国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
大学院医療福祉学研究科博士課程

第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの開発と評価

平成 26 年度

保健医療学専攻・看護学分野・リプロダクティブヘルス領域
学籍番号：09S3008　氏名：礒山　あけみ
研究指導教員：衣川　さえ子

題目：第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの開発と評価

氏名：礒山　あけみ

本研究の目的は、第２子を迎え入れるための母親に対する準備教育プログラムを開発し評価することである。ADDIEモデルに基づき準備教育プログラムを開発し、介入群（ｎ＝31)、対照群（ｎ＝28）の２群間を比較した。成果変数は『母親が認識している第１子の様子』『２人の同時育児に対する意識』『子ども観尺度』としプログラム前、出産後１週間および１か月の測定を行った。二元配置分散分析の結果、『母親が認識している第１子の様子』より、介入群において「第１子は第２子を抱っこするという」（p＜.05）であり、第１子が第２子に関心を示す行動が強化された。『２人の同時育児に対する意識』より、介入群において「２人同時育児の肯定感」（ｐ＜.05)「２人同時育児のイメージ化ができている」（ｐ＜.05）であり、２人の育児をポジティブに捉えられていた。開発した教育プログラムは経産婦に特化した２人の同時育児の適応を促す教育プログラムとして有効である。

キーワード：第２子妊娠、看護介入プログラム、育児意識、準備教育、
育児支援

Development and evaluation of a preparatory education program for mothers having their second child

Health sciences major, nursing division, Reproductive health field
Akemi Isoyama

The purpose of this study is to develop and evaluate a preparatory education program for mothers having their second child. We developed a preparatory education program based on the ADDIE model and compared between two groups: an intervention group (n = 31) and a control group (n = 28). The outcome variables were "mothers' awareness of the first child's condition," "awareness of caring for both children simultaneously," and "child's outlook scale". These variables were measured before the program, one week after birth, and one month after birth. The results of a two-way analysis of variance on "mother's awareness of the first child's condition" showed that "the first child hugged the second child" ($p < .05$) in the intervention group, suggesting an enhanced interest of the first child towards the second child. As for "awareness of caring for both children simultaneously," the intervention group showed "positive feelings about caring for both children" ($p < .05$) and "being able to imagine caring for both children simultaneously" ($p < .05$), suggesting a positive attitude towards raising two children. The education program specifically developed for multiparous women is useful for promoting the adaptation to caring for two children simultaneously.

Key word

Second child pregnancy、nursing intervention program 、childcare awareness、childcare support、childbirth education

目　　次

		ページ
第Ⅰ章	緒言	1
第Ⅱ章	問題の所在	4
	第１項　我が国における子どもを持つ体験の意味	4
	第２項　第2子が誕生する家族の特徴	5
	第３項　第2子を妊娠・出産した母親とその家族に関する先行研究	7
	1　第2子妊娠および出産後の母親の育児に対する意識	7
	2　経産婦に対する支援	10
	第４項　妊娠期の準備教育に関する動向	11
	第５項　第2子を迎え入れる母親と家族に対する準備教育	14
第Ⅲ章	研究の目的と意義	16
	第１項　目的・意義	16
	第２項　用語の定義	17
第Ⅳ章	準備教育プログラム開発の枠組み	18
	第１項　ADDIEモデルの適用の理由	18
	第２項　ADDIEモデルの適用によるプログラム開発	20
	第３項　ADDIEモデルの適用による研究の展開過程	21
第Ⅴ章	第2子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズ分析（Analyses）	22
	第１項　第2子妊娠中の母親に対するインタビューからのニーズ	22
	第２項　文献からのニーズ分析	34
	第３項　第2子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズの総括	40
第Ⅵ章	準備教育プログラムの設計(Design) 開発(Develop)	41
	第１項　準備教育の目標の設定	41
	第２項　準備教育の内容抽出と内容の構造化	42
	第３項　準備教育の方法の検討	52
	第４項　準備教育のプログラム設計	55
	第５項　準備教育で用いる教材の開発	60
	第６項　準備教育プログラムの介入計画	62
	第７項　準備教育の評価指標の作成と評価方法の設計	64
第Ⅶ章	準備教育プログラムの実施(Implement)・評価(Evaluate)	76
	第１項　第2子を迎え入れるための母親に対する準備教育プログラムの実施	76
	第２項　第2子を迎え入れるための母親に対する準備教育プログラムの評価	79
第Ⅷ章	考察	101
	第１項　開発した準備教育プログラムの効果	101
	第２項　実践への適用性	108
第Ⅸ章	結論と課題	110
	第１項　結論	110
	第２項　研究の限界と今後の課題	111
謝辞		112
文献		113
資料		119

第Ⅰ章　緒言

我が国の平成24年度の合計特殊出生率は1.41であり[1)]、前年比より若干の上昇がみられたが、未だ少子化の状況にある。出産順位別出生数の割合（同じ母親がこれまでに出産した児の総数）は[2)]、第1子46.9%、第2子36.5%、第3子13.1%であり、出産する女性の約半数は経産婦であるといえる。また、日本人女性の「子どもがほしい」と思う理想の子ども数としては「2人」(55.1%)が過半数で最も多く、次いで「3人」(26．7%）である[3)]。

このように、出産する女性の子ども数および理想の子ども数が2人や3人という日本の現代社会の背景には、晩婚化による出産年齢を考慮した場合、現実に持つことが可能な子どもの人数が限られてくること、養育費の負担感が子どもを持つか否かの判断に影響すること、これ以上育児の心理的・肉体的負担に耐えられないからという理由や、仕事と生活・育児の両立に対する不安などの要因がある。また、子どもの社会化の観点からは、1人っ子よりも兄弟が存在することにより社会性が身につくのではないかという養育者の考え方などが背景にあるといえる。

他方､マクロレベルでは､わが国の少子高齢化や将来人口の減少に関わる様々な影響を検討し、子どもを産み育てやすい環境づくりのために対策が講じられてきている。その一つとして、子どもと子育てを応援する社会の実現に向けて「子ども･子育てビジョン」を策定し､総合的な子育て支援を推進している[4)]。

現代では子どもを持つことが、単に個人の私的な問題ではなく、少子化問題に示されているように、社会的な関心事になってきている。親になるという選択は、社会構造の変化、核家族化の進行、女性の生き方の変化に伴い、子どもを産み育てる環境は大きく変化することで、個人自らが選択できるようになった。すなわち、妊娠や出産を「自然」な営みとして捉えるのではなく、「選択」するようになったのである。

子どもを産み育てるという体験は、楽しいことばかりではなく、時として育児による制約感や育児ストレスが生じる体験であることから、育児に意義を見出せない母親たちが増えている[9)]。親となる体験は、心理学的には人間の発達段階における「発達危機」とも捉えられている。そのため、親としての新たな役割課題を達成し適応していくための支援が求められている[6)]。特に初めて親になる母親に対しては、妊娠・出産・育児が初めての経験であることから、健やかな妊娠や出産、育児のために、それらに関する知識や技術の習得の機会として、母親学級や両親学級として病院や地域保健センターなどで手厚く実施さ

れている。

他方、第1子の育児経験を持つ経産婦に対しては、サポート体制が充分整っていない現状がある。第1子を育てながら第2子を妊娠中の母親は,第1子の退行現象や2人同時育児の不安などの戸惑を抱いている[12) 23) 24)]。そのため妊娠中から母親と家族に対して幼児期の特徴やかかわり方，第1子が兄姉になる心理的準備のための支援の必要性が指摘されるものの[12) 21) 29)]、現状では必ずしもそのニーズに応えられているとは言えない。

また、経産婦は妊娠・出産・育児の経験がある事から、看護者からの支援が手薄になり、家族のサポート機能の低下があると言われる[13)]。しかしながら、経産婦は第1子の育児経験があっても2人の育児を同時に行うことは初めてである事、育児の対象者が増えることから、初産婦と同様に、2人の親になるという新たな役割課題を達成し適応していくための支援を求めている。

我が国においては経産婦に対する研究や対応が十分なされないまま現在に至っている。第2子妊娠・出産をした母親に関する先行研究は、第2子出生前後の第1子の反応とそれに対する両親の認知[18) 22)～28) 30) 31)]、第2子出産後の第1子の関わりの視点について[18) 20)～24)]、第2子出生に伴う家族の適応過程[28) 29)]、関して着目し明らかにされている。これらはいずれも第2子妊娠・出産に伴う母親に対する支援および新しく兄弟を迎え入れる準備の必要性についても述べられているものの、具体的な支援や準備教育の実施には至っていない。欧米では、新しく兄姉になる第1子に対して、きょうだいを迎える準備クラス（sibling preparation classes）の報告がある[24) 23)]。日本でも兄姉クラスのプログラムを作成・実施し評価した報告は散見されるが[35) 36)]，これらの支援が多くの看護者に共有化され普及しているとは言い難い。

地域協同体の機能が失われていく中で、家族成員が一人増員するということは、母親にとって身体的にも心理的にも育児の負担感が増大する[12)]。経産婦は初産婦と異なるニーズがあり、第1子の育児と2人の同時育児に関する知識や技術が必要となる[16)～18)]。今後さらに核家族化が進行する中において、支援が得られにくい経産婦のための家族成員を迎え入れる準備教育プログラムの開発が必要である。

そこで、本研究において、経産婦の教育的支援ニーズに応えるために、第2子を迎え入れるための準備教育プログラムを開発し、評価することを目的とする。開発するプログラムは、従来行われている妊婦教育として一般に周知されている両親学級や母親学級とは異なる、経産婦に特化した内容で構成される準備教育プログラムである。

経産婦に対する準備教育プログラムが開発されれば、母親にとっては第 1 子と第 2 子の 2 人を同時に育児していくための知識や技術、態度の獲得につながり、健やかな家族形成への支援となる。

第Ⅱ章　問題の所在

緒言で述べた社会的背景を踏まえ、我が国における子どもを持つことの意義やはじめて親になる体験の意味、第 2 子が誕生する家族の特徴や経産婦に関する研究の動向について概観し、いかなる問題が内在しているかを整理し、本章で述べる。

第 1 項　我が国における子どもを持つ体験の意味

現代の日本において、子どもを持つということにはどのような意義があるだろうか。

柏木 [56] は子どもの価値について、家庭がにぎやかになる、夫婦の絆が深まるなど、家族や夫婦にとっての＜情緒的価値＞、次世代育成という社会にとっての意味としての＜社会的価値＞、子どもを産み育ててみたい、生きがい、自分の成長という＜個人的価値＞という 3 つがあると述べている。このように、子どもを持つことは、個人的意義と社会的な意義があるといえる。

それでは、子どもを持つという選択をし、親になる女性とその家族、社会にとって、その価値の実現が実際にどのように、求められるのであろうか。

はじめて親になるということは、養育者になること、すなわち「育てられる者」から「育てる者」へ転換することであり [5]、役割が変化するということである。役割が変化する際には、新たな役割課題を達成し適応していくことが必要である。「育てる者」は育児そのものが初めての体験であり、個人としての自己実現欲求を棚上げし、子どもの欲求中心の生き方という役割課題を遂行していくことが求められるからである。家族看護の観点からは [6]、夫と妻からなる夫婦サブシステムから、親と子からなるサブシステムが形成されるという変化がある。家族の発達課題 [7] は、家族員個々の発達ニーズを満たし、新しい役割（父親・母親など）を学習すること、家族での役割の調整を行い、家族機能や家族関係を拡大することである。初めての妊娠・出産・育児の経験は、腹部の増大という身体的変化が起こるだけでなく、新しい親子関係の形成や役割に適応するための準備段階であり、子どものいなかった生活から子どものいる生活へと移行する時期である。新道 [8] によれば、妊娠を知ったときの女性の心理として、妊娠を待ち望んでいたものであれば、喜びの感情を覚え、幸福感にひたる。そして喜びを夫と共に、更には両親やその家族と共に共有しようとする。その一方では、当惑や不安の感情を経験する。妊娠が予定しなかったときはも

ちろんであるが、予定していた妊娠であっても、「この自分がよい子を産み、元気な子どもを産むことができるかどうか」「子どもを元気でよい子に育てることのできる良い母親になれるだろうか」「妊婦をして健康に生活するにはどんな生活をすればよいのだろうか」などの感情を持つ。しかも、妊娠への期待や夢の代償として、「妊娠していなければもっと仕事ができたのに」「子どもが生まれて子育てができるか不安」などの役割遂行の変化を受容できないことによる葛藤も経験しており、妊娠の喜びと共に葛藤や不安も感じているという、相反する感情を持つことが示唆されている。

妊娠中ばかりではなく出産後の子育てにおいても同様に、楽しい経験ばかりではなく、育児による制約感という感情を持つことが示唆されている[9)]。大日向は[10)]、育児はすばらしい経験であり、多くの喜びと発見を分かち合う営みだが、子供が可愛く思えないときもある。社会で働く夫に比べて、自分だけ取り残され、子育てに束縛されていらいらする時もあり、行き場のない不全感、閉塞感に苛まれ、自分を見失ってしまいそうな人が増えていると述べている。

以上から、親となる体験は発達危機とも捉えられることから、アンビバレントな価値を体験する過程で、親役割に適応するための支援が求められる。

第 2 項　第 2 子が誕生する家族の特徴

第 2 子が誕生する家族は、第 1 子の誕生とどのように異なるのだろうか。第 1 子と父親、母親の 3 人で形成されてきた家族にとって、新たな家族成員を迎え入れる体験は、家族が発達を遂げるライフイベントである[11)]。家族形態の量的変化は、妻―夫―子どもの 3 人家族から 4 人家族へと変化することである。質的変化には、2 人の子どもの親になることにより、育児の対象が増えるということである。第 2 子を妊娠している女性の特徴として、第 1 子の妊娠と異なり、子どもを養育しながらの妊娠であるため、子育てと妊娠の変化に負担が生じると考えられる。しかも経済的な面においても出費が増す。と同時に仕事を持つ女性については、第 1 子の母親としてかつ職業人としての役割を担わなければならないことは周知のとおりである。

一方、家族成員である第 1 子にとっては「きょうだい」ができるという新しい家族役割への適応過程をたどるような変化を経験する[12)]ことである。家族看護学の観点からは[6)]、新たな家族が機能を発揮し発達するには、家族員各々が役割を分担し、機能を発揮すること、家族内での夫と妻からなる夫婦サブシ

ステムと家族員、親と子どもからなる親子サブシステム、きょうだい同士からなるきょうだいサブシステムのサブシステム同士が相互作用することである。家族員が増加し、家族が機能するように家族が組織化、調整されなければ家族機能は向上しない。そのため、家族機能が良好で well-being な状態に変化を遂げることが家族支援には必要である。

家族の発達段階[7]においては、第 1 子が学童期前期の子どもを持つ家族（第 1 子が 2 歳 6 カ月～6 歳未満）の家族の発達課題として、子どもが兄姉としての役割を取得できるように育て、事故や健康障害を予防すること、第 1 子のニーズを満たしながら、第 2 子のニーズを満たすこと、親役割と夫婦役割、親子関係（親の子離れ、子の親離れ）を調整することである。これらのことから、新たな家族成員を迎え入れる家族にとって健全な家族機能の発達を促すためには、役割獲得の準備期である妊娠期からの支援が重要であるといえる。

一般に育児に対する戸惑いは育児を初めて経験する初産婦に多いとされているが、経産婦は第 1 子の育児の経験があるものの、第 2 子出産後、2 人の子どもを育てることは初めての体験である。特に、兄姉になる第 1 子に対する関わり対する困難を感じており、第 1 子の育児とは異なる戸惑いを伴う[12][18][23][24]。母性看護学の領域では、初産婦に対しては育児支援の必要性を認識しており、心理状態やパートナーを含めた家族に対す理解などの把握や支援に努力をしている。しかし、経産婦に対する看護者の支援の認識として、妊娠・出産・育児の経験があることから妊娠期および出産後の育児に関する保健指導や看護が手薄になる傾向にある。家族の認識として、初めての妊娠時より夫や周囲からの関心やサポートの低下があるという指摘がある[14]。このように、第 2 子妊娠中の母親の多くは初めての妊娠時に比べ周囲の気遣いの低下を感じている[12]。健やか親子 21 では、子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減のため、妊娠期から出産、育児期にかけて育児に焦点を当てた心の問題の観点からケアシステムを構築し、1 人の人間を最適な環境で見守っていくことが必要とされている[15]。その意味において、経産婦に対して親としての役割獲得の準備期間である予期的段階[13]である妊娠期に、第 2 子を迎え入れるための準備教育を行うことが必要である。

新たに第 2 子を迎え入れる母親にとっては、2 人の子どもの親となることを受け入れ、第 1 子と第 2 子の 2 人の子どもの育児に適応していくことが役割課題である。父親にとっては、第 2 子を迎え入れる母親を支えると共に、2 人の子どもの父親として適応していくことが役割課題である。第 1 子にとっては、新しく生まれてくる児のきょうだいとして、兄弟関係を形成し、児に対し愛着

を持ち大切な家族の一員であることを認識し、両親の愛情を分かち合うことが役割課題である。

このように家族が変化し、新たな家族成員を迎え入れる準備期に直接接する機会が最も得られやすい立場にいるのが、看護者である。母性・助産学の観点からは、助産師教育のミニマム・リクワイアメンツの項目として、妊婦やパートナーが妊娠を受容し、親役割行動を遂行できるか否かについてアセスメントし、適切な準備教育のプランが立案できることとある[16]。助産師のケアの対象は女性本人のみならず、家族も対象としたケアの提供が求められている[17]。それゆえ、看護者が第2子を迎え入れる母親に対し、いかに家族役割への適応を促す支援を行うかが重要となる。

第3項　第2子を妊娠・出産した母親に関する先行研究

1. 第2子妊娠および出産後の母親の育児に対する意識

第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴について、礒山[12]は第2子妊娠中の母親の特徴として、生活の中心は第1子、第1子の変化への戸惑いと迎え入れる準備、2人の育児への迷い、育児経験から2人の育児に対する自信などの初めての妊娠時とは異なる特徴が語られ、母親たちの関心はまだ見ぬ胎児より【生活の中心は第1子】に関する話題が中心であったと結論づけている。坪田[32]は第2子妊娠中の第1子への養育意識の特徴として、第2子妊娠中の母親は妊娠中のどの時期もほぼ同じ養育意識で第1子に接していたことを明らかにしている。山崎[33]は第2子を迎えようとしている女性を対象とし、3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセスを明らかにした結果、胎児よりも上の子を気がかりとしていたと述べている。宇野ら[18]は第2子出生後の母親は2人同時の育児のジレンマや成長を喜ぶといった感情を持っていたと述べている。江守[20]は第2子出生後の母親は第1子にかける関心、労力、時間の比率が第2子よりも大きい傾向にあったと述べている。このように第2を迎え入れる母親の関心は第1子の育児であるということが明らかになっている。

第2子妊娠中の母親は第1子に対する育児の戸惑をいがある事が明らかになっている[12][18][30]。第2子妊娠中の母親の第1子のとらえ方として、赤ちゃん返りへ不安を感じていた[23][24][35]。また、第2子出産後は兄姉として自立しようという行動が見られるが，母親に甘えたいという第1子の反応や行動が表現されたが、子どもの思いに十分寄り添うことができずにジレンマを抱えていた

[18] [31]。特に、小島他によると、比較的低年齢の段階で弟や妹の誕生を経験した子どもは、母親をいたわるというポジティブな反応を示すと同時に、不安定な行動も示しやすいこと明らかになっている[23] [28] [38]。

第 1 子にとって第 2 子の誕生がストレス源[27]であることから、母親は第 1 子が母親の思うように行動しないことに苛立ちを感じ、その苛立ちの感情を母親は怒るという行動で表現していたことが明らかになっている[23]～[26]。

また、第 2 子妊娠中の母親は、兄姉と産まれたばかりの第 2 子の 2 人の育児を同時に行うことへの戸惑いを感じていた。第 2 子妊娠中の母親は第 1 子の妊娠・出産・子育ての経験はあるものの、同時に 2 人の子育ては初めてのことであるためイメージしにくい[12]。そのため、第 2 子妊娠中の母親は、子育て経験から 2 人の子育てに対する自信の一方で、2 人の子育ては初めての体験であるため、2 人の子育てへの迷いを抱いていた[12] [18] [35]。第 2 子を迎え入れる母親には、2 人を同時に育児することに対する戸惑いがあるといえる。

一方、第 2 子妊娠・出産後の母親は、育児の不安や負担感ばかりを感じているのではないことも明らかになっている。第 2 子妊娠中の母親の強みは、第 1 子の育児経験がある事である。そのため、第 1 子の育児経験を通して母親自身が成長したことにより，ゆとりを持って 2 人分の育児を楽しんでいたことが報告されている[18]。また、母親は退行現象などのネガティブな第 1 子の反応を予想しているが，第 2 子が誕生するまで予想しなかった第 1 子の行動に対し，成長発達を喜ぶといった前向きな一面があったことも明らかになっている[18]。第 1 子自身のポジティブな反応として、自分でするようになる、第 2 子の存在を人に知らせる、人形をかわいがるしぐさをする、我慢するなど成長的行動が見られていた[23]～[25] [31]。2 人の同時育児は戸惑いや困難のみならず、第 1 子の育児経験があるからこそのゆとりや、第 1 子の成長を喜ぶといった肯定的側面を備えているといえる。

兄姉になる第 1 子の特徴と接し方に関して、Sawicki J.A[23]は、きょうだいのライバル関係は、多くの家族で見られ、兄姉の行動は退行現象として現れ、親のストレスや困難な状況を作ると述べている。それらの状況には、親の行動やサポート、コミュニケーションのスタイルが影響を与えており、新しく兄姉になるきょうだいおよび親に対しての準備の必要性について述べている。また、第 1 子の退行現象については、第 1 子が第 2 子の気持ちを理解するための行動として、親の認識を変える方法を提唱している[26]。須藤他[35]は新しい家族を迎えるためのクラスにおいて第 2 子妊娠中から産後にかけての母親の第 1 子に対する気持ちとかかわりの変化として、第 1 子の赤ちゃん返りについて語られ

ていたと報告しており、礒山[12] Sawicki J.A[23]は妊娠中に母親と家族に対し幼児期の特徴とかかわり方などの説明の必要性を述べていた。宇野他[18]は母親に対し、第2子出生に伴う第1子の反応を説明することが有効であると述べている。納谷[24]中村他[36]によると、母親達は、第1子への接し方を知りたいことを明らかにしている。保田[31]は第1子もこれまでどおりに母親に甘えたいのだと理解できれば母親は戸惑いを感じることがないこと、第1子も自己の成長的な行動を褒められることにより健康的な母子関係を育むとしている。大月他[27]も両親の認知が適切となることで対処が効果的となり第1子のストレスフルな状況が軽減され成長につながることが認められたと報告している。以上より、母親が第1子と第2子の2人同時の育児に適応する為には、兄姉になる第1子の特徴と接し方の理解が必要であると言える。

礒山[12]小嶋他[21]大月他[29] MacLaughlin[39] Storr GB[40] Behnke[63]は、第1子が兄姉になる心理的準備のための支援の必要性を述べていた。母親が第2子の行動や内的状態を第1子によく説明するほど第1子はポジティブな反応を示すことが多く、母親への依存・攻撃を示すことが少なかったと報告している[22]。以上より、第2子を迎え入れる母親に対し、第1子が第2子を迎え入れる準備をすることで、第1子のポジティブな反応を高めることができるといえる。

育児は母親のみならず家族及び地域の支援等が重要である。特に夫の存在は重要な位置を占める[50][51]。また育児支援において身近に存在する祖父母の協力は大きい[12]。家族員個人の能力だけてなく、夫婦の関係性、外的家族資源の有効性などを十分にアセスメントし、夫婦の関係性なども調整する必要がある[37]。父親役割、実父母や近隣支援については、夫は第1子の妊娠期に比較して1人目ほど実感ない様子と捉え、育児のサポートについては諦めたように語る第2子妊娠中の母親の存在があった[33]。1人目より父親の育児に対する支援の認識の希薄化が考えられる。それらの認識に対し、大月他[29]は家族適応過程を促進する家族対処行動として、育児への巻き込み、夫婦の話し合い、夫婦の役割調整が必要であると述べている。また、育児の手伝いの人がいる場合の母親は、第2子に対してより多くの時間をかけていると感じていた[20]ことからも、母親を支える家族の支援が必要であると言える。

時代の変化に伴い、世代間における育児観や育児方法が異なってくる。祖父母に対しても現代における育児環境・方法の違いなどについて知ってもらい、次世代を育成する方法について共に考えてもらうことも必要である。納谷他[30]は、母親の第1子に対する接し方への不安には、家族サポート状況が影響して

いるのではないかと述べている。小嶋他[21]は第 2 子以降の出産を迎える家族が上の子との関係を形成してゆくプロセスにおいて必要とされる支援は、家族内支援の立て直し、家族内支援の活用、近隣ネットワークの活用であると述べている。また、父親や祖父母と親密な関わりあいを持つようになった第 1 子は、活動性の低下や引きこもりを起こしにくいことを明らかにしている[22]。

このように、母親が第 2 子を迎え入れ家族の発達を遂げるには、母親の支援者である父親や実父母の育児参加への促進が必要であると言える。

2. 経産婦に対する支援

新しく家族成員を迎え入れる支援の時期として、妊娠中から育児期にかけて継続的な支援の必要性が述べられている[12][18][26][27][35][36]。須藤他[35]は、新しく家族を迎え入れるクラスに参加した母親は，子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ，第 1 子とよりよいかかわりを築きながら第 2 子を迎えられたことを明らかにしている。母親たちはクラスを通じて解決の糸口をつかむことにより、第 1 子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ、第 1 子とよりよいかかわりを築きながら第 2 子を迎えられた[29]と述べている。また、MacLaughlin et[39] Storr GB[40] Behnke[63]は、子どもが新たに家族を迎え入れるためのクラスに参加することにより、第 1 子は第 2 子との新しい生活に適応しやすく第 2 子の受け入れがよいと述べている。

一方、集団クラスのみならず、第 2 子出生に伴う家族の適応を促すための夫婦に対する妊娠末期と産褥早期の面接介入が必要であると報告されている[37]。準備教育の方法として、夫婦/両親が、第 1 子に対し、赤ちゃんと赤ちゃんが生まれた後の生活を理解できるように説明する具体的な方法を一緒に考え、促すことが示唆されている[37]。教育の内容として、第 1 子が第 2 子に対してどのような反応を示すのかを具体的に話すことや，同じ状況の親同士が交流する機会を設けることも同じ経験をしている母親からの情報交換の場の提供[12][23][24][36]の必要性を述べている。クラスの後、子どもたちは、赤ちゃんのことをよく話すようになった、お母さんのお腹に対して優しくなった、お母さんの手伝いをするようになった、などの変化があった[36]ことも明らかになっている。Fortier.JC,et[38]は、母親の妊娠中に兄姉が兄弟準備クラスに参加群 20 組と非参加群 20 組（子どもの平均年齢 3.75 歳）の新しく家族になる新生児に直面した時の兄姉の行動を調査した。兄弟準備クラスの内容は，新生児が誕生した時の嫉妬の気持ちを持った兄姉が主人公の映画を上映し、嫉妬について両親に話す時間を持つこと、感情に対処する方法についての説明及び母親については新

生児の出生前に嫉妬に対処するためのヒントが含まれていた冊子を配布するという事であった。結果、長子が兄弟準備クラスに参加した群は、非参加群に比し退行現象が少なかったことが明らかになっている。

以上より、準備教育は、出産前からのクラス運営と個別的な支援の必要性があるといえる。

第2子妊娠・出産をした母親に関する先行研究は、第2子出生前後の第1子の反応とそれに対する両親の認知[18)22)～28)30)31)]、第2子出産後の第1子の関わりの視点について[18)20)～24)]、第2子出生に伴う家族の適応過程[28)29)]、関して着目し明らかにされている。これらはいずれも第2子妊娠・出産に伴う母親に対する支援および新しく兄弟を迎え入れる準備の必要性についても述べられているものの、具体的な支援や準備教育の実施には至っていない。

新しく兄姉になる第1子に対し、弟妹を迎えいれる準備をするためのクラス（sibling preparation classes）を開催し、その評価が報告されている[23)～25)38)～40)63)]。クラスの内容は、新生児が誕生した時の嫉妬の気持ちを持った長子が主人公である動画を上映すること、嫉妬について両親に話す時間を持つこと、感情に対処する方法について説明すること、母親については新生児の出生前に嫉妬に対処するためのヒントが含まれていた冊子を配布するということ、人形を用いて抱き方やおむつ交換などを実施することなどである[38)～40)63)]。また、親同士の交流の場も提供している。クラスの効果として、長子が兄弟準備クラスに参加した群は、非参加群に比し退行現象が少なかったことが明らかになっている[38)39)]。我が国でも兄姉クラスのプログラムを作成し[31)]、それらをもとに実施し評価されているものの[35)36)42)]、プログラム内容や方法の作成プロセスが明確ではなく、かつ定性的評価に留まっている。

兄姉になる第1子とその家族を対象としたプログラムの実施は、第2子妊娠・出産に伴う母親の支援には意義がある。しかしいずれも、クラスの実施及びプログラム内容を評価する観点からの示唆は得られるものの、母親が第1子と第2子の2人同時の育児に適応するという観点から評価はなされていない。また、日本における妊娠期の健康教育においては、経産婦に特化した準備教育プログラムは準備されていない。

第4項　妊娠期の準備教育に関する動向

健やかな妊娠や出産、育児のために、正しい知識や態度の習得が必要になる。その習得の機会として健康教育がある。

健康教育とは、1948年のWHO憲章により「健康とは、単に疾患がない、虚弱でないということではなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態」“Health is a state of complete physical、 mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity”であり、健康は人の権利であり、社会全体で取り組んでいく必要性がうたわれた[37]。健康教育の目指す目標としてエンパワメントの概念が用いられる。人々が自分自身の生活統制感を得るために、自分自身のニーズに直面し、自分自身の問題を解決し、その日必要な資源を終結するその可能性を認識し、促進し、拡大するという社会的過程である。

健康教育とは健康に関する信念、態度、行動に影響する個人・集団・コミュニティのすべての経験・努力・過程のうち、意図的に計画された健康に関する教育活動である[44]。健康教育の目的は行動変容（健康の維持・回復のためには問題のある保健行動を望ましい方向に改善していく行為）であり、①正しい知識や態度の習得②好ましい健康行動の実践③行動変容ができ、充実した生活を送ることである。健康を維持する努力と自己効力感（セルフエフィカシー）とはある行動を起こす前にその個人が感じる「遂行可能感」、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識、あるいは、自分にはこのようなことがここまでできるのだという考えである[45]。母親役割獲得の準備期である妊娠期に、健康教育として第 2 子を迎え入れるための準備教育を行うことは、新しく家族を迎え入れる準備として意義がある。

妊娠・出産・育児期における健康教育は、母子保健法第 9 条（知識の普及）および第 10 条（保健指導）に法的な位置づけがなされている[46]。第 9 条には知識の普及として「都道府県及び市町村は、母性又は乳児若しくは幼児の健康の保持及び増進のため、妊娠、出産又は育児に関し、相談に応じ、個別的又は集団的に、必要な指導及び助言を行い、並びに地域住民の活動を支援すること等により、母子保健に関する知識の普及に努めなければならない。」とある。第 10 条には保健指導として「市町村は、妊産婦若しくはその配偶者又は乳児若しくは幼児の保護者に対して、妊娠、出産又は育児に関して、必要な保健指導を行い、又は医師、歯科医師、助産師若しくは保健師について保健指導を受けることを推奨しなければならない。」とある。

妊娠期の健康教育の必要性は（1）妊産婦が健康な妊娠生活を過ごすことができるよう支援する。（2）妊娠によるマイナートラブルを防ぐことで、よりよい妊娠生活を送ることを目指す。（3）安全で主体性のある満足のいく出産を迎えられるように支援する。（4）妊娠・出産・育児に関する情報を整理し、正確

な知識・技術を選択できるよう支援する。(5) 妊婦と共に、家族に対しても積極的に育児に参加できるように支援する。(6) 妊産婦同士または夫同士の交流の場を提供し、ネットワークを広げられるようにすることである[47]。

妊娠期における健康教育を概観すると、妊婦とパートナーを対象に母親学級や両親学級などの形態で行われている。近年になって妊婦のみならず育児の支援者を対象とした祖父母学級なども行われるようになってきている[48](表1)。

母親教室は、妊娠・出産・育児の知識や技術を学びたい妊婦や妊婦同士の友達を作りたい妊婦が対象であり、妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、安心して子どもを産み育てるように支援することや、妊婦同士の交流ができるよう支援することが目的となっている。主な内容は、妊娠の経過や妊娠中の過ごし方、分娩の経過、入院の準備、分娩中の過ごし方、育児についてである。

両親学級や安産教室、父親学級は、妊娠出産育児の知識や技術を妊婦とともに学びたい父親を対象としている。主な目的は、夫婦が妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を共有し、お互いに協力しながら子どもを産み育てられるよう支援すること、夫に立ち会い分娩について必要な知識・技術を提供し、主体性のある満足のいく分娩が迎えられるように支援すること、夫同士の交流ができるように支援することなどである。主な内容は、妊娠の経過、妊娠中の過ごし方と夫の役割、分娩の経過、呼吸法・補助動作について、分娩中の夫の役割、育児について、育児中の父親同士のネットワークづくりである。

母乳教室は母乳育児を望んでいる方、乳房の大きさや乳頭の形などに悩みがある妊婦や出産後の母親を対象としている。目的は、対象のニーズに沿った知識・技術を提供し、母乳育児が確立するよう支援することである。内容は母乳分泌のメカニズム、母乳育児の方法、乳房トラブルについて、新生児の生理についてなどである。

双胎教室は双胎を妊娠している夫婦を対象とし、双胎妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、安心して子どもを産み育てられるよう支援することや双胎妊婦のネットワークが保てるよう支援することを目的としている。内容は、双胎の妊娠の生理、妊娠中の過ごし方、帝王切開術および術後の経過について、双子の母乳育児について、双子の育児の工夫について、双子のピアサポートグループについてなどである。

祖父母教室は子どもが妊娠・出産予定の祖父母や現代の育児方法を学びたい祖父母を対象としている。目的は、妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、必要時、妊産婦を支え、育児参加できるように支援することであ

る。主な内容は・現代の育児事情や祖父母の役割などである。

表１　妊娠期の健康教育　企画名と対象の特性、目的

企画名	対象の特性	目的	内容
母親教室	妊娠・出産・育児の知識や技術を学びたい妊婦	妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、安心して子どもを産み育てるように支援する	・妊娠の経過 ・妊娠中の過ごし方 ・分娩の経過 ・入院の準備 ・分娩中の過ごし方 ・育児について
	妊婦同士の友達を作りたい妊婦	妊婦同士の交流ができるよう支援する	
両親教室	妊娠・出産・育児の知識や技術を一緒に学びたい妊婦	夫婦が妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を共有し、お互いに協力しながら子どもを産み育てられるよう支援する。	・妊娠の経過 ・妊娠中の過ごし方と夫の ・分娩の経過 ・呼吸法・補助動作につい ・分娩中の夫の役割 ・育児について ・育児中の父親同士のネッワークづくり
安産教室	夫が立ち会い分娩を希望している妊婦	夫に立ち会い分娩について必要な知識・技術を提供し、主体性のある満足のいく分娩が迎えられるように支援する	
父親教室	夫婦である妻の支援方法を学びたい夫	妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、安心して子どもを産み育てるように支援する妊産婦を支え、積極的に育児参加できるように支援する。	
	育児方法を学びたい夫	夫同士の交流ができるように支援する	
	妊婦の妻をもつ夫と交流を持ちたい夫		
母乳教室	妊婦から褥婦までと幅広い	対象のニーズに沿った知識・技術を提供し、母乳育児が確立するよう支援する	・母乳分泌のメカニズム ・母乳育児の方法 ・乳房トラブルについて ・新生児の生理について
	母乳育児を望んでいる		
	乳房の大きさや乳頭の形などに悩みがある		
双胎教室	双胎を妊娠している夫婦	双胎妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、安心して子どもを産み育てられるよう支援する。 双胎妊婦のネットワークが保てるよう支援する。	・双胎の妊娠について ・妊娠中の過ごし方 ・帝王切開術および術後のについて ・双子の母乳育児について ・双子の育児の工夫につい ・双子のピアサポートグル・について
祖父母教室	子どもが妊娠・出産予定の祖父母	妊娠・出産・育児について必要な知識・技術を提供し、必要時、妊産婦を支え、育児参加できるように支援する。	・現代の育児事情 ・祖父母の役割
	現代の育児方法を学びたい祖父母		

出典：立岡弓子監修（2007）周産期ケアマニュアル、医学芸術社

第５項　第２子を迎え入れる母親と家族に対する準備教育

日本の現代社会において、出産する女性の子ども数および理想の子ども数が２人や３人であること、新たに第２子を迎え入れる母親にとっては、２人の子

どもの親となることを受け入れ、第 1 子と第 2 子の 2 人の子どもの育児に適応していくことが役割課題である。父親にとっては、第 2 子を迎え入れる母親を支えると共に、2 人の子どもの父親として適応していくことが役割課題である。第 1 子にとっては、新しく生まれてくる児のきょうだいとして、兄弟関係を形成し、児に対し愛着を持ち大切な家族の一員であることを認識し、両親の愛情を分かち合うことが役割課題である。それらの役割課題を獲得していくことが求められる。

ところが、第 2 子を迎え入れる母親の支援は手薄になる傾向にあり、第 2 子を迎え入れる家族に特化した妊娠期の準備教育プログラムが準備されていない。地域協同体の機能が失われていく中で、家族成員が一人増員するということは、母親にとって身体的にも心理的にも育児の負担感が増大する[12]。経産婦は初産婦と異なるニーズがあり、第 1 子の育児と 2 人の同時育児に関する知識や技術が必要となる[16]～[18]。今後さらに核家族化が進行する中において、支援が得られにくい経産婦のための家族成員を迎え入れる準備教育プログラムの開発が必要である。第 2 子を迎え入れるための準備教育プログラムを開発することで、母親にとって、第 1 子と第 2 子の 2 人を同時に育児していくための知識や技術、態度の獲得に繋がる。看護者および看護教育にとって、家族役割への適応を促す看護専門職教育プログラムとなる。

したがって、本研究において、新たに第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムを開発する必要がある。

第Ⅲ章　研究の目的と意義

第１項　目的・意義

本研究の目的は、第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムを開発し評価することである。経産婦に対する看護者の支援の認識として、妊娠・出産・育児の経験があることから手薄になる傾向にある。家族の認識は、初めての妊娠時より夫や周囲からの関心やサポートの低下があるという指摘がある[13)]。このように、第２子妊娠中の母親の多くは初めての妊娠時に比べ周囲の気遣いの低下を感じている[5)]。しかしながら経産婦は、第１子の育児経験があっても２人の育児を同時に行うことは初めてであること、育児の対象者が増えることから、初産婦以上に支援を求めている。

そこで、本研究で経産婦の支援ニーズに応えるために、第２子を迎え入れるための準備教育プログラムを開発するものである。開発するプログラムは、従来行われている妊婦教育として一般に周知されている両親学級や母親学級とは異なる、経産婦に特化した準備教育プログラムである。

研究仮説は、第２子を迎え入れる母親に対する準備教育群が対照群より第２子を迎え入れる準備性が高まり、第１子と第２子の２人を同時に育児していくための知識や技術、態度が獲得され、育児に適応できると設定される。

研究の意義として、第２子を迎え入れるための準備教育プログラムを開発し実施することで、①母親にとっては、第１子と第２子の２人を同時に育児していくための知識や技術、態度の獲得に繋がり、健やかな家族形成へのプログラムの構築が期待できる。②看護者にとっては、家族看護学の観点から、母子のみならずその家族への支援システム家族役割への適応を促す看護専門職教育プログラムとなる。③看護教育にとっては、母親とその家族が各々の役割行動を遂行できるか否かについてアセスメントし、妊娠期からの役割獲得のための準備教育のプランを立案する際の新学習内容となる。④社会貢献として、健やか親子 21 では、子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減のため、妊娠期から出産、育児期にかけて育児に焦点を当てた心の問題の観点からケアシステムを構築し、１人の人間を最適な環境で見守っていくことが必要とされている[14)]。経産婦に対して親としての役割獲得の準備期間である予期的段階である妊娠期における第２子を迎え入れるための準備教育プログラムの開発し活用することで、施策の目標達成に貢献できる。

第 2 項　用語の定義

本研究では、用語を以下のように規定した。

【第 2 子を迎え入れる】

新たな家族員の誕生に伴い、父親—母親—第 1 子からなる家族システムにおいて、システムの拡大とともに、家族員の役割が変化する。父親—母親にとっては、2 人のわが子を育てる役割が求められ、第 1 子にとっては新たに兄姉役割の獲得が求められる。それらの役割機能が発揮できるように、家族員それぞれが適応する過程である。

【準備教育】

父親—母親—第 1 子からなる家族が、第 2 子の誕生に伴う新たな役割の獲得に円滑に適応するために、母親の第 2 子妊娠中に看護職によって実践される教育をいう。

第Ⅳ章　準備教育プログラム開発の枠組み

第１項　ADDIE モデルの適用の理由

本プログラムの方法論的枠組みとして、インストラクショナルデザイン（instructional design）教育設計の ADDIE モデル[19]を選択する。

インストラクションは、人間の学習に焦点化しており、学習のプロセスを支援する目的で計画されている。Gagne, R. M.[19]らは、学習を「行動に見ることができる学習者の特性や能力が変化する過程」と述べており、また、「支援する目的的（purposeful）活動を構成する事象の集合体」と定義されている。インストラクショナルデザインの意味は、細かく区切られた学習・教育の単位である「インストラクション」を形づくる、あるいはデザインするということである。インストラクショナルデザインは、e ラーニング教材・学習教材の製作にも用いられることもある概念である。インストラクショナルデザイン手法は、あらゆる教育の場、人材育成の場、訓練の場、あるいは学習の場に適用可能であり、学校教育におけるカリキュラム構築や単元・授業の設計に活用されている[19]。

教育システム（insutoreuctional system）とは、学習を促進する為に用いられる資源「リソース」や手続きの配列である。教育システム設計（instructional system design：ISD）とは、教育システムを開発するプロセスを指し、分析・設計・開発・実施・評価の各フェーズを含んでおり、包括的な設計という概念により特徴づけられる。ISD プロセスの最も基本的なモデルは、ADDIE（アディー）モデルと呼ばれており、分析（Analysis)、設計（Design)、開発（Development)、実施（implementation)、評価（Evaluation）の要素で構成されている。表２に ADDIE モデルの構成要素と下位活動の要約を示した。

Ⅰ．分析（Analysis）の下位活動は a．インストラクションが解決策となるニーズを決定する、b．コースが対象とする認知的、情緒的、運動機能的なゴールを決定する教授分析を実施する、c．学習者の前提スキルと、そのいずれからのコースでの学習に影響を与えるかを決定する、d．利用可能な時間や、その時間にどの程度を達成できるかを分析する、である。

Ⅱ．設計（Design）の下位活動は、a．コースの目標を行動目標や主要なコース目標（単元目標）に変換する、b．取り上げるトピックや単元と、それぞれにどれだけの時間をかけるかを決定する、c．コース目標を考慮して単元を系列化する、d．単元を具体化し、それぞれの単元において達成すべき主要な目

標を特定する、e. それぞれの単元に対するレッスンと学習活動を定義する、f. 学習者が何を学んだかを評価するための指標を開発する、である。

Ⅲ. 開発（Development）の下位活動は、a. 学習活動と教材の種類について意思決定する、b. 教材や活動の草案を準備する、c. 対象とする学習者に教材や活動の試用を依頼する、d. 教材と活動を改善、精緻化、あるいは作成する、e. 教師の研修を実施し、付属教材を作成する、である。

Ⅳ. 実施（Implementation）の下位活動は、a. 教師や学習者に教材を採用してもらうために市場に出す、b. 必要に応じて支援を提供する、である。

Ⅴ. 評価（Evaluation）の下位活動として、a. 学習者評価の計画を実施する、b. プログラム評価の計画を実施する、c. コースの保守や改訂の計画を実施する、である。

第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムを考案し、その評価する。本研究は、母親が第 2 子を迎え入れるための学習を支援する目的的な活動である。よって、学習のプロセスを支援する教育設計のモデルが適していることから、ADDIE モデルを用いて設計することとした。

表 2　ADDIE のモデルの構成要素と下位活動の要約

Ⅰ.分析（Analysis）
- a　インストラクションが解決策となるニーズを決定する。
- b　コースが対象とする認知的、情緒的、運動機能的なゴールを決定する教授分析を実施する。
- c　学習者の前提スキルと、そのいずれからのコースでの学習に影響を与えるかを決定する。
- d　利用可能な時間や、その時間にどの程度を達成できるかを分析する。

Ⅱ.設計（Design）
- a　コースの目標を行動目標や主要なコース目標（単元目標）に変換する。
- b　取り上げるトピックや単元と、それぞれにどれだけの時間をかけるかを決定する。
- c　コース目標を考慮して単元を系列化する。
- d　単元を具体化し、それぞれの単元において達成すべき主要な目標を特定する。
- e　それぞれの単元に対するレッスンと学習活動を定義する。
- f　学習者が何を学んだかを評価するための指標を開発する。

Ⅲ.開発（Development）
- a　学習活動と教材の種類について意思決定する。
- b　教材や活動の草案を準備する。
- c　対象とする学習者に教材や活動の試用を依頼する。
- d　教材と活動を改善、精緻化、あるいは作成する。
- e　教師の研修を実施し、付属教材を作成する。

Ⅳ.実施（Implementation）
- a　教師や学習者に教材を採用してもらうために市場に出す。
- b　必要に応じて支援を提供する。

Ⅴ.評価（Evaluation）
- a　学習者評価の計画を実施する。
- b　プログラム評価の計画を実施する。
- c　コースの保守や改訂の計画を実施する。

第 2 項　ADDIE モデルの適用によるプログラム開発

ADDIE モデルを用いた本研究の方法論的枠組みを図 1 に示した。

本研究の方法論的枠組みは、まず、分析（Analyze）はニーズの分析である。第 2 子妊娠中の母親がどのような育児体験をしているかに着目し、明らかにする必要がある。また、これまでの先行研究より、第 2 子妊娠・出産・育児に対する意識や体験をレビューすることで、第 2 子を迎え入れる母親の支援ニーズが明らかになる。さらに、経産婦に関する支援の現状や方法をレビューすることで、準備教育の内容や方法に対し示唆が得られる。本研究では、まず、第 2 子妊娠中の母親の子育てに対する主観的体験を明らかにする。次に、第 2 子妊娠中から出産後の母親の育児に対する意識や体験、準備教育に関しレビューし、第 2 子を迎え入れる母親のニーズを明確にする。

次に、プログラム設計（Design）および開発（Develop）として、1. 第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの枠組みを作成する。次に 2. 準備教育プログラムの目標を設定し、3. 準備教育プログラムの評価指標を作成する。4. 第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムを作成するプロセスを辿ることとする。

実施（Implement）は、1. 第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムを実施する。

評価（Evaluate）として、1. 第 2 子を迎え入れる準備教育プログラムの有効性を評価する。

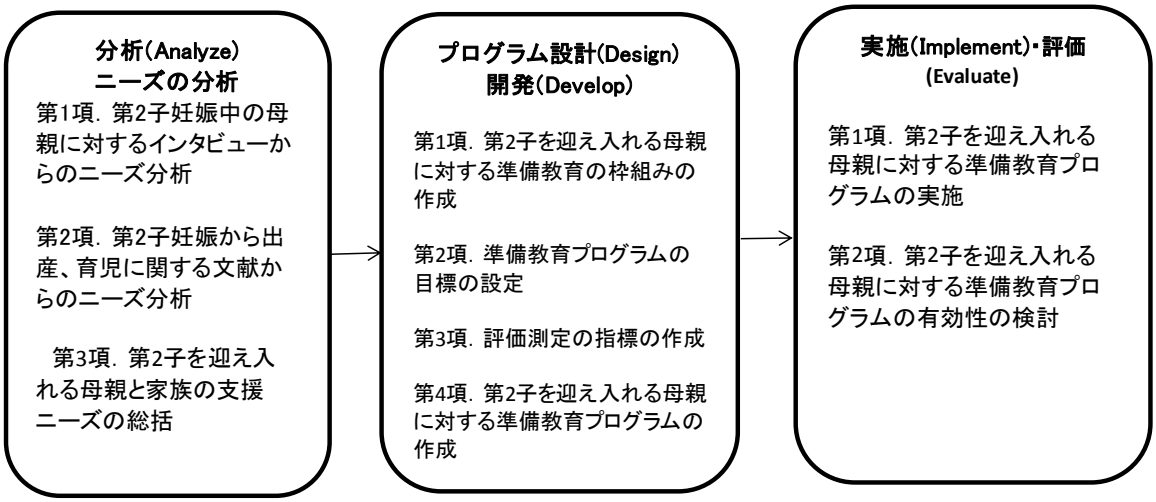


図 1　ADDIE モデルの適用による本研究のプログラム開発の枠組み

第３項　ADDIE モデルの適用よるに研究の展開過程

本研究の目的を遂行するために、ADDIE モデルの各フェーズに応じて、１～３のプロセスで研究展開することとした。

１．分析（Analyze）：第 2 子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズ

第 1 項．第 2 子妊娠中の母親に対するインタビューからのニーズ

第 2 項．文献からのニーズ

第 3 項．第 2 子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズの総括

２．準備教育プログラムの設計(Design) 開発(Develop)

第 1 項．準備教育の目標の設定

第 2 項．準備教育の内容抽出と内容構造

第 3 項．準備教育の方法の検討

第 4 項．準備教育のプログラム設計

第 5 項．準備教育で用いる教材の開発

第 6 項．準備教育の評価指標の作成

３．準備教育プログラムの実施(Implement)・評価(Evaluate)

第 1 項．第 2 子を迎え入れるための母親に対する準備教育プログラムの実施

第 2 項．第 2 子を迎え入れるための母親に対する準備教育プログラムの評価

論文の構成として、プログラムの実施（Implement）フェーズおよび評価（Evaluate）は連動して構造化されている。そのため本論文においては実施と評価と連動して表記する。

第Ⅴ章　第 2 子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズの分析（Analyses）

第 2 子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズを第 1 項から第 3 項に述べる。

第 1 項．第 2 子妊娠中の母親に対するインタビューからのニーズ

乳幼児期・学童前期の子どもを持つ第 2 子妊娠中の母親を対象に面接調査を実施し、育児に対する主観的体験を分析した。

1.調査目的

第 2 子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験を明らかにすることである。

【用語の定義】

本調査においては、育児に対する主観的体験を、「第 1 子の育児及び胎児への感情・感覚，第 2 子誕生後の将来にかけて，育児に対する感情・感覚」として定義した。

２.調査方法

1）調査対象

乳幼児期・学童前期の子どもを持つ第 2 子妊娠中の母親 20 名である。

2）調査期間

2005 年 5 月～9 月

3）データ収集方法

データの収集は、妊婦健康診査に来院していた妊婦，および研究者の知人の紹介を受けた第 2 子妊娠中の女性 23 名に依頼し，同意が得られた 20 名に面接調査を行った。面接は対象者の自宅または外来受診病院の食堂などで行った。なお，面接の際には静閑な環境が保たれるように配慮した。面接時間は 45 分から 85 分であった。対象者にはあらかじめ属性に関する質問紙を用意し必要事項を記入してもらい，補足的な質問を行うための資料として活用した。

調査内容は，第 1 子に対する育児について，おなかの子について，第 2 子

誕生後の育児について，半構造化面接法により実施した。面接の時の記録は対象者の承諾を得て，ＩＣレコーダーに録音した。

4）倫理的配慮

対象者には面接の 1～2 週間前の妊婦健康診査来院時および面接当日に研究の目的・方法を説明し、研究参加への意思は自由であること，途中辞退は自由であり不利益は生じないこと，個人情報については厳重に管理し匿名性を守秘すること，個人が特定できないようにデータの処理を行い，学会および学術雑誌へ公表することなどを文書と口頭にて説明し，同意書に署名を得るという手順をとった。

5）分析方法

データは質的帰納的に分析した。語られた内容から逐語録を作成し，意味のある単文にしてコード化し，育児に対する主観的体験と思われる内容について抽出した。類似したコードをカテゴリ化した。カテゴリ化のプロセスを経て新たなカテゴリ名が見いだせなくなった時点で分析を終了した。その後カテゴリを比較検討し，カテゴリ間の関係性を明らかにし，第 2 子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験を説明できる構造図を導いた。信頼性や妥当性の確保として,質的研究に精通した専門家からスーパービジョンを受け，調査者と看護領域の専門家 2 名でカテゴリ化した。

３.結果

1）対象の属性

対象者はＡ県内に在住しており，幼児期から学童前期の第 1 子をもつ第 2 子妊娠中の母親 20 名である。平均年齢は 32 歳，平均妊娠週数は 28 週，第 1 子の平均年齢は 2.85 歳であった（表 3)。

表 3　対象者の属性

対象	年齢	妊娠週数（週）	第１子年齢（歳）	第１子性別
A	20代前半	40	3	女
B	20代後半	27	1	男
C	30代後半	36	5	女
D	30代後半	32	4	男
E	20代後半	25	3	女
F	20代後半	28	1	男
G	30代前半	26	1	女
H	30代前半	15	1	男
I	30代前半	22	3	女
J	30代後半	25	3	女
K	30代前半	23	3	女
L	30代後半	37	1	男
M	20代後半	29	2	女
N	30代後半	36	7	女
O	20代後半	24	7	女
P	20代前半	36	2	女
Q	30代後半	17	2	男
R	30代前半	34	1	男
S	30代前半	26	5	女
T	30代前半	33	2	男

2）第 2 子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験

育児に対する主観的体験と思われる意味内容のあるデータ数は 747 であった。それから 54 のコード，11 のサブカテゴリ，3 のカテゴリが抽出された（表 4）。

カテゴリを【　】，サブカテゴリを＜　＞で示す。カテゴリは【第 1 子に対する育児の意味づけ】【第 2 子を迎え入れる準備】【育児の代償への期待】が抽出された。以下に第 2 子妊娠中の母親たちの育児に対する主観的体験の背景について触れながら説明する。

【第 1 子に対する育児の意味づけ】

第 2 子妊娠中の母親たちはまだ見ぬ胎児への関心より，＜生活の中心は第 1 子＞に関する話題が中心であった。母親たちは妊娠しながら育児に追われた生活は多忙で，＜孤立した育児の苦悩＞を感じながら，＜自分の時間確保への望み＞を持つ一方で，＜育児の合間の意図的な気分転換＞をしながら＜子どもを育てる喜び＞を感じ，何はともあれ＜育児経験による成長＞をしたと【第 1 子に対する育児の意味づけ】をしていた。

＜孤立した育児の苦悩＞

多くの母親が孤立した育児に対する苦悩を語った。G さんは自由な時間がないといった日々の自分との葛藤の様子を語った。

「育児はいまちょっとストレス。ちょっとしたことで怒ったりとか，ようやく昼寝したと思うと，すぐに起きちゃって散歩に行かなきゃいけない。すごく悪いです，今の状態が・・・・。一人で子育てしてるって感じですね～。」

P さんは，2 人目を妊娠してから周囲から“2 人目だから大丈夫ね”と妊娠・出産・育児の経験があるから心配はないと捉えていると感じていた。

「2 人目だからって周りは甘く見ているというか，2 人目だから大丈夫だろうみたいな感じで，家でも主人も，職場でも・・・。全体的にそういう考えがあって，でも結局おなかが大きくなると，子どもを見て，周りのこともやってというと，1 人目よりも苦労が多いっていうか，2 人目だから大丈夫だろうという目がやっぱり多いかなって感じ。」

＜自分の時間確保への望み＞

T さんは，自分の人生が大切だと語り，今後の人生について計画を立てていた。育児に専念しながら，あるいは育児が一段落してから自分のために時間を使いたいという願望を語った。

「自分の人生を考えると子育てをまとめてやっちゃって，なるべく一人で好きなように時間を使えるようにしたいなって思っているので。7・8 年くらいは子どもにかかってしまうなって思う気持ちと，あれもやりたい，これもやりたい

しと思うと・・悔しいですね。」

表 4　第 2 子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
第 1子に対する育児の意味づけ	孤立した育児の苦悩	出産 育児は体験してみないと分からない,軌道修正しながらだ
		妊娠中は身体的変化のために育児は大変
		育児中は 1人にされるのがつらい
		四六時中ずっと子どもと一緒なので疲れる
		子どもを怒る、後悔の日々の繰り返しだ
		育児は実際に体験してみないとうなづくことができない
		育児はつらい
		子どもは話が通じなくて泣くので手がかかる
		子どもの成長が順調か不安だった
		2人目だから大丈夫だろうとまわりは甘く見ていると思う
	自分の時間確保への望み	1人だけの時間確保のためにシルバー人材の育児サポートを使いたい
		自分の将来は子どもに追われることなく夫婦二人の生活を楽しみたい
		自分の時間が欲しい
		自分の将来は自分のために時間を使いたいし、今やれないことをやりたい
	育児の合間の意図的な気分転換	育児の合間に趣味で気分転換している
		育児は手抜きしているし、なるようになると思っている
		誰かと会って会話することで気が晴れる
		なるべく家にこもらないようにしている
		買い物で気晴らしをしている
		子どもとの時間と自分の時間を切り換えている
	育児経験による成長	子どもを産んで自分も成長したと思う
		なにはともあれ、今の生活に満足している
		第 1子の成長と共に育児が楽になった
		経済的に贅沢な生活はできないが、生活していけると思う
	子どもを育てる喜び	育児は大きな苦労はない
		夜泣きもないし、母乳もよく飲んだし、離乳食もよく食べたので育てやすかった
		育児は楽しい
	生活の中心は第 1子	第 1子の育児が中心でおなかの子はあまり気にかけていないと思う
		第 2子を妊娠しても第 1子中心の生活だ
		第 1子のために同姓がいい
		子どもは 1人っ子ではかわいそう
第 2子を受け入れる期待と不安のアンビバレンツな体験	2人の育児への迷い	2人目産まれたら第 1子中心に考えていこうと思う
		第 2子の育児ができるかどうか不安だ
		2人目の育児は期待半分 不安半分
		2人を同時に育てることができるかどうか心配だ
		第 1子もまだ手がかかるので、2人の育児は苦労しそうだ
	第 1子の変化への戸惑いと意識的関わり	妊娠して第 1子なりに我慢しているのを見ると切なくなる
		第 1子の赤ちゃんがえりを気にかけている
		第 1子が兄 姉になるということを意識的に関わっている
		お産で入院するとき、第 1子が心配だ
	育児経験から2人の育児に対する自信	まだ見ぬ第 2子を家族みんなが待ち遠しく思っている
		第 1子と共に2人目の育児を楽しめそうだ
		2人目の育児は一度経験しているので自信があるし、前向きに、余裕があるので楽しめると思う
育児の代償への期待	子どもの将来への願い	幸せになってほしい
		人間関係をうまく築けるようになって欲しい
		勉強ができて優秀になって欲しいと期待して進路を親が決めている
		子どもにはスポーツをさせたい
		元気に思いやりをもって精神的に成熟して欲しい
		自分たちの仕事や家をついで欲しいとは思わない
		子どもの能力が発揮できるような、自分らしく生きてもらいたい
		子どもには家をついでほしい
	子どもの学び支援の準備	子どもの教育的なことを考えて入園場所を選択している
		子ども同士の遊びや人間関係も必要だと思い入園させている
		預託場所は近所のお友だちと同じ場所がいい

＜育児の合間の意図的な気分転換＞

Ｄさんは，子どもと精一杯付き合う時間と，自分一人だけの時間を，上手に切り換えているという。メリハリのついた子どもの生活パターンが確立しており，Ｄさんなりに子どもの反応を読み取り，自分の時間を確保していると語った。

「昼間は徹底して子どもにつきあって,遊ばせて疲れさせて早めに寝かせる。自分は子どもが寝た後に，一息入れるというように切り替えちゃったっていうか，自分の時間が取れれば，その時間にゆっくり新聞見てもいいし，録画しておいたビデオを見てもいいし，もう切り替えるしかなかった。子どもが起きているうちに自分のことができないイライラっていうよりは，私は夜の人っていうか・・・・」

＜育児経験による成長＞

Ｇさんは育児について、自分の理想には程遠い現実があり，自分の思い通りにいかないというつらさと同時に育児の体験を“人間的に成長した”とか“気づきもあるだろう”と語った。

「妊娠して子ども産まないより産んだほうが，人間的成長もあるだろうし，気づきもあるだろうから，人間ってどこかで苦労しなくちゃいけないものだなと，今まで楽してばかりいたから・・・・。子育ては大変。やってみないとわからない。」

＜子どもを育てる喜び＞

Ｑさんは,仕事より家事･育児に専念していたほうが楽しかったと語った。

「初めての子育てだったので，大変なのはありましたけれど，すごく楽しかったです。結構友だちが来たりとか，友だちの家に遊びに行ったりとか，2人ボッチでずっといるっていうのは，あんまりなかったから・・・。ちょっと外に出てお散歩していると，立ち話したりとかいうのがあって，その人になにかあったら相談して，こうだからしょうがないよとか，大丈夫だよとか言われて・・楽しかったですよ。」

＜生活の中心は第１子＞

第２子妊娠中の母親の生活の中心は第１子であると語った。母親たちの語りの中心は第１子であったことからも伺えた。Ｋさんは第１子に手がかかるため，おなかの子を気にかけていないし，第１子中心の生活だと語った。

「この子（おなかの子）にあんまり話かけてないかなって。どうしても，一番にこの子（第１子）になっちゃうんで・・・・。最近くっついて抱っことか多いんですけど，なるべく抱っことかもあんまり関係なくしちゃってるん

で，階段のぼったり降りたりして。だからこう，もうちょっと（おなかの子を）いたわってあげたほうがいいかなって。今回は余裕があるから，けっこう甘く見ている感じです。」

【第 2 子を受け入れる期待と不安のアンビバレンツな体験】

第 2 子を妊娠したことで，第 1 子も母親の変化を感じている。その反応を見ながら母親たちは切なさや，戸惑いを感じたりしていた。＜第 1 子の変化への戸惑いと意識的関わり＞をし，これから生まれてくる第 2 子の育児を考え，＜2 人の育児への迷い＞を感じていた。一方で第 1 子の＜育児経験から 2 人の育児に対する自信＞を持っていた。

＜2 人の育児への迷い＞

A さんは，自分自身が 1 人っ子で育った経験しかないため，2 人の育児についてイメージできないと語った。

「今やっと（第 1 子が）母乳離れたんですよ～。わたし一番不安なのは，1 人っ子で育ってきたから，女姉妹で同じに育てるっていうのがよく分かんないんですよね～。だからそのあたりが想像できないっていうか・・・・。今は産まれてこないからよくわかんないのもあるけど，でもどっちかっていうと，やっぱうえの子って思ったり，お腹に話しかけたりなんかして，産まれてからもこうだったらどうしようとか・・・。」

＜第 1 子の変化への戸惑いと意識的関わり＞

L さんは，第 1 子がまだ 1 歳ということもあり，今までに離れて寝ることがなかったため，出産で入院する際，第 1 子について心配だと語った。

「入院している一週間が不安。家の親が見てくれると思う。お母さんが見てくれる。でも走り回ってるから大変だなって。その一週間が不安かな。離れて寝たことがないです。（母親と）2 人で寝ないと寝ないんです。夜が心配です。ちゃんと寝るかなって・・・。夜のお産とかだったら特に心配ですね。」

＜育児経験から 2 人の育児に対する自信＞

R さんは，第 1 子の経験から，今回の妊娠は周囲から“ゆとりのある顔だね”といわれるという。

「うえの子妊娠のときは，自分が結構元気で動いて，妊娠やお産についての基本的な勉強して，まあ，こんな感じなんだな～って思ってたんだけど，2 人目は何も変わらない，全然気にしてない。他の人からは，ゆとりがある顔だねって言われるんですけど，全然，まあ，おなかも順調なんで，特に心配していることはないんです。」

【育児の代償への期待】

多くの母親は＜子どもの将来への願い＞を持っていた。ほとんどの母親は，第１子が乳幼児・学童であるため，具体的に将来を描いているわけではなかった。漠然とした子どもの幸せを望んでおり，＜子どもの学び支援の準備＞をしていた。

＜子どもの将来への願い＞

J さんは自分の年齢的なこともあり、子どもは一人かもしれないと思っていた。漠然とではあるが，確実に子どもの将来について夢を描いていた。

「いろんなものに興味を持って，それで自分が興味を持ったものを生業としてくれればと思う。ただこう働かなきゃいけないから働くんだというよりは，何かこう自分が興味を持ったことっていうか，趣味と実益までもちろんいかないでしょうけど，その子が充実した人生を送ってくれればいいなと思います。お金のために働かなきゃいけないということよりは，何か自分の充実した人生を送ってくれればと思ってるんですけど～。」

＜子どもの学び支援の準備＞

D さんは自分の幼少時代に母親に育てられた経験から，自分の子どもに対する接し方や，描いている幸せ像を語った。

「初めて同年代の子にあったのが幼稚園だったんで，自分から積極的に何かするよりは，受け入れるままみたいなところがあったんで・・・。なるべくこう今ってやっぱり一人で生きてはいけないじゃないですか，なるべく自由に子育て教室とか子育てひろばとか，子どもが集まるところには連れて行ってたんです。」

３．考察

１）主観的体験の全体構造

第２子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験の特徴は，＜生活の中心は第１子＞のサイクルであった。その生活は＜自分の時間確保への望み＞を期待する一方で，＜育児の合間の意図的な気分転換＞を図っていた（図２）。

第１子の育児について＜子どもを育てる喜び＞とともに＜孤立した育児の苦悩＞を感じていた。これらの生活に対し，アンビバレンツな認識を持ちながらの育児体験から，＜育児経験による成長＞と【第１子に対する育児の意味づけ】をしていた。

第２子出産後の育児に関しては＜育児経験から２人の育児に対する自信＞

の一方で，2 人の育児は初めての体験であるため＜2 人の育児への迷い＞を抱いていた。＜第 1 子の変化への戸惑いと意識的関わり＞をしながら，兄姉になることを意識的に関わっており，まだ見ぬ【第 2 子を受け入れる期待と不安のアンビバレンツな体験】をしていた。第 2 子誕生後将来にかけての育児には,【育児の代償への期待】として＜子どもの将来への願い＞を持ちつつ＜子どもの学び支援の準備＞をしていた。

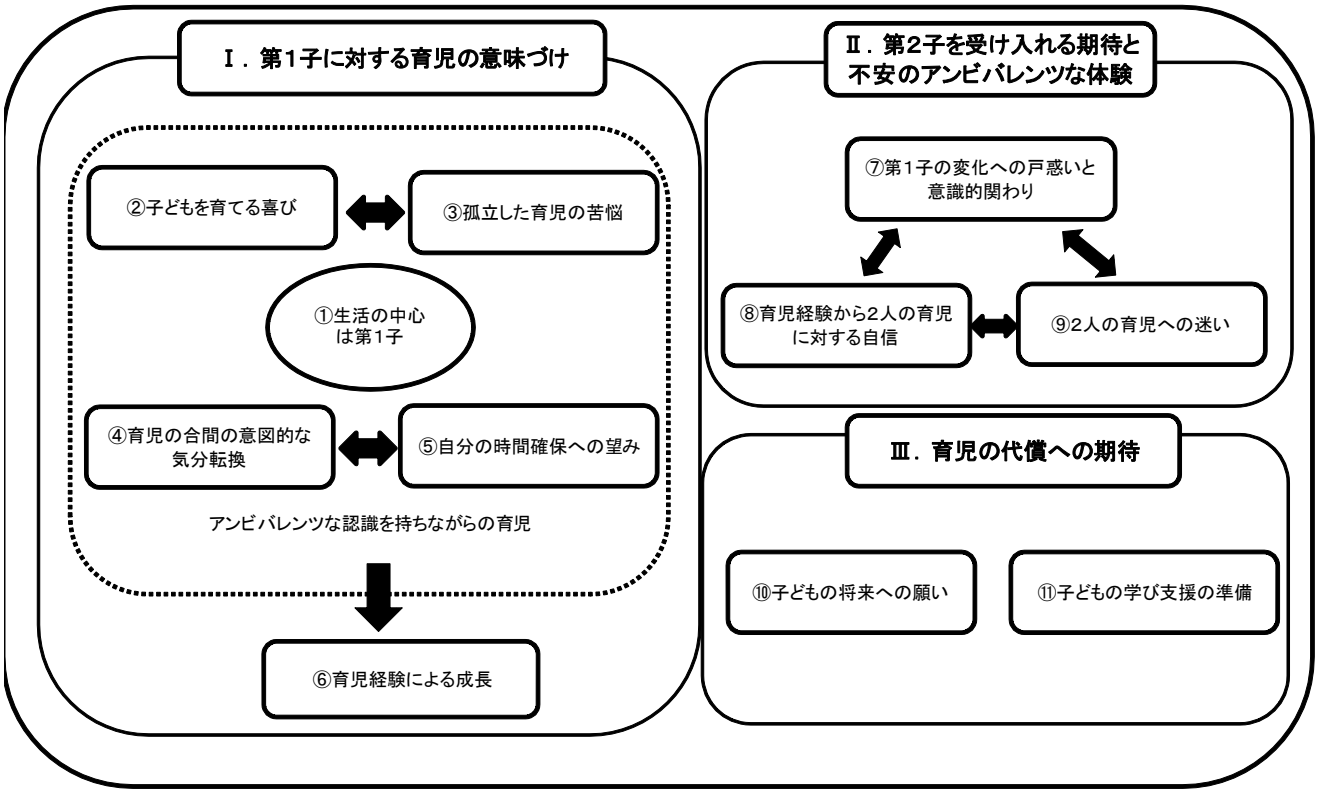


図２　第 2 子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験の構造

２）結果が示唆する看護介入のあり方

（1）第 1 子の育児中心の生活経験と自己成長

第 2 子妊娠中の母親の妊娠や育児に関するとらえ方の特徴は、初めての妊娠とは異なり、第 1 子の育児の延長線上での妊娠であるため、＜生活の中心は第 1 子＞であった。山崎 [33] も，第 2 子を迎え入れる家族形成プロセスの中で，女性は胎児より第 1 子を気遣いながら生活していたということを指摘しており，本研究においても，第 2 子妊娠中の母親の主観的体験の中心として示唆された。

＜孤立した育児の苦悩＞の体験は，我部山 [14] によると，経産婦の妊娠期

における身体的・精神的苦痛の訴えとして，第 1 子の世話をしながらつわりなどの身体症状を体験し苦痛を伴うことや，初めての妊娠時より夫や周囲からの関心やサポートの低下があるという指摘がある。「2 人目だから大丈夫だろうとまわりは甘く見ていると思う」というように，第 2 子妊娠中の母親の多くは初めての妊娠時に比べ，周囲の気遣いの低下を感じていた。また，第 1 子を育てながら，妊娠に伴う生理的変化による身体的負担を伴っていることが示唆された。

＜自分の時間確保への望み＞は，第 2 子を妊娠しながら日中の殆どを子どもと 2 人の生活を送ることを余儀なくされ，育児や仕事に追われ，自分の時間というものはないに等しい生活は想像できる。経産婦の妊娠中の感情として「あわただしくて，ゆっくりと気持ちを振り返る余裕がない」という感情が初めての妊娠に比して多くなったとの結果 [54] でも指摘しているように，第 1 子の世話の殆どを担うのは母親であり，「自分に時間を使いたい」と語らせる要因であろう。母親が子どもと向き合うためには，自分自身を見つめる時間が必要であることが示唆された。

＜育児経験による成長＞＜子どもを育てる喜び＞は，育児に携わることによる自身の変化への肯定的な評価として意味づけられている。内閣府の調査では [53]，育児が楽しいことの理由として「子どもの成長に立ち会えること」「家族のきずなが強まること」「育児を通じて自分が成長できること」というように本研究においても，育児体験を通して親役割を遂行する中で自ら獲得したものとして語られた。

（2）第 1 子の兄姉になる準備をしながら第 2 子を迎え入れる準備

＜育児経験から 2 人の育児に対する自信＞は，第 1 子が兄姉になる準備をしながら、第 2 子を迎え入れることで、育児を楽しめそうという認識の表現であった。第 1 子の育児経験から学習しており，母親の育児に対する気持ちにも余裕があり，前向きな語りであった。

一方「2 人を同時に育てることができるかどうか心配」というように，＜2 人の育児への迷い＞を感じていた。第 1 子が乳幼児の場合，育児に手のかかる時期である。2 人目が誕生したら今以上に子どもに追われる日々を想像すると，育児の経験を活かして育児を楽しむという余裕をもって第 2 子を迎え入れることが困難であることが考えられる。育児経験はあるものの，2 人の子を同時に育てることは初めてであるためイメージしにくい。育児の経験者であろうとも母親への支援は必要である。

本研究における対象者の第１子の殆どが幼児期であった。家族の愛情を独占し，周囲の関心も話題も自分ひとりに向けられていたが，第２子の妊娠を契機に変化する。第１子のかかわりに困惑しつつも，意識的にかかわっており,＜第１子の変化への戸惑いと意識的関わり＞として表現されたと考える。第２子妊娠期間中における母親と第１子の関係として，妊娠中期以降に第１子は心理的な不安定さを増し，妊娠後期は少し距離を置きながら第１子とかかわろうとする母親と，それに反発する第１子の葛藤が強まることが示されており[54]，本研究においても第２子を迎え入れる準備として，第１子へのかかわり方に戸惑いを感じていた。妊娠中の母親のみならず家族に対しても，幼児期の特徴について説明し，子どもの心の動きを理解して対応やしつけを行うことにより，情緒面が安定し周囲の大人との信頼関係が形成され，自己制御を身につけていくことなどを説明すること[35]により，第１子へのかかわり方への戸惑いの軽減になるであろうと思われる。すでに新しく兄姉になる子どもとその家族を対象としたクラスを実施しているが[28]，今後はますます家族成員を含めた出産準備クラスや産後のフォローアッププログラムが必要である。

（3）子どもの未来を展望し親役割を受諾する

多くの母親は＜子どもの将来への願い＞を持っていた。育児は楽しい事ばかりでなく，自己制御することが多く辛いこともある。しかしながら，子供の成長に立ち会うことができることが育児の醍醐味である。そして育児の楽しさを感じることができる。柏木らの調査によると[50]，自分にとって育児の楽しさは,「子どもの成長に立ち会えること」を挙げた者の割合が 67.8%と最も高く,「子どもの様子を見ているだけで楽しい」（43.5%）であった。子供の将来展望を含め，子どもは親にとって精神的価値[50]がある存在であるといえる。

３）第２子妊娠中の母親の主観的体験の特徴と看護介入

第２子妊娠中の母親の育児に対する主観的体験の特徴は，＜生活の中心は第１子＞のサイクルであった。その生活は＜自分の時間確保への望み＞を期待する一方で，＜育児の合間の意図的な気分転換＞を図っていた。第１子の育児について＜子どもを育てる喜び＞とともに＜孤立した育児の苦悩＞を感じていた。これらの生活に対し，アンビバレンツな認識を持ちながらの育児体験から，＜育児経験による成長＞と【第１子に対する育児の意味づけ】を

していた。第 2 子出産後の育児に関しては＜育児経験から 2 人の育児に対する自信＞の一方で，2 人の育児は初めての体験であるため＜2 人の育児への迷い＞を抱いていた。＜第 1 子の変化への戸惑いと迎え入れる準備＞をしながら，兄姉になることを意識的に関わっており，まだ見ぬ【第 2 子を迎え入れる準備】をしていた。第 2 子誕生後将来にかけての育児には，【育児の代償への期待】として＜子どもの将来への願い＞を持ちつつ＜子どもの学び支援の準備＞をしていた。

第 2 子妊娠中の母親は，第 1 子の妊娠・出産・育児の経験からの自信の一方で，同時に 2 人を育てることは初めてのためイメージしにくく，不安にさえ感じていた。特に第 1 子へのかかわりに対し戸惑いを抱いていた。妊娠中の母親に対し乳幼児期の特徴とかかわり方の説明をすることなどを含め，第 2 子妊娠中の母親および新しく兄姉になる家族を含めた支援の必要性が明らかになった。

第 2 項　文献からのニーズ分析

１．分析方法

１）対象論文の選定

第 2 子妊娠中から出産後の母親の支援ニーズを明らかにし、準備教育プログラムを考案する為には、第 2 子妊娠中および出産に関する母親の意識および支援についてのデータを扱っている論文を選出することが必要である。また、育児については各国各々の文化や施策の違いなどが影響する[65]。そのため本研究では、日本の文化や施策の影響を受けた第 2 子妊娠中の母親の支援ニーズを明らかにするため、日本の文献を分析することとした。文献は医学中央雑誌刊行会「医中誌 Web」から 1995 年から 2010 年の関連文献を「第 2 子」「育児」「看護」で検索した。

２）分析手法

収集した論文を丹念に読み、研究目的、理論的背景、研究方法、研究結果などについて評価した。さらに、第 2 子妊娠中および出産・育児に関する母親の意識や体験および支援について記述がある論文を分析対象とした。それらの記載がないものは除外した。支援ニーズは育児に対する意識や体験を抽出することで明らかになると考えたため、選択した論文より第 2 子妊娠中から出産後の母親の育児に対する意識や体験および支援方法を抽出した。なお、各調査から

得られた記述をそのままデータとして用いた。データの同質性・異質性から内容を整理分類した。

なお、検討した枠組み及び準備教育プログラムの考案は、助産学研究者および臨床経験 10 年目以上の助産師（合計 5 名）でプログラム内容の妥当性や臨床実施可能性を検討した。

２.分析結果

2011年3月17日現在「第2子」「育児」「看護」のキーワードでの検索文献は68件であった。その中から研究表題が本研究対象の文献の種類に該当しない文献を削除し、第2子の妊娠出産および育児に関する母親の意識と体験および支援に関する原著論文および研究報告、資料の計15論文を分析対象一次論文とした（表5)。

表５　1995年から2010年の「第2子」「育児」「看護」をキーワードとした国内論文

著者名（発表年）	表題	学会誌名	論文の種類	研究目的	研究対象	研究方法
礒山（2010）	第2子妊娠中の母親の子育てに対する主観的体験	日本母性看護学会誌	原著	第2子妊娠中における母親の育児に対する主観的体験を明らかにし、育児支援の方法について考える資料を得る	第2子妊娠中の母親20名	妊娠中期以降に半構成的インタビューし、質的帰納的に分析
宇野他（2010）	第2子出生に伴う第1子の反応と母親の感情	茨城県母性衛生学会誌	報告	第2子出生に伴う第1子の反応と母親の感情を明らかにする	第2子出生した母親4名	産後1カ月に半構成的インタビューし、質的帰納的に分析
小嶋他（2009）	第2子以降の出産を迎える家族のニーズ	南九州看護研究誌	原著	第2子以降の出産を迎える家族が上の子との関係を形成してゆくプロセスを明らかにし、その際に必要とされる助産師による支援について考察する	第2子以降の子育てをしている2名	母親の語りを質的帰納的に分析
納谷他（2005）	第二子出産後の母親の第一子に対する思い　対児感情に焦点をあてて	愛知母性衛生学会誌	原著	第二子出産後の母親の第一子に対する思いを明らかにする	褥婦2名(32歳,35歳.第一子:4歳女児,1歳男児)	「対児感情評定尺度(幼児用)」を用いた質問紙および半構成的インタビューを実施.
坪田（2005）	第2子妊娠中の母親の第1子に対する養育意識　妊娠各期における調査	京都母性衛生学会誌	原著	第2子妊娠中の母親について,妊娠各期における第1子への養育意識の特徴を明らかにする	第2子妊娠中の母親208人	定期妊婦健康診査を受診するために来院した際に質問紙を配布し健診後に回収箱で回収。.養育意識について,「育児生活へのストレス」「否定的育児行動」「育児肯定感」の下位因子からなる養育意識・行動尺度と,「子育て満足感・生きがい感」「子育て負担感・不安感」「子どもイメージ」の下位因子からなる子ども観尺度を用いた
保田（2004）	第2子誕生後1カ月時における母親のとらえた第1子の反応	日本助産学会誌	原著	第2子誕生後1カ月時における母親のとらえた第1子の反応について、母親が第1子をどのような感情の表れであると理解しているか明らかにする	妊娠36週以降に健康な第2子を出産した母親15人	産後1カ月検診以降2カ月未満の時期に，半構成的インタビューにて質的帰納的に分析
山崎（2003）	3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセス	日本助産学会誌	原著	3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセスを明らかにする	第1子月齢30～36ヵ月で第2子を迎えようとしている女性7人(20代後半～30代前半)	妊娠末期・産後2ヵ月・6ヵ月に家庭訪問し,「1単位としての家族」,「家族内部での相互作用」,「家族外部との相互作用」について半構成的インタビューを実施し、質的帰納的に分析
田尻（2003）	第2子を出産した産後1ヵ月の母親の体験　第1子との体験	日本母性看護学会誌	原著	第2子を出産した母親が産後1ヵ月に第1子との関わりの中でどのような体験をしているかを明らかにする	第2子を出産した母親10例	半構成的インタビューにて質的帰納的に分析
大月他（2002）a	第2子出生に伴う家族の適応過程	日本母性看護学会誌	原著	妊娠後期から第2子出生後3ヵ月までに第2子を統合していく家族の適応過程を明らかにする	第2子を妊娠中の15家族	妊娠後期から第2子出生後3ヵ月迄を縦断的に,主に半構成的インタビューにて質的帰納的に分析
大月他（2002）b	第2子出生前後の第1子の反応と家族の認知	母性衛生	原著	第2子出生前後の第1子の反応と,それに対する両親の認知を明らかにする	第2子を妊娠中の15家族	妊娠末期から出産後3ヵ月までを縦断的に半構成的インタビューにて質的帰納的に分析.
小島他（2001）	第2子の誕生から1ヵ月目までの母親　第1子関係と第1子の行動特徴	母性衛生	原著	第2子の誕生から1ヵ月目までの母親　第1子関係と第1子の行動特徴を明らかにする	1ヵ月前に第2子を出産した母親34名	質問紙調査
江守（2001）	第二子出産後の母親の二児に対する養育費率と第一子に対する態度の変化	母性衛生	原著	第2子出産後の母親の第一子に対する態度について	第二子出産後0～10ヶ月の母親２１４名	質問紙調査
須藤他（2007）	第2子妊娠中から産後にかけての母親の第1子に対する気持ちとかかわりの変化　新しい家族を迎えるためのクラス参加前後に焦点をあてて	聖路加看護学会誌	原著	クラスに参加した母親を対象に、第1子への気持ち及びかかわりに焦点をあて、クラスの前後における母親の気持ちを構成する要素を明確にし、変化を記述する	現在第2子を妊娠中の母親で、第1子が3歳児の3名	クラス1週間前、1週間後、2ヵ月後、産後1ヵ月で行った。半構成的インタビューし質的帰納的に分析
中村他（2006）	新しく兄姉になる子どものクラス「赤ちゃんがやってくる」の実施と評価	日本助産学会誌	資料	兄姉になる子どもが妊娠・出産・性について学ぶクラス「赤ちゃんがやってくる」の概要と実施状況を記述し，クラスの前後で実施されているアンケート結果を基に評価し，今後の課題を明らかにすることを目的とする	11回のクラスにて，クラス前後，出産後アンケートは,88家族に配布した（配布率99%）	クラスを開始した2004年7月から2005年12月の合計11回で得たアンケートの結果を分析
大月（2006）	第2子出生に伴う家族の適応を促す看護介入に関する研究	日本母性看護学会誌	原著	第2子出生を迎える家族に対して、家族が安定感・統制感を獲得できることを目標とした看護介入を行い、第2子出生に伴う家族の適応過程に対する効果を検討し、第2子出生に伴う家族の適応を促す看護介入を明らかにする	第2子妊娠中の合併症のない妊婦を含む家族12組	妊娠末期から産褥早期まで、面接を中心とした介入をおこない、同時期から第2子出生後4～5ヵ月の時期まで、半構成的インタビューと参加観察法を用いて収集した質的データを分析

１）第2子妊娠中から出産後の母親の育児に対する意識や体験（表６）

（１)第2子妊娠中における母親の特徴

第2子妊娠中の第1子への養育意識の特徴として、坪田[32]は第2子妊娠中の母親は妊娠中のどの時期もほぼ同じ養育意識で第1子に接していたことを明らかにしている。また、山崎[33]は第2子を迎えようとしている女性を対象とし、3歳になる第1子を気遣いながら4人家族を形成するプロセスを明らかにした結果、胎児よりも上の子を気がかりとしていたと述べている。

以上から、第2子妊娠中の母親は第１子の反応に着目し、気遣っているといえる。

（２)第2子誕生後における母親の特徴

第2子出生後の母親の特徴について、宇野他[18]は2人同時育児のジレンマや成長を喜ぶといった感情を持っていたと述べている。江守[20]は第2子出生後の母親は第1子にかける関心、労力、時間の比率が第2子よりも大きい傾向にあったと述べている。

田尻[26]は、母親は第1子が母親の思うように行動しないことに苛立ちを感じ、その苛立ちの感情を母親は怒るという行動で表現していた。しかも苛立ちを母親は第1子に向けていたと述べている。須藤他[35]は、第1子の赤ちゃん返りへの漠然とした不安を感じていたことを明らかにしている。さらに、宇野他[15]は、子どもの思いに十分に寄り添うことができずに，ジレンマを抱えていたと述べており、納谷によれは、2人を同時に子育てする際に、第1子への接し方に不安を抱いていたと述べている。須藤他[35]は、同時に2人の子どもを育児していく新たな不安やプレッシャーを抱いていることを明らかにしている。宇野他[15]によると、第2子出生後の母親は2人を同時に育てることによるジレンマを抱いていたと述べている。

以上から、第1子への対応に不安を感じているとともに、対応の仕方に困難を感じているといえる。

宇野他[15]によると、経産婦は、第1子の育児経験を通して母親自身が成長したことにより，ゆとりを持って2人分の育児を楽しんでいたことを明らかにしている。また、母親は退行現象などのネガティブな第1子の反応を予想しているが，第2子が誕生するまで予想しなかった第1子の行動に対し，成長発達を喜ぶといった前向きな一面があったと述べている。安田[31]は、第1子自身の反応として、自分でするようになる、第2子の存在を人に知らせる、人形をかわいがるしぐさをする、我慢するなど成長的行動が見られたと述べている。

以上から、母親は他方で、第1子の育児経験がある事で、第2子誕生後の育児に対してのゆとりや第1子の成長に対する楽しみを感じていることがわかる。

（３）第2子誕生後の母親に対するのサポート

母親がパートナーに関してどのように対処しているかを見ると、山崎[33]は、第1子の妊娠期に比較して1人目ほど実感ない様子と表現し、産後2か月には、やっぱりね・・・・と諦めたように言い、多くを語ることはないと述べている。小島他[22]は、夫を親にするために、方法の模索、支援の中心者である実母からなる家族内支援の立て直しが抽出されたことを明らかにしている。江守[20]は、育児に手伝いの人がいる場合には、母親は第2子に対してより多くの時間をかけていると感じていたことを明らかにしている。

以上から、母親は、父親や祖父母、近隣支援の支援を期待しているといえる。

表6　第2子妊娠中から出産後の母親の育児に対する意識や体験

【生活の中心は第1子】	･母親の第一子にかける関心、労力、時間の比率は、第二子よりも大きい傾向にあった。特に出 ･産直後の0～1ヶ月 では第1子に対する関心が大きかった（江守,2001）。 ･第1子の年齢が3歳以上であるとき、それより高齢の母親に比べて、第2子よりも第1子への関心がいつまでも大きい傾向にあった。（江守、2001） ･産後1か月目にかけて、母親から第1子への親和的（遊ぶ・抱っこする）が増加する傾向が見ら ･れた（小島他2001）。 ･第1子を叱るの頻度が遊ぶや抱っこすると同じように、産後1か月にかけて増加した（小島他 ･2001）。 妊娠末期では「もうすでに4人」の意識を持っていたが,「胎児よりも上の子」を気がかりとし ･ていた（山崎2003）。 ･産後2ヵ月では「第1子の生活リズムは家族の時計」として気遣い,母子3人・夫婦間の非機能的な家族内部での相互作用であった.（山崎2003）。 第2子妊娠中の母親は,妊娠中のどの時期もほぼ同じ養育意識で第1子に接していた（坪田2005）。 第2子妊娠中の母親の子育てに対する主観的体験の特徴は生活の中心は第1子のサイクルであった（礒山2010）。
【第1子に対する育児のへの戸惑い】	･比較的低年齢の段階で弟や妹の誕生を経験した子どもは、母親をいたわるというポジティブな反応を示すと同時に、不安定な行動も示しやすい（小島他2001）。 ･第1子にとって第2子の誕生がストレス源（大月他、2002）。 ･母親は第1子が母親の思うように行動しないことに苛立ちを感じ、その苛立ちの感情を母親は怒るという行動で表現していた。しかも苛立ちを母親は第1子に向けていた（田尻、2003）。 ･母親は第1子の気持ちを理解できずに2人の間に気持ちのずれを感じ、苛立ちと気持ちのずれによって第1子の育児に戸惑い、模索しながらも育児の責任は母親が担わなければならないとい ･う思いから感情がゆれていた（田尻、2003） ･第1子の赤ちゃん返りへの漠然とした不安を感じていた（須藤他、2007）。 ･第1子の子育てについて、子どもを育てる喜びとともに、孤立した子育ての苦悩を感じていた。（礒山、2010）。 ･母親は第1子がわがままになったり、甘えたりする一方で手伝うことに対して、上手に分けて ･いる、気分次第、と捉えていた（田尻、2003）。 ･兄姉として自立しようという行動が見られるが，母親に甘えたいという第1子の反応や行動が表現された（宇野他、2010）。 ･子どもの思いに十分に寄り添うことができずに，ジレンマを抱えていた（宇野他、2010）。 第2子誕生後1か月時における母親のとらえた第1子の反応は第2子への反応として、いたわ存在 ･であることの理解困難な言動、かわいい・気になるという感情などに伴った興味・関心、恪気などの反応を示した（保田、2004） 第1子の母親や親密な人への反応として、離れることへの不安、ぴったりくっついていたい言動、気を引く行動が見られた（保田、2004）。 第1子の攻撃的行動に対しては、負担感という認知が抽出されることが多く、結果として家族の適応過程に否定的な影響を与えていた（大月他、2002）。 第1子への接し方に不安を抱いていた（納谷他、2005）。
【第1子と第2子の育児を同時に行うことへの戸惑い】	･第2子出産後の子育てに関しては、子育て経験から2人の子育てに対する自信の一方で、2人の子育ては初めての体験であるため、2人の子育てへの迷いを抱いていた。（礒山、2010）。 ･同時に2人の子どもを育児していく新たな不安やプレッシャーを抱く（須藤他、2007）。 ･第2子妊娠中の母親は第1子の妊娠・出産・子育ての経験はあるものの、同時に2人の子育ては初めてのことであるためイメージしにくい（礒山2010）。 第2子出生後の母親は2人を同時に育てることによるジレンマを抱く（宇野他、2010）。
【第1子の育児経験を生かした第２子育児へのゆとり】	･第1子の育児経験を通して母親自身が成長したことにより，ゆとりを持って2人分の育児を楽し ･んでいた。（宇野他、2010） 母親は退行現象などのネガティブな第1子の反応を予想しているが，第2子が誕生するまで予想 ･しなかった第1子の行動に対し，成長発達を喜ぶといった前向きな一面があった（宇野他、2010）。 第1子自身の反応として、自分でするようになる、第2子の存在を人に知らせる、人形をかわいがるしぐさをする、我慢するなど成長的行動が見られた（保田、2004）。
【父親役割・実父母・近隣支援に対する期待】	･パートナーに関しては第1子の妊娠期に比較して1人目ほど実感ない様子と表現し、産後2か月 ･には、やっぱりね・・・・と諦めたように言い、多くを語ることはない（山崎、2003）。 ･夫を親にするために方法の模索、支援の中心者である実母からなる家族内支援の立て直しが抽出された（小嶋他、2009） 手伝いの人がいる場合には、母親は第2子に対してより多くの時間をかけていると感じていた（江守、2001）。
【第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴理解】	･第2子出生に伴う第1子の反応と母親の感情を理解して支援をしていく必要性が示唆された。 ･（宇野他2010） ･第2子妊娠中の母親の妊娠・出産・育児に対する特徴を知る（礒山2010） 第2子出生後の母親の感情を説明することが必要（宇野他2010）
【兄姉になる第1子の特徴と接し方の理解】	･両親の認知が適切で対処が効果的となり第1子のストレスフルな状況が軽減され第1子の成長に ･つながる（大月他、2002）。 母親への攻撃的な反応も第1子もこれまでどおりに母親に甘えたいのだと理解できれば、母親 ･は戸惑いを感じることがなく、第1子も自己の成長的な行動により褒められ、望めば母親が手 ･伝ってくれると安心すれば、健康的な母子関係を育む（保田2004）。 ･幼児期の子どもの成長発達過程や特徴を理解した上での関わりが必要（宇野他、2010）。 ･第2子出生に伴う第1子の反応を知る（宇野他、2010） 母親が第1子の感情を汲みとれる観察力を養い第1子の感情を肯定的に受け止め、尊重して関わ ･れる母親の解釈を支持するための援助が必要（保田、2004）。 ･第1子の年齢が3歳以上である時、母親は第1子に対して拒否的であり、さらに期待と矛盾の態度が認められた（江守、2001）。 ･第1子への接し方について知りたい（納谷他、2005）（中村他、2006）。 母親が第2子の行動や内的状態を第1子によく説明するほど,第1子はポジティブな反応を示すことが多く,母親への依存・攻撃を示すことが少なかった（小島他、2001）。 夫婦/両親が第2子出生後の生活をイメージできるように促す（大月、2006）。

第３項　第２子を迎え入れる母親と家族の支援ニーズの総括

第2子妊娠中の母親に対するインタビューおよび、第2子妊娠から出産、育児に関する文献から明らかになった内容を統合して、第2子を迎え入れる母親の支援ニーズを以下の４点にまとめて述べる。

１）第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴理解

２）兄姉になる第1子の特徴と接し方の理解

３）第1子が兄姉になる準備の必要性

４）父親・実父母・義父母に対する育児参加の促進

新たな家族員を迎えるにあたって、母親は、第2子妊娠期から育児期までのどの時期においても、「生活の中心を第1子」においている。その中で、母親は、「第1子に対する育児への戸惑い」とともに、「第1子と第2子の育児を同時に行うことへの戸惑い」を感じている。と同時に、「第1子の育児経験を生かした、第2子の育児に関わることへのゆとり」をも感じている。

以上から、まずは一般的に、１）第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親がどのような意識に基づいて生活をしているのかという特徴を新たな家族員を迎える母親自身が理解する必要がある。

次に、第1子に対する育児への戸惑い２人の子どもに応じることへの戸惑いを解消するために、２）兄姉になる第1子の特徴と接し方を理解する必要がある。また、第1子にとって第2子の誕生は、兄姉になるという新しい役割変化を辿る体験である[64]。兄姉として自立しようという行動が見られる一方、母親に甘えたいという反応や行動が見られたり、退行現象が現れたりする[15] [35]。兄姉になる新しい役割変化に適応していくことが求められる。そのため、３）第1子が兄姉になる準備をする必要がある。

さらには、母親は、第1子と第2子の育児を担っていくにあたり、「父親役割・実父母・近隣支援に対する期待」を持っている。そのため、家族員それぞれが新たな役割機能を発揮し、適応していくには、４）父親・実父母・義父母に対する育児参加を促進する必要があるといえる。

第Ⅵ章　準備教育プログラムの設計(Design) 開発(Develop)

第２子を迎え入れる母親に対する準備教育の枠組み作成、目標・評価の作成、準備教育プログラムの作成について、以下の１項から第６項で述べる。

第１項 準備教育の目標の設定
第２項 準備教育の内容抽出と内容構造
第３項 準備教育の方法の検討
第４項 準備教育のプログラム設計
第５項 準備教育で用いる教材の開発
第６項 準備教育の評価指標の作成

第１項　準備教育の目標の設定

第２子を迎え入れる母親の支援ニーズ分析の結果をふまえて母親に対する準備教育として、以下の５つの目標を設定した。

1. 準備教育の目的

第２子を迎え入れる母親が新しい役割変化に適応し、第１子と第２子の２人同時の育児へ適応することができることである。

2.準備教育の目標

1）第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴が理解できる。

2）兄姉になる第1子の感情が理解できる。

3）第1子の特徴を踏まえた育児が実践できる。

4）妊娠中から第1子が兄姉になる準備の必要性を理解し準備性を高めるかかわりができる。

5）パートナーである父親や実父母・義父母に育児を分担してもらい協力を得ることができる。

第２項　準備教育の内容抽出と内容の構造化

第２子を迎える母親の支援ニーズおよび、準備教育プログラムの目的・目標を達成するための教育内容を抽出し、以下の４項目にまとめて構造化した。

A.第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴
B．兄姉になる第１子の特徴と接し方
C.第１子が兄姉になる準備性を高める方法
D．父親・実父母・義父母に対する育児参加の促進

準備教育の目的および4つの教育内容と2回のクラス内容について、先行研究および母性看護学の専門者と共に検討した（図３）。以下、A）～B）の教育内容ごとに説明する（図４－１～図４－４）。

目標	準備教育の内容と構造		第1回内容	第2回内容
1)第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴が理解できる。	第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特	第1子の出産と第2子出産の違いに気づく	○	
		生活の中心は第1子	○	○
		第1子の変化への戸惑いと第2子を迎える準備		○
		2人の育児への戸惑い		○
		育児経験から2人の育児に対する自信		○
2)兄姉になる第1子の感情が理解できる。	兄姉になる第1子の特徴	退行現象	○	
		自立が進む	○	
		兄姉になる準備	○	○
3)第1子の特徴を踏まえた育児が実践できる。 4)妊娠中から第1子が兄姉になる準備の必要性を理解し行動できる。	第1子が兄姉になる準備性を高める方法	第2子の行動や内的状態を第1子によく説明する	○	○
		兄姉になるということの説明	○	○
		第2子の誕生に一緒に参加する	○	○
		第1子を優先する	○	○
		きょうだいが一緒に過ごす時間をとる	○	○
		認め・褒める	○	○
5)父親・実父母・義父母が育児に対して協力できる。	父親・祖父母に対する育児参加の促進	第2子誕生後の育児について話し合う		○
		母親一人で頑張らない		○
		父親・祖父母の育児参加		○
		地域子育て支援の情報提供		○

図３　準備教育の目的および教育内容とクラス内容

A.第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴（図４－１）

第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴を理解することは、自分の置かれた状況を客観的にみつめ第１子と第２子の２人同時の育児に適応するために必要になる。礒山[12]は第２子妊娠中の母親の特徴として、生活の中心は第１子、第１子の変化への戸惑いと迎え入れる準備、２人の育児への迷い、育児経験から２人の育児に対する自信などの初めての妊娠時とは異なる特徴が語られ、母親たちの関心はまだ見ぬ胎児より【生活の中心は第１子】に関する話題が中心であったと結論づけている。坪田[32]は第２子妊娠中の第１子への養育意識の特徴として、第２子妊娠中の母親は妊娠中のどの時期もほぼ同じ養育意識で第１子に接していたことを明らかにしている。山崎[33]は第２子を迎えようとしている女性を対象とし、3歳になる第１子を気遣いながら４人家族を形成するプロセスを明らかにした結果、胎児よりも上の子を気がかりとしていたと述べている。宇野ら[18]は第２子出生後の母親は２人同時の育児のジレンマや成長を喜ぶといった感情を持っていたと述べている。江守[20]は第２子出生後の母親は第１子にかける関心、労力、時間の比率が第２子よりも大きい傾向にあったと述べている。

以上より第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴を理解することが自己理解に繋がり、２人の同時育児に適応していくプロセスを支援することになる。

内容は、第１子時の出産と第２子出産時の違いに気づくことが自己理解に繋がる。また、第２子妊娠中の母親の体験として、生活の中心は第１子であること、第１子の変化への戸惑いと第２子を迎える準備をしていること、２人の育児への戸惑いを感じていること、育児経験から２人の育児に対する自信がある事について理解することである。

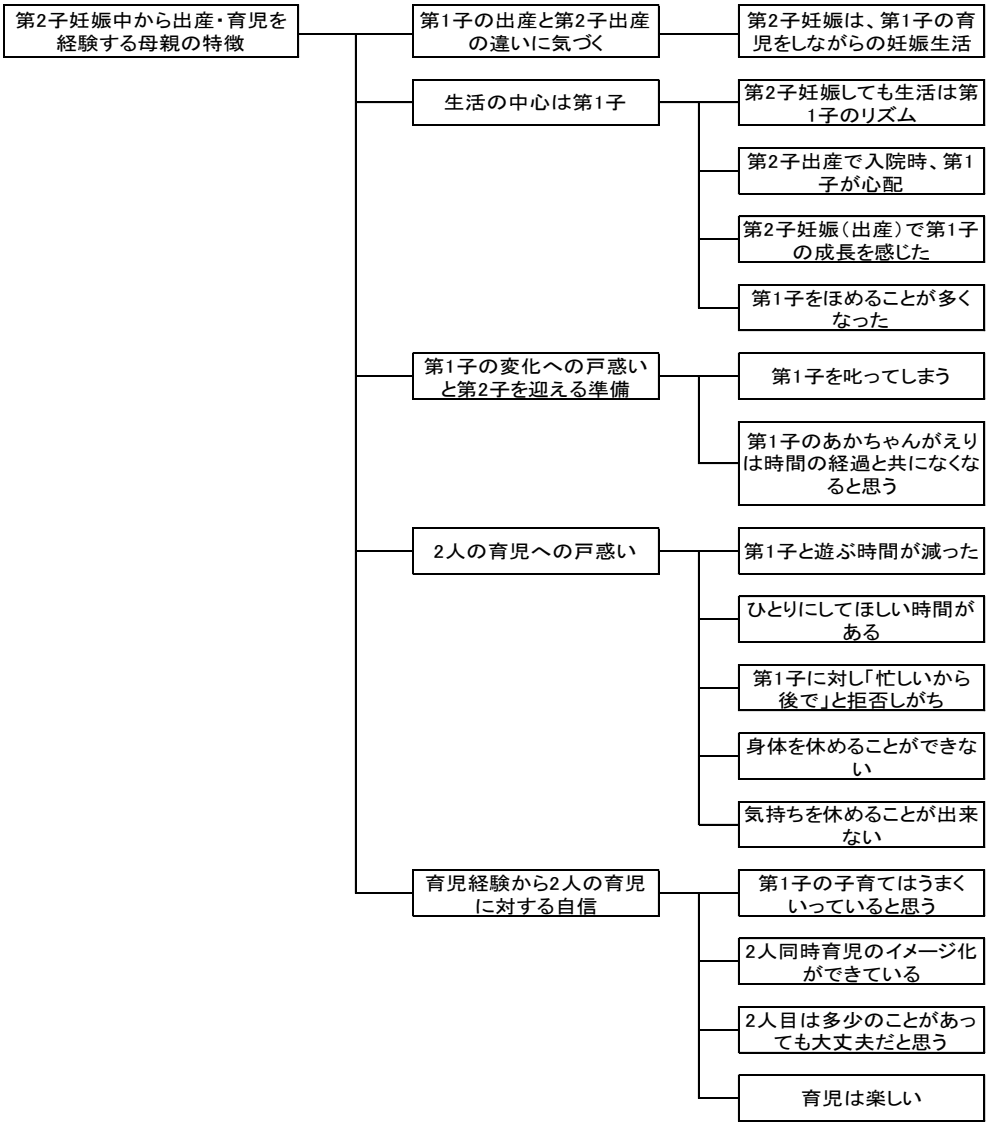


図４－１　準備教育の内容と構造１

（第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴）

B.兄姉になる第1子の感情（図４－２）

宇野他[18]は母親に対し、第２子出生に伴う第１子の反応を説明することが有効であると述べている。子どもの退行現象については、第１子が第２子の気持ちを理解するための行動として、親の認識を変える方法を提唱している[26]。須藤他[35]は新しい家族を迎えるためのクラスにおいて第２子妊娠中から産後にかけての母親の第１子に対する気持ちとかかわりの変化として、第１子の赤ちゃん返りについて語られていたと報告しており、礒山[12]は妊娠中に母親と家族に対し幼児期の特徴とかかわり方などの説明の必要性を述べていた。納谷他[30]中村他[36]によると、母親達は、第１子への接し方を知りたいことを明らかにしており、田尻[26]によると、出産後の母親は、第１子の気持ちのずれを感じていると報告している。保田[31]は第１子もこれまでどおりに母親に甘えたいのだと理解できれば母親は戸惑いを感じることがないこと、第１子も自己の成長的な行動を褒められることにより健康的な母子関係を育むとしている。大月他[29]も両親の認知が適切となることで対処が効果的となり第１子のストレスフルな状況が軽減され成長につながることが認められたと報告している。

以上より、母親が第１子と第２子の２人同時の育児に適応する為には【兄姉になる第１子の感情】を理解する知る必要がある。

内容は、第１子には退行現象が現れると同時に、自立が進むこと、退行現象の出現の意味について理解する。また、第１子の変化として、少しずつ兄姉になる準備が行われることを理解することである。

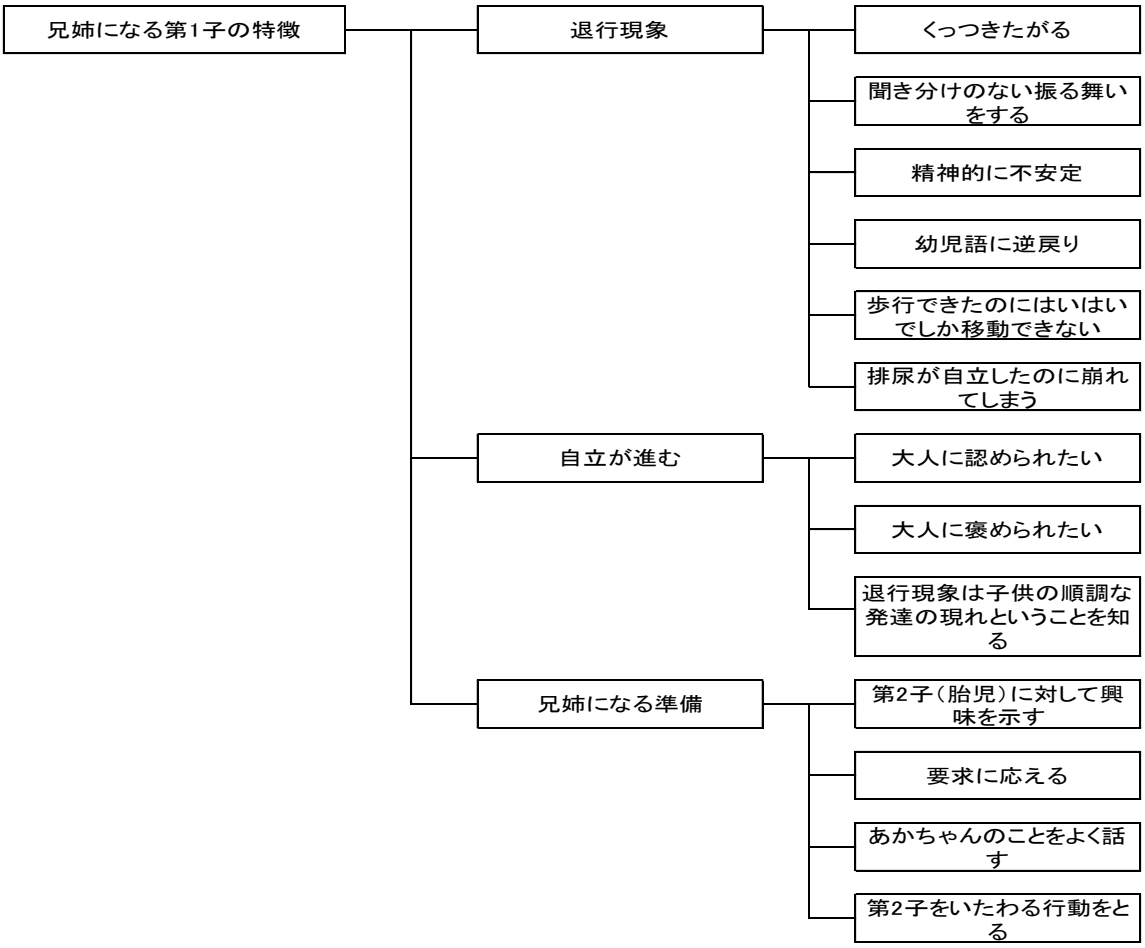


図４－２　準備教育の内容と構造２
（兄姉になる第1子の特徴）

C.第1子が兄姉になる準備性を高める方法（図４－３）

【第１子が兄姉になる準備性を高める方法】として小嶋他[21]は、第１子が兄姉になる心理的準備のための支援の必要性を報告していた。さらに母親が第2子の行動や内的状態を第１子によく説明するほど第１子はポジティブな反応を示すことが多く、母親への依存・攻撃を示すことが少なかったと報告している[22]。大月他[29]は第２子を迎えるにあたり家族適応過程を促進する家族対処行動として、第２子準備受容行動が必要であると述べている。

以上より、第２子を迎え入れる母親に対し、【第１子が兄姉になる準備性を高める】ことで、第１子のポジティブな反応を高めることができる。

内容は、第２子の行動や内的状態を第１子に良く説明すること、兄姉になることを説明すること、第２子の誕生に一緒に参加すること、第１子を優先すること、きょうだいが一緒に過ごす時間をとること、第１子認め・褒めることの必要性を理解することである。

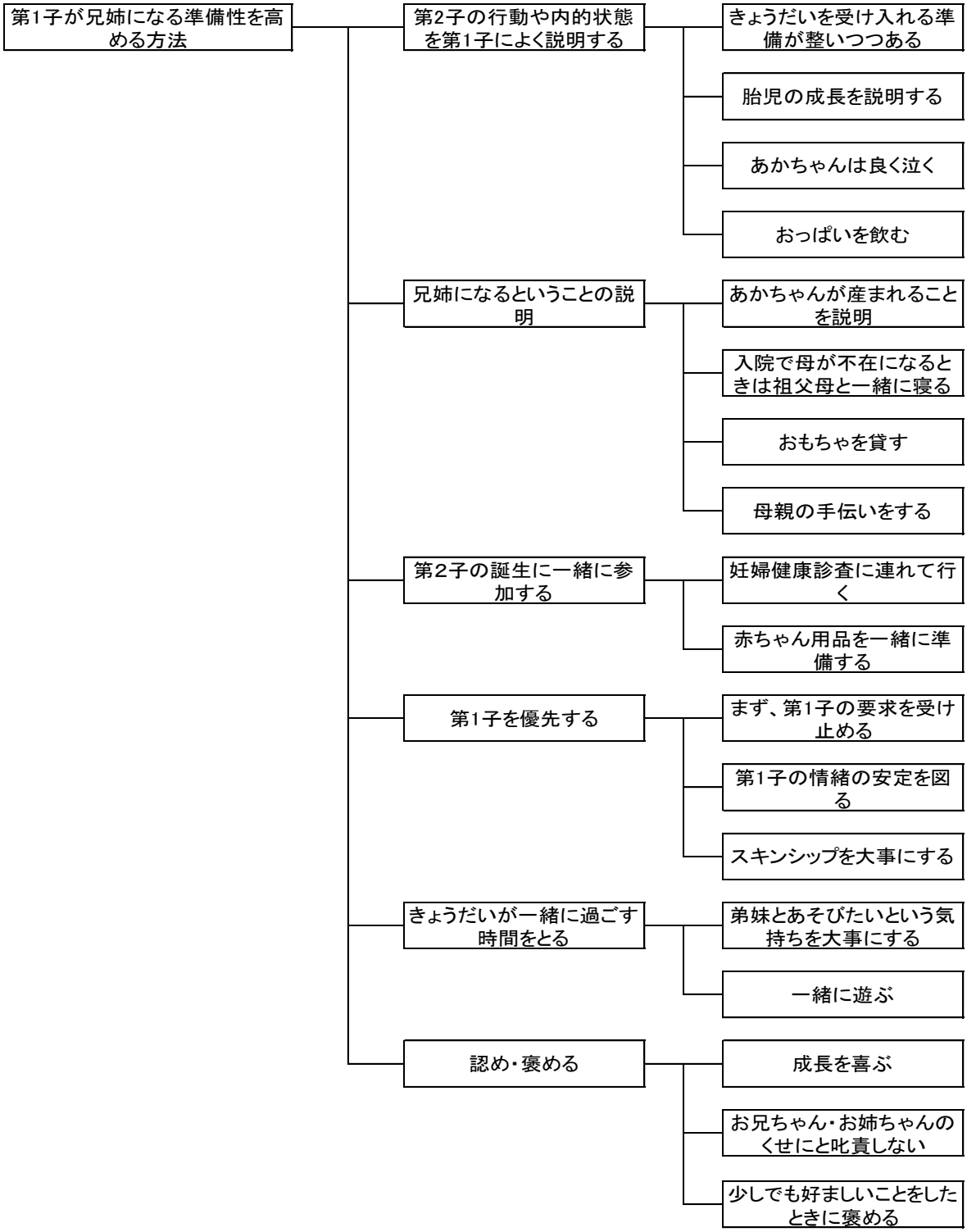


図４－３　準備教育の内容と構造３

（第1子が兄姉になる準備性を高める方法）

D．父親・実父母・義父母に対する育児参加の促進（図４－４）

育児は母親のみならず家族及び地域の支援等が重要である。特に夫の存在は重要な位置を占める[50][51]。また育児支援において身近に存在する祖父母の協力は大きい[12]。祖父母に対しても現代における育児環境・方法の違いなどについて知ってもらい、次世代を育成する方法について共に考えてもらうことも必要である。大月他[29]は家族適応過程を促進する家族対処行動として、育児への巻き込み、夫婦の話し合い、夫婦の役割調整が必要であると述べており、納谷他[30]は、母親の第１子に対する接し方への不安には、家族サポート状況が影響しているのではないかと述べている。小嶋他[21]は第２子以降の出産を迎える家族が上の子との関係を形成してゆくプロセスにおいて必要とされる支援は、家族内支援の立て直し、家族内支援の活用、近隣ネットワークの活用であると述べている。また、父親や祖父母と親密な関わりあいを持つようになった第１子は活動性の低下や引きこもりを起こしにくいことが明らかである[22]。

以上より、第２子の誕生が第１子の行動にもたらす影響を理解するには、【父親・実父母義父母に対する育児参加促進】が必要である。

内容は、第２子誕生後の育児について話し合うこと、母親一人で頑張らないこと、父親・祖父母の育児参加が必要であること、地域子育て支援の情報提供である。

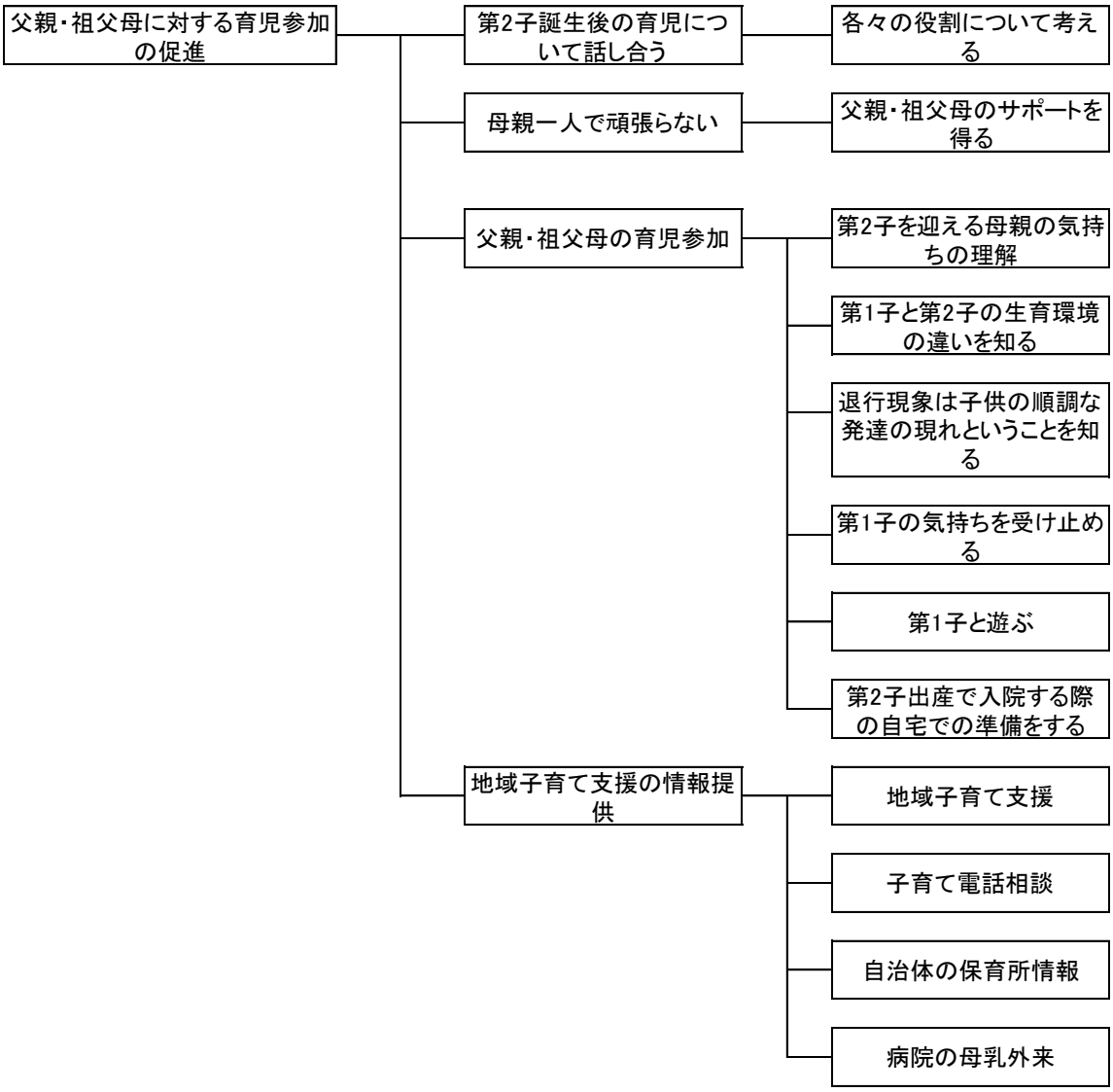


図４－４　準備教育のと構造４

（父親・実父母・義父母に対する育児参加の促進）

第３項　準備教育の方法の検討

準備教育の方法の検討として、先行研究を分析し、表7に示した。以下に説明する。

１）妊娠期からの準備教育

家族員が新たな役割に適応していくためには、出産前からの指導・援助が必要であると述べられている[12) 29) 35) 36)]。須藤他[35)]は、経産婦の出産準備教育の必要性を述べており，実際にクラスを実施し，第１子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ，第１子とよりよいかかわりを築きながら第２子を迎えられたと述べている。それらは、母親のみならず、新しく兄姉となる子どもが赤ちゃんを迎える準備教育が必要である[36)]。

妊娠期から育児期にかけて継続的な支援の必要性もある[15) 26) 35)]。宇野他[15)]は、第１子の行動に対するネガティブな感情を軽減させるために，母親が幼児期の行動特徴を理解しながら子育てをすることができるよう産前から産後にかけて支援していくことが必要であると述べており、須藤他[35)]は、継続的な支援やフォローアップが必要と述べている。

以上より、第２子の誕生後ではなく、第２子妊娠期から第２子を迎える準備が必要である。

２）集団クラス運営と面接を組み合わせた教育方法

須藤他[15)]によると、経産婦とその家族への集団クラス運営を実施した結果、母親たちはクラスを通じて解決の糸口をつかむことにより、第1子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ、第1子とよりよいかかわりを築きながら第2子を迎えられ、クラスへの参加により自分の第1子への対応や育児が保証され、自信を高めていく過程が認められたと述べている。中村他は[36)]兄姉になる長子も交えた集団クラスの後の子どもたちは、赤ちゃんのことをよく話すようになった、お母さんのお腹に対して優しくなった、お母さんの手伝いをするようになった、などの変化があったと述べている。また、第1子が第2子に対してどのような反応を示すのかを具体的に話すことや，同じ状況の親同士が交流する機会を設けることも同じ経験をしている母親からの情報交換の場の提供の必要性が指摘されている。以上より、集団クラスを取り入れて運営することが効果的であると言える。

一方、大月[37)]は、夫婦/両親が、第1子に対し、赤ちゃんと赤ちゃんが生まれた後の生活を理解できるように説明する具体的な方法を一緒に考え、促すこと

が必要と述べており、個別に応じた支援が必要であると言える。また、第2子出産後の家族の適応を促すための看護介入として、不確かな状況において家族の行っている対処行動が意識化され、適切性を支持され、対処行動に伴う否定的感情を表出し、肯定的な認知が強化される看護介入が加わることで現在の状況をより客観的に捉え、自信を持ち、適切な行動を継続していくことができると述べている[37)]。

以上より、集団クラスに個別的な関わりを取り入れた運営が効果的であるといえる。

したがって以下の2点を本研究での準備教育の方法とする。

1）実施時期

妊娠期からの準備教育

2）実施方法

集団指導と面接を組み合わせた教育方法

表7　準備教育の方法の検討

【妊娠中から育児期にかけて継続的な支援】	・出産前から指導・援助が必要である（大月他、2002）。 ・経産婦の出産準備教育の必要性を述べており，実際にクラスを実施し，第1子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ，第1子とよりよいかかわりを築きながら第2子を迎えられた（須藤他、2007）。 ・第2子妊娠中の母親および新しく兄姉になる家族を含めた支援が必要（礒山、2010）。 ・母親たちはクラスを通じて解決の糸口をつかむことにより、第1子とのかかわりにおける様々な不安や悩みを軽減させ、第1子とよりよいかかわりを築きながら第2子を迎えられた（須藤他、2007）。 ・新しく兄姉となる子どもが赤ちゃんを迎える準備教育が必要で（中村他、2006）。 ・第2子出生に伴う家族の適応を促すための夫婦に対する妊娠末期と産褥早期の面接介入（大月、2006）。 ・第1子の行動に対するネガティブな感情を軽減させるために，母親が幼児期の行動特徴を理解しながら子育てをすることができるよう産前から産後にかけて支援していくことが必要（宇野他、2010）。 ・継続的な支援やフォローアップが必要（須藤他、2007）。 ・母親が2人の子どもを育児しているイメージを持つことができる準備的関わりも重要（田尻、2003） ・不確かさや体験などからくる強い不安を緩和することは妊娠中に1回の介入では困難で、否定的な感情を十分に受け止め、共感することを繰り返すことで徐々に客観的な評価さらには対処へと目を向けるようになる（大月、2006）。 ・妊娠中に母親と家族に対し幼児期の特徴とかかわり方などの説明（礒山、2010）
【クラス運営と面接を組み合わせた支援】	・クラスへの参加により自分の第1子への対応や育児が保証され、自信を高めていく過程が認められた（須藤他、2007）。 ・夫婦/両親が、第1子に対し、赤ちゃんと赤ちゃんが生まれた後の生活を理解できるように説明する具体的な方法を一緒に考え、促す（大月、2006） ・第1子が第2子に対してどのような反応を示すのかを具体的に話すことや，同じ状況の親同士が交流する機会を設けることも同じ経験をしている母親からの情報交換の場の提供（礒山、2010）。 ・クラスの後子どもたちは、赤ちゃんのことをよく話すようになった、お母さんのお腹に対して優しくなった、お母さんの手伝いをするようになった、などの変化があった（中村他、2006）。 ・第2子出産後の家族の適応を促すための看護介入として、不確かな状況において家族の行っている対処行動が意識化され、適切性を支持され、対処行動に伴う否定的感情を表出し、肯定的な認知が強化される看護介入が加わることで現在の状況をより客観的に捉え、自信を持ち、適切な行動を継続していくことができる（大月、2006）。 ・親とのディスカッションの時間も良かったこととしてあげられていた（中村他、2006）。

第４項　準備教育のプログラム設計

これまで検討した、第2子を迎える母親の支援ニーズから準備教育の内容、方法を検討し、図4のように構造化した。

新たな家族員を迎えるにあたって、母親は、第2子妊娠期から育児期までのどの時期においても、「生活の中心を第1子」においている。その中で、母親は、「第1子に対する育児への戸惑い」とともに、「第1子と第2子の育児を同時に行うことへの戸惑い」を感じている。と同時に、「第1子の育児経験を生かした、第2子の育児に関わることへのゆとり」をも感じている。

それらのニーズを満たすための教育内容としてA.第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴の理解や、B.兄姉になる第1子の特徴と接し方の理解、C.第1子が兄姉になる準備の実施、D.父親・実父母・義父母に対する育児参加の促進が挙げられる。

これらの教育内容を教授し、母親の適応を促すために重要な時期は、新たな家族成員を迎え入れる準備期である【妊娠期からの準備教育】であると言える。

また、A～Dの学習内容における知識・技術の習得・態度の変容を促すためには、【クラス運営と面接を組み合わせた教育方法】が適切である。まず、第1に講義形式で行うことで、知識・技術の習得が可能である。第2に母親および家族員同士のディスカッションを行うことで、態度変容を狙う。一般にディスカッションの効果として､新しい問題解決方法を学び視野を広げることができ、他の参加者から励ましや支えもあり自信がつくということがあげられる[57]。

さらには、面接による準備教育も個々の要因によっては必要となる[37]ため、第1子と第2子の2人同時の育児に適応するには集団指導の中でも個別に応じた支援を行う必要がある。

以上より、母親が新しい役割変化に適応し、第1子と第2子の2人同時の育児へ適応するためには、【クラス運営と面接を組み合わせた教育方法】学習方法をとる必要があるといえる。

１．実施時期および回数

準備教育プログラムは、母親を対象とした第2子を迎えるための準備教育プログラムであるため、出産前教育として位置付ける。

第2子妊娠中の母親は、第1子の育児を行いながらの妊娠生活であるため、腹部増大とともに、身体的に負担が増す。また、妊娠期の40週という限定のある

期間に開催することになるため、妊娠が安定した時期が望ましい。そのため、妊娠中期と妊娠後期の2回を1クールとし、1回60分とする。

経産婦は2人目(3人目)の子どもだから、仕事をしているからなどの理由から3割以上の者が母親学級への参加を希望しなかったと報告している[58]。母親及び第1子を含めた家族が参加できるよう週末に設定する。

第1回、第2回の準備教育の内容と方法については、以下のように設定した。

２．第1回：妊娠中期の準備教育の内容と方法（表8－1）

第1回は妊娠中期に60分の準備教育を開催する。時間配分は導入5分、展開50分、まとめ・質疑応答5分とする。集団クラスが終了後、個別的に関わる。

導入は、担当者の自己紹介を行う。内容は、氏名、準備教育の目的と本日の内容や時間について、助産師の業務についての紹介とする。

展開は、参加者の自己紹介も含め、第1子が誕生した時に母親の気持ちについて、参加者一人ずつに答えてもらう。内容は、参加者の氏名、第1子の年齢、第1子の妊娠・出産・育児体験についてとする。第1子妊娠時と第2子妊娠時の相違について母親自身が客観視した上で、第2子を迎え入れるための具体的な方法について説明することが効果的であるため、それらの発言を中心に、ディスカッションを行う。

続いて、兄姉になる第１子の特徴と接し方の理解や、第１子が兄姉になる準備の実施のために、第２子を妊娠する前後の第１子の様子について語ってもらい、ディスカッションすることで、第１子の育児に関する思いが共有できる。そのディスカッションをもとに、兄姉になる第１子の特徴について説明を行う。

次に、第1子が兄姉になるための準備の内容について説明する。内容は、母親の腹部に胎児が存在すること、母親の腹部の増大とともに、第1子と遊ぶ時間が少なくなっていくこと、母親は第2子出産のため自宅を不在にするために、第1子は父親・祖父母と共にすごすこと、第1子が第2子に自分のおもちゃをかしたり、第2子をあやしたり、母親の手伝いをし、兄姉になっていくことに関する内容を物語として、第1子が兄姉になる準備をしていくことを促す。物語は絵本媒体とし、自宅でも第1子に対して読み聞かせを行うことが兄姉になる準備に役立つことを伝える。

最後に、第1子が誕生した時の母親の気持ちについて、兄姉になる第1子の特徴と接し方についてまとめ、本時の内容に関する質問があれば応答する。クラスの終盤には参加体験を振り返り、参加意義を明らかにすることを狙いとする。運営者は参加者の表現した内容をお互いが受け止められるように援助し、お互

いに参加者から何を得たのかを回顧させ、考えることができるよう支援していく。

３．第2回：妊娠後期の準備教育の内容と方法(表8－2)

第2回は妊娠後期に60分の準備教育を開催する。時間配分は導入5分、展開50分、まとめ・質疑応答5分とする。集団クラスが終了後、個別的に関わる。

導入は、担当者の自己紹介を行う。内容は、氏名、準備教育の目的と本日の内容や時間について、助産師の業務についての紹介とする。

展開は、参加者の自己紹介を行い、第1回の準備教育に参加した感想や、準備教育参加後の第1子の様子について答えてもらい、ディスカッションする。

続いて、第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴を理解するために、第2子妊娠中の母親の心理について説明する。内容は、第2子妊娠中の母親へのインタビューおよび文献レビューより抽出した第2子妊娠中の母親の心理についてとする。

次に、兄姉になる第1子の特徴と育児の工夫について説明する。具体的には、退行現象への対応、父親・祖父母の支援状況と支援の必要性について現状を発問しながら説明を加える。

子育て情報は、第1子誕生後の活用などを含め体験を聞きながら、病院や地域の育児支援に関する情報の提供を行う。

最後に第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴について、兄姉になる第1子の特徴と育児の工夫について、父親・祖父母の支援の必要性についてまとめ、本時の内容に関する質問があれば応答する。クラスの終盤には参加体験を振り返り、参加意義を明らかにすることを狙いとする。運営者は参加者の表現した内容をお互いが受け止められるように援助し、お互いに参加者から何を得たのかを回顧させ、考えることができるよう支援していく。

４．準備クラス運営時の留意点

参加者同士が、第２子を迎えることや第１子の育児についての体験談やどのように感じ考えているかを聞くことにより､個々の育児観の共有の機会となる。介入方法は参加型のクラス運営を中心としディスカッションは母性領域の専門家がファシリテータの役割を担い、参加者間で情報を交換できるように働きかけることとする。

表８－１　準備教育の展開（第１回）

目的：家族員各々が新しい役割変化に適応し、第1子と第2子の2人同時の育児へ適応することができる。
目標：
1）第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴が理解できる。
2）兄姉になる第1子の感情が理解できる。
3）第1子の特徴を踏まえた育児が実践できる。
4）妊娠中から第1子が兄姉になる準備の必要性を理解し行動できる。
5）父親・実父母・義父母が育児に対して協力できる。

項目		時間	内容	方法	使用媒体	留意点
受付			名札の配布とアンケートへの記入依頼			
第１回（妊娠中期）						
導入	担当者の紹介および本日の内容説明	5分	担当者の自己紹介と助産師の仕事について	説明		
展開	第1子が誕生した時	20分	第1子が誕生した時の母親の気持ち	ディスカッション		自己紹介および第１子の年齢 出産に臨む準備を含め、第1子の出産時の状況を想起してもらう。
	第2子を迎え入れる第1子の気持と準備について	30分	現在の第1子の状況について 第2子を迎え入れる第1子の気持ち	ディスカッション・説明	パンフレット「退行現象の事例」	第2子を妊娠してから現在に至る第1子の状況についてディスカッションすることで共有する。 第2子を迎え入れる第1子の気持ちや態度を説明する。
			赤ちゃんの誕生について	説明・ディスカッション	絵本「赤ちゃんがうまれる」第1子が主人公である兄姉になる気持ちについてのストーリー	絵本の内容について電子媒体を用いて説明する。母親が自宅に帰っても第1子がきょうだいを受け入れる準備の方法として活用してもらう。母親・父親・祖父母に対して読み聞かせを促す。
まとめまとめ・質疑応答		5分				

表８－２　準備教育の展開（第2回）

目的：家族員各々が新しい役割変化に適応し、第1子と第2子の2人同時の育児へ適応することができる。
目標：
1）第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴が理解できる。
2）兄姉になる第1子の感情が理解できる。
3）第1子の特徴を踏まえた育児が実践できる。
4）妊娠中から第1子が兄姉になる準備の必要性を理解し行動できる。
5）父親・実父母・義父母が育児に対して協力できる。

項目		時間	内容	方法	使用媒体	留意点
受付			名札の配布とアンケートへの記入依頼			
第2回（妊娠後半期）						
導入	本日の内容説明	3分		説明		
展開	絵本のよみきかせの感想	15分	絵本のよみきかせの感想	ディスカッション		自宅で絵本を読み聞かせた回数や読み聞かせした母親の感想、第１子の様子などはなしてもらう。
	第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴について	10分	第2子妊娠中の母親の心理について	ディスカッション・説明	パンフレット「第2子妊娠中の母親の心理について」	先行文献結果を用いて、第２子妊娠中の母親の心理を説明する。
	第1子の特徴と育児の知恵について	25分	2人の育児の知恵	ディスカッション・説明	パンフレット「妊娠中から第2子出生にかけて第1子への関わり方」	今の第１子の状況を話してもらいながら勧める。
			退行現象への対応			
			父親・祖父母の支援状況と対応			第1子時および第２子出産後の支援状況を話してもらう。
	子育て情報について	5分	病院・地域支援の情報提供（助産師外来、母乳外来、育児サークル、子育て支援センター、保健センターでの育児相談等）	説明	パンフレット「子育て情報」	第1子時利用の感想など話してもらう。
まとめ		5分	クラス終了後、アンケート記入			

第５項　準備教育で用いる教材の開発

準備教育の目的を達成するため、効果的で具体的な内容が理解できるように用いる教材を開発した。

１）紙媒体パンフレット（資料14）

（１）目的

準備教育に用いる教材は、1)第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴の理解、2)兄姉になる第1子の特徴理解、3)第1子の特徴を踏まえた育児の実践、4)父親・実父母・義父母の育児参加の促進に関する知識や技術、態度の習得ができる教材が必要である。準備クラスで参加者集団に説明するために、電子媒体が必要である。また、1)～4)についての知識や技術について、準備クラスでの説明のみでなく自宅でも活用できるように、紙媒体を用いると効果が期待できる。そのため、紙媒体での教材とする。

（２）内容

第１に、第２子妊娠中の母親の主観的体験をもとに説明する。母親の生活の中心は第１子であり､その生活は､自分の時間確保への望みを期待する一方で，＜育児の合間の意図的な気分転換＞を図っていたことについての説明を入れる。

第２に、第１子の育児については＜子どもを育てる喜び＞とともに＜孤立した育児の苦悩＞を感じており、アンビバレンツな認識を持ちながらの育児体験から，＜育児経験による成長＞と【第１子に対する育児の意味づけ】をしていたことを説明に入れる。

第３に、第２子出産後の育児に関しては＜育児経験から２人の育児に対する自信＞の一方で、２人の育児は初めての体験であるため＜2 人の育児への迷い＞を抱いていたことについて説明に入れる。

第４に、第２子妊娠中の母親は、＜第１子の変化への戸惑いと迎え入れる準備＞をしながら，第１子に対し、兄姉になることを意識的に関わっており，まだ見ぬ【第２子を迎え入れる準備】をしていたことについて説明に入れる。

第５に、兄姉になる第１子の発達段階、特に退行現象でとる行動の特徴とその意味について説明を入れる。

第６に、妊娠中から第２子出生にかけての第１子の育児方法および２人同時育児の方法について説明を加える｡家族で第２子を迎えることを意識すること、第１子の発達段階から第１子を優先に接すること、第１子とのスキンシップを大事にすること､兄姉がともにいる時間をとること､第１子の成長を喜ぶこと、

第１子に対して認める・褒めることを心がけること、父親・祖父母の育児参加について説明を入れた。

第７に、病院・地域の子育て情報として、自治体の子ども救急電話相談、休日診療機関のアクセス方法、保育所子ども園一覧リンク先、自治体子育て支援リンク先､助産師専門職団体ホームページリンク先についての情報を挿入した。

（３）活用方法

紙媒体の大きさと容量は、A4版7ページであり、母親が気軽に手に取り学習できるものとする｡準備クラスでの説明のみでなく自宅でも活用できるように、紙媒体を用いると効果が期待できる。そのため、紙媒体での教材とする。

2）絵本（資料16）

絵本には子供の語彙を豊かにし言葉で表現する力や感動する心、想像力、知的好奇心を育てることによって情緒が安定し社会活動で自分を豊かに表現しようとする意欲を引き出すという効果[61)]がある。さらには、情緒・感性を養う効果がある[62)]と報告されている。中村ら[36)]のクラスでは第1子を含めたクラスの運営の中で人形や紙芝居を用いてクラス運営することで、第2子誕生に対してポジティブな反応が見られたと報告している。自宅でも第1子がきょうだいを迎え入れる準備として母親あるいは家族が読み聞かせに活用するには絵本が有効であると考えられる。

（１）目的

絵本を用いることで第1子が興味を示し、兄姉になることについて知ることで、兄姉としての役割適応のための準備となる。

（２）内容

第1子が興味・関心を持つことができるような媒体を考えることが必要ではないかという意見をもとに、第1子を主人公にした絵本を用いる。準備教育が必要な第1子の年齢は、乳幼児期であり、自我意識が芽生え発達していく3歳前後の時期であると考えられる。第1子が第2子の誕生について理解を促すための教材として絵本を用いる。絵本の主人公は第1子であり、胎児の成長と共に弟妹を迎え入れる準備の内容とする。

具体的な内容は、１～４ページに母親の腹部に胎児が存在し、第1子が兄姉になっていく場面、５～１０ページに母親の腹部の増大とともに、第1子と遊ぶ時間が少なくなっていくことや、第１子が母親の手伝いをすることや自分でトイレに行くなど、少しずつ兄になることを感じている場面、１１～１４ページは、母親は第2子出産のため自宅を不在にするために、第1子は父親・祖父母

と共にすごす場面、１５～１６ページは、赤ちゃんが誕生した場面、１７～２２ページは、第2子が自宅にやってきて、父親が第2子の沐浴をしている場面、第1子が第2子に自分のおもちゃをかしたり、第2子をあやしたり、母親の手伝いをし、兄姉になっていく場面の設定とした。

（３）活用方法

自宅で母親及び家族が第1子に対し読み聞かせをする。

第６項　準備教育プログラムの介入計画

１．目的

第２子妊娠中の母親を対象に第２子を迎え入れるための準備教育プログラムを実施し、第１子に対する理解が高まり、第１子と第２子の２人同時の育児に対する適応への準備が進むか、その評価する。

2.方法

1）デザイン：準実験研究

第２子妊娠中の母親に対し第２子を迎え入れるための準備教育を行い，参加した母親を介入群とし，参加しない母親を対照群として設定した２群間を比較する介入研究である。研究仮説は図５のとおり、母親が第２子を迎えいれるための準備教育を受けることで、第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴や、兄姉になる第１子の特徴と接し方、第１子が兄姉になる準備性を高める方法を理解することができる。また、父親・実父母・義父母に対する育児参加が促進される。以上のことから第１子と第２子の２人同時の育児に対する適応への準備が進むとする。

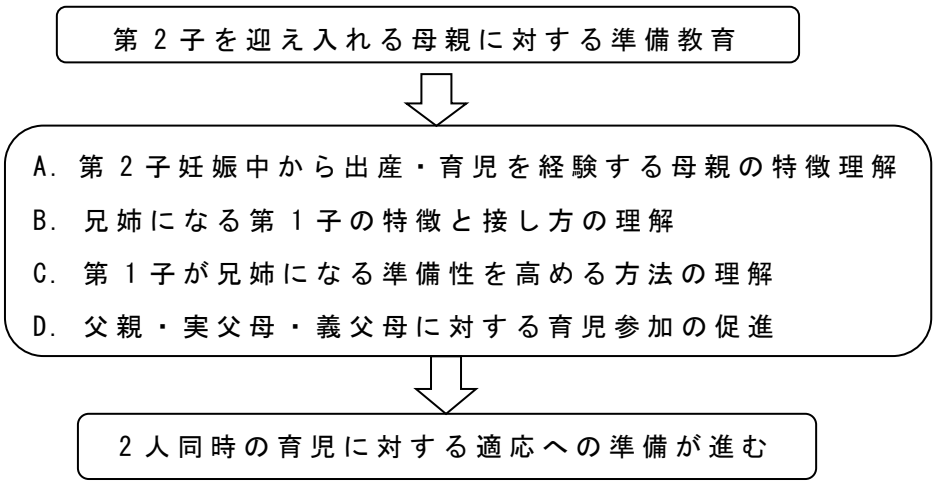


図５　　本研究の仮説

介入プロトコールは図６のとおりである。標本抽出は、便宜的標本抽出法を用いる。まず、第２子妊娠初期から中期の妊婦を対象に研究の説明をし、同意を得た。次に同意が得られた妊婦に対し、同意を得た時点で介入群・対象群とも妊娠中の質問紙調査表の記載を依頼した。次に介入群はクラスの日時を決定し、クラスの案内を手渡した。その後、妊娠 28 週前後および 36 週前後に１回 60 分のクラスを２回受講してもらう。出産後１週間及び１カ月時点で質問紙調査表に記載を依頼する。

対象群は妊娠中及び出産後１週間及び１カ月時点の質問紙調査表の記載を依頼する。

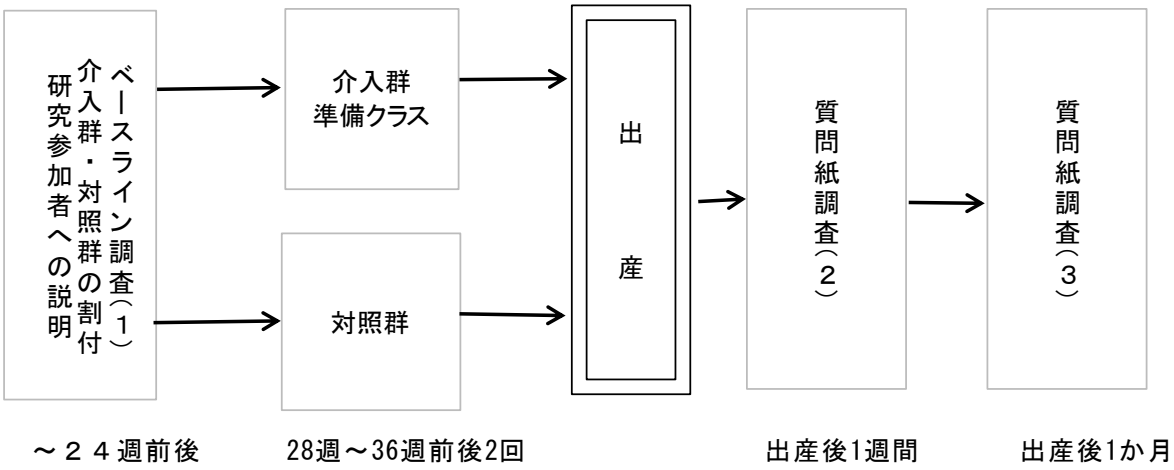


図６

第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための準備教育プログラムの有効性の検討プロトコール

３）介入方法

データ収集にはまず，A 県内の総合病院副院長（産婦人科部長）、看護部長および病棟助産師長に対し，研究の主旨について口頭と文書にて説明し研究実施について承諾を得る。許可が出た後に医療従事者に対象の条件を満たすものの抽出を依頼する。抽出された対象者の外来受診時に、医療従事者を介して対象者に研究参加に対する承諾の有無を聞く。承諾が得られた対象者に本研究の趣旨および方法、倫理的配慮について説明する。本研究者が手渡せない場合は、医療従事者に依頼する。質問紙は記載後、外来に設置した回収箱に投函して頂くように説明する。介入群には、クラスの日時を決定し、クラスの案内を手渡す。

４）調査対象および調査期間

調査対象は、Ａ県内の産婦人科外来に妊婦健康診査に来院しており，幼児を第１子に持つ第２子妊娠中の母親である。対象者の選定基準は（1）第２子妊娠中である。（2）妊娠中期（16 週）程度である。（3）順調な妊娠経過を辿っている。（4）出産後里帰りせず核家族である（5）出産後の研究にも引き続き研究参加に同意することとした。

第７項　準備教育の評価指標の作成と評価方法の設計

1.準備教育プログラムを評価する指標の作成

第2子妊娠中の母親に対する準備教育の目的は、第1子と第2子の2人同時の育児へ適応することができることである。目標は、以下の5点である。

1）第2子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴が理解できる。

2）第2子を迎え入れる第1子の感情が理解できる。

3）第1子の特徴を踏まえた育児が実践できる。

4）妊娠中から第1子がきょうだいを迎え入れる準備の必要性を理解し行動できる。

5）父親・実父母・義父母が育児に対して協力できる。

これらの準備教育の目標の達成度を評価することにより、準備教育プログラムの有効性が検討されることになる。

Polit and Hungler[59] は、プログラム評価に関する４つの分析方法を提案している。それは、

1）Process or implementation analysis：プログラムあるいは介入手順のプロセス、または実行された時にいかに機能するかについての記述をもとにした形成的評価

2）Outcome analysis：プログラムのゴールに到達しているか否か、肯定的な成果は出現しているか否かに関する総括的評価（比較単純な検証の記録によって評価することが可能である）

3）Impact analysis：介入による影響を確認することによる評価

4）Cost-benefit analysis：財政的な価値に関するプログラムのコストの評価である。

本研究においては、1）～3）が評価できるように、質問紙を作成した。

２.準備教育プログラムを測定する成果変数

Outcome analysis の主たる評価指標として、メイン指標である【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】の『母親から見た第 1 子の様子』『2 人の同時育児に対する意識』と、サブ指標である『子ども観尺度』の 3 つの指標を設定した。

１）【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】による Outcome analysis

（１）内容妥当性の検討

メイン指標の【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】は先行して行った第 2 子妊娠中の母親 20 名を対象とした育児に対する主観的体験を明らかにする目的で面接調査を行い抽出した結果 [12) 34)]及び、先行研究をもとに独自に抽出した結果、合計 33 項目となった（表 9)。

33 項目のうち、「第 1 子はくっつきたがる」や「第 1 子は第 2 子（胎児）に対して興味を示す」「第 1 子は要求に応える」などの 9 項目は、『母親から見た第 1 子の様子』に関する質問である。

【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】のうち、「第 2 子出産で入院する際、第 1 子のことが心配」「赤ちゃんがえりは時間の経過とともになくなると思う」「第 1 子の育児の経験を活かして楽しみたい」などの 24 項目は、『2 人の同時育児に対する意識』に関する質問項目である。

これらの質問項目の内容妥当性の検討として、『母親から見た第 1 子の様子』および『2 人の同時育児に対する意識』の内容としてその要素を網羅しているかについて、助産学分野および統計学の専門家 3 名と検討し、第 2 子妊娠中の母親 10 名にプレテストを行い、修正を加え作成した。

表 9　準備教育プログラムの有効性を測定する成果変数

第2子妊娠中の母親の育児意識（α ＝0.750）

母親から見た第1子の様子（α ＝O．796）

1　第1子は第2子に対して興味を示す
2　第1子は赤ちゃんのことをよく話す
3　第1子は第2子をいたわる行動をする
4　第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある
5　第1子は第2子を抱っこするという
6　第1子はききわけのないふるまいをする
7　第1子は精神的に不安定である
8　第1子は要求に答える
9　第1子はくっつきたがる

2人同時育児に対する意識（α ＝0.630）

1　気持ちを休めることができない
2　身体を休めることができない
3　ひとりにして欲しい時間がある
4　第1子との物理的な遊びは減ったがコミュニケーションは増えた
5　第1子を叱ってしまう
6　第1子と遊ぶ時間が減った
7　第1子の要求に対し忙しいから後でねと拒否しがちである
8　良い母親にならなくてはと焦る
9　第2子妊娠誕生で行動が制限されるようになった
10　第1子との関わり方に戸惑いがある
11　第1子のあかちゃんがえりが心配である
12　第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる
13　二人同時育児のイメージ化ができている
14　育児は楽しい
15　第1子の育児経験を生かして楽しみたい
16　女性としての自分に満足している
17　第1子をほめることが多くなった
18　あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなる
19　第1子の子育ては上手くいっていると思う
20　第2子妊娠出産で第1子の成長を感じた
21　第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配
22　第2子出産で入院時第1子のことが心配
23　二人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う
24　第2子よりも第1子が気にかかる

（2）因子分析による構成概念妥当性と信頼性の検討

①【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】について

『第 2 子妊娠中の母親の育児意識』の 33 項目について、質問項目の選択および下位尺度の構成の妥当性確認のため、第 2 子妊娠中の母親 70 名に対し、調査を行った。『第 2 子妊娠中の母親の育児意識』の全項目の信頼性係数は、0.750 であった

②『母親から見た第 1 子の様子』と『2 人の同時育児に対する意識』

【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】の 33 項目のうち、『母親から見た第 1 子の様子』の 9 項目および『2 人の同時育児に対する意識』の 24 項目について、構成概念妥当性の検証のため、因子分析を行った。その際、第 I 因子から順に寄与率が最大となるように主因子法を用いた。抽出した第 2 子妊娠中の母親の育児意識の項目は、項目間の関連性があると判断したため、プロマックス回転を用いた。

まず、『母親からみた第 1 子の様子』の 9 項目について、主因子法によるプロマックス回転を用いて固有値 1 のカイザー基準に因子を抽出したところ、2 因子が採用された（表 10)。第 I 因子は「第 1 子は第 2 子に対して興味を示す」「第 1 子は赤ちゃんのことをよく話す」など、第 1 子に対してポジティブな様子の項目のため、≪第 1 子に対するポジティブな受け止め≫と命名した。第Ⅱ因子は「第 1 子はききわけのないふるまいをする」「第 1 子は精神的に不安定である」など、第 1 に対してネガティブな様子についての項目であるため、≪第 1 子に対するネガティブな受け止め≫と命名した。全項目の α 係数は 0.796、下位尺度の α 係数として第 I 因子は 0.888、第Ⅱ因子は 0.628 であった。

表 10

母親から見た第1子の様子：因子分析結果（主因子法プロマックス回転）

n=70

変数（質問項目）	平均点	標準偏差	因子Ⅰ	因子Ⅱ
α＝0.796				
第Ⅰ因子:第1子に対するポジティブな受け止め(α ＝0.888)				
第1子は第2子に対して興味を示す	3.43	1.38	.920	.052
第1子は赤ちゃんのことをよく話す	3.14	1.44	.886	.132
第1子は第2子をいたわる行動をする	3.37	1.33	.847	.014
第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある	2.99	1.34	.798	-.116
第1子は第2子を抱っこするという	3.20	1.50	.706	-.038
第1子は要求に答える	3.59	0.88	.417	-.401
第Ⅱ因子：第1子に対するネガティブな受け止め（α＝0.628）				
第1子はききわけのないふるまいをする	3.01	1.21	-.040	.754
第1子は精神的に不安定である	2.07	1.05	.119	.698
第1子はくっつきたがる	3.84	1.10	.006	.372

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	—	.080
Ⅱ		—

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

次に、『2 人の同時育児に対する意識』の 24 項目について主因子法によるプロマックス回転を行った。因子数を決定する基準は、カイザー基準とスクリー基準がある。さらに項目の解釈の可能性も重要である。そのため、カイザー基準では 8 因子であったが、スクリー基準および項目の解釈の可能性により 2 因子とした（表 11）。

因子負荷量 0.3～0.4 という絶対値の負荷量をカットオフ値として用いる[67]。本研究では、因子負荷量を 0.3 と設定した。24 項目のうち、因子負荷量が 0.3 未満である 4 項目は分析から除外した。しかし因子負荷量が 0.295 である「あかちゃんがえりは時間の経過とともになくなると思う」の項目は、開発した準備教育プログラムの評価として確認すべき項目であり、構成概念のまとまりとして第Ⅱ因子の育児に関する肯定感の項目として妥当と判断し、負荷量が 0.3 未満であるが除外しなかった。本研究における因子分析は尺度開発が目的ではなく、構成概念の妥当性の検証が目的であることもあり除外しなかった。『2 人の同時育児に対する意識』の項目として最終的に 2 因子 20 項目となった。第Ⅰ因子は「気持ちを休めることができない」「身体を休めることができない」など、育児に関する負担感についての項目のため≪2 人同時の育児の負担感≫と命名した。第Ⅱ因子は「第 1 子のあかちゃんがえりを受け止めることができる」「2 人同時の育児のイメージ化ができている」など、育児に関する肯定感についての項目のため、≪2 人同時の育児の肯定感≫と命名した。

全項目の信頼性係数（Cronbachα 係数）は 0.630、下位尺度の α 係数は第Ⅰ因子 0.810、第Ⅱ因子 0.705 であった。α 係数がある程度の数値（.70 や.80）以上であれば、尺度の内的整合性が高いと判断される。よって、内的整合性が確保された。

表 11

2人同時育児に対する意識：因子分析結果（主因子法プロマックス回転）

n=70

変数（質問項目）	平均点	標準偏差	因子Ⅰ	因子Ⅱ
α＝0.630				
第Ⅰ因子：2人同時育児の負担感（α＝0.810）				
気持ちを休めることができない	2.90	1.17	.786	.111
身体を休めることができない	3.19	1.05	.705	.259
ひとりにして欲しい時間がある	3.53	1.22	.664	.065
第1子との物理的な遊びは減ったがコミュニケーションは増えた	3.43	1.00	.593	.455
第1子を叱ってしまう	3.10	1.25	.523	-.102
第1子と遊ぶ時間が減った	2.57	1.25	.484	-.195
第1子の要求に対し忙しいから後でねと拒否しがちである	2.91	1.11	.478	-.175
良い母親にならなくてはと焦る	2.79	1.10	.475	-.294
第1子との関わり方に戸惑いがある	2.11	1.12	.433	-.145
第1子のあかちゃんがえりが心配である	3.70	1.15	.362	-.138
第2子妊娠誕生で行動が制限されるようになった	3.69	1.04	.339	.315
第Ⅱ因子：2人同時育児の肯定感（α＝0.705）				
第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる	3.44	0.94	-.204	.778
二人同時育児のイメージ化ができている	2.56	1.04	.012	.539
育児は楽しい	3.91	0.96	-.203	.533
第1子の育児経験を生かして楽しみたい	4.09	0.83	-.144	.499
女性としての自分に満足している	3.00	1.10	-.161	.398
第1子をほめることが多くなった	3.63	0.94	.143	.373
第2子妊娠出産で第1子の成長を感じた	3.91	1.09	.142	.317
第1子の子育ては上手くいっていると思う	3.43	0.83	.009	.316
あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなる	4.39	0.79	-.006	.295

因子相関行列	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	—	-.274
Ⅱ		—

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

３）子ども観尺度による Outcome analysis

サブ指標である『子ども観尺度』は，Outcome analysis に該当する。

第 2 子を迎えるための準備教育プログラムは、家族員それぞれの役割適応を目的としている。子供を自分の中でどのような意味を持つ存在として捉えているかを測定することで、2 人同時育児への適応を測定することができる。そのため、子ども観尺度[60]（表 12）を用いることとする。

子ども観尺度の因子 1 は、子どもは自分の人生に充実感をもたらす、など子どもを肯定的に捉える項目からなっているので≪充実・楽しみ≫、因子 2 は子どものために自分のやりたいことが制限され、経済的な負担を感じる、など制約感や負担感を感じる項目からなっているので≪制約・負担≫、因子 3 は子どもをもって初めて社会に認められる等、子育てにも社会的な意義を見出す項目からなっているので≪社会的存在≫と命名している。因子 4 は、子どもが自分にとっての生きがいであり、何より大切なものは子どもであるという項目からなっている。子どもが生きがいであるという子ども観と考えられるので≪生きがい≫と命名している。因子 5 は、子どもに関心が持てず、子どもにあまり大きな価値をおかない、という項目からなっているので≪無関心・低価値≫と命名している。

5 因子 22 項目、4 段階リッカート④そう思う③どちらかといえばそう思う②あまりそう思わない①そう思わないに粗点（１～４）の合計を項目数で割った得点を各因子の尺度得点とする。

各因子をもとに作成した尺度得点の信頼性係数（Cronbachα 係数）はそれぞれ因子 1 が 0.82、因子 2 が 0.80,因子 3 が 0.66,因子 4 が 0.85、因子 5 が 0.78 であった。以上の結果を踏まえて各因子について尺度得点を作成し、粗点（1～4）の合計を項目数で割った得点を各因子の尺度得点とした。

尺度利用については作成者に利用の趣旨を説明し、承諾を得た。

表 12　子ども観尺度

質問項目	因子
1　子どもをみていると元気づけられる	1
2　子どもは心の支えである	1
3　もっと子どもと関わりたいと思う	1
4　子どものおかげで自分も成長する	1
5　子どもは自分の人生を豊かにする。	1
6　子どもは自分の人生に充実感をもたらす	1
7　子育ては自分の自由な時間を奪う	2
8　子どものために自分の行動がかなり制限される	2
9　子どもは自分の人生の多くの部分を奪う	2
10　子どもを持つことは経済的な負担が大きい	2
11　子どもを持つと精神的に休まらない	2
12　子どもから解放されたいと思う	2
13　子どもを持って初めて社会的に認められる	3
14　子どもを担うのは人間として自然なことである	3
15　社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ	3
16　子どものいない人生はむなしい	3
17　自分にとって何よりも大切なのは子どもである	4
18　子どもは自分にとって生きがいである	4
19　子どもを育てることに対して余り関心が持てない	5
20　自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない	5
21　子どものために仕事が満足に出来ない	5
22　自分がいなくても子どもは育つ	5

４）メイン指標とサブ指標の尺度間の相関

メイン指標の【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】である『母親から見た第 1 子の様』『2 人の同時育児に対する意識』と、サブ指標である『子ども観尺度』の下位尺度間の Pearson の相関係数を算出したところ、サブ指標である『子ども観尺度』の≪充実楽しみ≫≪制約負担≫≪社会的存在≫≪無関心低価値≫に弱い相関がみられた（表 13）。

表 13　メイン指標とサブ指標の尺度間の相関

		子ども観尺度					母から見た第1子の様子		2人同時育児に対する意識	
		充実楽しみ	制約負担	社会的存在	生きがい	無関心低価値	第1子に対するポジティブな受け止め	第1子対するネガティブな受け止め	2人同時育児の負担感	2人同時育児の肯定感
子ども観尺度	充実楽しみ	1								
	制約負担	-.390**	1							
	社会的存在	0.131	0.129	1						
	生きがい	.433**	-0.249	.316*	1					
	無関心低価値	-.477**	.477**	-0.057	-0.238	1				
母から見た第1子の様子	第1子に対するポジティブな受け止め	-0.112	0.049	-0.061	0.086	0.016	1			
	第1子対するネガティブな受け止め	0.07	0.205	.396**	0.206	0.059	.281*	1		
2人同時育児に対する意識	第1子に対する育児負担感	-0.245	.485**	.307*	0.054	.371**	0.183	.494**	1	
	2人同時育児の肯定感妊娠期	.388**	-.434**	0.147	0.189	-.304*	0.1	0.15	-0.22	1

** 1% 水準で有意（両側）　＊ 5% 水準で有意（両側）

５）準備クラスに参加した群の Process analysis

準備クラスに参加した群の Process analysis として，出産後 1 週間および 1 か月時点において、表 14 について回答を求めた。クラスの総合評価について、クラスに用いた冊子について、絵本を読み聞かせしているときの気持ち、絵本（内容・自宅での利用の仕方など）について、クラスの内容・時間について、そう思わないから、そう思う、の 5 件法で尋ねた。また、出産日、第 2 子性別、育児についての自由記載を求めた。

表 14

介入群の産後1週間および1か月評価
1 クラスの総合評価
2 クラスに用いた冊子について
3 絵本を読み聞かせているときの気持ち
4 絵本 内容 自宅での利用の仕方など)について
5 クラスの内容について
6 クラスの時間について

６）メイン指標とサブ指標による Impact analysis の評価時期

メイン指標である【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】の『母親から見た第 1 子の様子』『2 人の同時育児に対する意識』と、サブ指標である『子ども観尺度』は、出産後 1 週間と出産後 1 カ月に行う。この時期に行う理由について説明する。出産してから 1 週間後は、出産した病産院から自宅に戻る時期であり、第 1 子と第 2 子が共に生活を始める最初の時期であるため、特に生活に変化のある時期であると考えられる。また、出産後 1 カ月は自宅での生活にも慣れる時期で、家族の支援も減少するであろう時期である。その時期に介入の有無による第 1 子に対する理解、第 1 子と第 2 子の 2 人同時の育児に対する適応への準備、子ども観について評価することで、2 人同時の育児の適応状況が明らかになるためである。

２．準備教育の評価方法の設計

１）分析方法

（1）対象者の属性・特性について介入群および対照群について、χ^2 検定、期待度数 5 未満では fisher's 直接確率検定を行う。

（2）準備教育への参加の有無によりメイン指標である【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】の『母親から見た第 1 子の様子』『2 人の同時育児に対する意識』とサブ指標である『子ども観尺度』が変化するかを調べるために、被験者内因子を時期（妊娠中・出産後 1 週間及び 1 か月）、被験者間因子を介入の有無とする二元配置分散分析を行う。統計解析には統計パッケージ SPSS Statistics21.0J for Windows を使用し、$p < 0.05$ を有意差ありとする。

（3）介入群の評価として出産後 1 週間および 1 か月時点において、表 12 について回答を求める。クラスの総合評価について、クラスに用いた冊子につい

て、絵本を読み聞かせしているときの気持ち、絵本（内容・自宅での利用の仕方など）について、クラスの内容・時間について、そう思わないから、そう思う、の 5 件法で尋ね、一次集計を行う。

（4）妊娠中・出産後 1 週間、出産後 1 か月における自由記載について育児に関する内容をコード化し質的帰納的に分析する。信頼性・妥当性の確保のため、スーパービジョンを受け、厳密性の確保に努める。

第Ⅶ章　プログラムの実施(Implement)・評価(Evaluate)

第１項．第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの実施
第２項．第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの有効性の検討

第１項．第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの実施

１）調査対象および調査期間

調査対象は、Ａ県内の産婦人科外来に妊婦健康診査に来院しており，幼児を第１子に持つ第２子妊娠中の母親である。対象者の選定基準は（1）第２子妊娠中である。（2）妊娠中期（16 週）程度である。（3）順調な妊娠経過を辿っている。（4）出産後里帰りせず核家族である（5）出産後の研究にも引き続き研究参加に同意することとした。準備教育期間 2011 年 11 月 5 日～2012 年 7 月 26 日であり、調査期間は 2011 年 11 月から 2012 年 11 月であった。

介入群の参加者は表 15 の通りである。前期クラスと後期クラス 1 回を合わせて 1 クールとし、13 クール実施した。1 回のクラスへの参加人数は母子とその家族を含め延べ人数 136 名であった。最高 14 名、最低 2 名、平均 6 名の参加であった。夫の参加が述べ 16 名、実父母が 6 名の参加であった。

表 15　第 2 子を迎え入れるための準備教育プログラム開催回数および参加数

育児クラス開催回数	参加者属性	第１回	第２回
1	母	4	3
	子	3	2
	夫	1	—
	実父母・義父母	—	—
2	母	4	3
	子	3	2
	夫	—	—
	実父母・義父母	—	—
3	母	2	1
	子	2	—
	夫	2	1
	実父母・義父母	—	—
4	母	5	5
	子	4	5
	夫	3	2
	実父母・義父母	—	2
5	母	2	—
	子	1	—
	夫	1	—
	実父母・義父母	—	—
6	母	3	3
	子	1	2
	夫	—	—
	実父母・義父母	—	—
7	母	—	1
	子	—	1
	夫	—	1
	実父母・義父母	—	—
8	母	2	3
	子	2	3
	夫	1	1
	実父母・義父母	1	1
9	母	3	1
	子	3	1
	夫	2	—
	実父母・義父母	—	—
10	母	7	7
	子	3	3
	夫	—	1
	実父母・義父母	—	—
11	母	2	2
	子	1	1
	夫	—	1
	実父母・義父母	—	1
13	母	2	2
	子	1	1
	夫	1	—
	実父母・義父母	1	—
母総数		36	32
子総数		24	21
父総数		11	7
実・義父母総数		2	4
参加者延べ人数		136	

２）介入方法

データ収集にはまず，A 県内の総合病院副院長（産婦人科部長）、看護部長および病棟助産師長に対し，研究の主旨について口頭と文書にて説明し研究実施について承諾を得た。許可が出た後に医療従事者に対象の条件を満たすものの抽出を依頼した。抽出された対象者の外来受診時に、医療従事者を介して対象者に研究参加に対する承諾の有無を聞いた。承諾が得られた対象者に本研究の趣旨および方法､倫理的配慮について説明した｡本研究者が手渡せない場合は、医療従事者に依頼した。質問紙は記載後、外来に設置した回収箱に投函して頂くように説明した。介入群には、クラスの日時を決定し、クラスの案内を手渡した。

３）分析方法

（1）対象者の属性・特性について介入群および対照群について、χ^2 検定、期待度数 5 未満では fisher's 直接確率検定を行った。

（2）準備教育の参加の有無により【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】である『母親から見た第 1 子の様子』『2 人の同時育児に対する意識』と『子ども観尺度』が変化するかを調べるために、被験者内因子を時期（妊娠中・出産後 1 週間及び 1 か月)､被験者間因子を介入の有無とする二元配置分散分析を行った。統計解析には統計パッケージ SPSS　Statistics21.0J for Windows を使用し、$p < 0.05$ を有意差ありとした。

（3）介入群の評価として出産後 1 週間および 1 か月時点において、表 12 について回答を求めた。クラスの総合評価について、クラスに用いた冊子について、絵本を読み聞かせしているときの気持ち、絵本（内容・自宅での利用の仕方など）について、クラスの内容・時間について、そう思わないから、そう思う、の 5 件法で尋ねた。

（4）妊娠中・出産後 1 週間、出産後 1 か月における自由記載について育児に関する内容をコード化し質的帰納的に分析する。信頼性・妥当性の確保のため、スーパービジョンを受け、厳密性の確保に努めた。

８）倫理的配慮

依頼する施設に調査の趣旨・方法，倫理的配慮を説明して了解を得た。また，研究協力者には妊婦健康診査に来院した際に口頭および文書で説明した。その際，研究の趣旨と方法，研究協力は自由意志であること，研究協力を途中で中断しても不利益のないことを保証し，得られたデータを本研究以外に使用しないこと，研究結果を公表する際には匿名性を厳守することを説明した。回答された質問紙の提出をもって参加の同意が得られたものとした。対照群への倫理的配慮として、産後１か月における調査終了後、準備教育に用いた介紙媒体パンフレットおよび絵本活用していただくよう郵送した。なお、本研究は計画書の段階で国際医療福祉大学大学院研究倫理審査委員会において承認されている。

第２項．第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの評価

１．対象者の有効回答者数

研究の参加に同意したものは 77 名であった。77 名中、1 回のみのクラス参加や、アンケートの回収が妊娠期のみ、出産後 1 週間のみの回収であった場合を除いた結果、有効回答数は 59 名（76.6%）であった。介入群 39 名中有効回答 31 名（79.5%）、対照群 38 名中有効回答は 28 名（73.7%）の回収率であった。

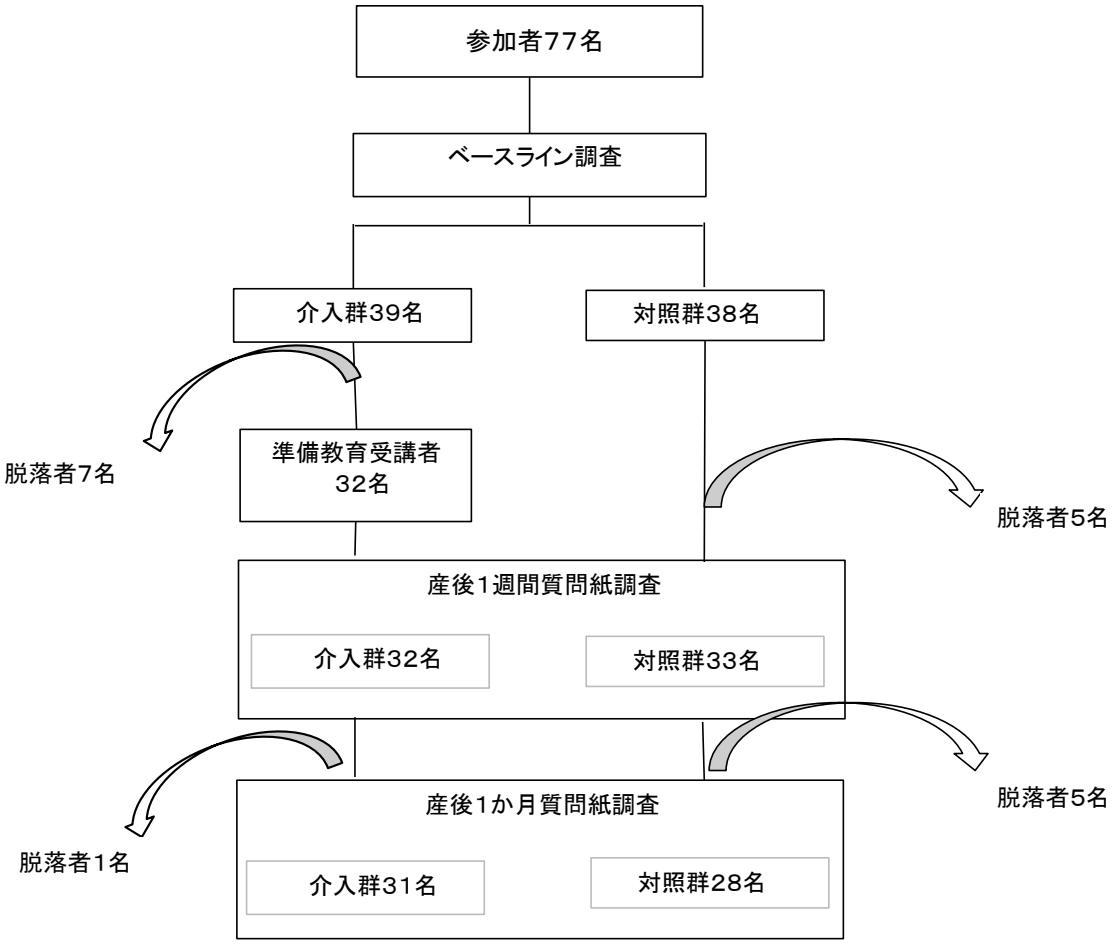


図 7　研究対象者の有効回答者状況

２．対象者の特性

対象者の特性について、表 16 に示す。第 2 子出産時第 1 子年齢、第 1 子性別、第 2 子出産年齢、同居の有無、就業の有無、託児の有無、経産婦の育児情報に満足、第 2 子妊娠中に経産婦を対象とした育児クラスは必要、父親は家事に参加していると思う、父親は育児に参加していると思う、実父母・義父母の協力を得ることができていると思うは、両群に差を認めなかった。妊娠週数においては、有意差を認め、介入群の 17 名（54.8%）が妊娠 28 週以降であるのに対し、対照群の 26 名（92.9%）が妊娠 28 週以降であった（$p < 0.001$）。

表 16　　対象者の特性

項目		介入群 (n=31)		対照群(n=28)		有意確率
第2子出産時第1子年齢	4歳未満	27	87.1%	21	75.0%	0.2 ns
	4歳以上	4	12.9%	7	25.0%	
第1子性別	男児	12	38.7%	11	39.3%	0.09 ns
	女児	19	61.3%	17	60.7%	
妊娠週数	28週未満	14	45.2%	2	7.1%	0 ***
	28週以降	17	54.8%	26	92.9%	
第2子出産年齢	30歳未満	6	19.4%	5	17.9%	0.95 ns
	30歳以上35歳未満	13	41.9%	11	39.3%	
	35歳以上	12	38.7%	12	42.9%	
同居の有無	同居有	9	29.0%	4	14.3%	0.17 ns
	同居なし	22	71.0%	24	85.7%	
就業の有無	あり	12	38.7%	13	46.4%	0.55 ns
	なし	19	61.3%	15	53.6%	
託児の有無	あり	14	45.2%	13	46.4%	0.92 ns
	なし	17	54.8%	15	53.6%	
経産婦の育児情報に満	あまりそう思わない　そ わない	17	54.8%	9	32.1%	0.21 ns
	どちらともいえない	9	29.0%	13	46.4%	
	そう思う　ややそう思う	5	16.1%	6	21.4%	
第2子妊娠中に経産婦を とした育児クラスは必	あまりそう思わない　そ わない	0	0.0%	1	3.6%	0.1 ns
	どちらともいえない	4	12.9%	9	32.1%	
	そう思う　ややそう思う	27	87.1%	18	64.3%	
父親は家事に参加してい 思う	あまりそう思わない　そ わない	12	38.7%	8	28.6%	0.07 ns
	どちらともいえない	4	12.9%	4	14.3%	
	そう思う　ややそう思う	15	48.4%	16	57.1%	
父親は育児に参加してい 思う	あまりそう思わない　そ わない	3	9.7%	5	17.9%	0.09 ns
	どちらともいえない	7	22.6%	1	3.6%	
	そう思う　ややそう思う	21	67.7%	22	78.6%	
実父母義父母の協力を得 とができていると思う	あまりそう思わない　そ わない	4	12.9%	3	10.7%	0.6 ns
	どちらともいえない	1	3.2%	0	0.0%	
	そう思う　ややそう思う	26	83.9%	25	89.3%	
家族以外の育児支援を活 ていると思う	あまりそう思わない　そ わない	7	22.6%	9	32.1%	0.07 ns
	どちらともいえない	5	16.1%	10	35.7%	
	そう思う　ややそう思う	19	61.3%	9	32.1%	

χ２ test(期待値5以下はFisherの直接法) (*p＜0.05,**p＜0.
数値は人数と%を示す。ns:not sig

３．Outcome analysis の評価指標の結果

１）妊娠中と出産後１週間の『母親から見た第１子の様子』『2人の同時育児に対する意識』『子ども観尺度』の変化

(1) 妊娠中と出産後１週間の『母親から見た第１子の様子』の変化

介入群と対照群の『母親から見た第 1 子の様子』の変化を介入の有無別【2 群（妊娠中・出産後 1 週間)】×【2 群（時期)】の二元配置分散分析で検討した（表 17、18)。

結果、交互作用を認め、介入群が出産後 1 週間において有意に増加した項目

は、「第 1 子は第 2 子を抱っこするという」【F(1,57)=4.351,p=0.041】、であった（図 8)。

時期別主効果が認められ、両群とも出産後 1 週間に得点が高く有意差を認めた項目は、「第 1 子に対するポジティブな受け止め」【F（1，57）＝20.854、p＜0.001】、「第 1 子は精神的に不安定である」【F（1，57）＝16.387、p＜0.001】、「第 1 子は赤ちゃんのことをよく話す」【F（1，57）＝11.024、p＜0.001】、「第 1 子は第 2 子に対して興味を示す」【F（1，57）＝21.811、p＜0.001】、「第 1 子は第 2 子をいたわる行動をする」【F（1，57）＝12.400、p＜0.001】、「第 1 子は第 2 子を抱っこするという」【F（1，57）＝5.127、p＝0.03】、「第 1 子はきょうだいをうけいれる準備が整いつつある」【F（1，57）＝20.312、p＜0.001】であった。

表 17　妊娠中と産後 1 週間の母親から見た第 1 子の様子の変化

妊娠中と産後1週間の母親が認識している第1子の様子の変化

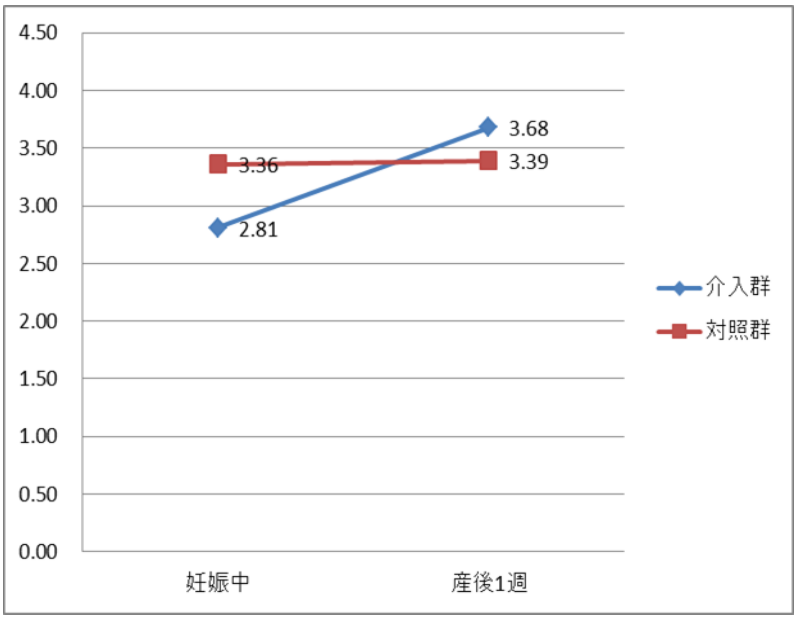
項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1週	SD	妊娠中	SD	産後1週	SD	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		
Ⅰ因子　第1子に対するネガティブな受け止め	12.81	± 2.43	13.97	± 2.59	12.21	± 2.92	12.96	± 3.31	0.798	0.375	1.559	0.217		F(1,57)=0.324,p=0.571
Ⅱ因子　第1子に対するポジティブな受け止め	14.94	± 6.33	19.26	± 5.95	16.39	± 6.17	18.89	± 5.05	0.164	0.687	20.854	0.000	***	F(1,57)=1.488,,p=0.228

Two Way ANOVA, (†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01　***p<0.001,)

表 18　妊娠中と産後 1 週間の母親から見た第 1 子の様子の変化

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用	
	妊娠中	SD	産後1週	SD	妊娠中	標準	産後1週	標準	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値			
第1子はくっつきたがる	3.74	± 1.13	3.84	± 1.19	3.96	± 1.11	3.68	± 1.42	0.013	0.910	0.355	0.554		F(1,57)=1.453,p=0.910	
第1子はききわけのないふるまいをする	3.26	± 1.06	3.45	± 1.21	2.75	± 1.43	2.96	± 1.20	3.404	0.070	† 1.401	0.241		F(1,57)=0.004,p=0.952	
第1子は精神的に不安定である	2.29	± 1.04	2.97	± 1.20	2.07	± 1.15	2.71	± 1.27	0.848	0.361	16.387	0.000	***	F(1,57)=0.011,p=0.916	
第1子は要求に答える	3.52	± 0.89	3.71	± 0.94	3.43	± 1.30	3.61	± 0.99	0.222	0.639	1.549	0.218		F(1,57)=0.003,p=0.960	
第1子は赤ちゃんのことをよく話す	3.00	± 1.55	3.81	± 1.40	3.11	± 1.47	3.61	± 1.32	0.021	0.886	11.024	0.002	**	F(1,57)=0.603,p=0.439	
第1子は第2子に対して興味を示す	3.29	± 1.55	4.26	± 1.06	3.43	± 1.26	4.25	± 1.08	0.600	0.808	21.811	0.000	***	F(1,57)=0.146,p=0.704	
第1子は第2子をいたわる行動をする	3.10	± 1.33	3.94	± 1.26	3.43	± 1.43	3.93	± 1.15	0.339	0.563	12.400	0.001	**	F(1,57)=0.794,p=0.377	
第1子は第2子を抱っこするという	2.81	± 1.54	3.68	± 1.60	3.36	± 1.42	3.39	± 1.55	0.149	0.701	5.127	0.027	*	F(1,57)=4.351,p=0.041	*
第1子はきょうだいをうけいれる準備が整いつつある	2.74	± 1.26	3.58	± 1.15	3.07	± 1.39	3.71	± 0.90	0.777	0.382	20.312	0.000	***	F(1,57)=0.355,p=0.554	

Two Way ANOVA, (†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01　***p<0.001,)



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.81	1.54	3.68	1.60	3.36	1.42	3.39	1.55	0.149	0.701	5.127	0.027 *	4.351	0.04 *

妊娠—産褥 1 週間

図 8 「第 1 子は第 2 子を抱っこするという」

（２）妊娠中と出産後１週間の『2人の同時育児に対する意識』の変化

介入群と対照群の母親が認識している『2 人の同時育児に対する意識』の変化を介入の有無別【2 群（妊娠中・出産後 1 週間)】×【2 群（時期)】の二元配置分散分析で検討した（表 19、20－1、20－2)。

結果、交互作用が認められ、介入群が増加した項目は、≪2 人同時の育児の肯定感≫【F(1,57)=5.906,p=0.008】(図 9)、「2 人同時育児のイメージ化ができている」【F(1,57)=7.097,p=0.010】(図 10)、「あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う」【F(1,57)=6.112,p=0.02】(図 11) であった。

一方、交互作用を認め対照群が増加した項目は、≪2 人同時の育児の負担感≫【F(1.57)=6.916, p＝0.011】(図 12)、「第 1 子への愛情が半分になってしまうのではと心配」【F(1.57)=0.763,p=0.008】(図 13)、「第 1 子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち」【F(1,57)=4.366,p=0.041】(図 14)、「第 2 子妊娠誕生で行動が制限されるようになった」【F(1,57)=5.813,p=0.019】(図 15)、「気持ちを休めることができない」【F(1,57)=2.499,p=0.019】(図 16)、 「家族以外の育児支援を活用することができている」、【F(1,57)=4.424,p=0.04】(図 17) であった。

交互作用を認めず、群間に主効果が見られたのは、「第 2 子妊娠中に経産婦を対象としたクラスは必要」【F（1, 57）＝31.294、p＜0.001】であった。

時期別主効果が認められ介入群・対照群とも産後 1 週間に有意に増加した項目は、≪2 人同時の育児の肯定感≫【F(1, 57)＝30.60, p＜0.001】、「第 1 子との関わり方に戸惑いがある」【F（1、57）＝5.367 ,p＝0.024 】、「第 1 子と遊ぶ時間が減った」【F（1、57）＝35.743 ,p＜0.001】、「第 1 子をほめることが多くなった」【F（1、57）＝5.197 ,p＝0.026】、「第 1 子のあかちゃんがえりを受け止めることができる」【F（1、57）＝4.821 ,p＝0.032】、「第 2 子妊娠出産で第 1 子の成長を感じた」【F（1、57）＝19.109 ,p＜0.001】、「二人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う」【F（1、57）＝6.820 ,p＝0.012】、「第 1 子の育児経験を生かして楽しみたい」【F（1、57）＝21.225 ,p＜0.001】、「女性としての自分に満足している」【F（1、57）＝5.071 ,p＝0.028】であった。

一方、時期別主効果が認められ、介入群・対照群とも産後 1 週間に有意に低下した項目は、「第 1 子のあかちゃんがえりが心配である」【F(1、57)＝5.117 ,p＝0.028】であった。

表 19　妊娠中と産後 1 週間の母親の 2 人の同時育児に対する意識

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1週	SD	妊娠中	SD	産後1週	SD	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		
Ⅰ因子　2人同時育児の負担感	34.77	± 7.32	33.93	± 8.02	33.32	± 7.84	37.18	± 5.50	0.29	0.59	2.86	0.096	†	F(1,57)=,p=6.916,p=0.011 *
Ⅱ因子　2人同時育児の肯定感	31.65	± 4.34	35.13	± 3.56	32.86	± 4.39	34.21	± 3.86	0.02	0.88	30.60	0.000	***	F(1,57)=,p=5.906,p=0.018 *

Two Way ANOVA, (†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01 ***p<0.001,)

表 20－1　妊娠中と産後 1 週間の母親の 2 人の同時育児に対する意識

妊娠中と産後1週間の母親の第1子の育児及び2人同時育児に対する意識

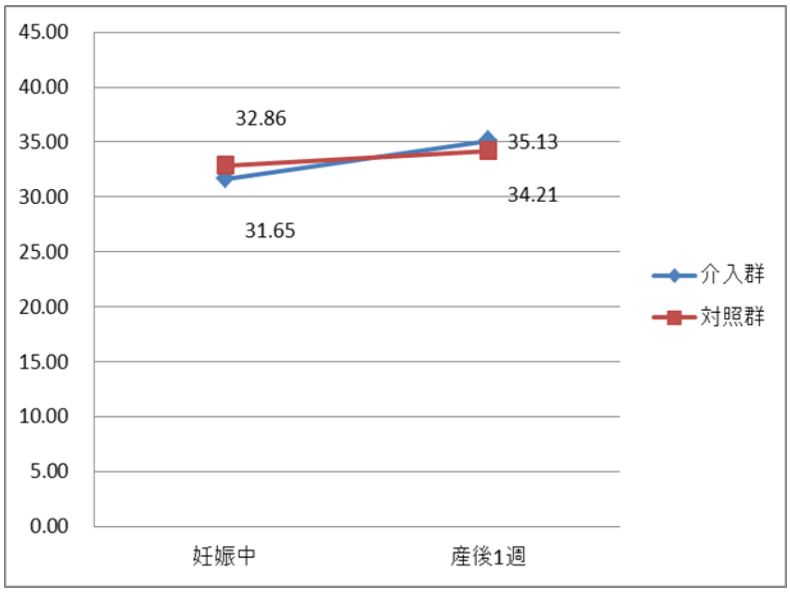
項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1週	SD	妊娠中	SD	産後1週	SD	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		
第1子との関わり方に戸惑いがある	2.23	± 1.26	2.65	± 1.50	1.93	± 1.05	2.46	± 1.26	0.826	0.367	5.367	0.024	*	F(1,57)=0.080,p=0.779
第1子と遊ぶ時間が減った	2.58	± 1.36	3.48	± 1.31	2.36	± 1.25	3.79	± 0.69	0.026	0.872	35.743	0.000	***	F(1,57)=1.814,p=0.183
第1子を叱ってしまう	3.10	± 1.30	2.74	± 1.18	3.00	± 1.54	2.89	± 1.23	0.008	0.927	1.759	0.190		F(1,57)=0.506,p=0.480
第1子の子育ては上手くいっていると思う	3.35	± 0.88	3.32	± 0.91	3.39	± 0.79	3.46	± 0.58	0.246	0.622	0.035	0.852		F(1,57)=0.245,p=0.623
ひとりにして欲しい時間がある	3.65	± 1.20	3.26	± 1.34	3.82	± 1.22	3.75	± 1.01	1.525	0.222	2.119	0.151		F(1,57)=1.004,p=0.321
ケーションは増えた	3.35	± 1.02	3.45	± 1.12	3.36	± 1.13	3.57	± 0.79	0.099	0.755	0.715	0.401		F(1,57)=0.102,p=0.750
第1子への愛情が半分になってしまうのではと心配	2.68	± 1.40	2.29	± 1.30	1.75	± 1.08	2.36	± 1.45	2.174	0.146	0.376	0.542		F(1,57)=0.763,p=0.008 **
第1子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち	3.06	± 0.96	2.90	± 1.17	2.68	± 1.19	3.14	± 0.93	0.097	0.757	1.024	0.316		F(1,57)=4.366,p=0.041 *
第1子をほめることが多くなった	3.55	± 0.89	4.10	± 0.94	3.75	± 1.01	3.89	± 0.83	0.000	0.995	5.197	0.026	*	F(1,57)=1.789,p=0.186
第2子よりも第1子が気にかかる	3.84	± 1.21	4.06	± 1.06	4.14	± 0.89	3.89	± 0.92	0.079	0.779	0.008	0.927		F(1,57)=3.236,p=0.077 †
第2子出産で入院時第1子のことが心配	4.32	± 1.01	4.45	± 0.96	4.46	± 1.00	4.11	± 1.03	0.027	0.651	0.705	0.405		F(1,57)=3.201,p=0.079 †
二人同時育児のイメージ化ができている	2.23	± 0.96	2.71	± 0.97	2.89	± 1.03	2.71	± 0.90	2.356	0.130	1.507	0.225		F(1,57)=7.097,p=0.010 *
第1子のあかちゃんがえりが心配である	4.03	± 0.91	3.39	± 1.23	3.46	± 1.29	3.29	± 0.98	2.200	0.144	5.117	0.028	*	F(1,57)=1.642,p=0.205
第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる	3.32	± 0.91	3.74	± 1.00	3.39	± 1.07	3.54	± 0.96	0.094	0.761	4.821	0.032	*	F(1,57)=1.166,p=0.285
あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う	4.23	± 0.88	4.68	± 0.54	4.46	± 0.69	4.39	± 0.74	0.022	0.883	3.229	0.078	†	F(1,57)=6.112,p=0.016 *
第2子妊娠出産で第1子の成長を感じた	3.81	± 1.17	4.68	± 0.54	3.93	± 1.15	4.43	± 0.74	0.114	0.737	19.109	0.000	***	F(1,57)=1.399,p=0.242
第2子妊娠誕生で行動が制限されるようになった	3.74	± 1.15	3.48	± 1.12	3.68	± 1.02	4.21	± 0.83	2.360	0.130	0.711	0.403		F(1,57)=5.813,p=0.019 *
二人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う	3.74	± 0.77	4.06	± 0.93	3.86	± 0.71	40.40	± 0.74	0.055	0.815	6.820	0.012	*	F(1,57)=0.563,p=0.456
第1子の育児経験を生かして楽しみたい	4.19	± 0.79	4.61	± 0.56	4.04	± 0.84	4.46	± 0.79	0.789	0.378	21.225	0.000	***	F(1,57)=0.003,p=0.960
身体を休めることができない	3.23	± 1.06	3.26	± 1.37	3.39	± 1.03	3.75	± 0.80	2.103	0.152	1.306	0.258		F(1,57)=0.909,p=0.344
気持ちを休めることができない	2.97	± 1.17	2.84	± 1.39	2.93	± 1.30	3.36	± 0.95	0.821	0.369	0.721	0.399		F(1,57)=2.499,p=0.019 *
良い母親にならなくてはと焦る	2.84	± 1.10	2.48	± 1.26	2.71	± 1.24	2.96	± 1.04	0.504	0.481	0.094	0.761		F(1,57)=3.119,p=0.083 †
女性としての自分に満足している	2.97	± 1.05	3.19	± 1.01	3.18	± 1.02	3.50	± 0.96	1.127	0.274	5.071	0.028	*	F(1,57)=0.155,p=0.695
育児は楽しい	4.00	± 0.82	4.10	± 0.83	3.82	± 0.95	3.82	± 0.82	1.338	0.252	0.214	0.645		F(1,57)-0.214,p=0.645

Two Way ANOVA, (†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01 ***p<0.001,)

表 20－2　妊娠中と産後 1 週間の母親の 2 人の同時育児に対する意識

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1週	SD	妊娠中	SD	産後1週	SD	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		
第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要	4.48	± 0.72	4.81	± 0.40	3.75	± 0.75	3.71	± 1.01	31.294	0.000	**	1.829	0.182	F(1,57)=3.853,p=0.097
経産婦の育児情報に満足している	2.45	± 0.96	2.58	± 1.09	2.86	± 1.04	2.89	± 0.99	2.320	0.133	0.434	0.513		F81,57)=0.139,p=0.710
父親は家事に参加していると思う	3.26	± 1.39	3.55	± 1.31	3.43	± 1.43	3.50	± 1.43	0.036	0.851	1.244	0.269		F(1,57)=0.455,p=0.503
父親は育児に参加していると思う	4.00	± 1.13	4.35	± 0.88	3.96	± 1.17	4.11	± 0.83	0.385	0.537	3.546	0.065	†	F(1,57)-0.644,p=0.426
実父母義父母の協力を得ることができている	4.13	± 1.18	4.35	± 1.02	4.21	± 1.23	4.43	± 0.96	0.091	0.765	3.855	0.054	†	F(1,57)=0.003,p=0.959
家族以外の育児支援を活用することができている	3.52	± 1.26	3.26	± 1.44	2.86	± 1.33	3.36	± 1.31	0.882	0.352	0.451	0.505		F(1,57)=4.424,p=0.040 *

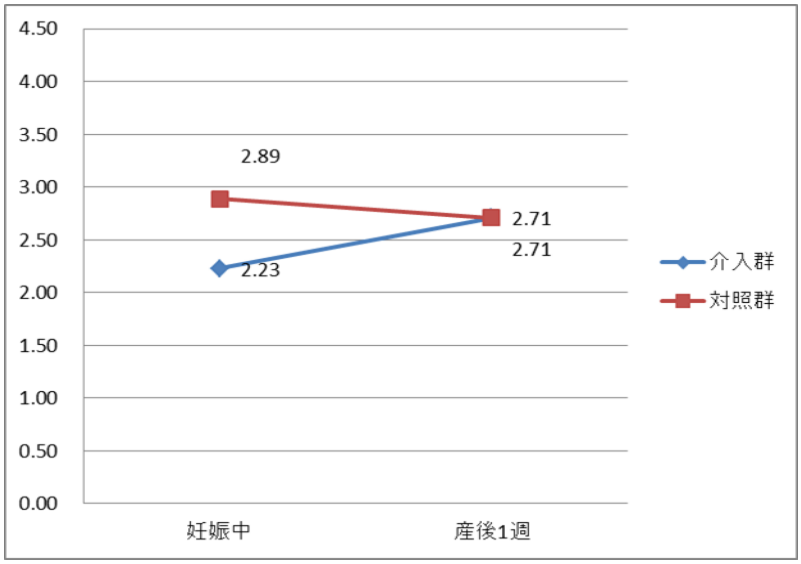
Two Way ANOVA, (†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01 ***p<0.001,)



介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値
31.65	4.34	35.13	3.56	32.86	4.39	34.21	3.86	0.02	0.88	30.60	0.000	***	5.906	0.008

妊娠—産褥 1週間

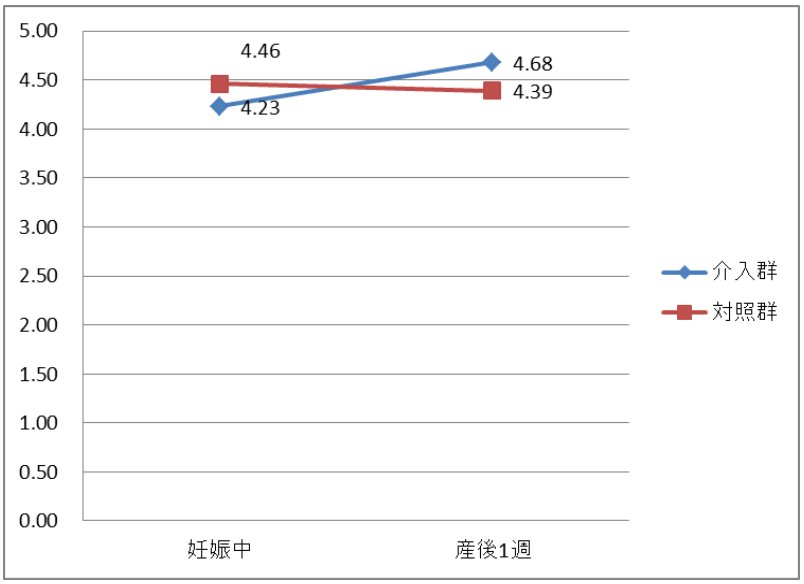
図 9≪2人同時育児の肯定感≫



介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値
2.23	0.96	2.71	0.97	2.89	1.03	2.71	0.90	2.356	0.130	1.507	0.225		7.097	0.010 *

妊娠—産褥 1週間

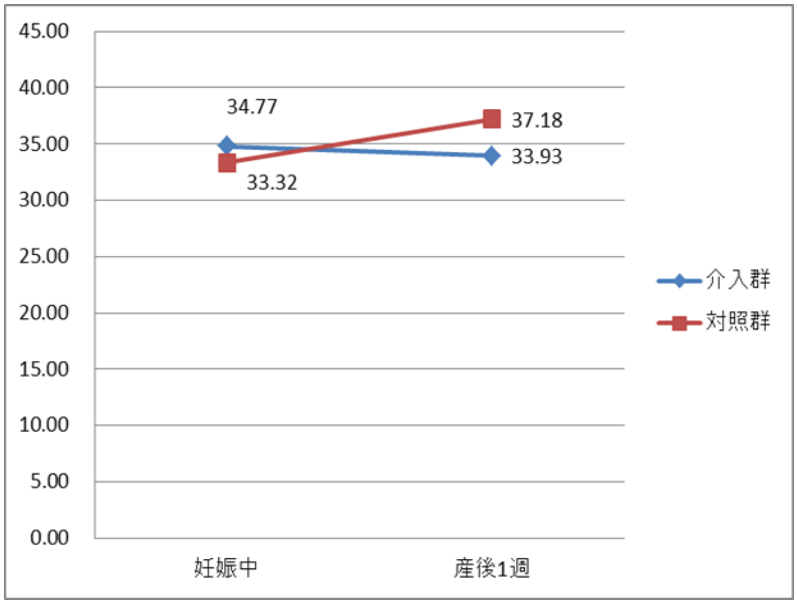
図 10「2人同時育児のイメージ化ができている」



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.23	0.88	4.68	0.54	4.46	0.69	4.39	0.74	0.022	0.883	3.229	0.078 †	6.112	0.02 *

妊娠—産褥 1 週間

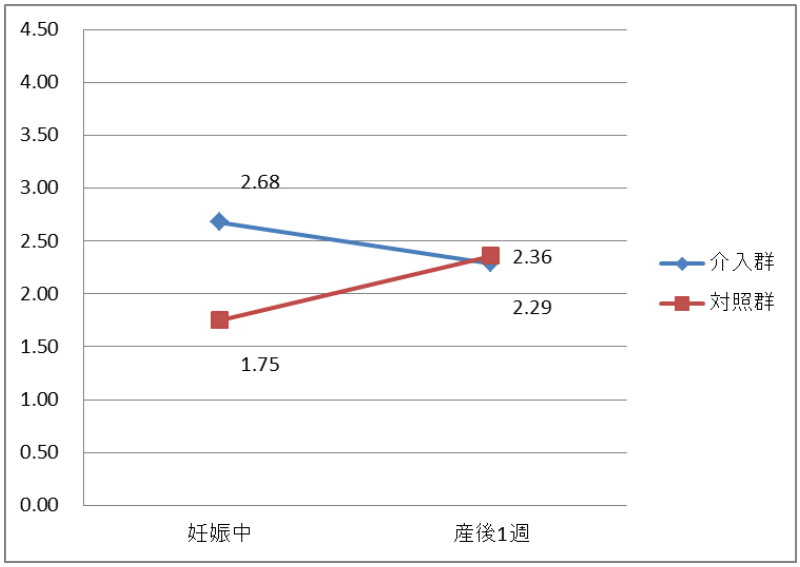
図 11「あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う」



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
34.77	7.32	33.93	8.02	33.32	7.84	37.18	5.50	0.29	0.59	2.86	0.096 †	6.916	0.011

妊娠—産褥 1 週間

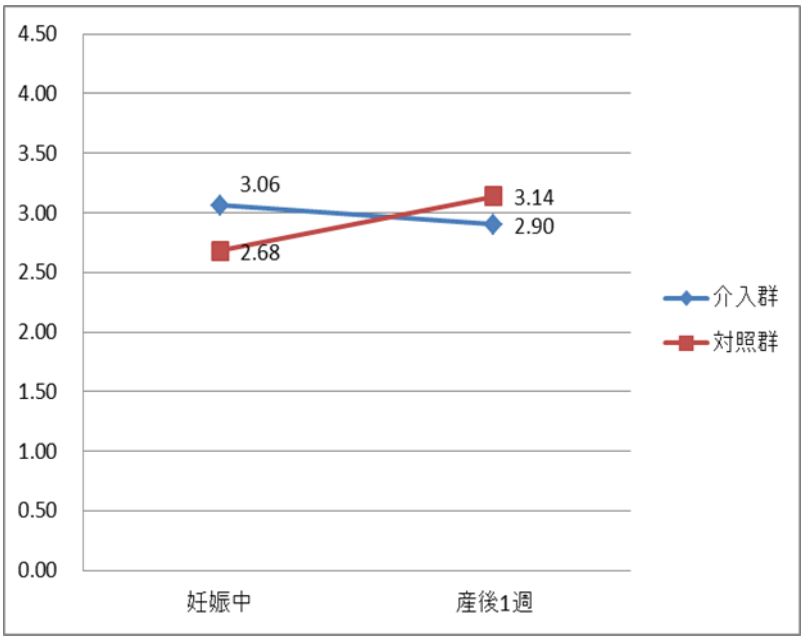
図 12≪2 人同時の育児の負担感≫



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.68	1.40	2.29	1.30	1.75	1.08	2.36	1.45	2.174	0.146	0.376	0.542	7.673	0.01 *

妊娠—産褥 1 週間

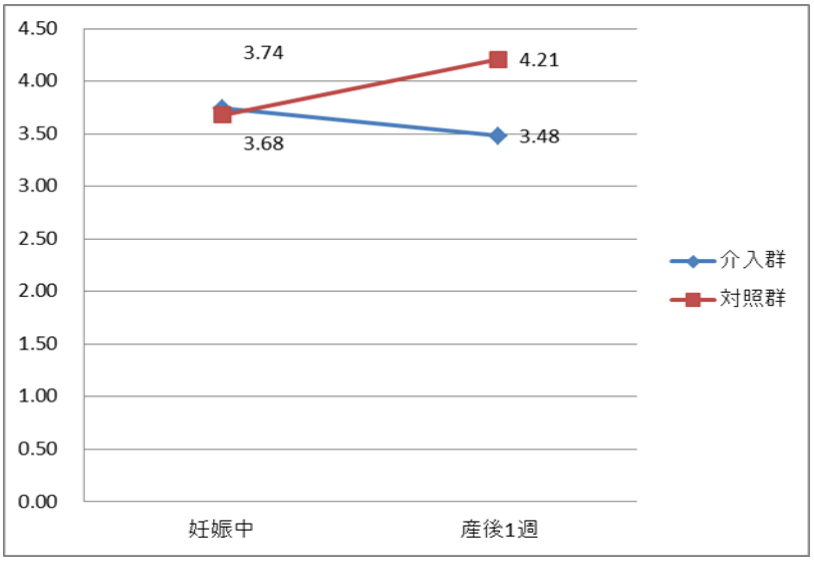
図 13「第 1 子への愛情が半分になってしまうのではと心配」



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.06	0.96	2.90	1.17	2.68	1.19	3.14	0.93	0.097	0.757	1.024	0.316	4.366	0.04 *

妊娠—産褥 1 週間

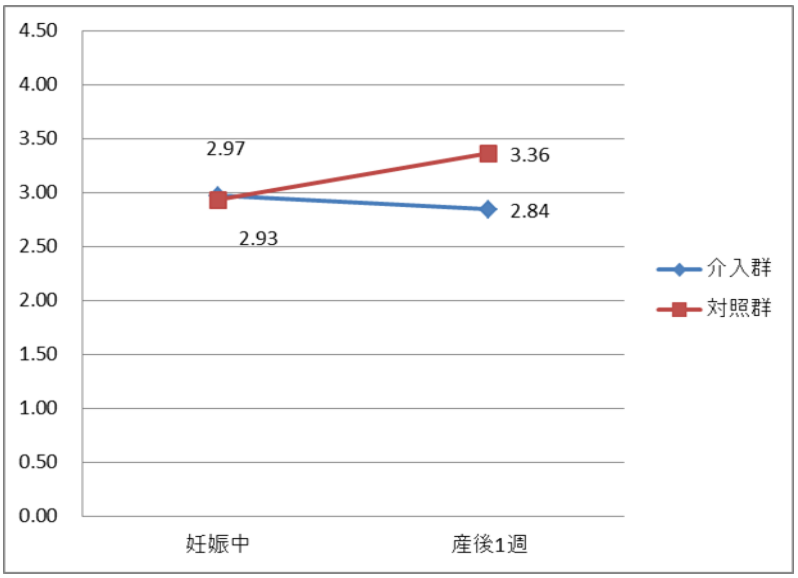
図 14「第 1 子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち」



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用		
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値	
3.74	1.15	3.48	1.12	3.68	1.02	4.21	0.83	2.360	0.130	0.711	0.403	5.813	0.019	*

妊娠—産褥 1 週間

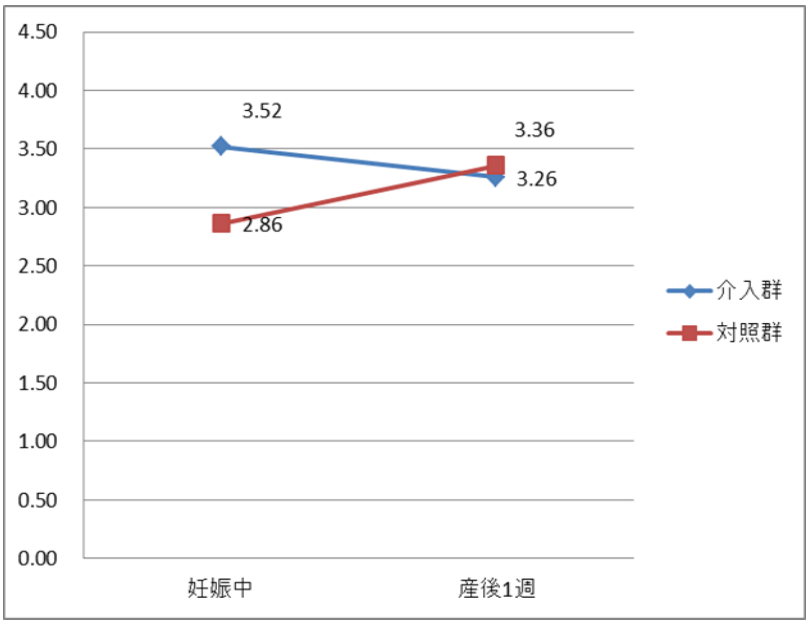
図 15「第 2 子妊娠誕生で行動が制限されるようになった」



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用		
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値	
2.97	1.17	2.84	1.39	2.93	1.30	3.36	0.95	0.821	0.369	0.721	0.399	3.499	0.02	*

妊娠—産褥 1 週間

図 16「気持ちを休めることができない」



介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.52	1.26	3.26	1.44	2.86	1.33	3.36	1.31	0.882	0.352	0.451	0.505	4.424	0.04 *

妊娠—産褥 1 週間

図 17「家族以外の育児支援を活用することができている」

（３）妊娠中と出産後１週間の『子ども観尺度』の変化

介入群と対照群の「子ども観尺」の変化を介入の有無別【2 群（妊娠中・出産後 1 週間)】×【2 群（時期)】の二元配置分散分析で検討した（表 21)。

結果、≪充実楽しみ≫【F(1,57)=0.735,p=0.395】、≪制約負担≫【F(1,57)=0.999,p=0.322】、≪社会的存在≫【F(1,57)=-.808,p=0.372】、≪生きがい≫【F(1,57)=2.204,p=0.143】、≪無関心低価値≫【F(1,57)=2.555,p=0.115】どの項目も交互作用はみられなかった。群間に主効果も見られなかった。時期別主効果傾向が認められたのは、≪社会的存在≫【F(1, 57)＝3.029　p ＝0.087】であった。

表 21　妊娠中と産後 1 週間の子ども観尺度の変化

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)								交互作用
	妊娠中	SD	産後1週	SD	妊娠中	SD	産後1週	SD	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	
充実楽しみ	22.25	± 2.01	22.80	± 1.64	21.82	± 3.04	21.89	± 2.71	1.465	0.231	1.241	0.270	F(1,57)=0.735,p=0.395
制約負担	13.93	± 3.09	13.09	± 3.11	14.39	± 3.71	14.35	± 3.03	1.334	0.253	1.185	0.281	F(1,57)=0.999,p=0.322
社会的存在	10.70	± 1.97	10.90	± 2.37	10.54	± 2.82	11.14	± 3.11	0.003	0.959	3.029	0.087 †	F(1,57)=-.808,p=0.372
生きがい	6.68	± 1.28	6.55	± 1.36	6.61	± 1.45	6.96	± 1.40	0.296	0.588	0.485	0.489	F(1,57)=2.204,p=0.143
無関心低価値	6.29	± 1.72	6.23	± 1.65	5.71	± 1.41	6.29	± 1.76	0.464	0.499	1.623	0.208	F(1,57)=2.555,p=0.115

Two Way ANOVA, (†p<0.1、*p<0.05,**p<0.01　***p<0.001,)

２）妊娠中と出産後１か月の『母親から見た第１子の様子』『2人の同時育児に対する意識』『子ども観尺度』の変化

（１）妊娠中と出産後１か月の『母親から見た第１子の様子』の変化

介入群と対照群の『母親から見た第１子の様子』の変化を、介入の有無別【2群（妊娠中・出産後１か月）】×【2群（時期）】の二元配置分散分析で検討した（表 22，23）。

結果、すべての項目において交互作用は認められなかった。

時期別主効果が認められ、両群とも、出産後１か月に得点が高く有意差を認めたのは、≪第 1 子に対するネガティブな受け止め≫【$F(1,57)= 20.430, p< 0.001$】、≪第１子に対するポジティブな受け止め≫【$F(1,57)= 57.706, p< 0.001$】,「第１子はききわけのないふるまいをする」【$F(1,57)= 6.205, p=0.016.$】、「第 1 子は精神的に不安定である」【$F(1,57)= 22.495, p< 0.001$】、「第１子は赤ちゃんのことをよく話す」【$F(1,57)= 30.381, p< 0.001$】、「第１子は第２子に対して興味を示す」【$F(1,57)= 54.849, p< 0.001$】、「第１子は第２子をいたわる行動をする」【$F(1,57)= 40.774, p< 0.001$】、「第 1 子は第 2 子を抱っこするという」【$F(1,57)= 26.014, p< 0.001$】、「第１子はきょうだいをうけいれる準備が整いつつある」【$F(1,57)= 54.039, p< 0.001$】であった。

表 22　妊娠中と産後 1 か月の母親から見た第 1 子の様子の変化

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1か月	SD	妊娠中	SD	産後1ヵ月	SD	群(F)	群 p値	時期(F)	時期 p値		
第1子に対するネガティブな受け止め	12.81	± 2.43	14.42	± 3.04	12.21	± 2.92	13.79	± 2.73	0.930	0.339	20.430	0.000	***	F(1,57)=0.003,p=0.953
第1子に対するポジティブな受け止め	14.94	± 6.33	21.19	± 4.41	16.39	± 6.17	21.79	± 3.76	0.798	0.375	57.706	0.000	***	F(1,57)=0.318,p=0.575

Two Way ANOVA, (†p<0.1、*p<0.05,**p<0.01 ***p<0.001,)

表 23　妊娠中と産後 1 か月の母親から見た第 1 子の様子の変化

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1か月	SD	妊娠中	SD	産後1ヵ月	SD	群(F)	群 p値	時期(F)	時期 p値		
第1子はくっつきたがる	3.74	± 1.13	3.97	± 1.17	3.96	± 1.11	4.11	± 0.99	0.527	0.471	1.655	0.203		F(1,57)=0.084,p=0.773
第1子はききわけのないふるまいをする	3.26	± 1.06	3.65	± 1.28	2.75	± 1.43	3.25	± 1.18	2.796	0.100	6.205	0.016	**	F(1,57)=0.101,p=0.752
第1子は精神的に不安定である	2.29	± 1.04	3.13	± 1.28	2.07	± 1.15	2.79	± 1.29	1.128	0.293	22.495	0.000	***	F(1,57)=0.144,p=0.705
第1子は要求に答える	3.52	± 0.89	3.68	± 1.01	3.43	± 1.30	3.64	± 0.91	0.086	0.770	1.768	0.189		F(1,57)=0.035,p=0.852
第1子は赤ちゃんのことをよく話す	3.00	± 1.55	4.10	± 1.19	3.11	± 1.47	4.32	± 0.91	0.379	0.541	30.381	0.000	***	F(1,57)=0.079,p=0.780
第1子は第2子に対して興味を示す	3.29	± 1.55	4.61	± 0.76	3.43	± 1.26	4.75	± 0.44	0.377	0.542	54.849	0.000	***	F(1,57)=0.000,p=0.997
第1子は第2子をいたわる行動をする	3.10	± 1.33	4.29	± 1.43	3.43	± 1.43	4.57	± 0.69	1.596	0.212	40.774	0.000	***	F(1,57)=0.019,p=0.890
第1子は第2子を抱っこするという	2.81	± 1.54	4.06	± 1.32	3.36	± 1.42	4.14	± 1.56	0.947	0.335	26.014	0.000	***	F(1,57)=1.390,p=0.243
第1子はきょうだいをうけいれる準備が整いつつある	2.74	± 1.26	4.13	± 0.99	3.07	± 1.39	4.00	± 1.05	0.143	0.707	54.039	0.000		F(1,57)=2.119,p=0.151

Two Way ANOVA, (†p<0.1、*p<0.05,**p<0.01 ***p<0.001,)

（２）妊娠中と出産１か月後の『2 人の同時育児に対する意識』の変化

介入群と対照群の母親が認識している『2 人の同時育児に対する意識』の変化を介入の有無別【2 群（妊娠中・出産後 1 か月）】×【2 群（時期）】の二元配置分散分析で検討した（表 24、25－1、25－2）。

結果、交互作用を認め介入群に有意に増加した項目は「２人同時育児のイメージ化ができている」【F(1,57)=7.034,p=0.01】（図 18）であった。

交互作用を認めず、群間に主効果の傾向が見られ、介入群が低下し対照群が増加した項目は「第 1 子への愛情が半分になってしまうのではと心配」【F(1,57)=6.775, p＝0.012】であった。そのほか、「身体を休めることができない」【F(1,57)= 3.693, p＝0.060】が対照群に増加傾向であった。

介入群・対照群とも増加した項目は、「第 2 子妊娠中に経産婦を対象としたクラスは必要」【F(1,57)= 21.164, p＜0.001】であった。対照群に増加が見られた項目は「経産婦の育児情報に満足している」【F(1,57)= 4.247, p＝0.044】であった。そのほか、「家族以外の育児支援を活用することができている」【F(1,57)= 3.207, p＝0.079】が、対照群が増加傾向であった。

時期別主効果が認められ、出産後 1 か月に増加が見られたのは≪2 人同時の育児の負担感≫【F(1,57)= 8.054, p＝0.006】、≪2 人同時の育児の肯定感≫【F(1,57)= 28.697, p＜0.001】、「第 1 子との関わり方に戸惑いがある」【F(1,57)= 5.827, p＝0.019】、「第 1 子と遊ぶ時間が減った」【F(1,57)= 60.342, p＜0.001】、「第 1 子を叱ってしまう」【F(1,57)= 5.934, p＝0.018】、「第 1 子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち」【F（1.57）＝7.926 、p＝0.007】、「２人同時育児のイメージ化ができている」【F(1,57)= 17.311, p＜0.001】、「第 1 子のあかちゃんがえりを受け止めることができる」【F(1,57)= 9.737, p＝0.003】、「あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う」【F(1,57)= 6.594, p＝0.013】、「第 2 子妊娠出産で第 1 子の成長を感じた」【F(1,57)= 28.106, p＜0.001】、「第 2 子妊娠誕生で行動が制限されるようになった」【F(1,57)= 7.219, p＝0.009】、「２人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う」【F(1,57)= 13.886, p＜0.001】、「第 1 子の育児経験を生かして楽しみたい」【F(1,57)= 23.004, p＜0.001】、「育児は楽しい」【F(1,57)= 8.997, p＝0.004】、「第 2 子妊娠中に経産婦を対象としたクラスは必要」【F(1,57)= 6.496, p＝0.014】であった。

一方、産後 1 か月において有意に低下したのは、「第 1 子のあかちゃんがえりが心配である」【F(1,57)= 7.675, p＝0.008】、であった。

表 24　妊娠中と産後 1 か月の母親の 2 人の同時育児に対する意識

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1か月	SD	妊娠中	SD	産後1ヵ月	SD	群(F)	群 p値	時期(F)	時期 p値		
2人同時育児の負担感	34.77	± 7.32	36.03	± 7.16	33.32	± 7.84	37.11	± 6.01	0.013	0.908	8.054	0.006	**	F(1,57)=2.023,p=0.160
2人同時育児の肯定感	31.65	± 4.34	35.45	± 4.37	32.86	± 4.39	35.00	± 4.35	0.146	0.703	28.697	0.000	***	F(1,57)=2.244,p=0.140

Two Way ANOVA,（†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01　***p<0.001,）

表 25－1　妊娠中と産後 1 か月の母親の 2 人の同時育児に対する意識

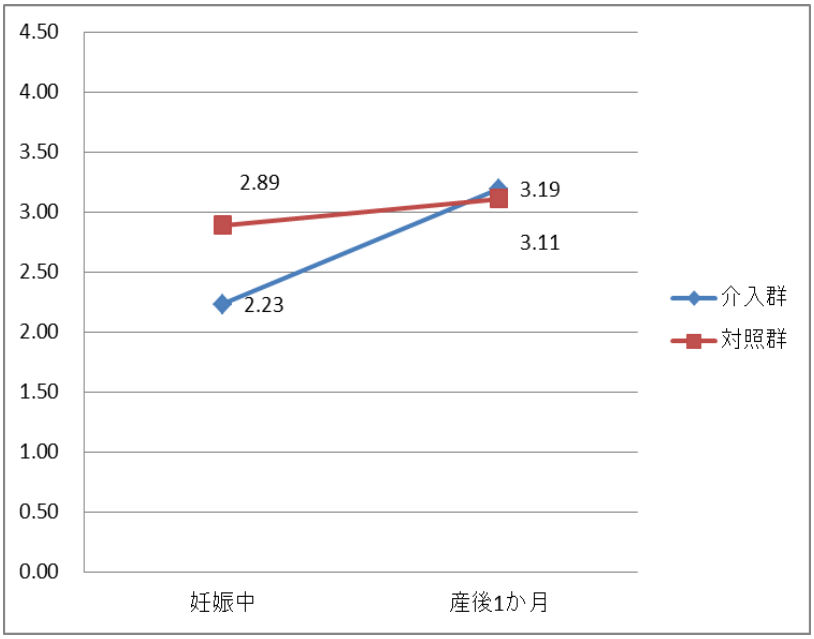
項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用	
	妊娠中	SD	産後1か月	SD	妊娠中	SD	産後1ヵ月	SD	群(F)	群 p値	時期(F)	時期 p値			
第1子との関わり方に戸惑いがある	2.23	± 1.26	2.61	± 1.43	1.93	± 1.05	2.39	± 1.26	0.869	0.355	5.827	0.019	*	F(1,57)=0.048,p=0.828	
第1子と遊ぶ時間が減った	2.58	± 1.36	3.87	± 1.06	2.36	± 1.25	4.04	± 0.96	0.015	0.902	60.342	0.000	***	F(1,57)=1.032,p=0.314	
第1子を叱ってしまう	3.10	± 1.30	3.87	± 1.09	3.00	± 1.54	3.14	± 1.30	2.095	0.153	5.934	0.018	*	F(1,57)=2.182,p=0.099	†
第1子の子育ては上手くいっていると思う	3.35	± 0.88	3.29	± 0.97	3.39	± 0.79	3.21	± 0.88	0.011	0.917	0.729	0.397		F(1,57)=0.160,p=0.690	
ひとりにして欲しい時間がある	3.65	± 1.20	3.45	± 1.23	3.82	± 1.22	3.57	± 1.14	0.354	0.554	1.374	0.246		F(1,57)=0.022,p=0.882	
第1子との物理的な遊びは減ったがコミュニケーションは増えた	3.35	± 1.02	3.52	± 1.06	3.36	± 1.13	3.57	± 1.00	0.018	0.895	1.246	0.269		F(1,57)=0.025,p=0.875	
第1子への愛情が半分になってしまうのではと心配	2.68	± 1.40	2.23	± 1.33	1.75	± 1.08	1.75	± 1.08	6.775	0.012	*	1.618	0.208		F(1,57)=1.618,p=0.208
第1子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち	3.06	± 0.96	3.32	± 0.95	2.68	± 1.19	3.25	± 1.14	0.962	0.331	7.926	0.007	**	F(1,57)=1.131,p=0.292	
第1子をほめることが多くなった	3.55	± 0.89	3.65	± 1.05	3.75	± 1.01	4.07	± 0.94	2.525	0.118	1.729	0.194		F(1,57)=0.499,p=0.483	
第2子よりも第1子が気にかかる	3.84	± 1.21	4.10	± 1.17	4.14	± 0.89	3.71	± 1.01	0.031	0.861	0.237	0.628		F(1,57)=3.846,p=0.055	†
第2子出産で入院時第1子のことが心配	4.32	± 1.01	4.29	± 1.13	4.46	± 1.00	4.46	± 0.92	0.456	0.502	0.016	0.900		F(1,57)=0.016,p=0.9	
二人同時育児のイメージ化ができている	2.23	± 0.96	3.19	± 1.08	2.89	± 1.03	3.11	± 1.07	1.611	0.210	17.311	0.000	***	F(1,57)=7.034,p=0.01	*
第1子のあかちゃんがえりが心配である	4.03	± 0.91	3.26	± 1.24	3.46	± 1.29	3.11	± 1.29	2.391	0.128	7.675	0.008	**	F(1,57)=1.043,p=0.311	
第1子のあかちゃんがえりをうけとめることができる	3.32	± 0.91	3.81	± 1.01	3.39	± 1.07	3.71	± 0.81	0.003	0.959	9.737	0.003	**	F(1,57)=0.396,p=0.532	
あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う	4.23	± 0.88	4.71	± 0.64	4.46	± 0.69	4.57	± 0.57	0.119	0.731	6.594	0.013	*	F(1,57)=2.679,p=0.107	
第2子妊娠出産で第1子の成長を感じた	3.81	± 1.17	4.77	± 0.50	3.93	± 1.15	4.57	± 0.69	0.047	0.830	28.106	0.000	***	F(1,57)=1.144,p=0.289	
第2子妊娠誕生で行動が制限されるようになった	3.74	± 1.15	3.94	± 1.15	3.68	± 1.02	4.32	± 0.91	0.488	0.488	7.219	0.009	**	F(1,57)=2.083,p=0.154	
二人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う	3.74	± 0.77	4.23	± 0.96	3.86	± 0.71	4.25	± 0.89	0.143	0.706	13.886	0.000	***	F(1,57)=0.150,p=0.700	
第1子の育児経験を生かして楽しみたい	4.19	± 0.79	4.65	± 0.55	4.04	± 0.84	4.36	± 0.87	1.477	0.229	23.004	0.000	***	F(1,57)=0.652,p=0.423	
身体を休めることができない	3.23	± 1.06	2.97	± 1.33	3.39	± 1.03	3.71	± 1.08	3.693	0.060	†	0.032	0.858	F(1,57)=2.707,p=0.105	
気持ちを休めることができない	2.97	± 1.17	2.71	± 1.40	2.93	± 1.30	3.36	± 1.19	1.200	0.278	0.224	0.638		F(1,57)=3.634,p=0.062	†
良い母親にならなくてはと焦る	2.84	± 1.10	2.52	± 1.21	2.71	± 1.24	2.64	± 1.06	0.000	0.996	1.532	0.220		F(1,57)=0.625,p=0.803	
女性としての自分に満足している	2.97	± 1.05	3.06	± 1.15	3.18	± 1.02	3.29	± 1.15	0.768	0.385	0.503	0.481		F(1,57)=0.001,p=0.971	
育児は楽しい	4.00	± 0.82	4.32	± 0.70	3.82	± 0.95	4.11	± 0.79	1.116	0.295	8.997	0.004	**	F(1,57)=0.033,p=0.856	

Two Way ANOVA,（†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01　***p<0.001,）

表 25－2　妊娠中と産後 1 か月の母親の 2 人の同時育児に対する意識

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)									交互作用
	妊娠中	SD	産後1か月	SD	妊娠中	SD	産後1ヵ月	SD	群(F)	群 p値	時期(F)	時期 p値		
第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要	4.48	± 0.72	4.84	± 0.37	3.75	± 0.75	3.96	± 0.95	21.164	0.000	***	6.496	0.014	*	F(1,57)=0.396,p=0.532
経産婦の育児情報に満足している	2.45	± 0.96	2.45	± 1.06	2.86	± 1.04	3.04	± 0.96	4.247	0.044	*	0.702	0.406		F(1,57)=0.702p=0.406
父親は家事に参加していると思う	3.26	± 1.39	3.19	± 1.38	3.43	± 1.43	3.64	± 1.31	0.867	0.356		0.310	0.580		F(1,57)=1.076,p=0.304
父親は育児に参加していると思う	4.00	± 1.13	4.23	± 0.85	3.96	± 1.17	4.11	± 0.96	0.109	0.742		1.937	0.169		F(1,57)=0.098,p=0.755
実父母義父母の協力を得ることができている	4.13	± 1.18	4.32	± 1.08	4.21	± 1.23	4.32	± 1.02	0.025	0.874		1.366	0.247		F(1,57)=0.113,p=0.738
家族以外の育児支援を活用することができている	3.52	± 1.26	3.13	± 1.31	2.86	± 1.33	2.75	± 1.38	3.207	0.079	†	1.796	0.185		F(1,57)=0.576,p=0.451

Two Way ANOVA,（†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01　***p<0.001,）



介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用		
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値	
2.23	0.96	3.19	1.08	2.89	1.03	3.11	1.07	1.611	0.210	17.311	0.000	***	7.034	0.010	*

妊娠中—出産後１か月

図 18　「２人同時育児のイメージ化ができている」

（３）妊娠中と出産後１か月の『子ども観尺度』の変化

介入群と対照群の『子ども観尺度』の変化を介入の有無別【2 群（妊娠中・出産後 1 か月）】×【2 群（時期）】の二元配置分散分析で検討した（表 26）。

すべての項目において交互作用はみられなかった。時期別主効果傾向が認められたのは、≪無関心低価値≫【F(1,57)= 4.889，p＝0.031】であった。

表 26　妊娠中と産後 1 か月の子ども観尺度の変化

項目	介入群 (n=31)				対照群 (n=28)								交互作用
	妊娠中	SD	産後1か月	SD	妊娠中	SD	産後1ヵ月	SD	群(F)	群 p値	時期(F)	時期 p値	
充実楽しみ	22.25	± 2.01	22.48	± 1.61	21.82	± 3.04	21.89	± 3.70	0.608	0.439	0.413	0.523	F(1,57)=0.111,p=0.740
制約負担	13.93	± 3.09	13.45	± 3.15	14.39	± 3.71	14.35	± 2.58	0.882	0.352	0.447	0.507	F(1,57)=0.332,p=0.567
社会的存在	10.70	± 1.97	10.97	± 2.37	10.54	± 2.82	10.86	± 2.85	0.054	0.817	1.514	0.224	F(1,57)=0.018,p=0.893
生きがい	6.68	± 1.28	6.61	± 1.43	6.61	± 1.45	6.86	± 1.58	0.061	0.805	0.523	0.472	F(1,57)=1.505,p=0.225
無関心低価値	6.29	± 1.72	6.58	± 2.13	5.71	± 1.41	6.46	± 1.84	0.729	0.397	4.889	0.031 *	F(1,57)=0.955,p=0.333

Two Way ANOVA,（†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01 ***p<0.001,）

３）準備クラスに参加した群の Process analysis

準備クラスに参加した群の Process analysis として出産後 1 週間および 1 か月時点において、表 27・28 について回答を求めた（n＝30）。クラスの総合評価について、クラスに用いた冊子について、絵本を読み聞かせしているときの気持ち、絵本（内容・自宅での利用の仕方など）について、クラスの内容・時間について、そう思わないから、そう思う、の 5 件法で尋ねた。平均値と標準偏差を求めた。

出産後 1 週間の評価の結果、クラスの総合評価は、4.57±0.50、クラスに用いた冊子について 4.4±0.68、絵本を読み聞かせているときの気持ちについて 4.23±0.73、読み聞かせに用いた絵本について 4.17±0.87、クラスの内容について 4.47±0.571、クラスの時間について 4.4±0.62 であった。

出産後 1 か月の評価の結果､絵本の読み聞かせ回数は 1 週間あたり 2.83±1.15 回、読み聞かせている気持ちについて 4±0.95、読み聞かせに用いた絵本について 3.97±0.94 であった。

表 27

介入群産後1週間のクラス評価（n=30 ）

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
クラス総合評価	4	5	4.57	0.504
冊子について	3	5	4.4	0.675
読み聞かせの気持ち	3	5	4.23	0.728
絵本について	3	5	4.17	0.874
クラスの内容	3	5	4.47	0.571
クラス時間	3	5	4.4	0.621

表 28

介入群産後1か月のクラス評価（n=30 ）

項目	最小値	最大値	平均値	標準偏差
絵本の読み聞かせ回数	0	4	2.83	1.147
読み聞かせている気持	1	5	4	0.947
絵本について	1	5	3.97	0.944

４）妊娠中・出産後１週間、出産後１か月における自由記載について

妊娠中・出産後１週間、出産後１か月における自由記載について育児に関する内容をコード化し質的帰納的に分析した。表 29・30 のとおりである。コードを＜　＞で示す。出産後１週間の自由記載によると、育児クラスについては＜育児クラスはあったほうがいい＞＜育児クラス参加で気持が楽になった＞＜第１子の関わり方が分かり助かった＞＜第１子が赤ちゃんを迎える姉としての学びがあったと思う＞＜絵本はまだ早すぎる＞＜第１子が絵本に興味を持った＞＜父親や祖父母も巻き込める内容になっているとさらによかった＞であった。第１子の様子については＜第１子がききわけのない振る舞いをする＞＜第２子誕生時に第１子の成長する姿を見ることができた＞であった。育児全般については＜体力的に大変＞＜きょうだいの姿を見るととても幸せ＞であった。

出産後１カ月の自由記載によると、育児クラスについて＜第１子が絵本に興味を持った＞＜絵本はまだ早すぎる＞＜出産後も育児クラスを開催してほしい＞、第１子の様子について＜第１子は兄姉らしくなった＞＜第１子はがまんする＞、育児全般については＜第１子の育児に戸惑う＞＜経産婦の母親への支援を望む＞＜夫・実父母義父母に協力してもらいたい＞であった。

表 29　出産後 1 週間自由記載

育児クラスについて		第1子の様子		育児全般について	
育児クラスがあったほうがいい	5	第1子がききわけのない振る舞いをする	2	体力的に大変	2
育児クラス参加で気持が楽になった	5	第2子誕生時に第1子の成長する姿を見ることができた	3	きょうだいの姿を見るととても幸せ	2
第1子の関わり方が分かり助かった	5				
第1子が赤ちゃんを迎える姉としての学びがあったと思う	1				
絵本はまだ早すぎる	2				
第1子が絵本に興味を持った	1				
父親や祖父母も巻き込める内容になっているとさらによかった	1				

*数字はコード数

表 30　出産後 1 カ月自由記載

育児クラスについて		第1子の様子		育児全般について	
第1子が絵本に興味を持った	1	第1子は兄姉らしくなった	4	第1子の育児に戸惑う	4
絵本はまだ早すぎる	1	第1子はがまんする	2	経産婦の母親への支援を望む	5
出産後も育児クラスを開催してほしい	3			夫 実父母義父母に協力してもらいたい	2

*数字はコード数

第Ⅷ章　考察

第１項　開発した準備教育プログラムの効果

１.準備教育に参加した対象者の特性

介入群と対照群の属性においては、第２子出産時第１子年齢、第２子出産年齢、同居の有無、就業の有無、託児の有無の項目で比較した結果、ほぼ同質な集団とみなしうる。しかしながら妊娠週数においては、28 週以降が介入群で 15%を占めたのに対し、対照群では 92.9%であり、有意差が認められた。本研究における介入群と対照群の振り分けにおいては、厳密な RCT の手法を取らなかったことが影響している。しかしながら週数の差が介入結果には影響するとは言い難い。なぜならば、介入群と対照群のアウトカムを比較した結果、28 週未満と以降の結果において有意な差は認められなかった。したがって、ベースラインにおいては同質な集団と言える。本研究の対象者は、平均年齢が 32.9 歳の第２子妊娠中の母親である。出産順位別にみた母の平均年齢の年次推移は平成 24 年で 32.1 歳[4)]であるため、一般的な属性の第２子妊娠中の母親であるといえる。

本研究における第１子の年齢を４歳未満と４歳以上の２群で分析した際、介入群における４歳未満は 27 名（87.1%）、対照群の４歳未満は 21 名（75.0%）、介入群の４歳以上は４名（12.9%）、対照群の４歳以上は７名（25.0%）であった。よって介入群と対照群における第１子の年齢においてベースラインでは差はなく、２群間での有効性の検討は可能と判断した。しかしながら、第１子の特徴を踏まえて準備教育プログラムの効果を吟味すると、１歳から７歳と年齢に幅がある。介入群および対照群の４歳未満の数と割合は介入群 27 名（87.1%）、対照群 21 名（75.0%）であるため、４歳未満の第１子を持つ母親に対する準備教育プログラム効果の解釈は可能であると考える。他方、４歳以上の第１子を持つ母親における準備教育プログラムの効果については、データ数が絶対的に少ない点、および第１子の発達に応じた対応が母親に求められる点からみて、４歳未満群と同質の効果があったとは言いきれない。そのため、今後データ数を増やし、再検討する必要がある。

２.検出力分析について

検定力分析は G*Power3（Faul,Erdfelder,Lang＆Buchner,2007: http://www.phycho.uni-duesseldorf.de/abteilungen/aap/gpower3/）[66)] を用いて事後にサンプルサイズを確認した。

効果量（effect size）は Cohen（1988）[67] の基準により f＝0.25（効果量中）、有意水準 0.05、検定力（1－β）＝0.8 として設定し算出した。2 元配置分散分析のサンプルサイズは 1 群につき 33 名と算出された。本研究の参加に同意した研究対象者は、当初、77 名であったものの、1 回のみのクラス参加やアンケートの回収が妊娠期のみ、出産後 1 週間のみの回収であった場合を除いた結果、有効回答数は 59 名（76.6％）であった。介入群 39 名中有効回答 31 名（79.5％）、対照群 38 名中有効回答は 28 名（73.7％）の回収率であった。

以上より、検出力分析としては第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの有効性を測定するサンプルサイズに満たなかったことは否めない。本研究は、介入前の妊娠 28 週前後から産後 1 か月という 16 週前後を縦断的に調査するデザインであった。その結果、途中脱落者があり、サンプルサイズに満たなかった。サンプルサイズには満たなかったものの、介入群 31 名、対照群 28 名の結果は得られた貴重なデータであることから分析し考察する必要がある。

２．評価指標からみた準備教育プログラムの介入（Outcome analysis）の効果

１）メイン指標からみた効果

【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】である『母親から見た第 1 子の様子』の 9 項目のうち「第 1 子は第 2 子を抱っこする」という項目において介入群では出産後 1 週間で有意に得点が増加した。その要因は、準備教育プログラムに母親と参加した第 1 子の割合は 67％であるため、第 1 子が準備教育プログラムに参加した結果として、第 1 子がきょうだいを迎え入れる準備ができたといえる。第 1 子がきょうだいを迎え入れる上でも妊娠中からの準備が示唆されている [12) 21) 29) 39) 40) 63)]。本研究で考案したプログラムの中に第 1 子の理解を高めるために【第 1 子が兄姉になる準備】に関する内容が盛り込まれている。用いる媒体には、第 1 子が興味・関心を持つことができるように絵本を用いた。絵本の中には、誕生した弟妹に対する第 1 子の関わり方についての記述がある。母親は第 1 子に対し妊娠中から、第 2 子を迎えいれる準備として絵本を用い、日々の育児の中で、【兄姉になる第 1 子の特徴】を理解しながら、きょうだいを受け入れる準備を整え、出産を迎えたのではないかと考えられる。本介入プログラムの効果は一部支持された。

妊娠中と出産後 1 週間および 1 カ月の『母親から見た第 1 子の様子』につい

ては、介入の有無に関わらず、有意に時期別主効果が認められた。母親は妊娠中と出産後の第1子の変化についてポジティブにもネガティブにも捉えていた。ポジティブな側面として、きょうだいを受け入れる準備が整いつつあり、第2子をいたわる行動をとること、「第1子はあかちゃんのことをよく話す」ことなどを通して、第2子誕生により第1子の成長を実感していた。第1子は妊娠中の母親の身体変化を感じているものの、眼には見えない胎児であるため、兄姉となる実感が沸きにくい。出産を契機として第2子が誕生したことにより弟妹が存在しているという、今までの生活環境とは異なっていることを、第1子なりに実感し、徐々に兄姉になるという行動がとれるようになっていくことが明らかになった。

一方、第2子出産後に「第1子は精神的に不安定である」と感じていた。母親は第2子誕生後に第1子の育児に対し、戸惑いを感じている[12) 18) 26) 35)]。また、小島ら[22)]の結果でも、産後1ヶ月目の第1子の行動には、第2子誕生へのポジティブな反応、依存性/攻撃性、活動の低下/ひきこもりの3つの軸が存在した。ことから、本研究においても同様の結果であった。妊娠中より出産後において第1子に対し、ネガティブに捉えていることから、妊娠中のみならず、出産後においても経産婦に対する育児支援の必要性が示唆された。本研究において、母親の意識を通して第2子誕生前後の第1子の変化が明らかになったことは意義があると言える。

第2子を迎えるための準備教育は【第2子妊娠中の母親の育児意識】である『2人の同時育児に対する意識』の指標結果により、2人同時の育児適応に対して介入効果が認められた。

出産後1週間または1カ月の時期に介入群に有意に増加した項目は、「2人同時の育児の肯定感」「2人同時の育児のイメージ化ができている」「あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う」「第2子妊娠中に経産婦を対象としたクラスは必要」の4項目であった。一方、介入群に有意に低下した項目は、「2人同時の育児の負担感」「第1子への愛情が半分になってしまうのではと心配」「第1子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち」「第2子妊娠誕生で行動が制限されるようになった」「気持ちを休めることができない」「良い母親にならなくてはと焦る」の6項目であった。このうち、「第2子妊娠中に経産婦を対象としたクラスは必要」以外の項目に有意差が見られた要因は、自ら準備教育に参加したことにより第2子を迎え入れるための認識が変容し、情緒的に育児に対して肯定的に捉えることができたことである。「第2子妊娠中に経産婦を対象としたクラスは必要」の項目が増加した理由は、準備教育プログ

ラムを体験したことにより実感としての現れである。

開発した準備教育プログラムは、妊娠期が第 2 子を迎え入れる準備期間として重要と捉え、予期的に介入していく必要性を認識したうえでの実施であった。妊娠中から第 2 子を迎え入れる準備を行うことで、準備教育プログラムに参加した母親の育児意識に対し、ポジティブに影響を及ぼしたと言える。

第 2 子を迎える母親と家族の準備教育の目的は、第 2 子を迎え入れる第 1 子の感情が理解できる、兄姉になる第 1 子の特徴を踏まえた育児が実践できる、妊娠中から第 1 子が兄姉になる準備の必要性を理解し行動できる、である。内容として、幼児期、特に自我意識が芽生え発達していく 3 歳ころの第 1 反抗期が目立つ時期及び、他人から褒められることによって自我を確認しようとする欲求が出現する時期であることを説明したこと、第 1 子に対する関わり方について知識を得ることにより、効果をもたらすことができたのではないかと考える。先行研究 [12) 23) 27) 36) 37)] では、【兄姉になる第 1 子の特徴と接し方の理解】についての必要性を述べているが、提案や推論でしかなかった。本研究において、【兄姉になる第 1 子の特徴と接し方の理解】を促す介入をすることで効果が得られたことに大きな意義がある。

中でも、最も重視していた評価項目が、「2 人同時の育児のイメージ化ができている」、「2 人同時の育児の肯定感」「2 人同時の育児の負担感」である。これらの項目は介入効果が認められた。本研究における第 1 子の理解を高める育児クラスは今後、一定の効果のある第 1 子の理解を高める育児クラスとして、臨床実践可能性を示唆したと言える。

第 2 子妊娠中に経産婦を対象とした育児クラスの必要性については、介入群に有意に増加した。これは、介入群の母親がプログラム内容について、意義を感じており、必要性を認識した結果であると言える。このことからも本研究における第 1 子の理解を高める育児クラスのニーズについては支持されたと言える。よって準備教育プログラムが第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育の妥当な内容であったと解釈できる。

『2 人の同時育児に対する意識』については介入の有無に関わらず、有意に時期別主効果が認められ、出産後 1 週間および 1 カ月において変化が見られた。母親は、第 1 子の成長を感じており、2 人目は多少のことがあっても乗り越えられると捉え、第 1 子の育児経験を生かして楽しみたいとポジティブに捉えていた。第 2 子を迎える家族は、妊娠中から胎児の存在を認識しているものの、出産を契機としてより家族に大きな変化をもたらすことを意味している。第 1 子の育児経験は初産婦と経産婦の大きな育児の知識や態度に関する違いになる。

一方で、介入の有無に関わらず妊娠中より出産後において、第 1 子との関わり方に戸惑いを感じていた。須藤ら[35]も、産後に同時に 2 人の子どもを育児していくことに対しては、第 1 子に妊娠前や妊娠中のような対応ができなくなる不安やプレッシャーが持続していたと述べている。家族成員が増加することで育児負担は増す。育児は家族や家族以外の支援が必要である。第 2 子の育児に時間と労力が必要なことは言うまでもない。第 1 子に関わる時間や労力について以前より不足感を感じることが経産婦の特徴ともいえる。第 1 子との関わりに戸惑いを感じながらも、上手に適応していくことが目標である。物理的に第 2 子誕生により第 1 子と遊ぶ時間が減ったと感じていた。妊娠前より出産後に父親が家事・育児に参加していると認識している母親が多いことから、家族が第 1 子に関心を持ち、育児に協力しているのではないかと推察できる。

本研究における第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育は、妊娠中のみのプログラムである。第 1 子に対する関わりに戸惑いを感じていることにより、母親が 2 人同時の育児に適応するためには、妊娠中のみならず産褥にわたり継続的に支援していくことも検討すべきである。

以上より、第 1 子の妊娠・出産・育児の経験がある母親でも、初産婦経産婦の区別がない出産前教育の必要性もあろうが、本研究の結果においては、経産婦に特化した第 1 子の理解を高める育児クラスの必要性を示唆していると言える。

２）サブ指標からみた効果

サブ指標である『子ども観尺度』の 5 つの因子について、介入の有無による交互作用は認められなかった。有意差は認められなかったものの、介入群において、≪充実楽しみ≫に増加がみられ、≪制約負担≫に低下がみられた。≪充実楽しみ≫の下位項目は、「子どもは自分の人生に充実感をもたらす」など子どもを肯定的に捉える項目からなっている。また、≪制約負担≫は「子どものために自分のやりたいことが制限され、経済的な負担を感じる」など制約感や負担感を感じる項目からなっている。以上より、第 1 子の理解を高める育児クラスは子ども観に影響を及ぼす可能性が示唆されたと言える。

時期別主効果傾向が認められたのは、≪無関心低価値≫であった。≪無関心低価値≫の項目は 4 項目であり、「子どもを育てることに対して余り関心が持てない」「自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない」「子どものために仕事が満足に出来ない」「自分がいなくても子どもは育つ」で構成されてい

る。産後 1 週間では介入群が妊娠前より低下し対照群が増加した。出産後 1 カ月においては両群とも増加した。宇野 [12] も出産後 1 カ月の母親は≪2 人同時の育児のジレンマ≫があると述べているように、本研究においても出産後 1 カ月において育児負担感を感じていることが示唆された。

３）評価指標の妥当性について

本研究における準備教育プログラムの効果を測定するための評価指標は、独自に作成したメイン指標である【第 2 子妊娠中の母親の育児意識】である『母親から見た第 1 子の様子』と『2 人の同時育児に対する意識』と既存の尺度であるサブ指標の『子ども観尺度』を用いた。サブ指標の『子ども観尺度』は、独自に作成したメイン指標の妥当性を測定するために設定した。弱い相関が得られたことから、本研究におけるメイン指標は準備教育プログラムを測定できると解釈できる。

４）第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの Process analysis

本研究のおける準備教育プログラムは【第 1 子に対する理解を高める】ことにより、育児負担が軽減し 2 人同時の育児のイメージ化が高まることが分かった。本プログラムでは、初めての妊娠時の体験と今回の第 2 子妊娠の体験について妊婦同士でディスカッションしたり、電子媒体や冊子、絵本を用いて第 1 子の特徴を説明したり、関わり方についてのポイントを伝えたことが効果的であったと考えられる。また、妊娠中に 2 回のクラスを持つことで、1 回目の講義内容を妊娠中に実践し、それらをリフレクションし、第 2 子を迎え入れる準備をすることで理解が深まったのではないかと考えられる。出産後 1 週間の評価の結果、クラスの総合評価は、4.57±0.50、クラスに用いた冊子について 4.4±0.68、絵本を読み聞かせているときの気持ちについて 4.23±0.73、読み聞かせに用いた絵本について 4.17±0.87、クラスの内容について 4.47±0.57、クラスの時間について 4.4±0.62 と概ね高い評価を得た。プログラムの実施は助産師である研究者本人が参加者に関わりながら進めた。母親は第 1 子の妊娠・出産・育児の体験を持っており、助産師の存在について認識している。中には第 1 子の妊娠・出産・育児の体験の際に助産師による支援を好意的に受け止めている母親も存在したと考える。助産師の存在および同じ境遇に置かれた母親同士だからこそもてる安心感を持つことができ、学びに効果的に作用したのではない

かと考えられる。

準備教育プログラムは母親の集団に対し行った。集団指導のメリットは、教育的かかわりとして知識や技術の提供といった概念的な内容を取り扱うことができる[55]。参加者が自らの状態を的確に把握し、判断できるようにするためのものとして捉えることが参加者の主体性を引き出し実際に使いこなせるものとなる。準備教育プログラムにおいて、第1子の理解についての知識の提供は、第1子の育児を経験した母親同士の集団に対して行うことができる内容であった。そして、参加者の孤立感をなくすことができたと同時に、第2子妊娠中の母親の第1子に対する育児に共通な感情は、自分だけに限ったことではないことを感じ取り、他の参加者と共に問題解決に向けての態度を持つことができるようになったのではないか。

介入は、母親のみのクラスではなく第1子を含め、家族が参加できるタイプであった。育児は母親のみならず家族支援が欠かせない[12]ことからも、家族に対し2人同時の育児適応を促す支援ができたことは母親を支えることに関与する契機となり、意義あることであると考えられた。本研究は、第2子を迎え入れる母親に焦点を当てたため、兄姉の参加は任意であった。そのため、第1子である兄姉の参加の有無では評価はされていない。MacLaughlin et[39] Storr GB[40] Behnke[63]は、子どもが新たに家族を迎え入れるためのクラスに参加することにより、第1子は第2子との新しい生活に適応しやすく第2子の受け入れがよいと述べている。今後は、兄姉になる第1子に焦点をあてたクラスを検討していく必要がある。

介入プログラムの導入の際に重要なことは、集団指導といえども、最終的に個別的に第1子の理解を促し2人同時の育児という問題解決を促すためには、参加者を個別に理解することが必要となる[57]。参加者自身を理解するための内容として、個人的な内容（氏名、第1子の年齢、性別、家族構成、育児観等）があげられた。参加者が第1子の育児についての体験談やどのように感じ、考えているかを聞くことにより、個々人の育児観に触れることができた。

まとめにおいては、経験を振り返り、参加した意義を明らかにすることが必要である[57]。一般にグループは①参加者は新しい問題解決方法を学ぶことができた、②視野を広くすることができた、③他の参加者からの励ましや支えもあり自信がついた④新しい知識を学んだ等の目的を成就することになる。準備教育プログラムまとめでは、1人1人の参加者が、何を経験し、何を学んだかを表現することができるようにした。また、運営者は参加者の表現した内容をお互いが受け止められるように援助し、お互いにクラスから、あるいは他の参

加者から何を得たのかを回顧させ、考えることができるように支援することができたのではないかと考えられる。

用いた絵本についての評価として、出産後 1 か月の評価の結果、絵本の読み聞かせ回数は 1 週間あたり 2.83±1.15 回、読み聞かせている気持ちについて 4±0.95、読み聞かせに用いた絵本について 3.97±0.94 であった。読み聞かせは第 1 子の年齢により、関心が持てるか否かが左右された。絵本は子どもの成長発達に応じ、選択することが必要である[61) 62)]。本研究で用いた絵本は、3～4 歳の幼児に焦点をあて作成した。自由記載似もあるように、1～2 を第 1 子に持つ母親にとっては、読み聞かせに至らないケースもあったことから、今後年齢に応じた絵本の作成が課題である。

第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムは、第 1 子に対する理解を促す看護を行い、2 人同時の育児に適応することが目的である。2 人同時の育児に適応するということは、母親の育児不安を軽減し、母親としてのアイデンティティを持つことができ、母子ともに健やかな生活を営むことに繋がるといえる。

第 2 項：実践への適用性

本研究において、第 2 子妊娠中から出産後の母親に対する準備教育は第 1 子に対する理解を高め、第 1 子と第 2 子の 2 人同時の育児に適応することであることが明らかになったこと、第 2 子妊娠以降の母親に特化した準備教育プログラムの検討がされたことに意義がある。周産期の支援として新たな出産前教育への示唆を与えるものである。開発した準備教育プログラムの介入方法は、第 2 子妊娠中の母親を対象とした集団指導である。その目的は対象者の人たちが正しい知識や理解を持つこと、好ましい態度を持つこと、必要なことを実行し充実した生活を送ることである[44) 46)]。そのため、準備教育の目的・目標を達成するために集団指導が効果的である。導入の方法として、現在行われている母親学級や両親学級のプログラムをベースに、第 2 子を迎え入れる準備教育プログラムを組み入れいていく方法が実際的である。

現在、出産前教育として病院や地域保健センターなどで開催されているプログラムと本研究で開発した準備教育プログラムの方法論は、開催時期や時間の配分など類似点がある。運用方法として現在開催されている母親学級や両親学級を開催し、さらに経産婦を対象として希望に応じる形で開発した準備教育プログラムを適用することが可能であろう。そのため、新たに大きなコストを費

やすことなく実施できる。

開発した準備教育プログラムにおける第1子に対する理解についての知識の提供は第1子の育児経験のある母親に対する内容であり、第2子妊娠中の母親の第1子に対する育児の感情は共通であることを知ることで、他の参加者と共に問題解決に向けての態度を持つことが期待できる可能性がある。本準備教育プログラムを集団指導で行い補足部分を個別に補うことは必要である。以上より本プログラムは病院・地域における妊娠期の介入プログラムとして適用可能である。

第Ⅸ章　結論と課題

第１項　結論

第２子を迎え入れるための母親に対する準備教育プログラムをインストラクショナルデザインの ADDIE モデルを枠組みとして開発し、第２子妊娠中の母親に対し第２子を迎え入れるための準備教育を行い，参加した母親を介入群とし（ｎ＝31)、参加しない母親を対照群（ｎ＝28）として設定し、2 群間を比較した。成果変数は、『母親から見た第１子の様子』『2 人の同時育児に対する意識』『子ども観尺度』とし、被験者内因子を時期（妊娠中・出産後１週間及び１か月)、被験者間因子を介入の有無とする二元配置分散分析を行った。

結果は、以下である。

1）母親から見た第１子の様子

「第１子は第２子を抱っこするという」に交互作用が認められ（ｐ＜0.05)、介入後に有意に増加し第１子が第２子に関心を示す行動が強化された。

2）2 人の同時育児に対する意識

介入群に有意に増加した項目は、≪2 人同時育児の肯定感≫（p＜0.05)、「2 人同時の育児のイメージ化ができている」（ｐ＜0.05)、「あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う」（ｐ＜0.05）であり、2 人の育児に対し、介入群においてポジティブに捉えていた。一方、介入群に有意に低下した項目は、≪2 人同時育児の負担感≫（p＜0.05)、「第１子への愛情が半分になってしまうのではと心配」（p＜0.01)、「第１子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち」(p＜0.05)、「第２子妊娠誕生で行動が制限されるようになった」(p＜0.05)、「気持ちを休めることができない」（p＜0.05）であり、2 人の育児に対し対照群においてネガティブに捉えていた。

3）第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの有効性

開発された第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムは、第１子に対する理解を高め、母親の育児意識に対しポジティブな影響を及ぼし、2 人の同時育児の適応を促すための準備教育プログラムとして有効であることが示された。本プログラムは、経産婦に特化した介入プログラムとして有効である。よって、第２子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムの有効性が確認された。

第 2 項　研究の限界と今後の課題

今回の研究では第 2 子妊娠中の母親に焦点を当てた報告が少ない中，第 2 子妊娠中の母親の育児意識について明らかに出来た点，第 2 子を迎え入れるために妊娠期から準備教育を行う支援の必要性と方向性を示すことができた点、第 2 子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムを考案し、介入の効果が得られた点で意義深いと思われる。

本研究の限界について述べる。まず、対象者の選定についてである。本研究の対象者の選定は地方における 1 医療機関からのリクルートであった。そのため、第 2 子妊娠中の母親の母集団を反映していると言い難い。また、検出力分析において、データ数の確保がサンプルサイズに満たなかった点は、事前のサンプルサイズ設計の必要性の認識が甘かったこと、本研究が 16 週間という長期間に渡る縦断的研究であることによる脱落率を充分検討できなかったことに起因する。これらは、介入研究の方法論上の課題といえる。

次に、第 1 子の年齢差である。今回、得られたデータでは、第 1 子の年齢は 1 歳から 7 歳と幅があり、4 歳以上の第 1 子を持つ母親の対象数が少ない中での効果検証に留まった。「母親が認識している第 1 子の様子」と「第 1 子の育児および第 2 子誕生後の 2 人の育児について」などの母親の育児意識と第 1 子の年齢との関連では、第 1 子が 4 歳未満においてネガティブに影響を及ぼすことから[69]、今後はさらに、第 1 子の年齢を加味した準備教育プログラムに用いる媒体や方法を検討していく必要がある。

次に評価指標についてである。評価指標を検討するにあたり、構成概念の妥当性を確認するために 70 名の母親に対する質問紙調査をもとに因子分析を行った。松尾他[68]によると、因子分析を行う際のサンプル数は質問項目数の 5～10 倍程度と考えるとある。そのため、本研究における評価指標のサンプル数としては、120 が必要であったことが研究の限界である。

最後に、母親が 2 人の育児に適応していくには、妊娠期に限らず育児期にかけて継続的に支援することにより効果を示す。出産後、育児期にかけての準備教育プログラムを検討していく。母親が妊娠期から第 2 子を迎え入れる準備の必要性を認識し，家族を含めた支援を検討していくことが今後の課題である。

本研究における第 2 子を迎え入れる準備教育プログラムの実施・評価は、2011 年～2013 年文部科学省補助金基盤研究（C）（課題番号 23493325）の一部である。

謝辞

本研究を遂行する過程には、様々な困難があった。2011 年 3 月 11 日、本研究の倫理審査が通り、研究を依頼するためにフィールド予定としていた産婦人科医院に向かう途中、未曾有の大震災、東日本大震災に遭遇した。車中での出来事であり、車が上下左右に揺れ何が起きたか検討がつかず、ただただ体が震えていたことが記憶に残っている。当時の依頼施設の現状は、研究協力以前に産婦人科のソフト面およびハード面の復興が第一優先であった。そのため研究依頼予定の産婦人科は協力が得られにくい状況に置かれた。

このような状況の中、私の助産学科時代の同級生である水戸赤十字病院産婦人科の加司山良子様（当時係長、現在は看護師長）に研究フィールドの件で相談したところ、圷病棟看護師長に橋渡しをしてくださり、藤田看護部長、そして満川元一病院副院長兼産婦人科医長に快諾してくださった。そのような温かいお言葉がなければ、この研究は実施できなかった。ここに感謝の意を表したい。

また、研究遂行中には病棟及び外来助産師の方々に多大なる協力を得ることができたことにより、こうして研究が遂行できた。彼らの支援があって遂行できた。改めてここに感謝の意を表したい。

看護大学教員と研究との両立による日々であった。週末に介入であるクラス運営を行った。クラス運営を順調に進行できたわけではなく、日時の調整等に苦慮した。しかしながら、参加してくださった第 2 子妊娠中のお母様方の不安や悩みがクラス終了時には解消され、また「育児を頑張ろう」という言動や表情に触れることで、私自身も本研究の意義を感じることができ、最後まで遂行することができたと思う。研究に快く同意してくださった第 2 子妊娠中のお母様方に感謝である。本研究で開発されたプログラムは、多くの方々のご支援があって開発されたのである。

最後に、本研究および論文執筆を遂行するにあたり、多大なご教授をいただいた国際医療福祉大学大学院教授、衣川さえ子先生に感謝申し上げます。

文献

1）厚生労働省．人口動態統計の年間推計．http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai12．2013.9．17
2）財団法人母子衛生研究会編．母子保健の主なる統計　出生順位別．出生数及び割合の年次推移．東京：母子衛生研究会，2012:56
3）内閣府政策統括官（共生社会政策担当）少子化対策．平成 21 年度インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査最終報告書．http://www8.cao.go.jp/shoushi/cyousa/cyousa21/net-riyousha/html/2-1-1.html，2014.1.3
4）平成 25 年度版厚生労働白書
http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/2-01.pdf、189-195
2015.1.31
5）鯨岡峻．＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ、関係発達の視点から．東京:NHK ブックス，2006:158－234
6）法橋尚宏．新しい家族看護学，理論・実践・研究．東京:メジカルフレンド社，2010:67－71
7）Friedman,MM 著、野嶋佐由美監訳．家族看護学—理論とアセスメント．東京へるす出版，1993:111－127
8）新道幸恵、和田サヨ子．母性の心理社会的側面と看護ケア．東京:医学書院，2003:2－8
9）厚生労働省第 8 回 21 世紀出生児縦断調査結果の概況，子育ての意識など，http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/08/dl/04.pdf、2014.1.3
10）大日向雅美著．子育てと出会うとき，東京：日本放送出版協会，1999
11）Rubin．R.著／新道幸恵．後藤桂子訳．母性論－母性の主観的体験—．東京：医学書院，1997:70-74
12）礒山あけみ．第 2 子妊娠中の女性の育児に対する主観的体験．日本母性看護学会誌 2010；10（1）：17-23
13）Marriner-Tomer,A.et al 編著，都留伸子訳、看護理論家とその業績，第 3 版．東京：医学書院，2004：475-493
14）我部山キヨ子．妊娠期から育児期までの身体的および精神的苦痛に関する記述的研究．三重看護学会誌　2000；2：57-67
15）厚生労働省．健やか子や子 21 検討会報告書．http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_b_18.html．2010.1.26
16）全国助産師教育協議会、助産師教育のコア内容におけるミニマム・リク

ワイアメンツの項目と例示
http://www.zenjomid.org/activities/img/min_require.pdf、2013．4.24
17）山本あい子．助産師基礎教育テキスト 1　助産概論．東京：日本看護協会出版会，2009:62-66
18）宇野晴美．浅野郁代．礒山あけみ他．第 2 子出生に伴う第 1 子の反応と母親の感情．茨城県母性衛生学会誌 2010;28：25-30
19）ガニエ，R．ゴラス，C．ウエイジャー，W．他著　鈴木克明・岩崎信監訳インストラクショナルデザインの原理．東京：北大路書房，2007:21－50
20）江守陽子．第 2 子出産後の母親の 2 児に対する養育費率と第 1 子に対する態度の変化．母性衛生 2001；42（1）：60-67
21）小嶋理恵子．兵頭慶子．水畑喜代子他．第 2 子以降の出産を迎える家族のニーズ．南九州看護研究誌 2009；7（1）：9 - 15
22）小島康生．入澤みち子．脇田満里子．第 2 子誕生から 1 ヶ月目までの母親第 1 子関係と第 1 子の行動特徴．母性衛生 2001；42（1）：212 - 221
23）Sawicki J.A:Sibling Rivalry and the New Baby. Anticipatory Guidance and Management Strategies. PEDLATRIC NURSING1997；23（3）：298-302
24）Smith, V C. Preparing a Child for the Birth of a Sibling.International Journal of Childbirth Education. 2013； 28（2）：20－24
25）Johnsen NM；Gaspard ME. Theoretical foundations of a prepared sibling class. Journal of Obstetric, Gynecologic & Neonatal Nursing, 1985；14（3）：237－242
26）田尻后子．第 2 子を出産した産後 1 ヶ月の母親の体験　第 1 子との体験．日本母性看護学会誌 2003；3（1）：27 - 35
27）大月恵理子．森恵美．第 2 子出生前後の第 1 子の反応と家族の認知．母性衛生 2002；43（2）：332 - 339
28）Faller HS ，Ratcliffe L. Sibling visitation: how far should the pendulum swing? Journal of Pediatric Nursing ， 1993； 8（2）：92－99
29）大月恵理子．森恵美．第 2 子出生に伴う家族の適応過程．日本母性看護学会誌 2002；2（2）：31 - 40
30）納谷真由美．岡田由香．第 2 子出産後の母親の第 1 子に対する思い　対児感情に焦点をあてて．愛知母性衛生学会誌 2005；23：53 - 58
31)保田ひとみ.第 2 子誕生後 1 カ月時における母親のとらえた第 1 子の反応．日本助産学会誌 2004；18（2）：9 - 20

32）坪田明子．第２子妊娠中の母親の第１子に対する養育意識　妊娠各期における調査．京都母性衛生学会誌 2005；13（1）：53-59
33）山崎あけみ．3歳になる第１子を気遣いながら４人家族を形成するプロセス．日本助産学会誌 2003；17（1）；35-46
34）礒山あけみ．第２子妊娠中の女性の育児と就労および支援体制についての認識．茨城キリスト教大学看護学部紀要 2010；2（1）：29－36
35）須藤宏恵．片岡弥恵子．第２子妊娠中から産後にかけての母親の第１子に対する気持ちとかかわりの変化 - 新しい家族を迎えるためのクラス参加前後に焦点をあてて - ．聖路加看護学会誌 2007；11（1）：19 - 27
36）中村紋子．片岡弥恵子．堀内成子．新しく兄姉になる子どものクラス「赤ちゃんがやってくる」の実施と評価．日本助産学会誌 2006；20（2）：85-93
37）大月恵理子．第２子出生に伴う家族の適応を促す準備教育に関する研究．日本母性看護学会誌 2006；6（1）：9-14
38）Fortier.JC;CarsonVB;Will.S;Shubkagel.BL．Adjusiment to a newborn:sibling preparation makes a difference，J Obstet Gynecol Neonatal Nurs　1991；20（1）：73-79
39）MacLaughlin SM，Johnston KB．The preparation of young children for the birth of a sibling. Journal of Nurse-Midwifery , 1984：29（6）：371－376
40）Storr GB；Robinson P．Preparing kids for the new baby.　Canadian Nurse，1998；94（3）：33－35
41）堀内成子．土屋麻由美．片岡弥恵子．赤ちゃんがやってくる．ペリネイタルケア夏季増刊号．東京：メディカ出版，2005；211-218
42）片岡弥恵子．須藤宏恵．永森久美子他．幼児と妊娠中の母親および家族への性の健康クラスの影響―クラスに参加した母親の気持ちと家族の反応の変化から―．日本助産学会誌 2008；22（2）：158-169
43）WHO. 健康の定義. http://www.who.int/kobe_centre/about/faq/ja/2011.4.7
44）宮坂忠夫．川田智恵子．吉田亨、最新保健学講座別巻１健康教育論．東京：メジカルフレンド社，2006:78 - 84
45）坂野雄二：認知行動療法．東京：日本評論社，2002:49-60
46）福井トシ子編．新版助産師業務要覧第２版　基礎編．東京：日本看護協会出版会，2012:299-301
47）堀内成子編，江守陽子著：助産学講座５助産診断・技術学Ⅰ．東京：医学書院，2007:165 - 189
48）立岡弓子監修．写真と CD でわかる周産期ケア・マニュアル．東京：医学

芸術社，2007:78
49）園田かおり．ある経産婦の出産体験からニーズを探る．神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 2007；32：220-225
50）伊藤道子．妊娠期から産褥期までの女性の心理・社会的状態とソーシャルサポート．北海道医療大学看護福祉学部紀要 2006；13：1‐9
51）NHK 放送文化研究所．現代日本人の意識構造（第 7 版）．東京：日本放送出版会，2010:37‐51
52）我部山キヨ子，妊婦の意識の変化―母性意識の確立―，ペリネイタルケア東京：メディカ出版，1994；13（1）：31－30
53）内閣府世論調査報告書：社会意識に関する世論調査，社会のあり方に関する意識について，2008
54）小島康生，入澤みち子，脇田満里子：第二子妊娠期間中における母親―第一子関係，母性衛生，2003；44（2）：289－299,
55）宇田倫子：第 2 子出産に際する第 1 子の心理を支える，ペリネイタルケア東京：メディカ出版，2002：21（9）：14－17
56）柏木惠子：子どもという価値―少子化時代の女性の心理，東京:中央公論新社，2001
57）黒木保博．横山穣．水野良也他．グループワークの専門技術．東京：中央法規，2005:34‐44
58）尾花万里、味村砂智子．母親が望む育児学級のあり方を探る　アンケ‐ト調査を実施して．日本看護学会論文集　母性看護 2007；37：84‐86
59）Polit,D.F.,& Hungler,B.P.Nursing Research:Principles and methods(7th ed.Philadelphia:Lippincott，2011：229-233
60）福丸由佳．無籐隆．飯長喜一郎．乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観.子ども観　父親の育児参加との関連.発達心理学研究,1999;10(3):189-198
61）Jim Trelease 著 亀井 よし子 訳．読み聞かせ‐この素晴らしい世界．東京:高文研，1987：33‐62
62）河合隼雄．松居直．柳田邦男．絵本の力．東京：岩波書店，2010：119‐124
63）Behnke A. Sibling classes: fun or frenzy?. International Journal of Childbirth Education, 1999；14（3）：9－11
64）Rubin，R.著／新道幸恵，後藤桂子訳．母性論－母性の主観的体験―．東京：医学書院，1997：70－74
65）牧　陽子．産める国フランスの子育て事情．第 9 章　日本社会の現状．：

東京：明石書店，2009：202-229
66）G*Power: Statistical Power Analyses for Windows
http://www.gpower.hhu.de/2014．12.18
67）Polit,D.F.,& Hungler,B.P.Nursing Research:Principles and methods(7th ed.Philadelphia:Lippincott，2011：540
68）松尾太加志．中村知靖．誰も教えてくれなかった因子分析．京都：北大路書房，2003：38
69）礒山あけみ．第 2 子妊娠中の母親の育児意識および特性との関連．母性衛生 2014；55（2）：434 - 443

資　　料

資料1：研究課題3「母親が認識している第1子の様子」結果グラフ及び表 119

資料2：研究課題3「第1子の育児および第2子誕生後の2人同時育児に対する意識」結果グラフ・表 125

資料3：研究課題3「子ども観尺度」結果グラフ・表 141

資料4：調査票自由記載結果 144

資料5：施設に対する調査協力依頼書 148

資料6：介入群に対する研究依頼書および同意書 151

資料7：対照群に対する研究依頼書および同意書 155

資料8：介入群の妊娠期調査書 159

資料9：介入群の出産後1週間調査書 164

資料10：介入群の出産後1か月調査書 169

資料11：対象群の妊娠期調査書 174

資料12：対象群の出産後1週間調査書 179

資料13：対象群の出産後1か月調査書 184

資料14：準備教育プログラムに用いたパンフレット 189

資料15：準備教育プログラムに用いたパンフレット説明時のシナリオ 197

資料16：準備教育プログラムに用いた絵本 207

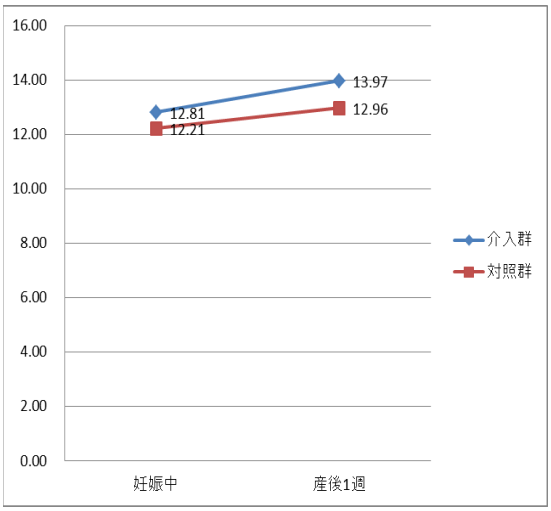
資料17：準備教育プログラムに用いた電子媒体 232

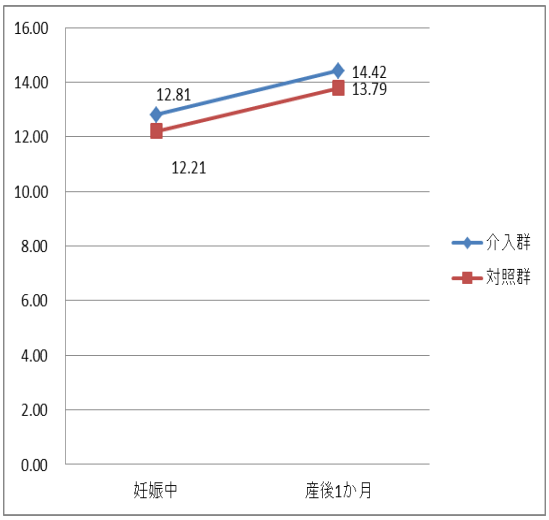
資料18：準備教育プログラムの進行およびシナリオ 247

資料19：準備教育の実際 249

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸:1＝妊娠中 2＝産後1週間 産後1か月

母親が認識している第1子の様子





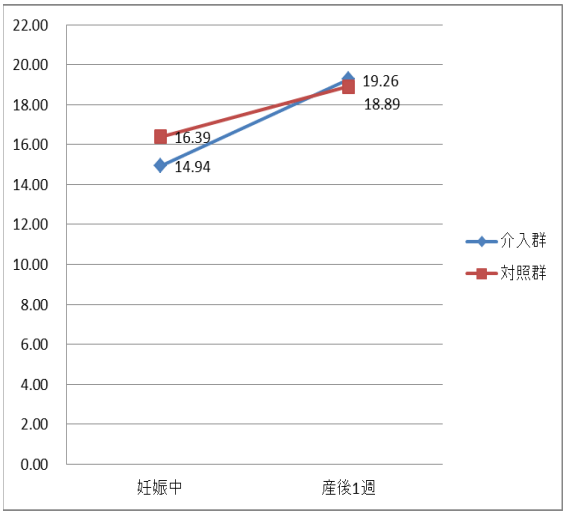
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
12.81	2.43	13.97	2.59	12.21	2.92	12.96	3.31	0.798	0.375	1.559	0.217	0.324	0.571

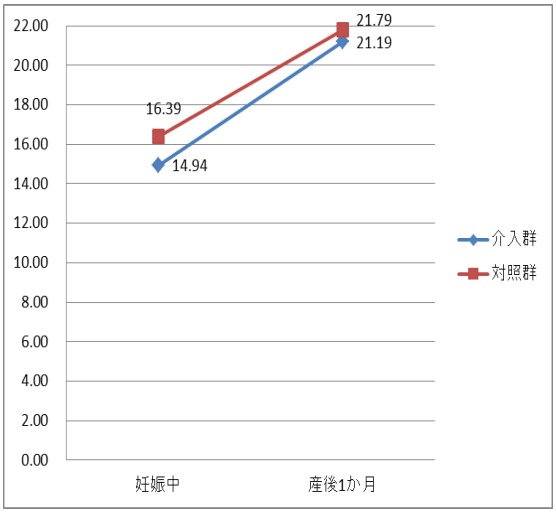
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
12.81	2.43	14.42	3.04	12.21	2.92	13.79	2.73	0.930	0.339	20.430	0.000 ***	0.003	0.953

妊娠−産褥1カ月

図1　第1子に対するネガティブな受けとめ





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
14.94	6.33	19.26	5.95	16.39	6.17	18.89	5.05	0.164	0.687	20.854	0.000 ***	1.488	0.228

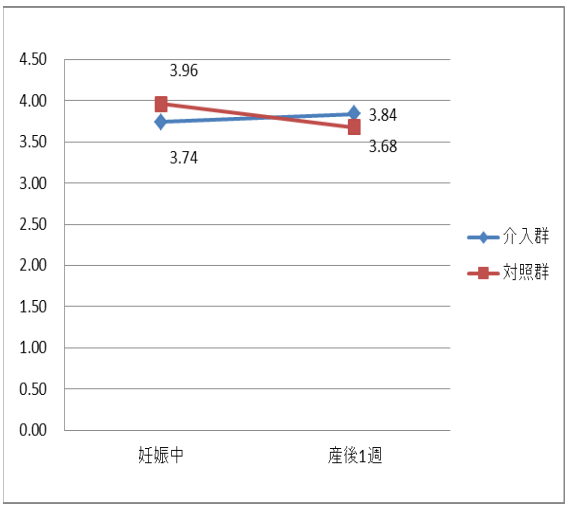
妊娠−産褥1週間

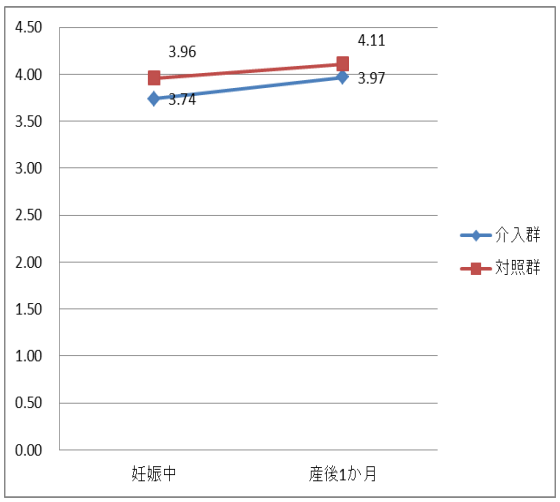
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
14.94	6.33	21.19	4.41	16.39	6.17	21.79	3.76	0.798	0.375	57.706	0.000 ***	0.318	0.575

妊娠−産褥1カ月

図2　第1子に対するポジティブな受けとめ

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,）
横軸:1＝妊娠中 2＝産後1週間 産後1か月





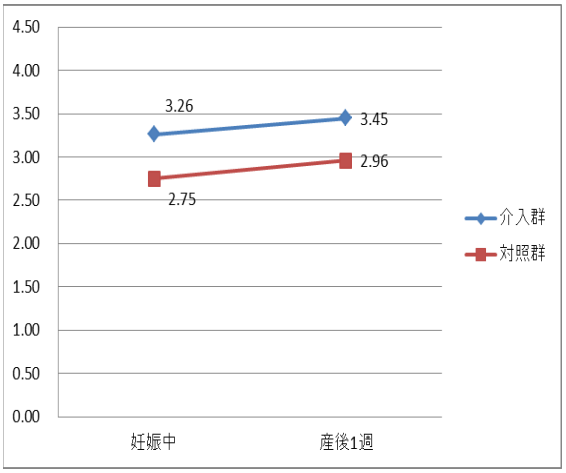
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.74	1.13	3.84	1.19	3.96	1.11	3.68	1.42	0.013	0.910	0.355	0.554	1.453	0.91

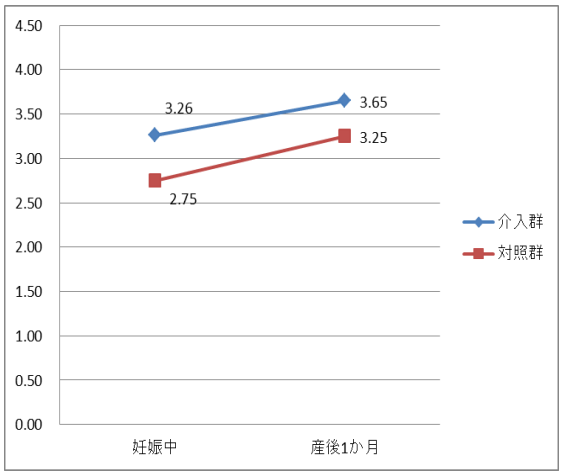
妊娠−産褥１週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.74	1.13	3.97	1.17	3.96	1.11	4.11	0.99	0.527	0.471	1.655	0.203	0.084	0.773

妊娠−産褥1カ月

図3 第1子はくっつきたがる





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.26	1.06	3.45	1.21	2.75	1.43	2.96	1.20	3.404	0.070 †	1.401	0.241	0.004	0.95

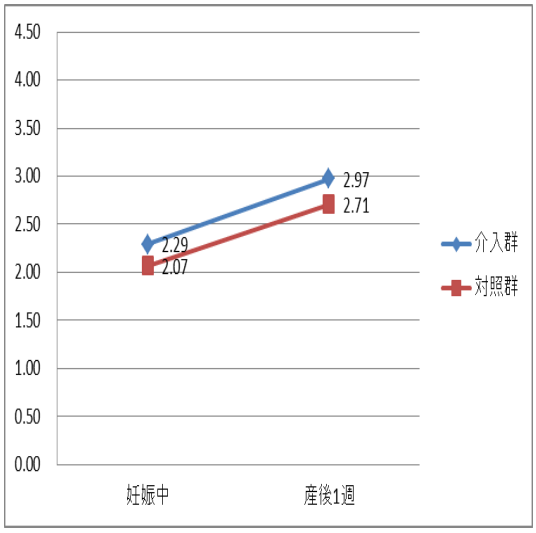
妊娠−産褥１週間

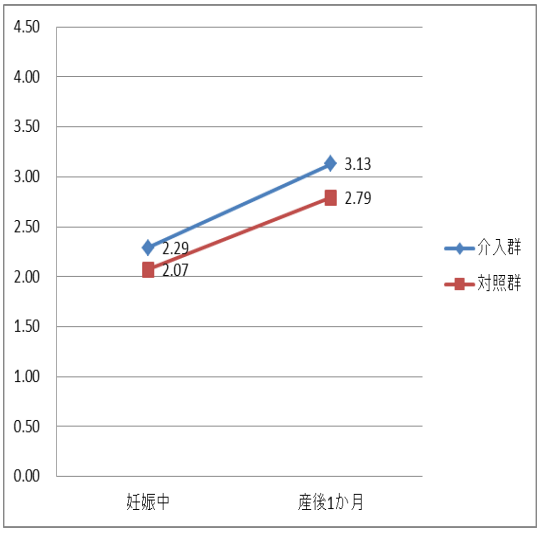
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.26	1.06	3.65	1.28	2.75	1.43	3.25	1.18	2.796	0.100	6.205	0.016 **	0.101	0.752

妊娠−産褥1カ月

図4 第1子はききわけのないふるまいをする

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸:1＝妊娠中 2＝産後1週間　産後1か月





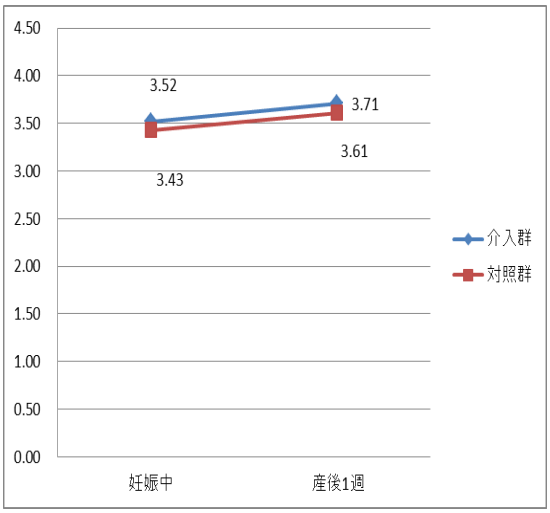
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.29	1.04	2.97	1.20	2.07	1.15	2.71	1.27	0.848	0.361	16.387	0.000 ***	0.011	0.92

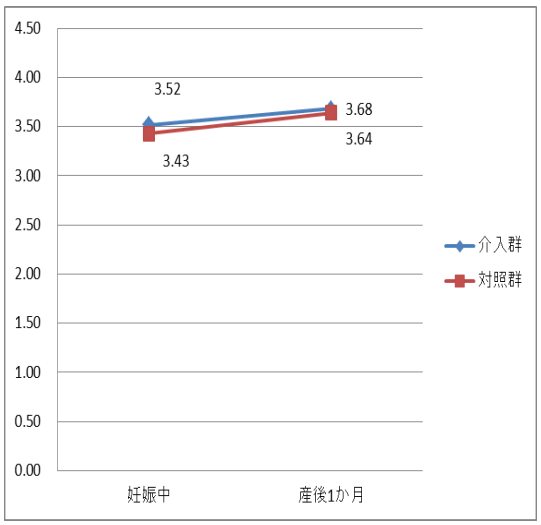
妊娠−産褥１週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.29	1.04	3.13	1.28	2.07	1.15	2.79	1.29	1.128	0.293	22.495	0.000 ***	0.144	0.705

妊娠−産褥1カ月

図5　第1子は精神的に不安定である





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.52	0.89	3.71	0.94	3.43	1.30	3.61	0.99	0.222	0.639	1.549	0.218	0.003	0.96

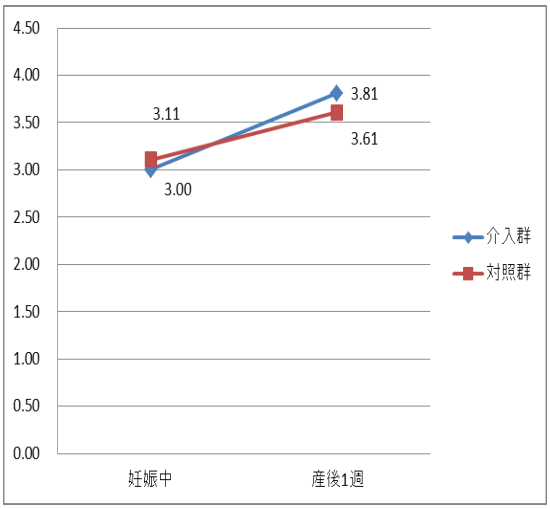
妊娠−産褥１週間

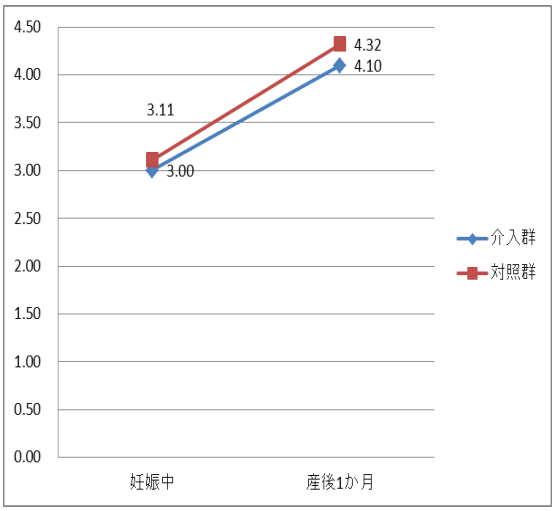
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.52	0.89	3.68	1.01	3.43	1.30	3.64	0.91	0.086	0.770	1.768	0.189	0.035	0.852

妊娠−産褥1カ月

図6　第1子は要求に答える

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸:1＝妊娠中 2＝産後1週間 産後1か月





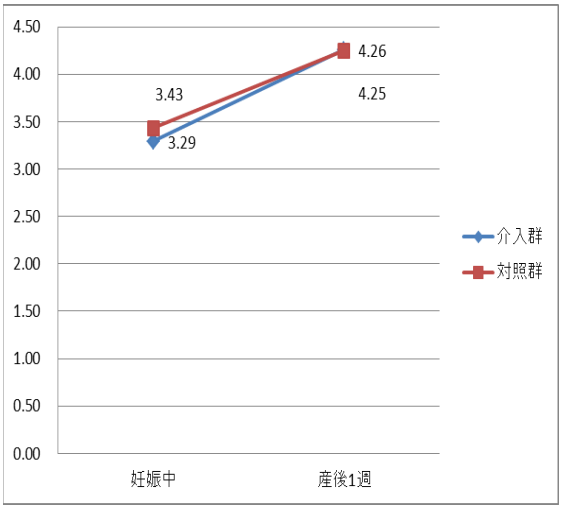
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.00	1.55	3.81	1.40	3.11	1.47	3.61	1.32	0.021	0.886	11.024	0.002 **	0.607	0.44

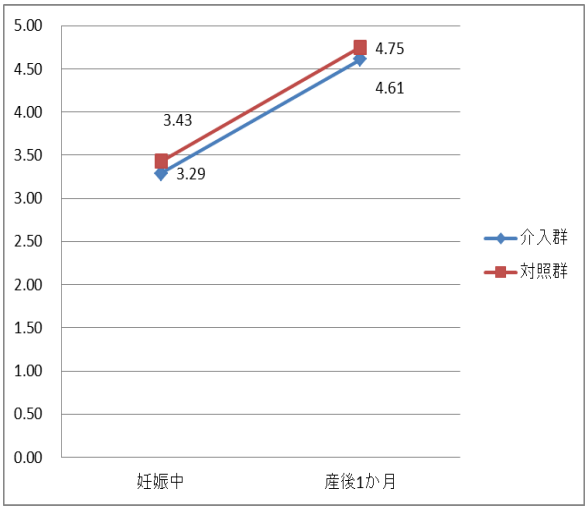
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.00	1.55	4.10	1.19	3.11	1.47	4.32	0.91	0.379	0.541	30.381	0.000 ***	0.079	0.780

妊娠−産褥1カ月

図7　第1子は赤ちゃんのことをよく話す





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.29	1.55	4.26	1.06	3.43	1.26	4.25	1.08	0.600	0.808	21.811	0.000 ***	0.146	0.70

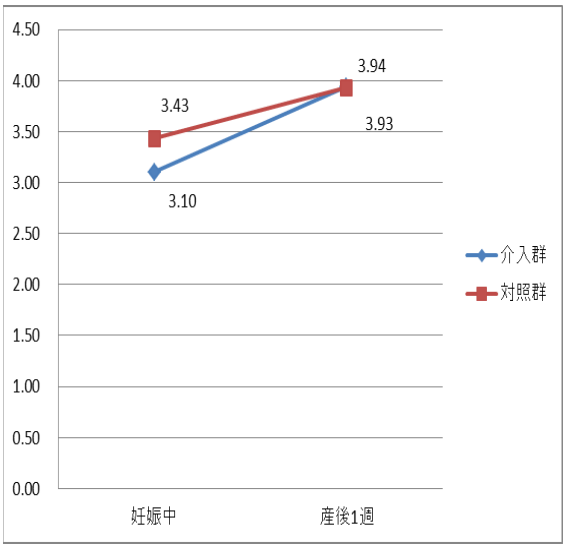
妊娠−産褥1週間

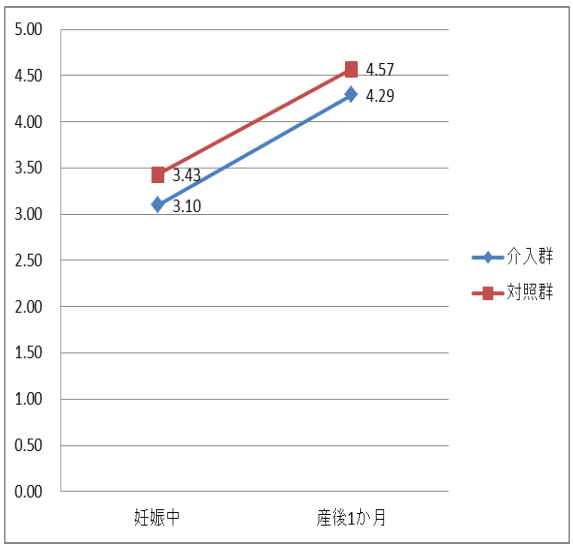
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.29	1.55	4.61	0.76	3.43	1.26	4.75	0.44	0.377	0.542	54.849	0.000 ***	0.000	0.997

妊娠−産褥1カ月

図8　第1子は第2子に対して興味を示す

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸:1＝妊娠中 2＝産後1週間 産後1か月





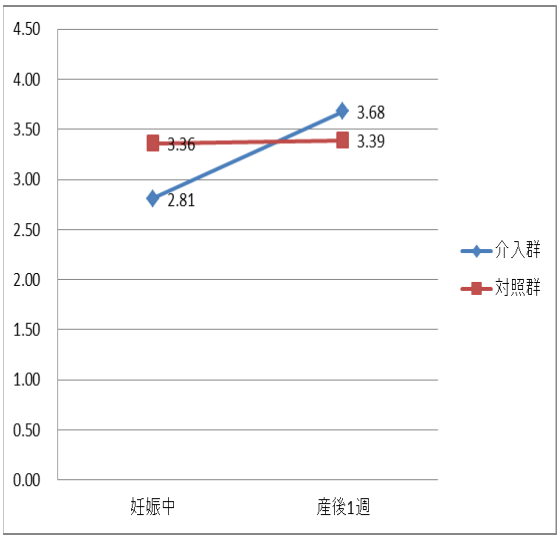
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.10	1.33	3.94	1.26	3.43	1.43	3.93	1.15	0.339	0.563	12.400	0.001 **	0.794	0.38

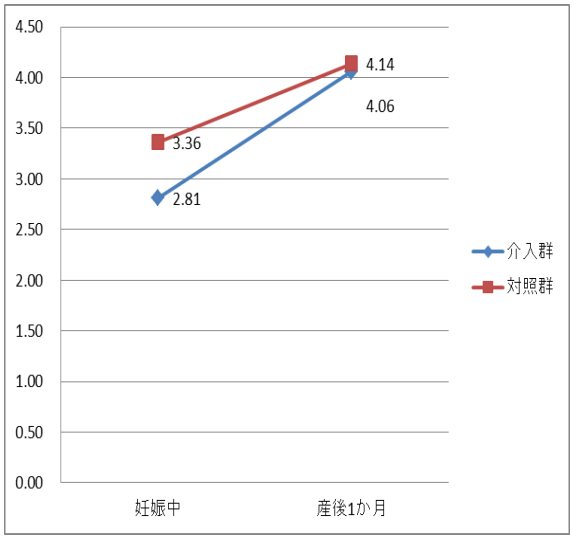
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.10	1.33	4.29	1.43	3.43	1.43	4.57	0.69	1.596	0.212	40.774	0.000 ***	0.019	0.890

妊娠−産褥1カ月

図9　第1子は第2子をいたわる行動をする





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.81	1.54	3.68	1.60	3.36	1.42	3.39	1.55	0.149	0.701	5.127	0.027 *	4.351	0.04 *

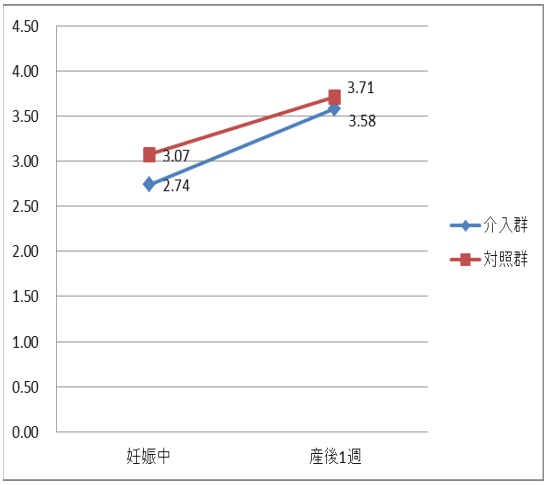
妊娠−産褥1週間

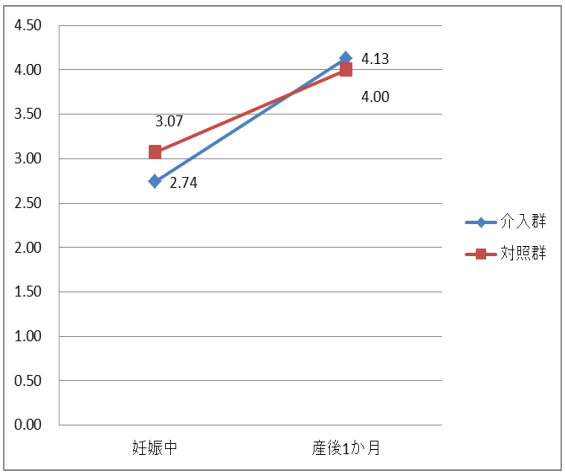
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.81	1.54	4.06	1.32	3.36	1.42	4.14	1.56	0.947	0.335	26.014	0.000 ***	1.390	0.243

妊娠−産褥1カ月

図10　第1子は第2子を抱っこするという

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,）
横軸:1＝妊娠中 2＝産後1週間　産後1か月





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.74	1.26	3.58	1.15	3.07	1.39	3.71	0.90	0.777	0.382	20.312	0.000 ***	0.355	0.55

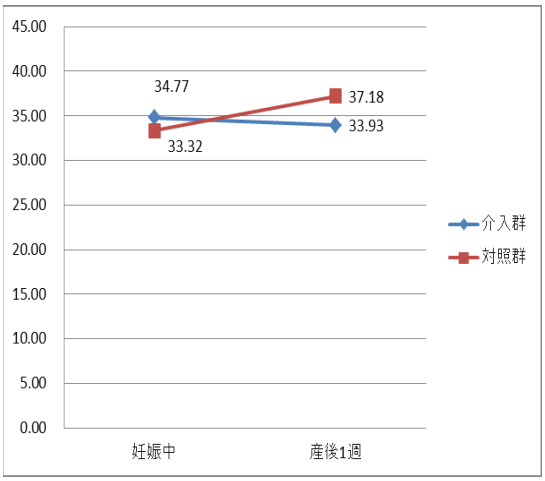
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.74	1.26	4.13	0.99	3.07	1.39	4.00	1.05	0.143	0.707	54.039	0.000 ***	2.119	0.151

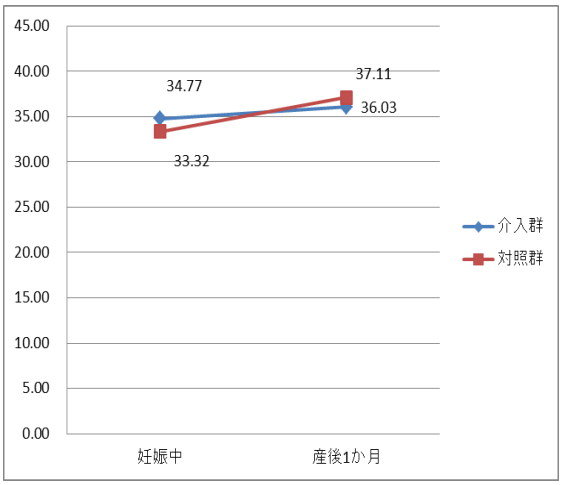
妊娠−産褥１週間　　妊娠−産褥1カ月

図11　第1子はきょうだいをうけいれる準備が整いつつある

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月

第1子の育児および第2子誕生後の2人同時育児に対する意識





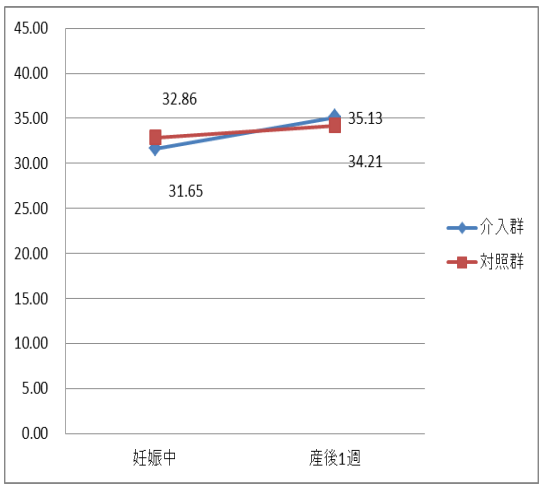
介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値
34.77	7.32	33.93	8.02	33.32	7.84	37.18	5.50	0.29	0.59	2.86	0.096	†	6.916	0.011

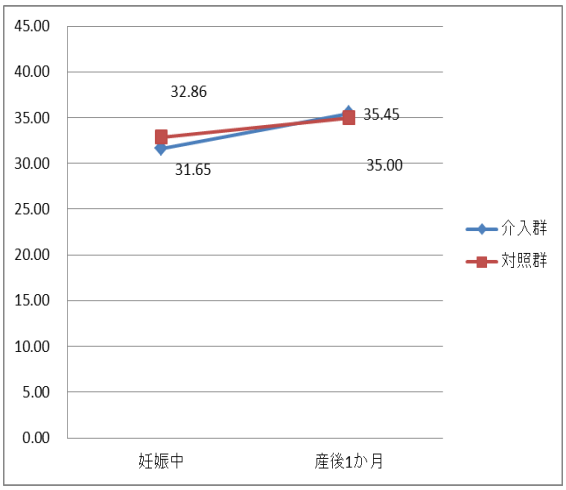
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値
34.77	7.32	36.03	7.16	33.32	7.84	37.11	6.01	0.013	0.908	8.054	0.006	**	2.023	0.160

妊娠−産褥1カ月

図12　2人同時育児の育児負担感





介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値
31.65	4.34	35.13	3.56	32.86	4.39	34.21	3.86	0.02	0.88	30.60	0.000	***	5.906	0.008

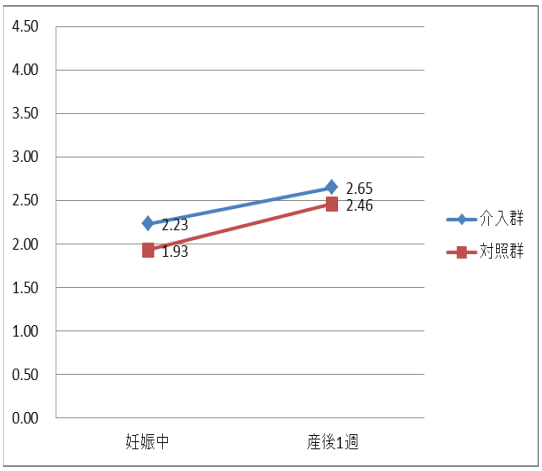
妊娠−産褥1週間

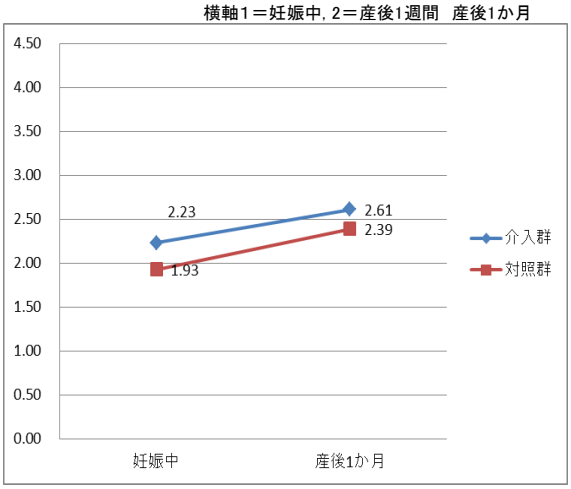
介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値		F	p値
31.65	4.34	35.45	4.37	32.86	4.39	35.00	4.35	0.146	0.703	28.697	0.000	***	2.244	0.140

妊娠−産褥1カ月

図13　2人同時育児の肯定感

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,）
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





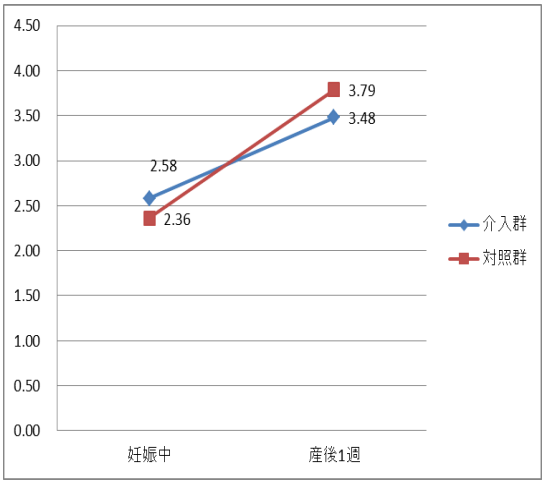
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.23	1.26	2.65	1.50	1.93	1.05	2.46	1.26	0.826	0.367	5.367	0.024 *	0.080	0.78

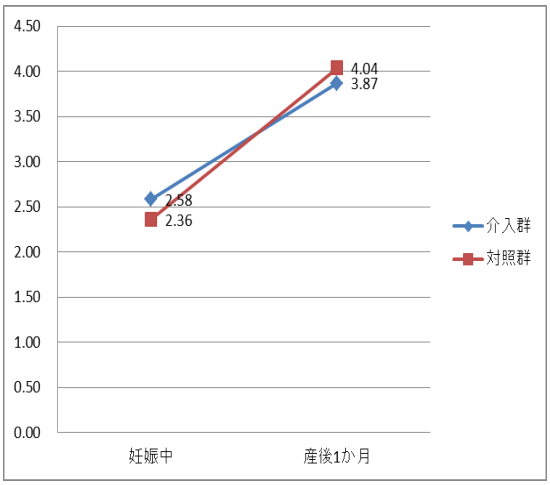
妊娠−産褥１週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.23	1.26	2.61	1.43	1.93	1.05	2.39	1.26	0.869	0.355	5.827	0.019 *	0.048	0.828

妊娠−産褥1カ月

図14　　第1子との関わり方に戸惑いがある





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.58	1.36	3.48	1.31	2.36	1.25	3.79	0.69	0.026	0.872	35.743	0.000 ***	1.814	0.18

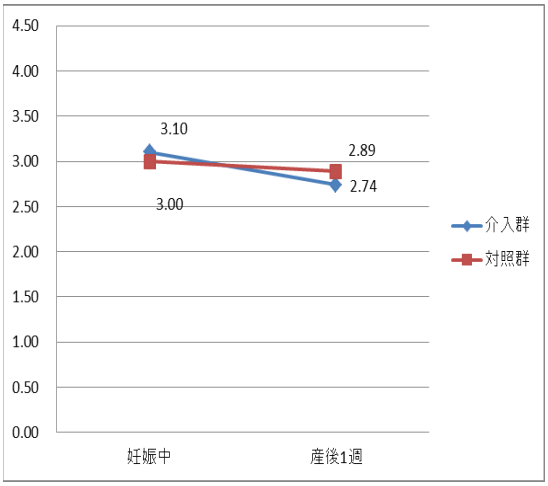
妊娠−産褥１週間

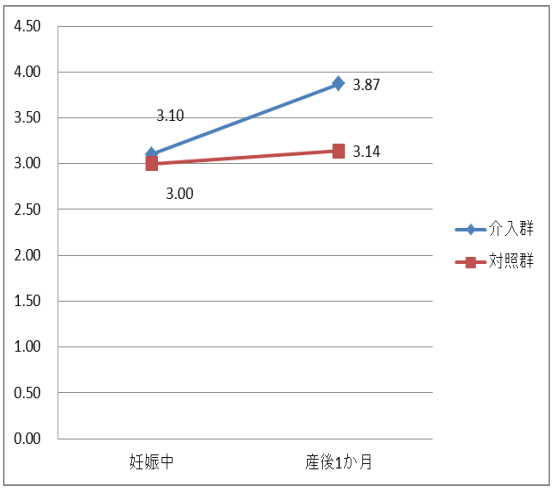
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.58	1.36	3.87	1.06	2.36	1.25	4.04	0.96	0.015	0.902	60.342	0.000 ***	1.032	0.314

妊娠−産褥1カ月

図15　第1子と遊ぶ時間が減った

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,）
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





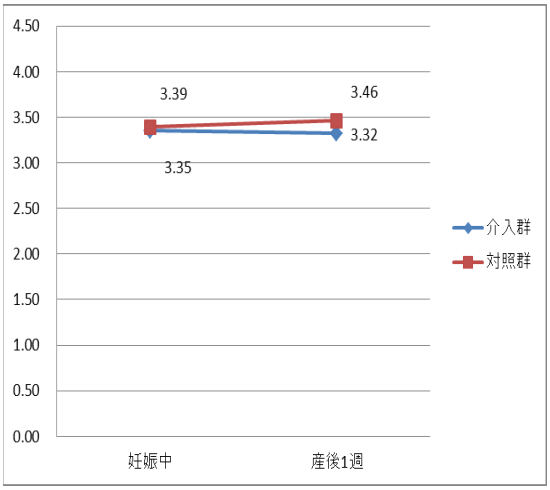
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.10	1.30	2.74	1.18	3.00	1.54	2.89	1.23	0.008	0.927	1.759	0.190	0.506	0.48

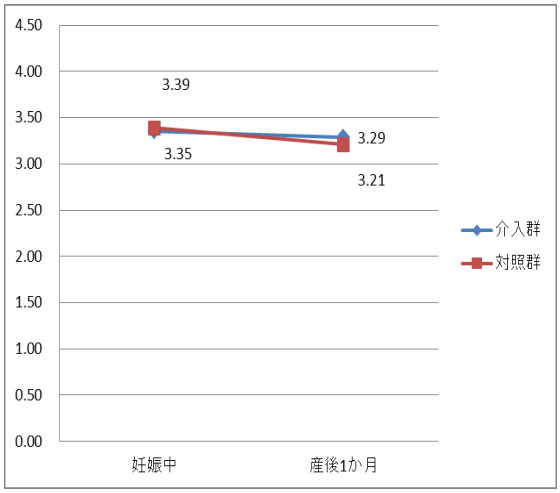
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.10	1.30	3.87	1.09	3.00	1.54	3.14	1.30	2.095	0.153	5.934	0.018 *	2.812	0.099 †

妊娠−産褥1カ月

図16　第1子を叱ってしまう





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.35	0.88	3.32	0.91	3.39	0.79	3.46	0.58	0.246	0.622	0.035	0.852	0.245	0.62

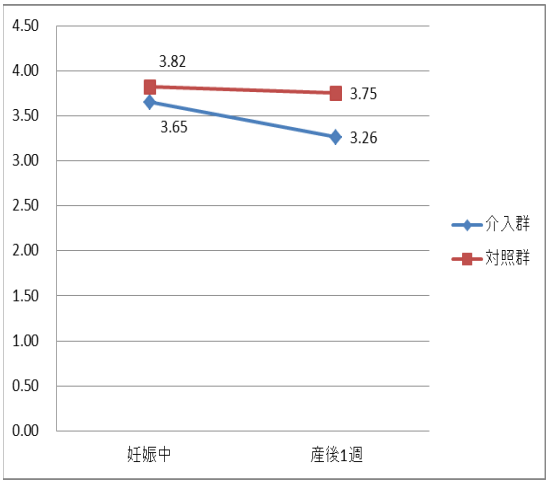
妊娠−産褥1週間

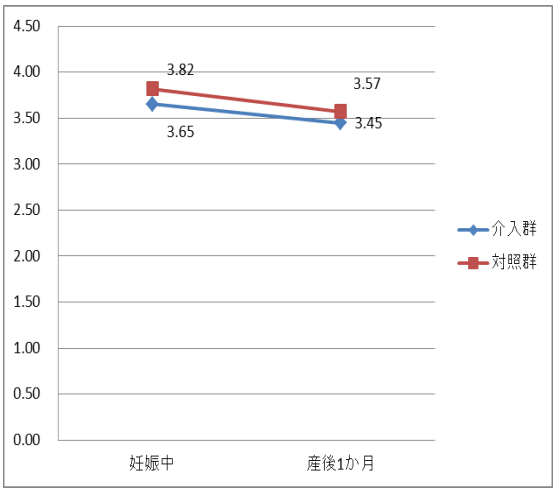
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.35	0.88	3.29	0.97	3.39	0.79	3.21	0.88	0.011	0.917	0.729	0.397	0.160	0.690

妊娠−産褥1カ月

図17　第1子の子育ては上手くいっていると思う

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





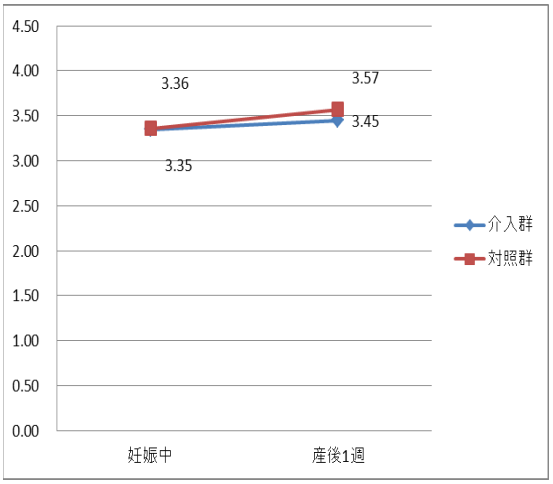
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.65	1.20	3.26	1.34	3.82	1.22	3.75	1.01	1.525	0.222	2.119	0.151	1.004	0.32

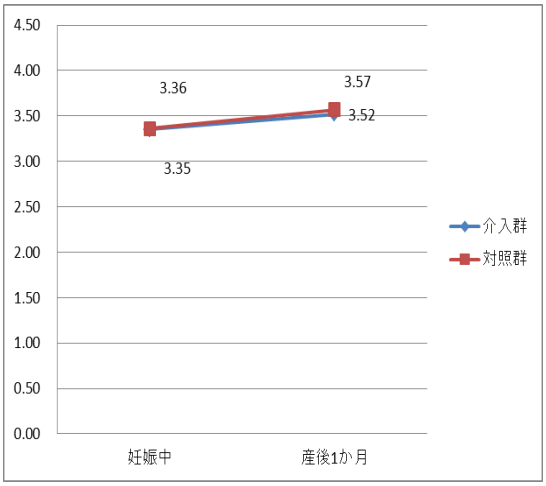
妊娠−産褥１週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.65	1.20	3.45	1.23	3.82	1.22	3.57	1.14	0.354	0.554	1.374	0.246	0.022	0.882

妊娠−産褥1カ月

図18　ひとりにして欲しい時間がある





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.35	1.02	3.45	1.12	3.36	1.13	3.57	0.79	0.099	0.755	0.715	0.401	0.101	0.75

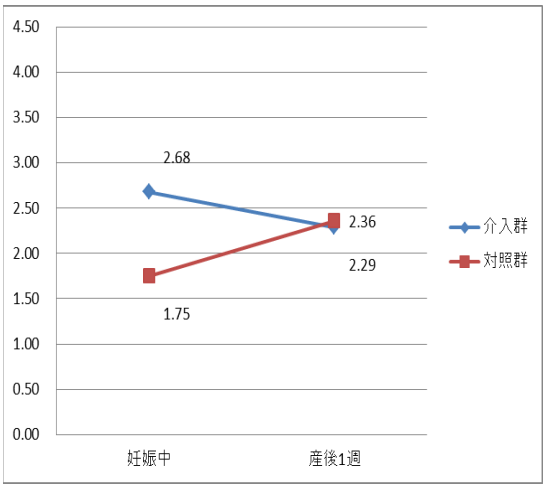
妊娠−産褥１週間

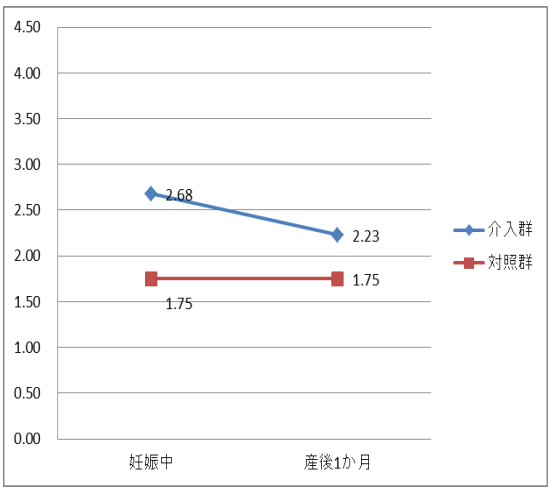
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.35	1.02	3.52	1.06	3.36	1.13	3.57	1.00	0.018	0.895	1.246	0.269	0.025	0.875

妊娠−産褥1カ月

図19　第1子との物理的な遊びは減ったがコミュニケーションは増えた

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





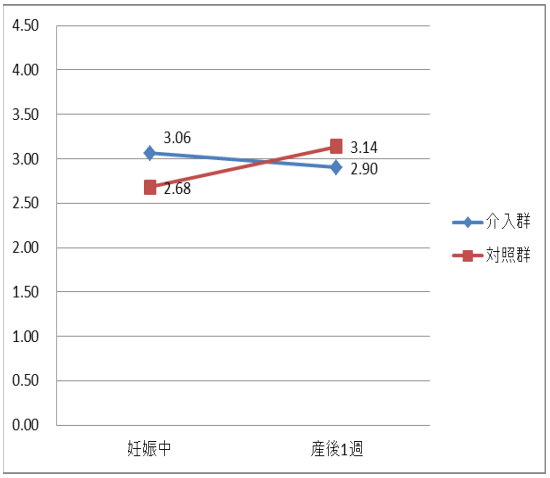
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.68	1.40	2.29	1.30	1.75	1.08	2.36	1.45	2.174	0.146	0.376	0.542	7.673	0.01 *

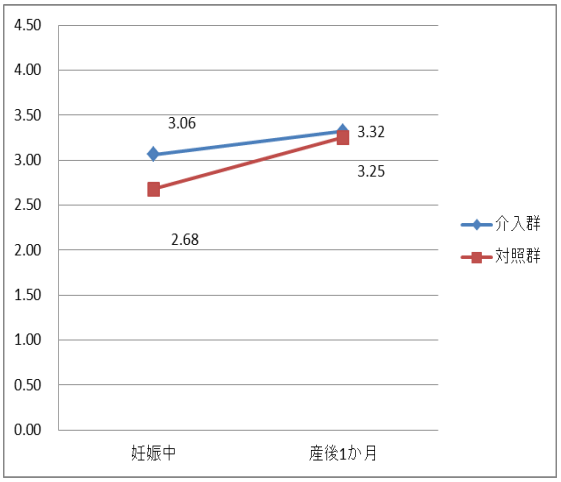
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.68	1.40	2.23	1.33	1.75	1.08	1.75	1.08	6.775	0.012 *	1.618	0.208	1.618	0.208

妊娠−産褥1カ月

図20　第1子への愛情が半分になってしまうのではと心配





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.06	0.96	2.90	1.17	2.68	1.19	3.14	0.93	0.097	0.757	1.024	0.316	4.366	0.04 *

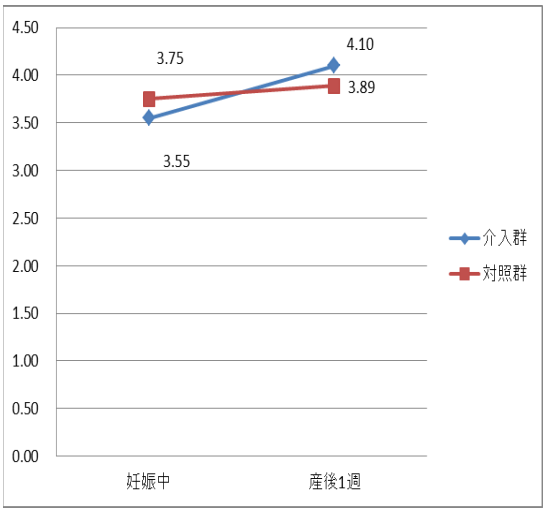
妊娠−産褥1週間

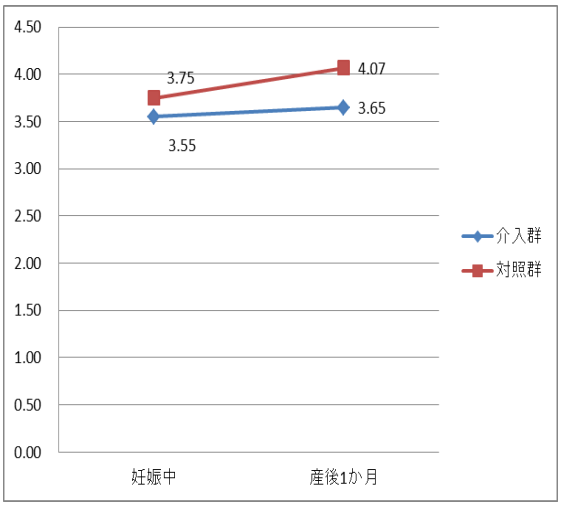
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.06	0.96	3.32	0.95	2.68	1.19	3.25	1.14	0.962	0.331	7.926	0.007 **	1.131	0.292

妊娠−産褥1カ月

図21　第1子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





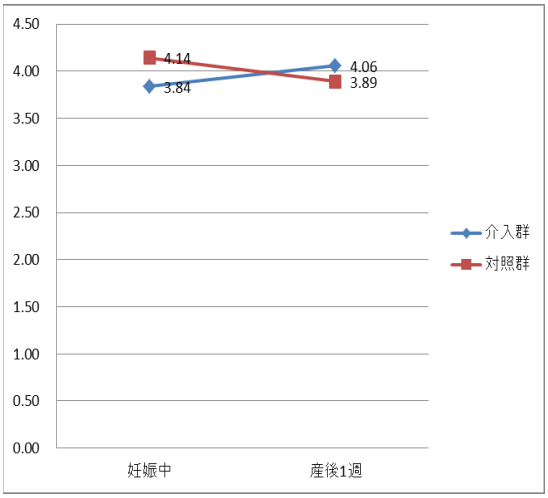
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.55	0.89	4.10	0.94	3.75	1.01	3.89	0.83	0.000	0.995	5.197	0.026 *	1.789	0.19

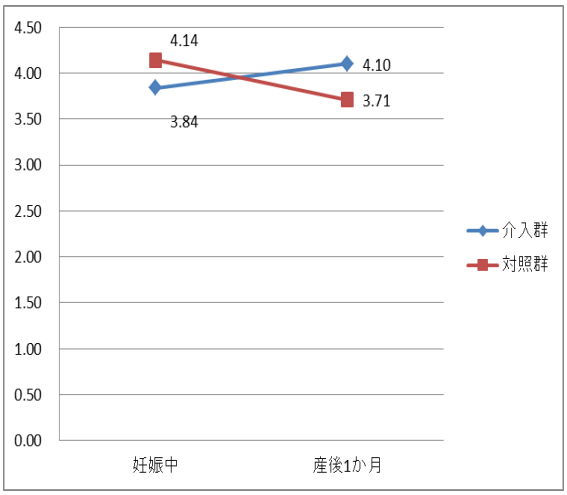
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.55	0.89	3.65	1.05	3.75	1.01	4.07	0.94	2.525	0.118	1.729	0.194	0.499	0.483

妊娠−産褥1カ月

図22　第1子をほめることが多くなった





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.84	1.21	4.06	1.06	4.14	0.89	3.89	0.92	0.079	0.779	0.008	0.927	3.236	0.08 †

妊娠−産褥1週間

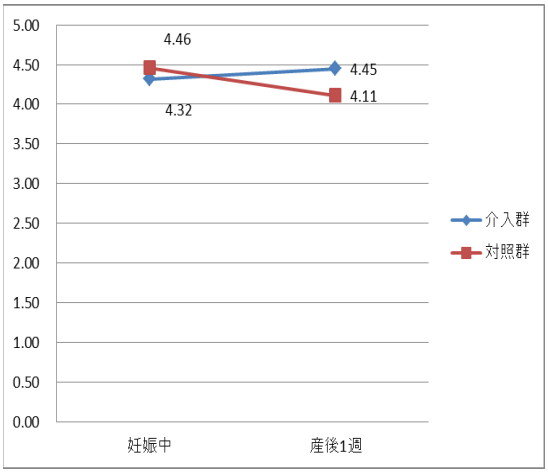
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.84	1.21	4.10	1.17	4.14	0.89	3.71	1.01	0.031	0.861	0.237	0.628	3.846	0.055 †

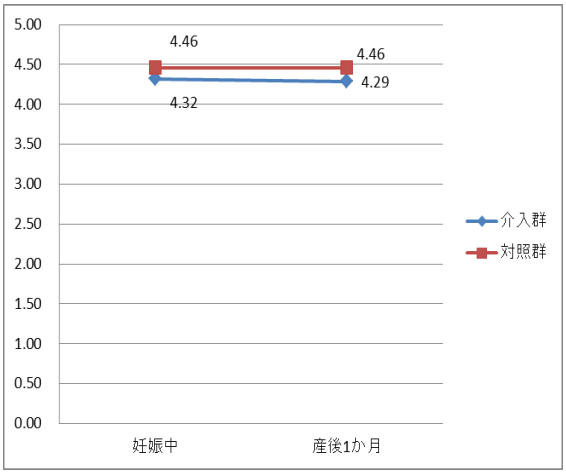
妊娠−産褥1カ月

図23　第2子よりも第1子が気にかかる

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)

横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





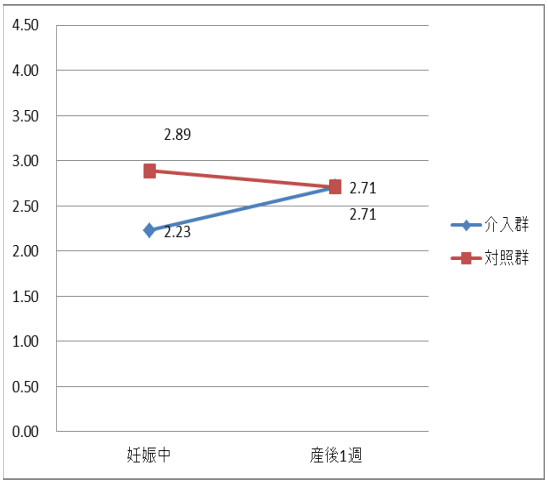
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.32	1.01	4.45	0.96	4.46	1.00	4.11	1.03	0.027	0.651	0.705	0.405	3.201	0.08 †

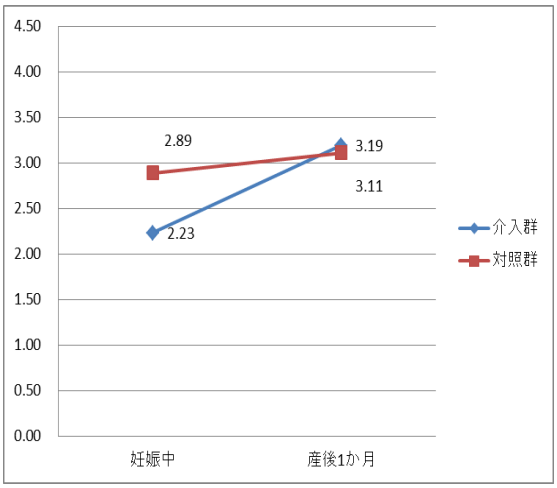
妊娠−産褥１週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.32	1.01	4.29	1.13	4.46	1.00	4.46	0.92	0.456	0.502	0.016	0.900	0.016	0.900

妊娠−産褥1カ月

図24　第2子出産で入院時第1子のことが心配





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.23	0.96	2.71	0.97	2.89	1.03	2.71	0.90	2.356	0.130	1.507	0.225	7.097	0.010 *

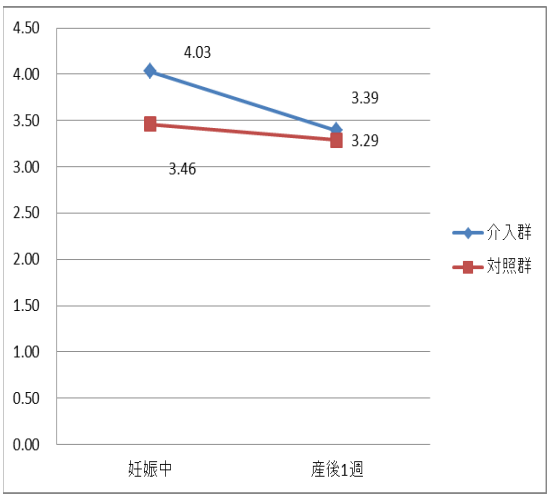
妊娠−産褥１週間

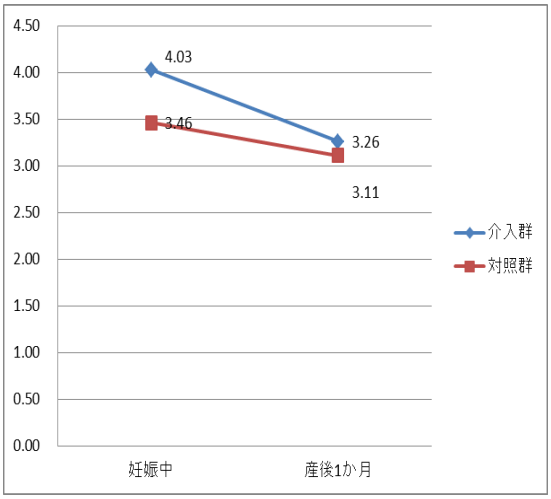
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.23	0.96	3.19	1.08	2.89	1.03	3.11	1.07	1.611	0.210	17.311	0.000 ***	7.034	0.010 *

妊娠−産褥1カ月

図25　二人同時育児のイメージ化ができている

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,）
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





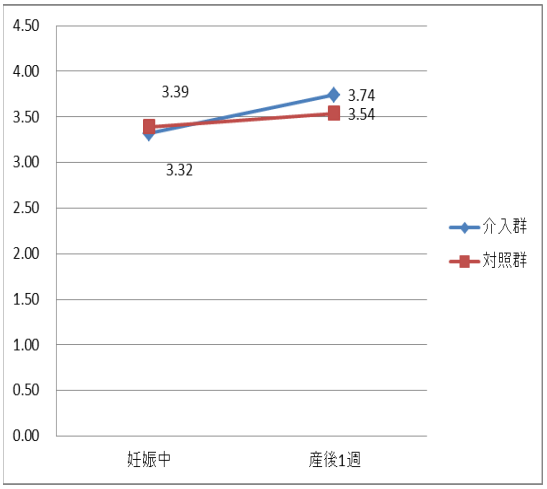
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.03	0.91	3.39	1.23	3.46	1.29	3.29	0.98	2.200	0.144	5.117	0.028 *	1.642	0.21

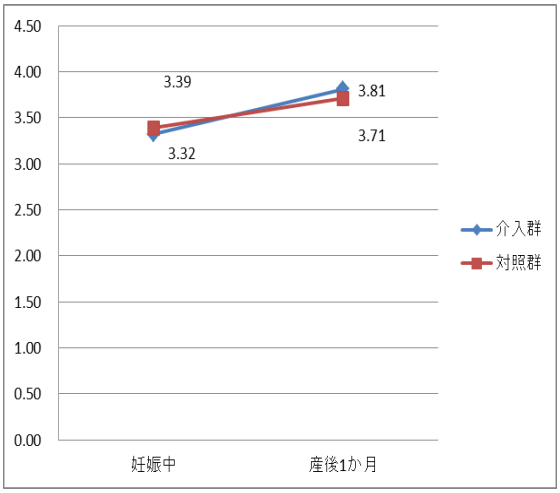
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.03	0.91	3.26	1.24	3.46	1.29	3.11	1.29	2.391	0.128	7.675	0.008 **	1.043	0.311

妊娠−産褥1カ月

図26　第1子のあかちゃんがえりが心配である





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.32	0.91	3.74	1.00	3.39	1.07	3.54	0.96	0.094	0.761	4.821	0.032 *	1.166	0.29

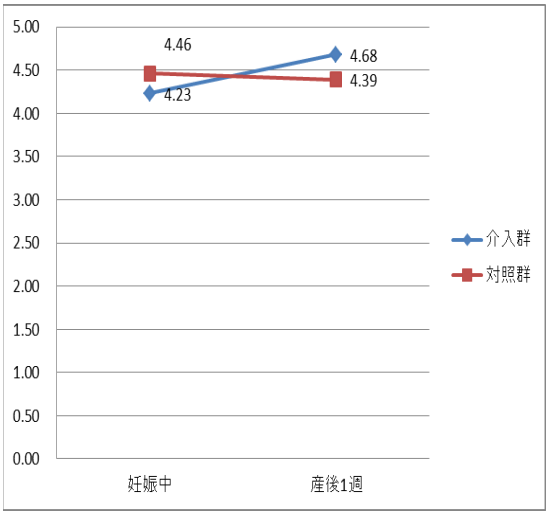
妊娠−産褥1週間

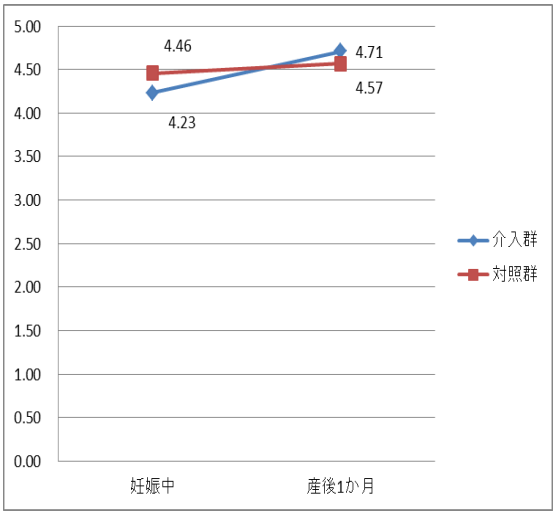
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.32	0.91	3.81	1.01	3.39	1.07	3.71	0.81	0.003	0.959	9.737	0.003 **	0.396	0.532

妊娠−産褥1カ月

図27　第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





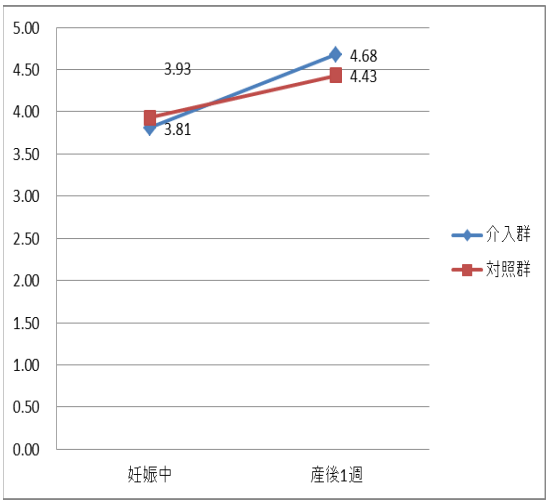
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.23	0.88	4.68	0.54	4.46	0.69	4.39	0.74	0.022	0.883	3.229	0.078 †	6.112	0.02 *

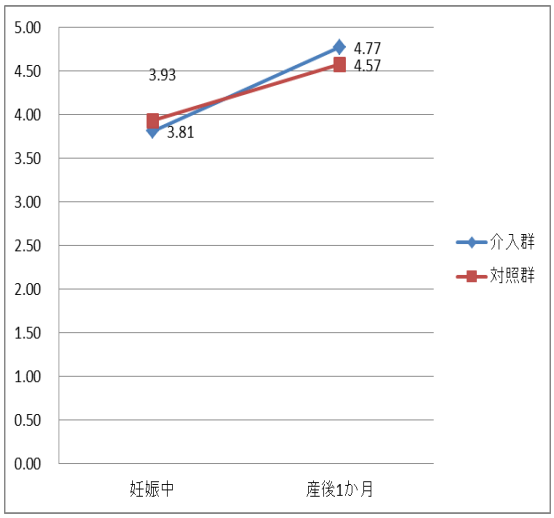
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.23	0.88	4.71	0.64	4.46	0.69	4.57	0.57	0.119	0.731	6.594	0.013 *	2.679	0.107

妊娠−産褥1カ月

図28　あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.81	1.17	4.68	0.54	3.93	1.15	4.43	0.74	0.114	0.737	19.109	0.000 ***	1.399	0.24

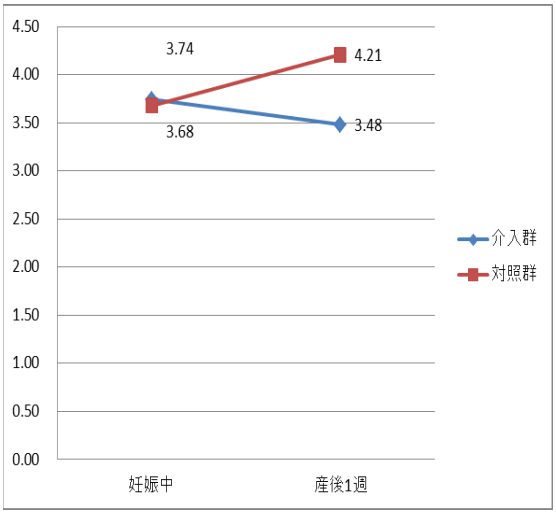
妊娠−産褥1週間

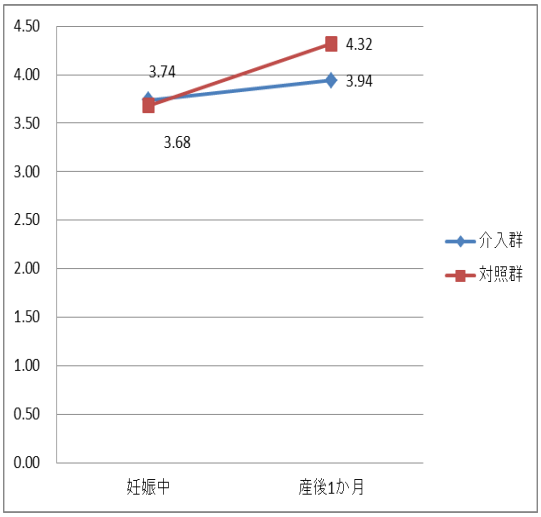
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.81	1.17	4.77	0.50	3.93	1.15	4.57	0.69	0.047	0.830	28.106	0.000 ***	1.144	0.289

妊娠−産褥1カ月

図　29　第2子妊娠出産で第1子の成長を感じた

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





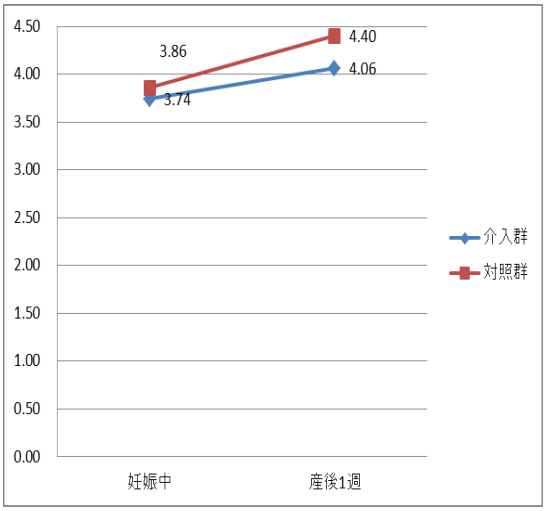
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.74	1.15	3.48	1.12	3.68	1.02	4.21	0.83	2.360	0.130	0.711	0.403	5.813	0.019 *

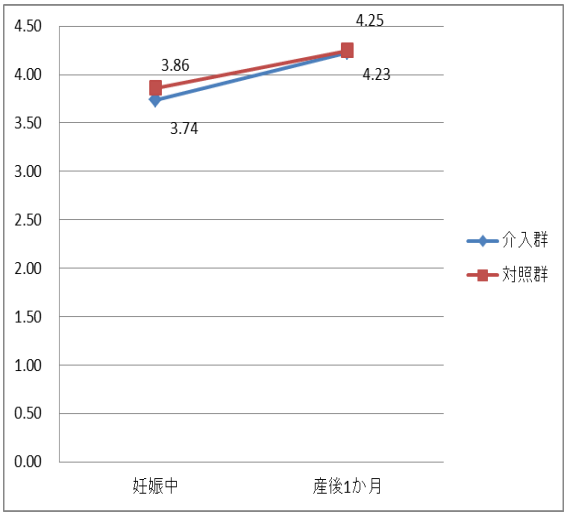
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.74	1.15	3.94	1.15	3.68	1.02	4.32	0.91	0.488	0.488	7.219	0.009 **	2.083	0.154

妊娠−産褥1カ月

図30　第2子妊娠誕生で行動が制限されるようになった





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.74	0.77	4.06	0.93	3.86	0.71	40.40	0.74	0.055	0.815	6.820	0.012 *	0.563	0.456

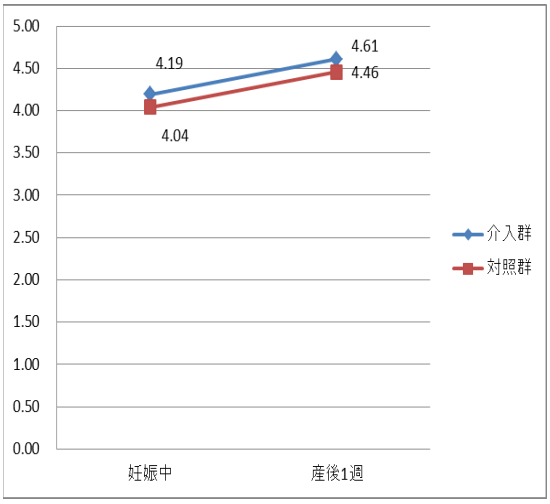
妊娠−産褥1週間

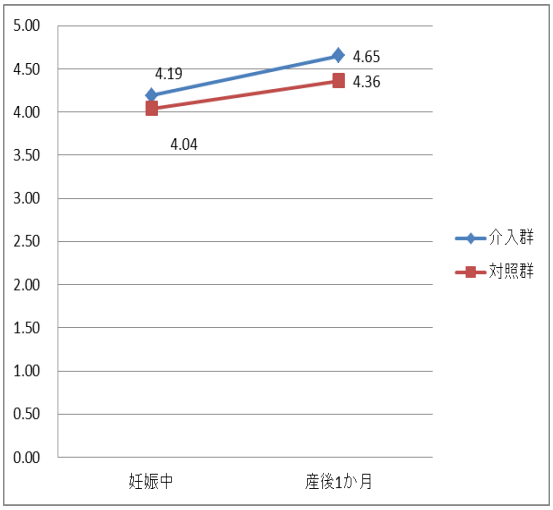
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.74	0.77	4.23	0.96	3.86	0.71	4.25	0.89	0.143	0.706	13.886	0.000 ***	0.150	0.700

妊娠−産褥1カ月

図31　二人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





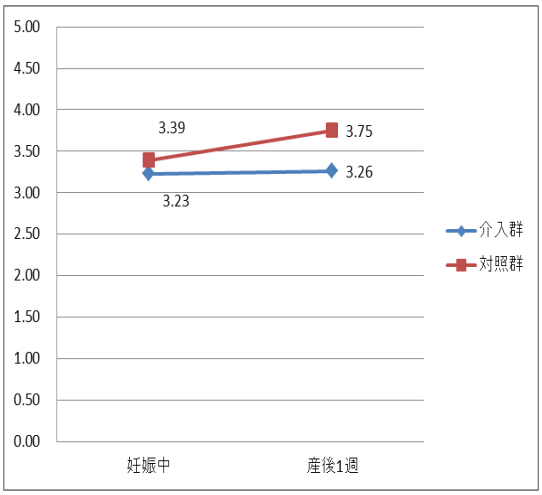
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.19	0.79	4.61	0.56	4.04	0.84	4.46	0.79	0.789	0.378	21.225	0.000 ***	0.003	0.96

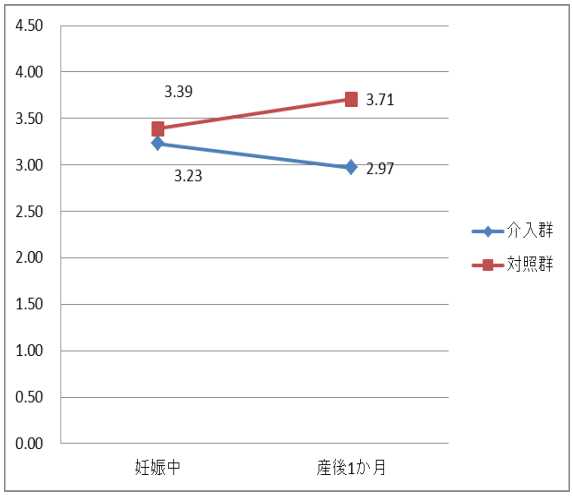
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.19	0.79	4.65	0.55	4.04	0.84	4.36	0.87	1.477	0.229	23.004	0.000 ***	0.652	0.423

妊娠−産褥1カ月

図32　第1子の育児経験を生かして楽しみたい





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.23	1.06	3.26	1.37	3.39	1.03	3.75	0.80	2.103	0.152	1.306	0.258	0.909	0.34

妊娠−産褥1週間

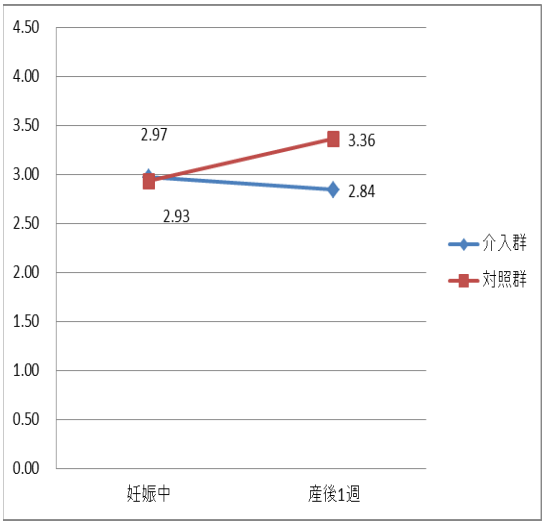
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.23	1.06	2.97	1.33	3.39	1.03	3.71	1.08	3.693	0.060 †	0.032	0.858	2.707	0.105

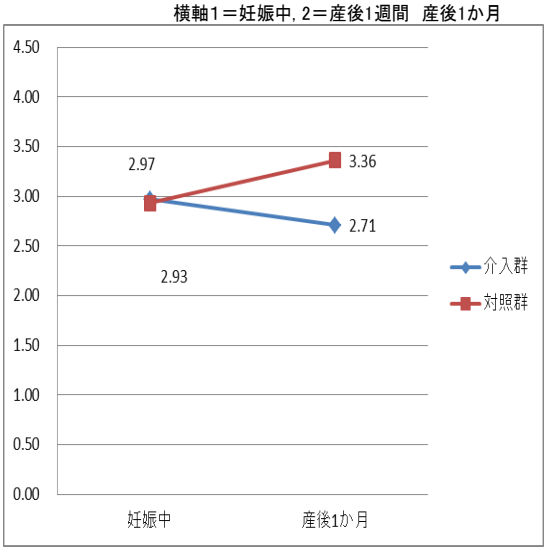
妊娠−産褥1カ月

図33　身体を休めることができない

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)

横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





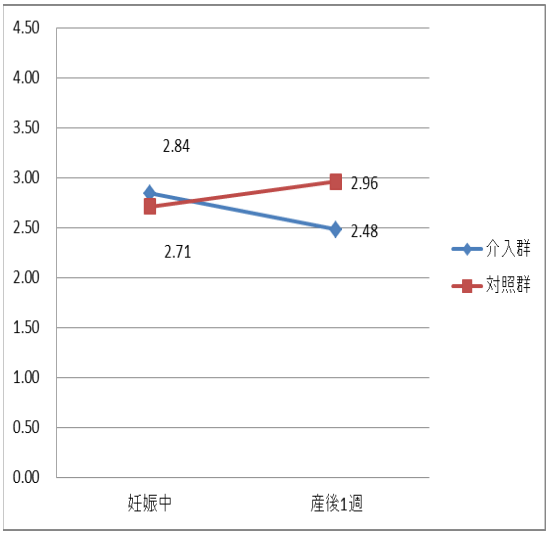
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.97	1.17	2.84	1.39	2.93	1.30	3.36	0.95	0.821	0.369	0.721	0.399	3.499	0.02 *

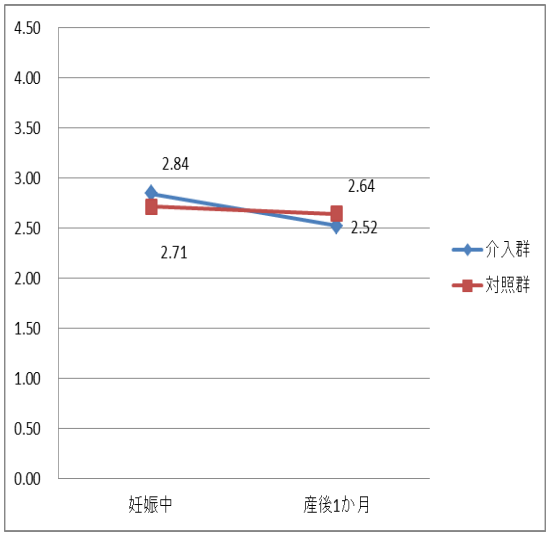
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.97	1.17	2.71	1.40	2.93	1.30	3.36	1.19	1.200	0.278	0.224	0.638	3.634	0.062 †

妊娠−産褥1カ月

図34　気持ちを休めることができない





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.84	1.10	2.48	1.26	2.71	1.24	2.96	1.04	0.504	0.481	0.094	0.761	3.119	0.08 †

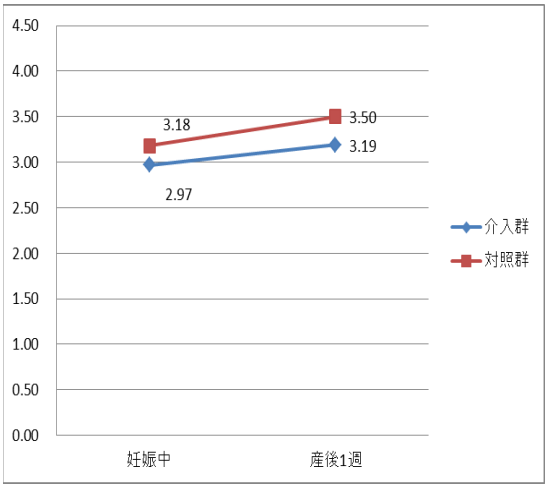
妊娠−産褥1週間

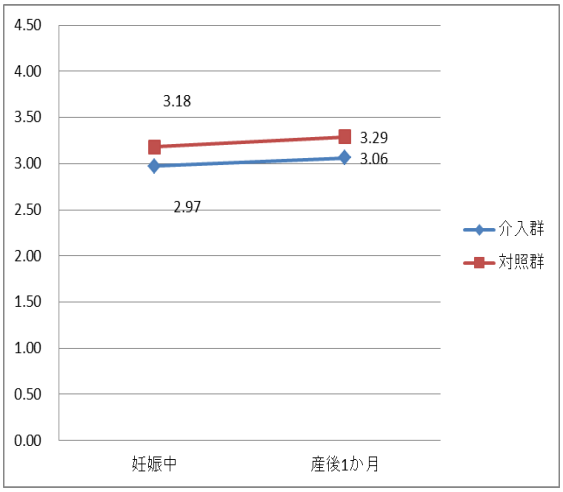
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1ヵ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.84	1.10	2.52	1.21	2.71	1.24	2.64	1.06	0.000	0.996	1.532	0.220	0.625	0.803

妊娠−産褥1カ月

図35　良い母親にならなくてはと焦る

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





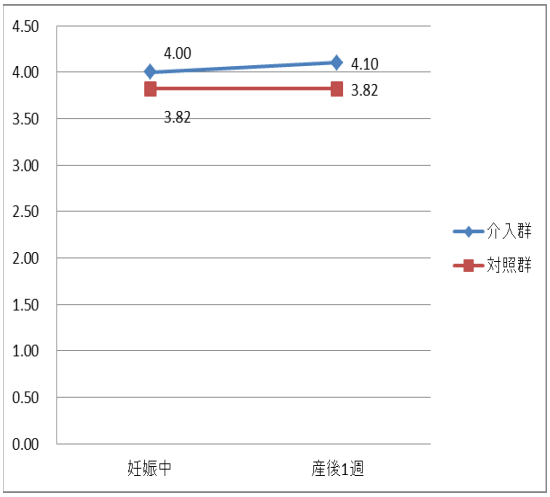
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.97	1.05	3.19	1.01	3.18	1.02	3.50	0.96	1.127	0.274	5.071	0.028 *	0.155	0.70

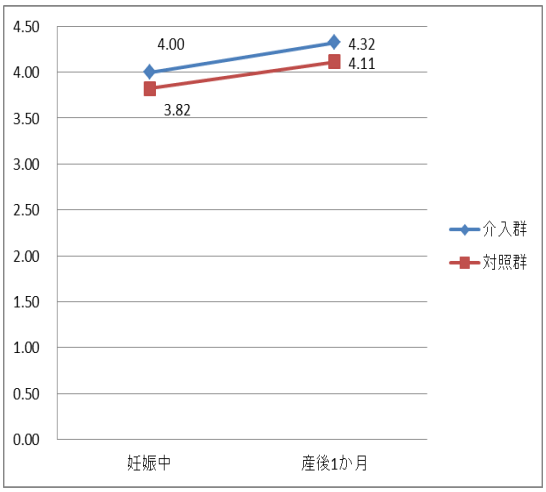
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.97	1.05	3.06	1.15	3.18	1.02	3.29	1.15	0.768	0.385	0.503	0.481	0.001	0.971

妊娠−産褥1カ月

図36　女性としての自分に満足している





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.00	0.82	4.10	0.83	3.82	0.95	3.82	0.82	1.338	0.252	0.214	0.645	0.214	0.65

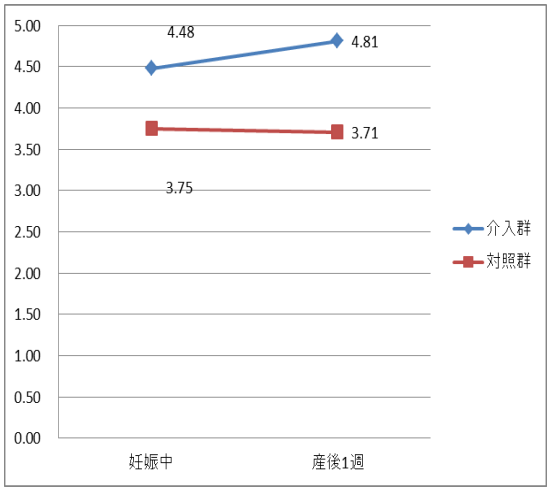
妊娠−産褥1週間

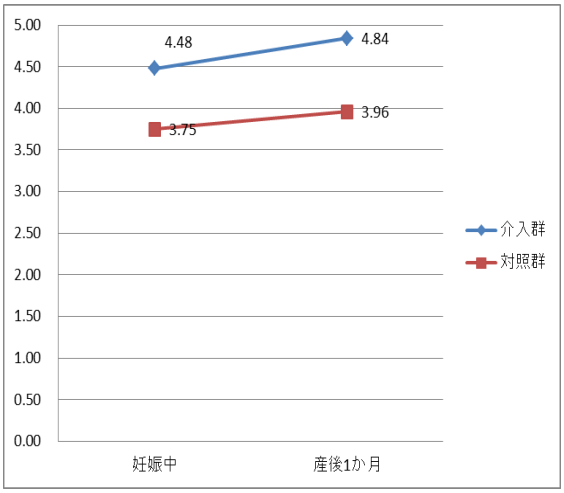
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.00	0.82	4.32	0.70	3.82	0.95	4.11	0.79	1.116	0.295	8.997	0.004 **	0.033	0.856

妊娠−産褥1カ月

図37　育児は楽しい

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





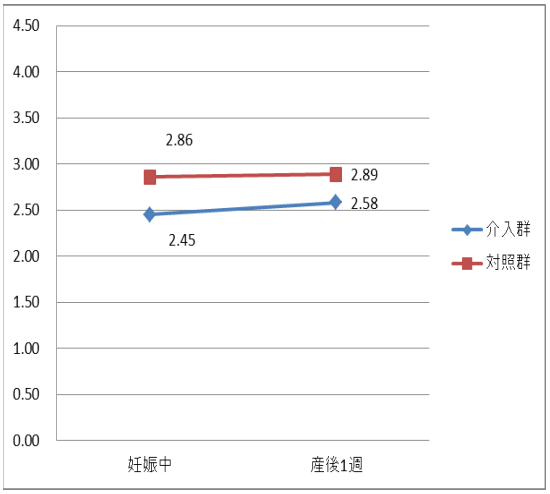
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.48	0.72	4.81	0.40	3.75	0.75	3.71	1.01	31.294	0.000 ***	1.829	0.182	3.853	0.10 †

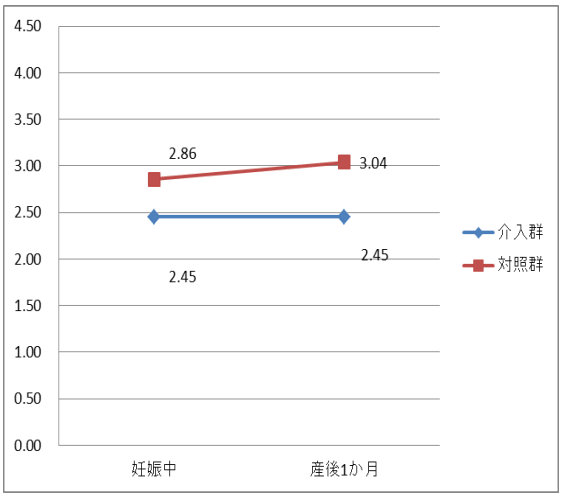
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.48	0.72	4.84	0.37	3.75	0.75	3.96	0.95	21.164	0.000 ***	6.496	0.014 *	0.396	0.532

妊娠−産褥1カ月

図38　第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.45	0.96	2.58	1.09	2.86	1.04	2.89	0.99	2.320	0.133	0.434	0.513	0.139	0.71

妊娠−産褥1週間

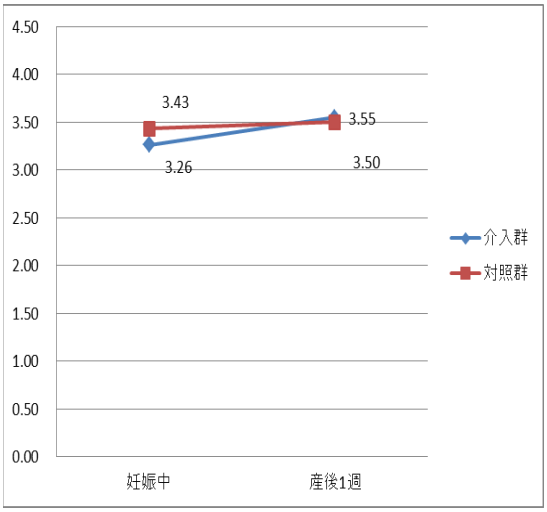
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
2.45	0.96	2.45	1.06	2.86	1.04	3.04	0.96	4.247	0.044 *	0.702	0.406	0.702	0.406

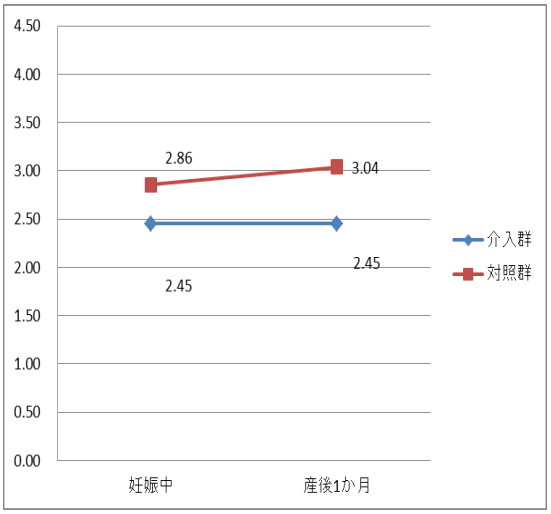
妊娠−産褥1カ月

図39　経産婦の育児情報に満足している

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)

横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





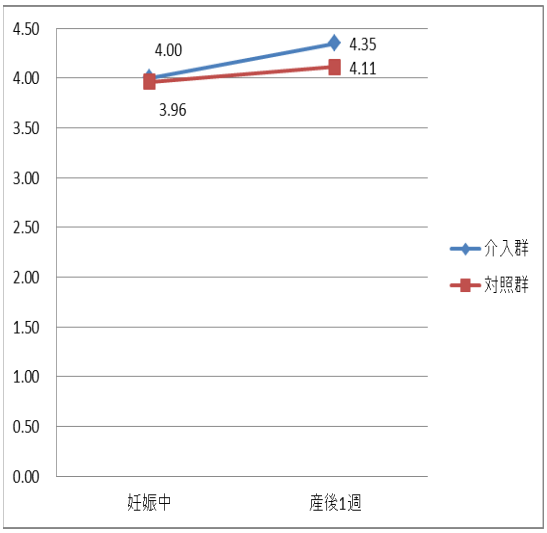
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.26	1.39	3.55	1.31	3.43	1.43	3.50	1.43	0.036	0.851	1.244	0.269	0.455	0.50

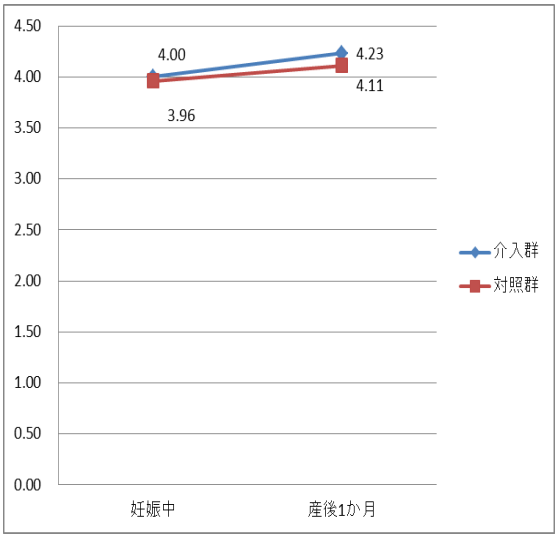
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.26	1.39	3.19	1.38	3.43	1.43	3.64	1.31	0.867	0.356	0.310	0.580	1.076	0.304

妊娠−産褥1カ月

図40　父親は家事に参加していると思う





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.00	1.13	4.35	0.88	3.96	1.17	4.11	0.83	0.385	0.537	3.546	0.065 †	0.644	0.43

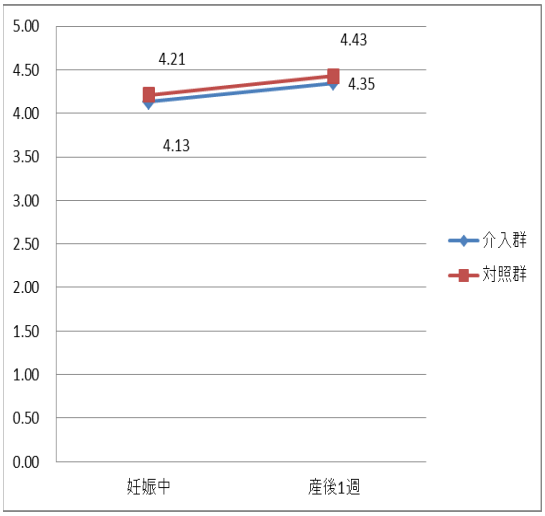
妊娠−産褥1週間

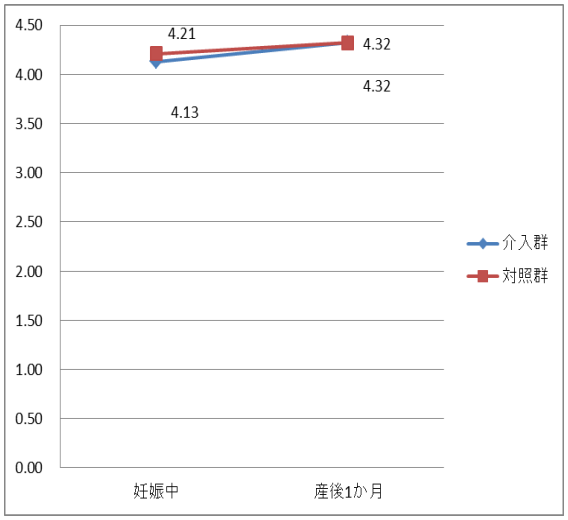
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.00	1.13	4.23	0.85	3.96	1.17	4.11	0.96	0.109	0.742	1.937	0.169	0.098	0.755

妊娠−産褥1カ月

図41　父親は育児に参加していると思う

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間 産後1か月





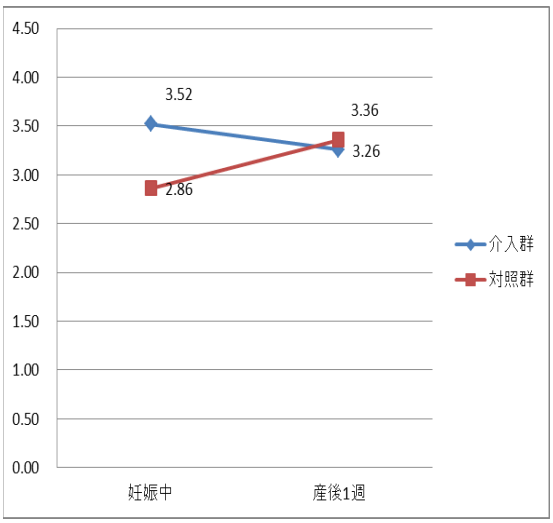
介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.13	1.18	4.35	1.02	4.21	1.23	4.43	0.96	0.091	0.765	3.855	0.054 †	0.003	0.96

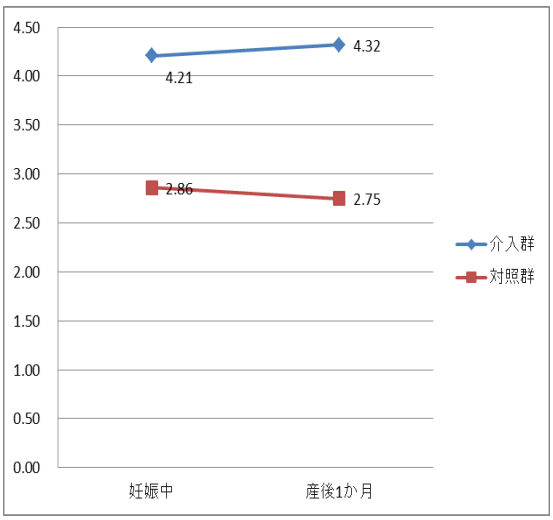
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
4.13	1.18	4.32	1.08	4.21	1.23	4.32	1.02	0.025	0.874	1.366	0.247	0.113	0.738

妊娠−産褥1カ月

図42　実父母義父母の協力を得ることができている





介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.52	1.26	3.26	1.44	2.86	1.33	3.36	1.31	0.882	0.352	0.451	0.505	4.424	0.04 *

妊娠−産褥1週間

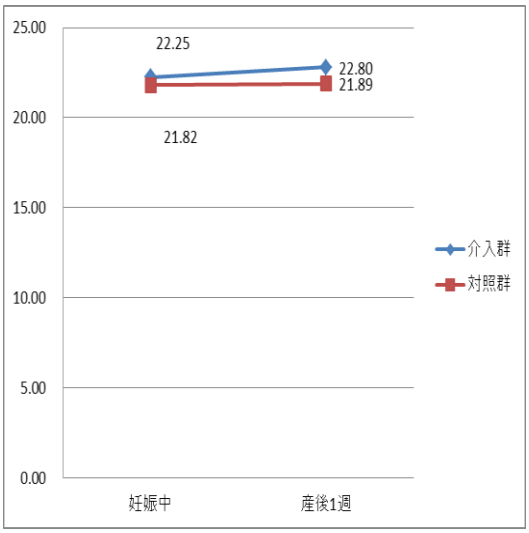
介入群(n=31)				対照群(n=28)									交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
3.52	1.26	3.13	1.31	2.86	1.33	2.75	1.38	3.207	0.079 †	1.796	0.185	0.576	0.451

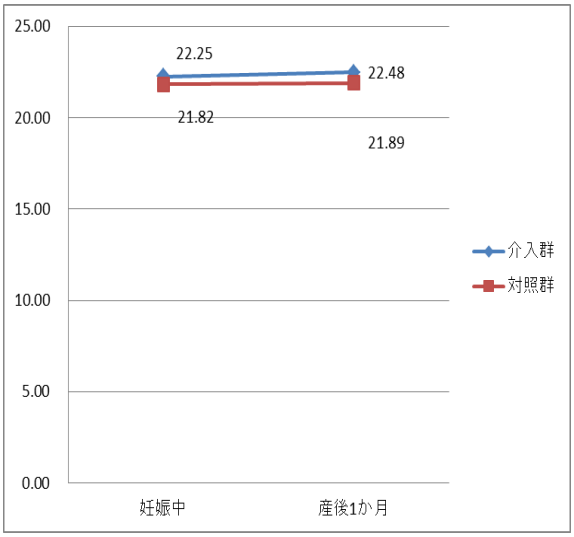
妊娠−産褥1カ月

図42　家族以外の育児支援を活用することができている

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間 産後1か月

子ども観尺度





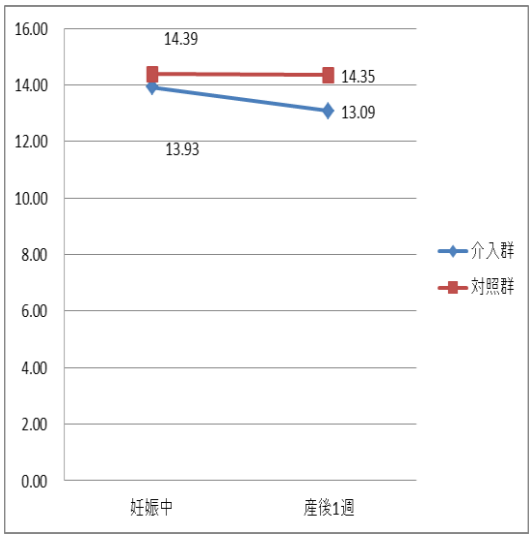
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
22.25	2.01	22.80	1.64	21.82	3.04	21.89	2.71	1.465	0.231	1.241	0.270	0.735	0.40

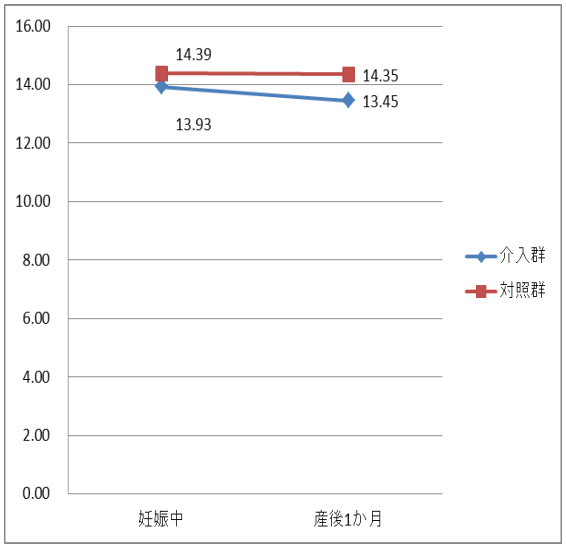
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
22.25	2.01	22.48	1.61	21.82	3.04	21.89	3.70	0.608	0.439	0.413	0.523	0.111	0.740

妊娠−産褥1カ月

図43　充実楽しみ





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
13.93	3.09	13.09	3.11	14.39	3.71	14.35	3.03	1.334	0.253	1.185	0.281	0.999	0.32

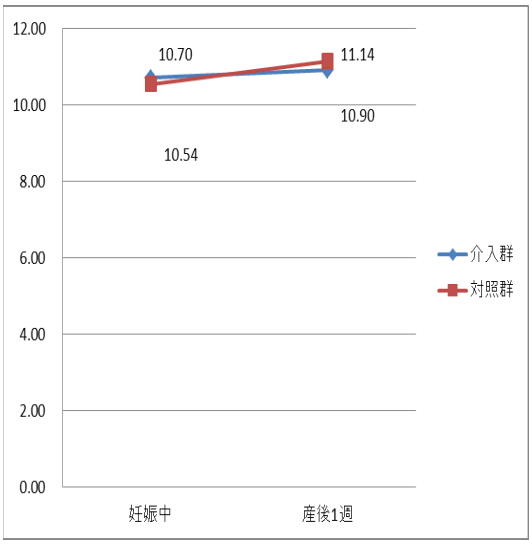
妊娠−産褥1週間

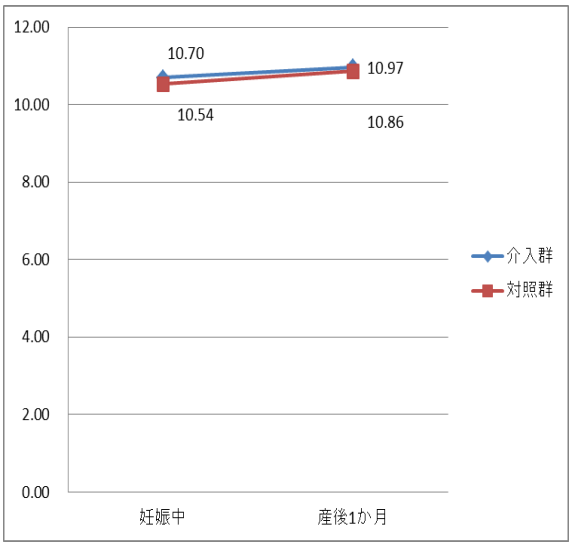
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
13.93	3.09	13.45	3.15	14.39	3.71	14.35	2.58	0.882	0.352	0.447	0.507	0.332	0.567

妊娠−産褥1カ月

図44　制約負担

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,)
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





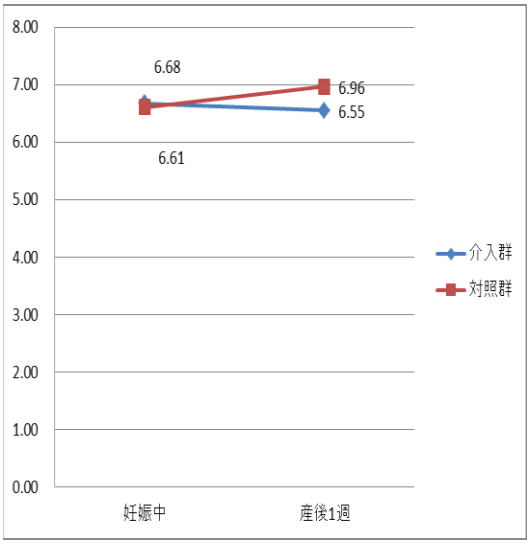
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
10.70	1.97	10.90	2.37	10.54	2.82	11.14	3.11	0.003	0.959	3.029	0.087 †	0.808	0.37

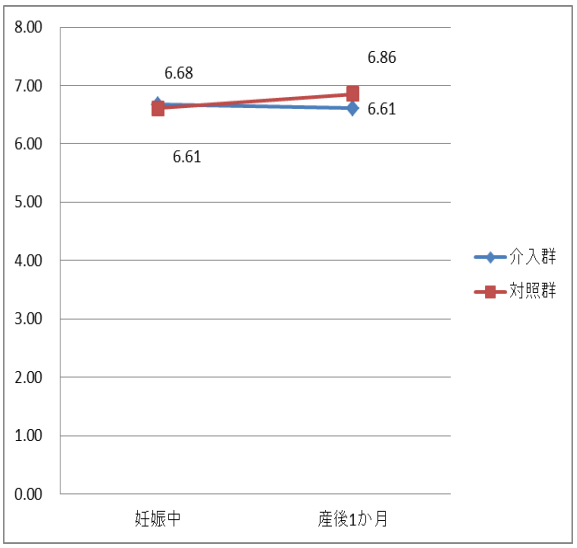
妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
10.70	1.97	10.97	2.37	10.54	2.82	10.86	2.85	0.054	0.817	1.514	0.224	0.018	0.893

妊娠−産褥1カ月

図45　社会的存在





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
6.68	1.28	6.55	1.36	6.61	1.45	6.96	1.40	0.296	0.588	0.485	0.489	2.204	0.14

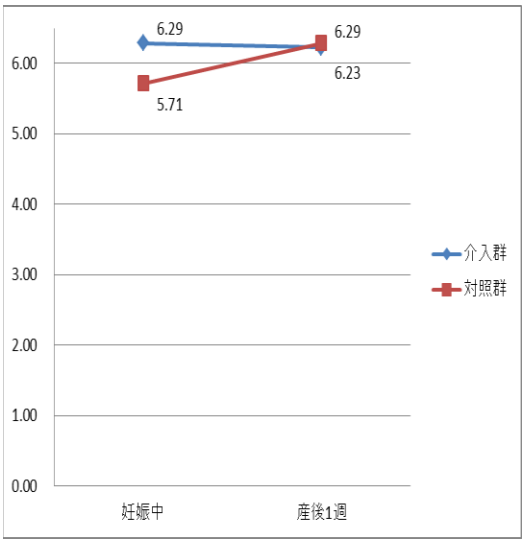
妊娠−産褥1週間

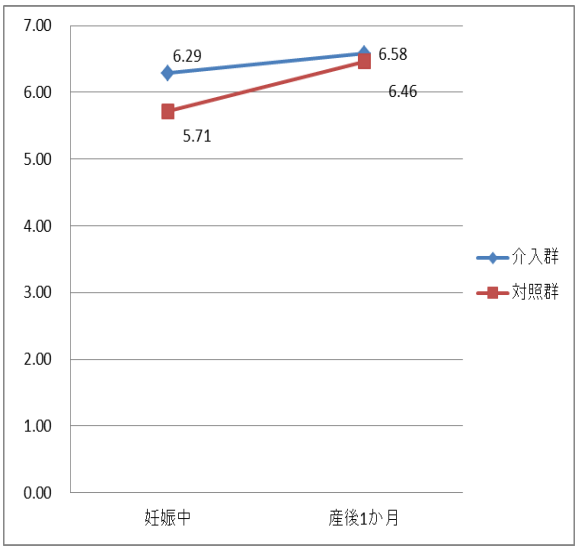
介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1カ月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
6.68	1.28	6.61	1.43	6.61	1.45	6.86	1.58	0.061	0.805	0.523	0.472	1.505	0.225

妊娠−産褥1カ月

図46　生きがい

Two Way ANOVA, (†p＜0.1、*p＜0.05,**p＜0.01 ***p＜0.001,）
横軸1＝妊娠中, 2＝産後1週間　産後1か月





介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1週	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
6.29	1.72	6.23	1.65	5.71	1.41	6.29	1.76	0.464	0.499	1.623	0.208	2.555	0.12

妊娠−産褥1週間

介入群(n=31)				対照群(n=28)								交互作用	
妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	妊娠中	標準偏差	産後1か月	標準偏差	群(F)	群p値	時期(F)	時期p値	F	p値
6.29	1.72	6.58	2.13	5.71	1.41	6.46	1.84	0.729	0.397	4.889	0.031 *	0.955	0.333

妊娠−産褥1カ月

図47　無関心低価値

資料４　調査票自由記載結果

介入群自由記載

産後1週間

A	第1子がいて第2子出産には体力的にも大変でした。10日から1カ月自宅を留守にする準備や体調面の管理しつつの出産は …。入院してからも帝王切開ということもあり母乳育児や自宅に帰ってからの育児全般には不安が有りますが、周囲の人の協力を得ながらゆっくり2子の母親として成長していけたらと思っています。入院中に第1子が面会に来ましたが、だきついておお泣きされました。子どももさみしさ反面、弟の誕生を喜び、協力してくれているのだなあと感謝の気持ちでいます。
B	育児クラスがあったほうがいい
C	2回目の出産を体験してみると、やはり経産婦の方が体力的にも気持的にも大変だと思った。家庭などの事情で子どもを見てもらえる場所（人）がいなかったり、たとえ預かってくれる人がいてもどうしても上の子が気になって仕方がありませんでした、上の子を気にするあまり、下の子に十分（気持等）構って挙げられていないのではないかなど、下の子に申し訳なく思ったりもしました。一人っ子ではなない以上、いずれ通る、体験することですが、これからも同じ体験をするだろうお母さんたちの教室は続けていただけたらと思います。
D	普段、定期健康診断の時に話をしながら今回のクラスに参加し、情報交換や現在の状況、家族や上の子の話ができて気持が楽になったり、別の考え方ができるようになった。
E	人数によってそのクラスの時間を変更するか1回何人までと決めてもっと深く話ができる方が良かった。私の場合は保育士をしていたので複数の子育てのイメージは付いていましたが、ひとより子どもは好きなので困ることは殆どなかったのですが、やはりこのクラスを受けてみて上の子への対応の仕方が分かり大変助かった。
G	赤ちゃんがえりが自然なことと教えられ親として受け入れる準備ができて良かった。上の子は5歳で話も大体理解できる年齢だったためか子どもも一緒に参加したことで赤ちゃんを迎えるおねえちゃんとしての学びがあったように思う。私が授乳する様子を自然に受け入れて良かった。「同じ時期に生まれた幼なじみか授乳する様子を見たがらない「場所をかえてあげてよ」ということを聞きました。あげているのを見たくない。
H	家族のみでなく地域（社会にもこそだてしやすい環境が作られればと思う。もっとこのような子育てクラスの場が増えてくれればよいと思う。
I	第1子のための子育てクラスに参加して同じ思いをしているお母さんたちがいると思い、いろんな不安を抱えていたが、気持ちが少し楽になった。
J	第2子の親に注目していただいてとてもありがたかった。父親や祖父母も巻き込める内容になっているとさらによかったと思う。
K	子育てクラスに参加をして気持が楽になった部分があった。これからもこのようなクラスがあった方がよいと思う。
L	子育てクラスに参加させていただき、第1子への関わり方を学ぶことができ、第2子誕生時に第1子の成長する姿を見受けることができました。特に第2子をかわいがり、優しく接するのを見て、頑張っていると思います。今のところ、甘えが出て聞き分けが悪くなったりすることもあるので第1子とのスキンシップをはかり、子育てを充実させたいと思います。
N	第1子の子育てにかなり苦労と困難の日々だったので第2子の子育てに対して不安や悩みが多く、自信を無くしていたのですが、第2子を迎えるための準備クラスに参加し、礒山助産師や自分と同じ立場にあるママたちと出会い、いろいろな話を聞いたり、相談したり、短い時間ではありましたが、とても気分が楽になり、前向きな気持ちになりました。参加してよかった。このクラスは必要だと思った。
O	赤ちゃんが来ることについての本はまだ早すぎる感じ。別の本を何回か妊娠中より読み聞かせる。最初はその本を好きではなかったが3～4カ月したら少しずつ自分から読むようになった、心の準備が少しずつ出来たと他のことからも感じられるようになった頃だっだ。第2子については避けられない事実なので、嫌でも少しずつ受け入れるようにしていかねばならないと思った。
P	退院してすぐは上の子との関わりに戸惑った。上の子が保育園なので助かっていますが、土日は全く休まる時間がないくらい忙しい
Q	経産婦クラスに参加して第1子との関わり方について教わり、そのおかげで私も第1子との時間を取りながら第2子の世話ができ、とても穏やかに過ごしています。クラスに参加していなかったら、第1子も赤ちゃんを受け入れられなかったかも知れないし、私も第1子につめたくあたっていたかもしれません。とても勉強になり、良かったと思っています。
R	第1子は子どもが読んでと本を持ってきたときに読んであげました。最初は興味を持ってくれなかったのですが、読んでいくうちに子どもが絵本に出てくる言葉を繰り返す言うようになりました。
S	絵本は使わず寝る前やおやつの時などに赤ちゃんの話をしていた。クラスに現在2人目育児の最中の方がいてその人の話を聞けたりとかあると良いと思った。
T	少人数だったので話し合いというか自分の悩みを言う時間があったので不安の解消に役立った。1歳半くらいの子どもによみきかせをするには絵本が少し長いと感じた。もう少し単純なバージョンがあると良いと思う。こういうクラスは必要だと思うので、これからも続けてほしい。
U	子育てクラスに参加したおかげで上の子の赤ちゃんがえりは成長のしるしと思うことができているからこそ、今のところ穏やかに育児をできています。また、上の子の経験があるせいか、下の子の育児も殆ど戸惑うことなく自分にも余裕がもてるから上の子とのふれあいも上手く出来ている気がします。姉妹の姿を見るととても充実した気持ちになり、今、とても幸せです。クラスのおかげで上の子も赤ちゃんがうまれた喜びを体いっぱい表現してくれて本当にうれしいです。絵本や先生の考えのおかげです。ありがとうございました。

介入群自由記載

	産後1か月
A	入院中は主人が第1子を見てくれて里帰りも1週間することができました。面会や実家を訪ねてくれた時、第1子はお兄ちゃんらしくなったりする反面、私が第2子のおっぱいをあげたり、抱っこしているとあまえてきたり泣きだしたりと欲求がありました。戸惑いながら優先順位を考えて今も生活しています。家族の協力は重要でとても一人では無理だなと思うことがありました。家庭環境の背景は人それぞれだと思いますが、第1子第2子 ・・楽しく育児をしていけるような母親への支援を望みます。外出するにも時間がかかったりするので、自宅でもできることを考えてほしいと思う。
C	1か月たつと上の子もだいぶ精神的に落ち着いてきました。ただ、時々見せるさびしそうな表情などあるので、よく観察していこうと思います。日々生活していく中でこんなときはどうすればいいかと思うことがあるので、子供の心理についてわかる方に気軽に相談できる場があればいいなと思います。
D	どうしても母親が中心となって子育てをするがもっと夫に子育てについて知ってもらいたいし協力してもらいたい。2人目が生まれた沐浴をお願いしたら 「やだ、こわい」などといい、協力してくれず、沐浴が終わり、授乳していると 「ごはんまだ？」などと言ってくるので少しは料理もできるようになってもらいたい。このように私に係る負担は大きいものである。夫は2歳になる上の子の関してはなんでもやってくれるのですが。
E	クラスで用いた絵本はうちの子は絵本が好きなせいか、産後思い出したように読んでと持ってきたりして読んであげた。子どもには絵本で伝えるとよく理解してくれたり、分かりやすく自分からそのことをもっと知りたいと思ってくれるようになるんだと思った。うちは同居なので心配ないですが、やはりどこのママも第2子の子育ては第1子が小さいほど大変かなと思いました。
F	絵本の読み聞かせについては子どもが小さかったのであまり関心がなかったようです。もっと大きくなっていたら違ったかも。
H	第1子第2子其々の行事が有るとき等、フォローしてもらえる機関や申請などの簡素化がなされると良いと思う。
K	今回の子育てクラスを出産後もやってほしいと思う。第2子が生まれてから第1子の気持ちの変化などが想像していたのと異なり、こちらも戸惑ってしまったから。
M	上の子の年齢や発達に応じた2人の子育てのアイデア コツ、知恵などに関する情報の提供。 2人目を出産して感じていることですが、1人目の時の経験があるので2人目の育児に関しては体は疲れていても精神的にはゆとりが有ります。一方で上の子の発達や変化 下の子誕生による退行現象）には、初めての経験であることもあって何かと戸惑いが多いのも事実です。2人目の子を妊娠している時もそうでしたが出産後も上の子がいつも気になっています。一時託児付きの第2子出産予定者向けのマタニティ講座に参加する機会を増やしていただくことで、助産師さんや他の参加者の方から様々なお話を聞くことが出きるので、育児不安の軽減にもつながると思います。2人目の出産前に礒山さまが主催してくださった講座に参加出来たことは私にとって有意義な経験となりました。
N	第2子が誕生して1か月がたちますが、第1子はかわいいと撫でてみたり、抱っこしてみたり。引っ張ってみたり、かじってみたり、第1子なりに第2子を受け入れようとしているので、私も第1子を見守りながら子育てをしていきたいです。
O	無料のセミナー、場所などの情報がほしい 託児つき）2人の子どもを1人で世話するのは大変なので育児支援センターにボランティアの人がいて、そのうちの子ども1人を見て一緒に遊んでくれると嬉しい。2人同時育児のイメージが出きるのが遅かったので活用できる支援の紹介と共にみんなんがどうしているか教えてもらえると助かる。2人をお風呂に入れるやり方など 特に首がすわる前）

介入群自由記載

	産後1か月
P	2人目だからできて当然と思われているのではと思い込んでプレッシャーに感じました。たとえば産後すぐ授乳がうまくいかなかったとき、助産師さんに助けを求めたけど、気が引けました。
Q	市町村で第1子の時は赤ちゃんと親に集まれる場所を作ってくれたが、第2子の誕生ではそのような場所がなく、同級生というか友達をつくるきっかけの場所が少ないと思う。たいていは「第1子に限る」と書かれていて残念に思う。
S	入院中は良かったが実家に戻り上の子も一緒の生活に成ると下の子のことが何かと後回しになってしまいちょっと申し訳ない。それに実家では余り家事をしなくていいが戻ったら家事と両立で大変そう。上の子がわがままになり、実家の両親も少しお疲れモード上の子がいるといないでは全然違う。上の子が夜中寝言で抱っこ～とかいうとさびしい思いをしているのかなと思う。
T	子育てクラスの内容は核家族向けだったので大家族向けの内容もあるといいと思った。悩みとしては「世代が違うことにより子育ての考えのギャップへの対処」とか細かいことになってしまいますが。第１子に対して怒ってしまうことが多いのですが少し自分を落ち着かせて「さみしかったんだね」等声をかけるようにしています。それでも大暴れの時もありますが、何とかうまくやってます（笑）。
U	今日は第2子の1カ月健診でした。母子共に順調でした。産後1カ月がたち、産後1週間の時と気持的に変化があったようにこのアンケートを記入して自分でも感じているところです。完全母乳で育児をしている私にとって授乳の時間は第2子と触れ合うもっとも安定した時間です。でも母乳だと手が離れないため、第1子に対して「ちょっと待っててね」と言っていることが多い気がして、仕方のないことなのにかわいそうな想いをさせている気がして悩んでしまうことがあります。我慢をさせることが良いことなのか…。でも第2子にとっては大切な時間。矛盾してしまうところです。そんな私の気持ちを知ってか知らずか、どんどんたくましく成長してくれる第1子。3歳ということもあり、物分かりもよくきちんと理解し待っていてくれたり、第2子の面倒を見たりして。心配だった赤ちゃんがえりも落ち着き、出来なくなっていたトイレも今ではすべての行程を自分でできるようになったり、しっかりおねえちゃんになっています。遊ぶ時間こそ減った気がしますが、一緒におふろに入ったり、おふとんに入って寝るまでお話をしたり手をつないだり、コミュニケーションをとれるように心がけるようにも成りました。自分のイメージしていた2児の育児とは少し違うかもしれないけど、自分なりに時間を使い分け、楽しく1カ月がたち、生活のリズムも落ち着いてきましたので、これからもがんばっていこう。と思います。性格のせいできっちりやろうそんな考えがあった私ですが、今では「まっ、いいか」と思えるようにも成りました。二児を育てながらの家事はなかなかまれるまで難しいものです。先生のおかげで経産婦産の母親学級に参加することができました。アンケートのおかげで客観的に自分を見返すことも出来、いろいろ考えたりして落ち着いて育児ができているように思います。やはり、経産婦用の母親学級が少ない今、こういった機会を設けていただけたこと、とても感謝しています。第1子から1年たっても3年5年たっても経産婦というくくりなので、1年より3年、3年より5年…ブランクがあればあるほど不安になる出産や育児です。このような経産婦用の学級の推進を願うばかりです。

対照群自由記載

	産後1週間
D	第1子を実家の両親に預けて1人にするのは初めてのことだったのでかなり心配しましたが、親が思うより子どもは平気なのかと驚いた。逆に面会に来ても抱っこしなかったり、バイバイとすんなり帰る様子を見て、自分のほうがさみしくなった。まだ入院中で退院後の生活をしていないので分かりませんが、今のところは親子ともども第2子出産入院等は良い経験になったのではないかと思う。面倒を見てくれている両親にはかなり感謝している。そのおかげで第1子とうまく過ごせていると思うから。

対象群自由記載

	産後1か月
A	第2子を出産して大変だと感じることは2人して泣いているときのそれぞれの接し方です。上の子は母親をとられてしまうと大泣きだし、下の子は抱っこしてもらえないためか激しくなくことが我が家ではよくある光景です。こんな時どうしたらいいかいつも悩みます。上の子の期限をとって下の子の面倒を見たり、里帰り中の今は両親に助けてもらっていますが、間もなく自宅に帰る私には先行き不安だらけです。でもいつか解決してくれると願うばかりです。
B	私は第1子を保育所に預けているので2人家で面倒を見ているお母さんは大変だと思う。そういう人のために第1子をたまに預けられるところがあればよいと思う。
C	第1子のときに母親学級を受けたので今回は何も受けませんでした。入院中。第1子の時と同じようにおむつ交換をしていたらそれはやめたほうがいいですよと言われました。経産婦でも母親学級等は希望ではなく全員が受けるようにした方が良いかもしれないと思いました。
D	支援センターはどちらかというと1歳くらいまでの遊びのスペースのような気がする。2～3歳を連れて赤ちゃんと3人で行けて話もできるという感情があったらなと思った。
E	年齢差による子育ての注意点またはポイント【コツ】などの情報を知りたい（入浴、食事、あそびなど）
F	第1子を外遊びさせたいが、核家族の場合、限界があると思う。ファミリーサポートなどもあるが、第2子誕生で不安定になっていたり、人見知りがある子供を預けるのに抵抗もある。金銭的な面でも余裕がない。
G	上の子が未就園児の場合、ひっこしや周りにママ友がいないと引きこもりがちになるので、赤ちゃんを連れて利用できる飲食店や交流の場、イベントがあると助かります。私の場合、第2子妊娠中に引っ越ししてきて、児童館等たくさん利用しましたが、サークルや輪ができてしまい、なかなか打ち解けられる環境ではありませんでした。季節のイベントや気軽に参加できる場がたくさんあると、上の子のストレス発散に成るので情報がほしいです。

資料５

平成 23 年 7 月 11 日

A　　病院
看護部長　○○　○○　殿

国際医療福祉大学大学院
保健学専攻助産学分野博士課程
礒山　あけみ

調査協力のお願い（ご依頼）

謹啓

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、下記の目的で調査を行うこととなりました。つきましてはご多忙のところ大変恐縮ではございますが、貴病院に調査施設としてご協力いただきたく、宜しくお願い申し上げます。なお、この調査は、平成 23 年度科学研究費助成金（課題番号 23593325）を受けて実施いたします。本研究の研究成果につきましては報告書を作成し、貴病院にもご報告いたします。

敬具

記

１．研究課題名：第 2 子妊娠中の母親を対象とした第 2 子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討

２．目的：第 2 子妊娠中の母親を対象とした第 2 子を迎え入れるための看護介入プログラムを考案し、その有効性を検討することにある。

３．調査対象者

県内の産婦人科外来に妊婦健康診査に来院しており，幼児を第１子に持つ第２子妊娠中の母親 90 名（教育群 45 名，非教育群 45 名）である。対象者の選定基準は（１）第２子妊娠中である。（２）第 1 回学級時が妊娠 24～28 週程度である。（３）順調な妊娠経過を辿っている。（４）第１子が幼児期（１歳以上４歳未満）である。（５）出産後里帰りせず核家族である（６）出産後の研究にも引き続き研究参加に同意すること。

４．研究方法および概要：別紙のとおり

５．場所：貴病院学級開催ルーム

６．本人連絡先：〒319-1221　茨城県日立市大みか町 6-11-1

℡：0294-53-9093　Fax:0294-52-3343　　携帯：090-8016-3924

E-mail:isoyama@icc.ac.jp

以上

平成 23 年 7 月 20 日

A　　病院
病棟師長　○○　○○　殿

国際医療福祉大学大学院
保健学専攻助産学分野博士課程
礒山　あけみ

調査協力のお願い（ご依頼）

謹啓

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、下記の目的で調査を行うこととなりました。つきましてはご多忙のところ大変恐縮ではございますが、貴病院に調査施設としてご協力いただきたく、宜しくお願い申し上げます。なお、この調査は、平成 23 年度科学研究費助成金（課題番号 23593325）を受けて実施いたします。本研究の研究成果につきましては報告書を作成し、貴病院にもご報告いたします。

敬具

記

１．研究課題名： 第 2 子妊娠中の母親を対象とした第 2 子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討

２．目的： 第 2 子妊娠中の母親を対象とした第 2 子を迎え入れるための看護介入プログラムを考案しその有効性を検討することである。

３．調査対象者

県内の産婦人科外来に妊婦健康診査に来院しており，幼児を第１子に持つ第２子妊娠中の母親 90 名（教育群 45 名，非教育群 45 名）である。対象者の選定基準は（１）第２子妊娠中である。（２）第 1 回学級時が妊娠 24～28 週程度である。（３）順調な妊娠経過を辿っている。（４）第１子が幼児期（１歳以上４歳未満）である。（５）出産後里帰りせず核家族である（６）出産後の研究にも引き続き研究参加に同意すること。

４．研究方法および概要：別紙のとおり

５．場所：貴病院学級開催ルーム

６．本人連絡先：〒319-1221　茨城県日立市大みか町 6-11-1

TEL：0294-53-9093　Fax:0294-52-3343　　携帯：090-8016-3924

E-mail:isoyama@icc.ac.jp

以上

平成 23 年 7 月 19 日

A　　病院
副院長　○○　○○　殿

国際医療福祉大学大学院
保健学専攻助産学分野博士課程
礒山　あけみ

調査協力のお願い（ご依頼）

謹啓

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、下記の目的で調査を行うこととなりました。つきましてはご多忙のところ大変恐縮ではございますが、貴病院に調査施設としてご協力いただきたく、宜しくお願い申し上げます。なお、この調査は、平成 23 年度科学研究費助成金（課題番号 23593325）を受けて実施いたします。本研究の研究成果につきましては報告書を作成し、貴病院にもご報告いたします。

敬具

記

１．研究課題名： 第 2 子妊娠中の母親を対象とした第 2 子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討

２．目的： 第 2 子妊娠中の母親を対象とした第 2 子を迎え入れるための看護介入プログラムを考案しその有効性を検討することである。

３．調査対象者

県内の産婦人科外来に妊婦健康診査に来院しており，幼児を第１子に持つ第２子妊娠中の母親 90 名（教育群 45 名，非教育群 45 名）である。対象者の選定基準は（１）第２子妊娠中である。（２）第 1 回学級時が妊娠 24～28 週程度である。（３）順調な妊娠経過を辿っている。（４）第１子が幼児期（１歳以上４歳未満）である。（５）出産後里帰りせず核家族である（６）出産後の研究にも引き続き研究参加に同意すること。

４．研究方法および概要：別紙のとおり

５．場所：貴病院学級開催ルーム

６．本人連絡先：〒319-1221　茨城県日立市大みか町 6-11-1

TEL：0294-53-9093　Fax:0294-52-3343　　携帯：090-8016-3924

E-mail:isoyama@icc.ac.jp

以上

（教育群用）資料６

「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」に関するお願い

国際医療福祉大学大学院　助産学分野　博士課程
礒山あけみ

この説明書は「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」の内容について説明したものです。この計画に参加されなくても不利益を受けることは一切ありません。ご理解、ご賛同いただける場合は、研究の対象者として研究にご参加くださいますようお願い申し上げます。

１．研究実施計画

（１）研究の背景・目的について

一般に育児に対する戸惑いは初産婦に多いとされていますが，新しく第２子を迎える母親にとって家族の形態の大きな変化とみなされ，重要な発達課題に位置づけられています。しかしながら経産婦に対しては，妊娠・出産・育児の経験があるため育児に慣れているということで手薄になりやすいという傾向にあります。さらに時代の変化に伴い，核家族化や地域社会の衰退などにより子育てに関する支援が得られにくい現状があることは否めません。健やか親子 21 では，子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減のため，妊娠期から出産，育児期にかけて育児に焦点を当てた心の問題の観点からケアシステムを構築し，一人の人間を最適な環境で見守っていくことが必要とされています。初産婦のみならず経産婦に対して子育てを含めた生活にも焦点を当て援助していくプログラムの確立が必要とされています。そこで本調査では、第１子の子育てを担いながら新しく家族の誕生を迎える第２子妊娠中の母親を対象として、第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討を行いたと存じます。

（２）研究内容・方法について

「第２子を迎え入れるためのクラス参加」と「アンケート調査」の双方です。クラスは１回１時間のクラスを妊娠 28 週と 36 週前後に受けていただきます。アンケートは妊娠中に１回、出産して１週間後、出産して１カ月後の合計３回行っていただきます。回答後、同封の研究者住所宛名の記載のある封筒にて郵送をお願いいたします。

２．プライバシーおよび個人情報の保護、この研究の参加した場合に受ける利益・不利益について

調査結果は本研究のみに使用いたします。また、途中で協力することを取りやめても構いません。尚、本研究へのご協力は、皆様の自由意志によりますので強制ではありません。収集したデータは厳重に管理し匿名性を守秘し，個人が特定できないようにデータの処理を行い，皆様の不利益になったり、ご迷惑をおかけすることがないように配慮いたします。

３．研究結果について

本研究の結果は，女性が求める妊娠・出産・育児に対するケアシステムへの示唆を与えるものです。これらを博士論文にまとめるとともに学会および学術誌に公表していく所存です。

４．費用

この研究に必要な費用は、あなたが負担することはありません。

５．同意およびその撤回

参加・協力は、自由意思によって行っていただきます。この研究についてご理解いただき、研究に参加していただける場合は別紙「同意書」に署名をお願いいたします。一度同意された場合でも、いつでも撤回することができます。その場合は研究者に口頭で伝え、かつ別紙「同意撤回書」に署名してください。

＜お問い合わせ等の連絡先＞

研究者：国際医療福祉大学大学院　助産学分野　博士課程　　礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617　　携帯：090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

同　意　書

研究者　礒山あけみ　殿

私は「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」について、国際医療福祉大学大学院保健学専攻助産学分野の礒山あけみから別紙の説明書に基づき、次の項目について詳しい説明を受け、十分理解し納得できましたので、研究に参加することに同意します。

説明事項

１．研究実施計画書
２．プライバシーおよび個人情報の保護、この研究の参加した場合に受ける利益・不利について
３．研究結果について
４．費用
５．同意およびその撤回

平成　　年　　月　　日

（自署）

研究協力者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

同　意　徹　回　書

研究者　礒山あけみ　殿

私は「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」の参加に同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回することを国際医療福祉大学大学院保健学専攻助産学分野の礒山あけみに伝え、ここに同意撤回書を提出します。

平成　　年　　月　　日

（自署）

研究協力者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（本人の署名が困難な場合・未成年者の場合）

代諾者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

被験者との続柄＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（非教育群用）**資料７**

「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」に関するお願い

国際医療福祉大学大学院　助産学分野　博士課程
礒山あけみ

この説明書は「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」の内容について説明したものです。この計画に参加されなくても不利益を受けることは一切ありません。ご理解、ご賛同いただける場合は、研究の対象者として研究にご参加くださいますようお願い申し上げます。

１．研究実施計画

（１）研究の背景・目的について

一般に育児に対する戸惑いは初産婦に多いとされていますが，新しく第２子を迎える母親にとって家族の形態の大きな変化とみなされ，重要な発達課題に位置づけられています。しかしながら経産婦に対しては，妊娠・出産・育児の経験があるため育児に慣れているということで手薄になりやすいという傾向にあります。さらに時代の変化に伴い，核家族化や地域社会の衰退などにより子育てに関する支援が得られにくい現状があることは否めません。健やか親子 21 では，子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減のため，妊娠期から出産，育児期にかけて育児に焦点を当てた心の問題の観点からケアシステムを構築し，一人の人間を最適な環境で見守っていくことが必要とされています。初産婦のみならず経産婦に対して子育てを含めた生活にも焦点を当て援助していくプログラムの確立が必要とされています。そこで本調査では、第１子の子育てを担いながら新しく家族の誕生を迎える第２子妊娠中の母親を対象として、第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討を行いたと存じます。

（２）研究内容・方法について

アンケート調査です。アンケートは妊娠中に１回、出産して１週間、出産して１カ月時の合計３回行っていただきます。回答後、同封の研究者住所宛名の記載のある封筒にて郵送をお願いいたします。

２．プライバシーおよび個人情報の保護、この研究の参加した場合に受ける利益・不利益について

調査結果は本研究のみに使用いたします。また、途中で協力することを取りやめても構いません。尚、本研究へのご協力は、皆様の自由意志によりますので強制ではありません。収集したデータは厳重に管理し匿名性を守秘し，個人が特定できないようにデータの処理を行い，皆様の不利益になったり、ご迷惑をおかけすることがないように配慮いたします。3 回のアンケート終了後、ご希望の方には子育てクラスに用いたパンフレットおよび絵本を差し上げます。

３．研究結果について

本研究の結果は，女性が求める妊娠・出産・育児に対するケアシステムへの示唆を与えるものです。これらを博士論文にまとめるとともに学会および学術誌に公表していく所存です。

４．費用

この研究に必要な費用は、あなたが負担することはありません。

５．同意およびその撤回

参加・協力は、自由意思によって行っていただきます。この研究についてご理解いただき、研究に参加していただける場合は別紙「同意書」に署名をお願いいたします。一度同意された場合でも、いつでも撤回することができます。その場合は研究者に口頭で伝え、かつ別紙「同意撤回書」に署名してください。

６．絵本およびパンフレット

産後１カ月のアンケート回収後､第１子理解のための絵本およびパンフレットを差し上げます。

＜お問い合わせ等の連絡先＞

研究者：国際医療福祉大学大学院　助産学分野　博士課程　　礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617　　携帯：090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

同　意　書

研究者　礒山あけみ　殿

私は「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」について、国際医療福祉大学大学院保健学専攻助産学分野の礒山あけみから別紙の説明書に基づき、次の項目について詳しい説明を受け、十分理解し納得できましたので、研究に参加することに同意します。

説明事項

１．研究実施計画書
２．プライバシーおよび個人情報の保護、この研究の参加した場合に受ける利益・不利について
３．研究結果について
４．費用
５．同意およびその撤回

平成　　年　　月　　日

（自署）
研究協力者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

同　意　徹　回　書

研究者　礒山あけみ　殿

私は「第２子妊娠中の母親を対象とした第２子を迎え入れるための看護介入プログラムの有効性の検討」の参加に同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回することを国際医療福祉大学大学院保健学専攻助産学分野の礒山あけみに伝え、ここに同意撤回書を提出します。

平成　　年　　月　　日

（自署）

研究協力者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（本人の署名が困難な場合・未成年者の場合）

代諾者＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

被験者との続柄＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（教育群）資料８

第２子妊娠中のお母様方へ

アンケートのお願い

アンケートは、１）妊娠中、２）産後１週間、３）産後１カ月の３種類を同封しています。

それぞれの時期にお答えいただき、回収箱またはポストへ投函してください。

【ご記入にあたってのお願い】

１．妊娠中のアンケートについてお手元に届いた日に回答してください。

２．回答は、設問にそって、番号に〇をつけるか、（　　）の中に記入してください。

３．ご記入後は、無記名のまま、同封した封筒にいれて封をし、２週間以内に回収箱またはポストへ投函してください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学大学院博士課程　助産学分野　博士課程
礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617
090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

No.

1．第１子の子育てについて、あなたの考えやあなた自身についてどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

あなた自身が感じる「第1子の様子について」「第1子との関わり方について」「あかちゃんがえりについて」、あてはまる縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	疲れやすい		⊕			
1	第1子はくっつきたがる					
2	第1子はききわけのないふるまいをする					
3	第1子は精神的に不安定である					
4	第1子は要求に答える					
5	第1子はほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ					
6	第1子は赤ちゃんのことをよく話す					
7	第1子は第2子に対して興味を示す					
8	第1子は第2子をいたわる行動をする（妊娠中は母親をいたわる）					
9	第1子は第2子を抱っこするという					
10	第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある					
11	第1子との関わり方に戸惑いがある					
12	第1子と遊ぶ時間が減った					
13	第1子を叱ってしまう					
14	第1子の子育ては上手くいっていると思う					
15	ひとりにして欲しい時間がある					
16	第1子との物理的な遊びは減ったが、コミュニケーションは増えた					
17	第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配					
18	第1子の要求に対し、「忙しいから後でね」と拒否しがちである					
19	第1子をほめることが多くなった					
20	第2子（妊娠中は胎児）よりも第1子が気にかかる					
21	第2子出産で入院時、第1子のことが心配					
22	2人同時育児のイメージ化ができている					
23	第1子のあかちゃんがえりが心配である					
24	第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる					
25	あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う					
26	第2子妊娠（出産）で、第1子の成長を感じた					

２．あなたの考えや、あなた自身にどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

	あなたの考えやあなた自身にどのくらいあてはまるか、縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、 そのおつもりでお答えください	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	**よく肩が凝る**		⊕			
27	第2子妊娠（誕生）で行動が制限されるようになった。					
28	2人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う。					
29	第1子の育児経験を生かして楽しみたい。					
30	身体を休めることができない。					
31	気持ちを休めることができない。					
32	良い母親にならなくてはと焦る。					
33	女性としての自分に満足している。					
34	育児は楽しい。					
35	第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要だと思う。					
36	経産婦に対する子育ての情報について満足している。					
37	第1子の関わり方に戸惑いを感じる。					
38	父親は家事に参加していると思う。					
39	父親は育児に参加していると思う。					
40	祖父または祖母の協力を得ることができていると思う。					
41	家族以外の育児支援を活用することができていると思う。					

３．あなたの日常の考えや行動にどの程度当てはまるかを〇で囲んでください。

各回答は1点、2点、3点、4点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	どちらかと言えばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
		4	3	2	1
例	仕事は楽しい		〇		
42	子どもをみていると元気づけられる				
43	子どもは心の支えである				
44	もっと子どもと関わりたいと思う				
45	子どものおかげで自分も成長する				
46	子どもは自分の人生を豊かにする。				
47	子どもは自分の人生に充実感をもたらす				
48	子育ては自分の自由な時間を奪う				
49	子どものために自分の行動がかなり制限される				
50	子どもは自分の人生の多くの部分を奪う				
51	子どもを持つことは経済的な負担が大きい				
52	子どもを持つと精神的に休まらない				
53	子どもから解放されたいと思う				
54	子どもを持って初めて社会的に認められる				
55	子どもを担うのは人間として自然なことである				
56	社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ				
57	子どものいない人生はむなしい				
58	自分にとって何よりも大切なのは子どもである				
59	子どもは自分にとって生きがいである				
60	子どもを育てることに対して余り関心が持てない				
61	自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない				
62	子どものために仕事が満足に出来ない				
63	自分がいなくても子どもは育つ				

４．以下の問いにお答ください。

１）分娩予定日についてご記入願います。

年　　月　　日

２）第1子の性別についてあてはまるほうに〇をつけてください。

①男児　　②女児

３）第2子出産時のあなたの年齢についてご記入ください。

（　　）歳

４）第2子出産時の第１子の年齢についてご記入ください。

（　　）歳（　　）カ月

５）家族構成について同居している方すべてに〇をつけてください

①実父　　②実母　　③義父　　④義母　　⑤同居していない

⑥その他（　　）

６）お仕事についてお尋ねします。あてはまるものに〇をつけてください。

①仕事はしていない（専業主婦）　　②フルタイムで仕事をしている（1日7～8時間以上）

③パートで仕事をしている（半日程度）　④パートで仕事をしている（週に2～3日程度）

⑤就職しているが､現在産休･育児休暇中である。　⑤その他(　　)

７）昼間、どなたかに第1子を預けていますか。

①はい　　②いいえ

８）７）で①はいと回答した方のみお答えください。どなた（どこ）に預けていますか。

①保育園　　②幼稚園　　③義父母・実父母　　④親戚・友人

⑤その他（　　）

９）２４時間のうち、第1子と一緒にいる時間はどのくらいですか。

（　　）時間

１０）父親の帰宅時間はいつ頃ですか。

（　　）時ころ

＊記入年月日：　　年　　月　　日

ありがとうございました。

（教育群）資料９

第２子出産後１週間のお母様方へ

アンケートのお願い

【ご記入にあたってのお願い】

１．回答は、出産後１週間時点においてお答えください。

１．回答は、設問にそって、番号に〇をつけるか、（　　）の中に記入してください。

２．ご記入後は、無記名のまま、同封した封筒にいれて封をし、回答後２週間までに回収箱またはポストへ投函してください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学大学院博士課程　助産学分野　博士課程
磯山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617
090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

Ｎｏ．

第２子出産後１週間

１．第１子の子育てについて、あなたの考えやあなた自身についてどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

	あなた自身が感じる「第1子の様子について」「第1子との関わり方について」「あかちゃんがえりについて」、あてはまる縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、そのおつもりでお答えください	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	疲れやすい		〇			
1	第1子はくっつきたがる					
2	第1子はききわけのないふるまいをする					
3	第1子は精神的に不安定である					
4	第1子は要求に答える					
5	第1子はほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ					
6	第1子は赤ちゃんのことをよく話す					
7	第1子は第2子に対して興味を示す					
8	第1子は第2子をいたわる行動をする					
9	第1子は第2子を抱っこするという					
10	第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある					
11	第1子との関わり方に戸惑いがある					
12	第1子と遊ぶ時間が減った					
13	第1子を叱ってしまう					
14	第1子の子育ては上手くいっていると思う					
15	ひとりにして欲しい時間がある					
16	第1子との物理的な遊びは減ったが、コミュニケーションは増えた					
17	第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配					
18	第1子の要求に対し、「忙しいから後でね」と拒否しがちである					
19	第1子をほめることが多くなった					
20	第2子（妊娠中は胎児）よりも第1子が気にかかる					
21	第2子出産で入院時、第1子のことが心配					
22	2人同時育児のイメージ化ができている					
23	第1子のあかちゃんがえりが心配である					
24	第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる					
25	あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う					
26	第2子妊娠（出産）で、第1子の成長を感じた					

２．あなたの考えや、あなた自身にどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

	あなたの考えやあなた自身にどのくらいあてはまるか、縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、 そのおつもりでお答えください	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	よく肩が凝る		⊕			
27	第2子妊娠（誕生）で行動が制限されるようになった。					
28	2人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う。					
29	第1子の育児経験を生かして楽しみたい。					
30	身体を休めることができない。					
31	気持ちを休めることができない。					
32	良い母親にならなくてはと焦る。					
33	女性としての自分に満足している。					
34	育児は楽しい。					
35	第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要だと思う。					
36	経産婦に対する子育ての情報について満足している。					
37	第1子の関わり方に戸惑いを感じる。					
38	父親は家事に参加していると思う。					
39	父親は育児に参加していると思う。					
40	祖父または祖母の協力を得ることができていると思う。					
41	家族以外の育児支援を活用することができていると思う。					

３．あなたの日常の考えや行動にどの程度あてはまるかを〇で囲んでください。

各回答は1点、2点、3点、4点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	どちらかと言えばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
		4	3	2	1
例	仕事は楽しい		⊕		
42	子どもをみていると元気づけられる				
43	子どもは心の支えである				
44	もっと子どもと関わりたいと思う				
45	子どものおかげで自分も成長する				
46	子どもは自分の人生を豊かにする。				
47	子どもは自分の人生に充実感をもたらす				
48	子育ては自分の自由な時間を奪う				
49	子どものために自分の行動がかなり制限される				
50	子どもは自分の人生の多くの部分を奪う				
51	子どもを持つことは経済的な負担が大きい				
52	子どもを持つと精神的に休まらない				
53	子どもから解放されたいと思う				
54	子どもを持って初めて社会的に認められる				
55	子どもを担うのは人間として自然なことである				
56	社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ				
57	子どものいない人生はむなしい				
58	自分にとって何よりも大切なのは子どもである				
59	子どもは自分にとって生きがいである				
60	子どもを育てることに対して余り関心が持てない				
61	自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない				
62	子どものために仕事が満足に出来ない				
63	自分がいなくても子どもは育つ				

４．以下の問いにお答ください。

１）出産日をご記入願います。

年　　月　　日

２）第1子の性別についてあてはまるほうに〇をつけてください。

①男児　　②女児

５．子育てクラスに参加した方のみお答えください。あてはまる番号に〇をつけてください。

１）絵本を読み聞かせした回数

①１日２回以上　　②１日１回程度　　③1週間に1回程度④　その他（　　）回

項　目		良い	やや良い	どちらともいえない	やや悪い	悪い
		5	4	3	2	1
例	母親学級の内容について		⊕			
1	子育てクラスの総合評価について					
2	子育てクラスに用いた冊子について					
3	絵本を読み聞かせしている時の気持ち					
4	絵本(内容･自宅での利用の仕方など)について					
5	子育てクラスの内容について					
6	子育てクラスの時間について					

６．子育てやクラスについて、ご意見・ご感想などあればご記入願います。

＊記入年月日：　　年　　月　　日

（教育群）資料１０

第２子出産後１カ月のお母様方へ

アンケートのお願い

【ご記入にあたってのお願い】

１．回答は、出産後１カ月時点において、お答えください。

２．回答は、設問にそって、番号に〇をつけるか、（　　）の中に記入してください。

３．ご記入後は、無記名のまま、同封した封筒にいれて封をし、回答後２週間以内に回収箱またはポストへ投函してください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学大学院博士課程　助産学分野　博士課程
礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617
090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

Ｎｏ．

第２子出産後１カ月

１．第１子の子育てについて、あなたの考えやあなた自身についてどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

	あなた自身が感じる「第1子の様子について」「第1子との関わり方について」「あかちゃんがえりについて」、あてはまる縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、そのおつもりでお答えください	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	疲れやすい		⊕			
1	第1子はくっつきたがる					
2	第1子はききわけのないふるまいをする					
3	第1子は精神的に不安定である					
4	第1子は要求に答える					
5	第1子はほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ					
6	第1子は赤ちゃんのことをよく話す					
7	第1子は第2子に対して興味を示す					
8	第1子は第2子をいたわる行動をする					
9	第1子は第2子を抱っこするという					
10	第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある					
11	第1子との関わり方に戸惑いがある					
12	第1子と遊ぶ時間が減った					
13	第1子を叱ってしまう					
14	第1子の子育ては上手くいっていると思う					
15	ひとりにして欲しい時間がある					
16	第1子との物理的な遊びは減ったが、コミュニケーションは増えた					
17	第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配					
18	第1子の要求に対し、「忙しいから後でね」と拒否しがちである					
19	第1子をほめることが多くなった					
20	第2子（妊娠中は胎児）よりも第1子が気にかかる					
21	第2子出産で入院時、第1子のことが心配					
22	2人同時育児のイメージ化ができている					
23	第1子のあかちゃんがえりが心配である					
24	第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる					
25	あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う					
26	第2子妊娠（出産）で、第1子の成長を感じた					

２．あなたの考えや、あなた自身にどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

あなたの考えやあなた自身にどのくらいあてはまるか、縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、 そのおつもりでお答えください		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	よく肩が凝る		⊕			
27	第2子妊娠（誕生）で行動が制限されるようになった。					
28	2人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う。					
29	第1子の育児経験を生かして楽しみたい。					
30	身体を休めることができない。					
31	気持ちを休めることができない。					
32	良い母親にならなくてはと焦る。					
33	女性としての自分に満足している。					
34	育児は楽しい。					
35	第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要だと思う。					
36	経産婦に対する子育ての情報について満足している。					
37	第1子の関わり方に戸惑いを感じる。					
38	父親は家事に参加していると思う。					
39	父親は育児に参加していると思う。					
40	祖父または祖母の協力を得ることができていると思う。					
41	家族以外の育児支援を活用することができていると思う。					

３．あなたの日常の考えや行動にどの程度当てはまるかを〇で囲んでください。

各回答は1点、2点、3点、4点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	どちらかと言えばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
		4	3	2	1
例	仕事は楽しい		○		
42	子どもをみていると元気づけられる				
43	子どもは心の支えである				
44	もっと子どもと関わりたいと思う				
45	子どものおかげで自分も成長する				
46	子どもは自分の人生を豊かにする。				
47	子どもは自分の人生に充実感をもたらす				
48	子育ては自分の自由な時間を奪う				
49	子どものために自分の行動がかなり制限される				
50	子どもは自分の人生の多くの部分を奪う				
51	子どもを持つことは経済的な負担が大きい				
52	子どもを持つと精神的に休まらない				
53	子どもから解放されたいと思う				
54	子どもを持って初めて社会的に認められる				
55	子どもを担うのは人間として自然なことである				
56	社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ				
57	子どものいない人生はむなしい				
58	自分にとって何よりも大切なのは子どもである				
59	子どもは自分にとって生きがいである				
60	子どもを育てることに対して余り関心が持てない				
61	自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない				
62	子どものために仕事が満足に出来ない				
63	自分がいなくても子どもは育つ				

４．子育てクラスに参加した方のみお答えください。あてはまる番号に〇をつけてください。

１）子育てクラスで用いた絵本を読み聞かせした回数

①１日２回以上　　②１日１回程度　　③1週間に1回程度④　その他（　　）

回

項　　目		良い	やや良い	どちらともいえない	やや悪い	悪い
		5	4	3	2	1
例	母親学級の内容について		◯			
1	絵本を読み聞かせしている時の気持ち					
2	絵本(内容･自宅での利用の仕方など)について					

５．子育てについて、経産婦に必要な情報や支援等、ご意見・ご感想などあればご記入願います。

６．記入年月日：　　年　　月　　日

ありがとうございました。

資料１１

第２子妊娠中のお母様方へ

アンケートのお願い

アンケートは、１）妊娠中、２）産後１週間、３）産後１カ月の３種類を同封しています。

それぞれの時期にお答えいただき、回収箱またはポストへ投函してください。

【ご記入にあたってのお願い】

１．妊娠中のアンケートについてお手元に届いた日に回答してください。

２．回答は、設問にそって、番号に〇をつけるか、（　　）の中に記入してください。

３．ご記入後は、無記名のまま、同封した封筒にいれて封をし、２週間以内に回収箱またはポストへ投函してください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学大学院博士課程　助産学分野　博士課程
礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617
090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

No.

1．第１子の子育てについて、あなたの考えやあなた自身についてどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

あなた自身が感じる「第1子の様子について」「第1子との関わり方について」「あかちゃんがえりについて」、あてはまる縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	疲れやすい		⊕			
1	第1子はくっつきたがる					
2	第1子はききわけのないふるまいをする					
3	第1子は精神的に不安定である					
4	第1子は要求に答える					
5	第1子はほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ					
6	第1子は赤ちゃんのことをよく話す					
7	第1子は第2子に対して興味を示す					
8	第1子は第2子をいたわる行動をする（妊娠中は母親をいたわる）					
9	第1子は第2子を抱っこするという					
10	第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある					
11	第1子との関わり方に戸惑いがある					
12	第1子と遊ぶ時間が減った					
13	第1子を叱ってしまう					
14	第1子の子育ては上手くいっていると思う					
15	ひとりにして欲しい時間がある					
16	第1子との物理的な遊びは減ったが、コミュニケーションは増えた					
17	第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配					
18	第1子の要求に対し、「忙しいから後でね」と拒否しがちである					
19	第1子をほめることが多くなった					
20	第2子（妊娠中は胎児）よりも第1子が気にかかる					
21	第2子出産で入院時、第1子のことが心配					
22	2人同時育児のイメージ化ができている					
23	第1子のあかちゃんがえりが心配である					
24	第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる					
25	あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う					
26	第2子妊娠（出産）で、第1子の成長を感じた					

２．あなたの考えや、あなた自身にどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

	あなたの考えやあなた自身にどのくらいあてはまるか、縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、 そのおつもりでお答えください	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	よく肩が凝る		⊕			
27	第2子妊娠（誕生）で行動が制限されるようになった。					
28	2人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う。					
29	第1子の育児経験を生かして楽しみたい。					
30	身体を休めることができない。					
31	気持ちを休めることができない。					
32	良い母親にならなくてはと焦る。					
33	女性としての自分に満足している。					
34	育児は楽しい。					
35	第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要だと思う。					
36	経産婦に対する子育ての情報について満足している。					
37	第1子の関わり方に戸惑いを感じる。					
38	父親は家事に参加していると思う。					
39	父親は育児に参加していると思う。					
40	祖父または祖母の協力を得ることができていると思う。					
41	家族以外の育児支援を活用することができていると思う。					

３．あなたの日常の考えや行動にどの程度当てはまるかを〇で囲んでください。

各回答は1点、2点、3点、4点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	どちらかと言えばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
		4	3	2	1
例	仕事は楽しい		⊕		
42	子どもをみていると元気づけられる				
43	子どもは心の支えである				
44	もっと子どもと関わりたいと思う				
45	子どものおかげで自分も成長する				
46	子どもは自分の人生を豊かにする。				
47	子どもは自分の人生に充実感をもたらす				
48	子育ては自分の自由な時間を奪う				
49	子どものために自分の行動がかなり制限される				
50	子どもは自分の人生の多くの部分を奪う				
51	子どもを持つことは経済的な負担が大きい				
52	子どもを持つと精神的に休まらない				
53	子どもから解放されたいと思う				
54	子どもを持って初めて社会的に認められる				
55	子どもを担うのは人間として自然なことである				
56	社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ				
57	子どものいない人生はむなしい				
58	自分にとって何よりも大切なのは子どもである				
59	子どもは自分にとって生きがいである				
60	子どもを育てることに対して余り関心が持てない				
61	自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない				
62	子どものために仕事が満足に出来ない				
63	自分がいなくても子どもは育つ				

４．以下の問いにお答ください。

１）分娩予定日についてご記入願います。

年　　月　　日

２）第1子の性別についてあてはまるほうに〇をつけてください。

①男児　　②女児

３）第2子出産時のあなたの年齢についてご記入ください。

（　　）歳

４）第2子出産時の第１子の年齢についてご記入ください。

（　　）歳（　　）カ月

５）家族構成について同居している方すべてに〇をつけてください

①実父　　②実母　　③義父　　④義母　　⑤同居していない

⑥その他（　　）

６）お仕事についてお尋ねします。あてはまるものに〇をつけてください。

①仕事はしていない（専業主婦）　　②フルタイムで仕事をしている（1日7～8時間以上）

③パートで仕事をしている（半日程度）　④パートで仕事をしている（週に2～3日程度）

⑤就職しているが、現在産休･育児休暇中である。　⑤その他(　　)

７）昼間、どなたかに第1子を預けていますか。

①はい　　②いいえ

８）７）で①はいと回答した方のみお答えください。どなた（どこ）に預けていますか。

①保育園　　②幼稚園　　③義父母・実父母　　④親戚・友人

⑤その他（　　）

９）２４時間のうち、第1子と一緒にいる時間はどのくらいですか。

（　　）時間

１０）父親の帰宅時間はいつ頃ですか。

（　　）時ころ

＊記入年月日：　　年　　月　　日　　ありがとうございました。

資料１２

第２子出産後１週間のお母様方へ

アンケートのお願い

【ご記入にあたってのお願い】

１．回答は、出産後１週間時点においてお答えください。

１．回答は、設問にそって、番号に〇をつけるか、(　　)の中に記入してください。

２．ご記入後は、無記名のまま、同封した封筒にいれて封をし、回答後２週間までに回収箱またはポストへ投函してください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学大学院博士課程　助産学分野　博士課程
礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617
090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

Ｎｏ．

第２子出産後１週間

１．第１子の子育てについて、あなたの考えやあなた自身についてどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

あなた自身が感じる「第1子の様子について」「第1子との関わり方について」「あかちゃんがえりについて」、あてはまる縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	疲れやすい		⊕			
1	第1子はくっつきたがる					
2	第1子はききわけのないふるまいをする					
3	第1子は精神的に不安定である					
4	第1子は要求に答える					
5	第1子はほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ					
6	第1子は赤ちゃんのことをよく話す					
7	第1子は第2子に対して興味を示す					
8	第1子は第2子をいたわる行動をする					
9	第1子は第2子を抱っこするという					
10	第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある					
11	第1子との関わり方に戸惑いがある					
12	第1子と遊ぶ時間が減った					
13	第1子を叱ってしまう					
14	第1子の子育ては上手くいっていると思う					
15	ひとりにして欲しい時間がある					
16	第1子との物理的な遊びは減ったが、コミュニケーションは増えた					
17	第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配					
18	第1子の要求に対し、「忙しいから後でね」と拒否しがちである					
19	第1子をほめることが多くなった					
20	第2子（妊娠中は胎児）よりも第1子が気にかかる					
21	第2子出産で入院時、第1子のことが心配					
22	2人同時育児のイメージ化ができている					
23	第1子のあかちゃんがえりが心配である					
24	第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる					
25	あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う					
26	第2子妊娠（出産）で、第1子の成長を感じた					

２．あなたの考えや、あなた自身にどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

	あなたの考えやあなた自身にどのくらいあてはまるか、縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、 そのおつもりでお答えください	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	よく肩が凝る	├	⊕	┼	┼	┤
27	第2子妊娠（誕生）で行動が制限されるようになった。	├	┼	┼	┼	┤
28	2人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う。	├	┼	┼	┼	┤
29	第1子の育児経験を生かして楽しみたい。	├	┼	┼	┼	┤
30	身体を休めることができない。	├	┼	┼	┼	┤
31	気持ちを休めることができない。	├	┼	┼	┼	┤
32	良い母親にならなくてはと焦る。	├	┼	┼	┼	┤
33	女性としての自分に満足している。	├	┼	┼	┼	┤
34	育児は楽しい。	├	┼	┼	┼	┤
35	第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要だと思う。	├	┼	┼	┼	┤
36	経産婦に対する子育ての情報について満足している。	├	┼	┼	┼	┤
37	第1子の関わり方に戸惑いを感じる。	├	┼	┼	┼	┤
38	父親は家事に参加していると思う。	├	┼	┼	┼	┤
39	父親は育児に参加していると思う。	├	┼	┼	┼	┤
40	祖父または祖母の協力を得ることができていると思う。	├	┼	┼	┼	┤
41	家族以外の育児支援を活用することができていると思う。	├	┼	┼	┼	┤

３．あなたの日常の考えや行動にどの程度あてはまるかを〇で囲んでください。

各回答は1点、2点、3点、4点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	どちらかと言えばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
		4	3	2	1
例	仕事は楽しい		⊕		
42	子どもをみていると元気づけられる				
43	子どもは心の支えである				
44	もっと子どもと関わりたいと思う				
45	子どものおかげで自分も成長する				
46	子どもは自分の人生を豊かにする。				
47	子どもは自分の人生に充実感をもたらす				
48	子育ては自分の自由な時間を奪う				
49	子どものために自分の行動がかなり制限される				
50	子どもは自分の人生の多くの部分を奪う				
51	子どもを持つことは経済的な負担が大きい				
52	子どもを持つと精神的に休まらない				
53	子どもから解放されたいと思う				
54	子どもを持って初めて社会的に認められる				
55	子どもを担うのは人間として自然なことである				
56	社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ				
57	子どものいない人生はむなしい				
58	自分にとって何よりも大切なのは子どもである				
59	子どもは自分にとって生きがいである				
60	子どもを育てることに対して余り関心が持てない				
61	自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない				
62	子どものために仕事が満足に出来ない				
63	自分がいなくても子どもは育つ				

４．以下の問いにお答ください。

１）出産日をご記入願います。

年　　月　　日

２）第1子の性別についてあてはまるほうに〇をつけてください。

①男児　　②女児

５．子育てやクラスについて、ご意見・ご感想などあればご記入願います。

ありがとうございました。

＊記入年月日：　　年　　月　　日

資料１３

第２子出産後１カ月のお母様方へ

アンケートのお願い

【ご記入にあたってのお願い】

１．回答は、出産後１カ月時点において、お答えください。

２．回答は、設問にそって、番号に〇をつけるか、（　　）の中に記入してください。

３．ご記入後は、無記名のまま、同封した封筒にいれて封をし、回答後２週間以内に回収箱またはポストへ投函してください。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学大学院博士課程　助産学分野　博士課程
礒山あけみ
〒309-1736　茨城県笠間市八雲 2-4-31
TEL/fax：0296-78-4617
090-8016-3924
E-mail:isoyama@icc.ac.jp

Ｎｏ．

第２子出産後１カ月

１．第１子の子育てについて、あなたの考えやあなた自身についてどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

あなた自身が感じる「第1子の様子について」「第1子との関わり方について」「あかちゃんがえりについて」、あてはまる縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	疲れやすい		⊕			
1	第1子はくっつきたがる					
2	第1子はききわけのないふるまいをする					
3	第1子は精神的に不安定である					
4	第1子は要求に答える					
5	第1子はほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ					
6	第1子は赤ちゃんのことをよく話す					
7	第1子は第2子に対して興味を示す					
8	第1子は第2子をいたわる行動をする					
9	第1子は第2子を抱っこするという					
10	第1子はきょうだいを受け入れる準備が整いつつある					
11	第1子との関わり方に戸惑いがある					
12	第1子と遊ぶ時間が減った					
13	第1子を叱ってしまう					
14	第1子の子育ては上手くいっていると思う					
15	ひとりにして欲しい時間がある					
16	第1子との物理的な遊びは減ったが、コミュニケーションは増えた					
17	第1子への愛情が半分になってしまうのではないかと心配					
18	第1子の要求に対し、「忙しいから後でね」と拒否しがちである					
19	第1子をほめることが多くなった					
20	第2子（妊娠中は胎児）よりも第1子が気にかかる					
21	第2子出産で入院時、第1子のことが心配					
22	2人同時育児のイメージ化ができている					
23	第1子のあかちゃんがえりが心配である					
24	第1子のあかちゃんがえりを受け止めることができる					
25	あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う					
26	第2子妊娠（出産）で、第1子の成長を感じた					

２．あなたの考えや、あなた自身にどのくらいあてはまるかを〇で囲んでください。

あなたの考えやあなた自身にどのくらいあてはまるか、縦棒（｜）に〇を付けてください。 なお、各回答は1点、2点、3点、4点、5点と処理しますので、 そのおつもりでお答えください		そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
		5	4	3	2	1
例	よく肩が凝る		⊕			
27	第2子妊娠（誕生）で行動が制限されるようになった。					
28	2人目は多少のことがあっても大丈夫だと思う。					
29	第1子の育児経験を生かして楽しみたい。					
30	身体を休めることができない。					
31	気持ちを休めることができない。					
32	良い母親にならなくてはと焦る。					
33	女性としての自分に満足している。					
34	育児は楽しい。					
35	第2子妊娠中に経産婦を対象とした子育てクラスは必要だと思う。					
36	経産婦に対する子育ての情報について満足している。					
37	第1子の関わり方に戸惑いを感じる。					
38	父親は家事に参加していると思う。					
39	父親は育児に参加していると思う。					
40	祖父または祖母の協力を得ることができていると思う。					
41	家族以外の育児支援を活用することができていると思う。					

３．あなたの日常の考えや行動にどの程度当てはまるかを○で囲んでください。

各回答は1点、2点、3点、4点と処理しますので、そのおつもりでお答えください		そう思う	どちらかと言えばそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
		4	3	2	1
例	仕事は楽しい		○		
42	子どもをみていると元気づけられる				
43	子どもは心の支えである				
44	もっと子どもと関わりたいと思う				
45	子どものおかげで自分も成長する				
46	子どもは自分の人生を豊かにする。				
47	子どもは自分の人生に充実感をもたらす				
48	子育ては自分の自由な時間を奪う				
49	子どものために自分の行動がかなり制限される				
50	子どもは自分の人生の多くの部分を奪う				
51	子どもを持つことは経済的な負担が大きい				
52	子どもを持つと精神的に休まらない				
53	子どもから解放されたいと思う				
54	子どもを持って初めて社会的に認められる				
55	子どもを担うのは人間として自然なことである				
56	社会を担う次世代育成のために子育ては大切だ				
57	子どものいない人生はむなしい				
58	自分にとって何よりも大切なのは子どもである				
59	子どもは自分にとって生きがいである				
60	子どもを育てることに対して余り関心が持てない				
61	自分にとって子どもは余り大きな価値を持たない				
62	子どものために仕事が満足に出来ない				
63	自分がいなくても子どもは育つ				

４．子育てについて、経産婦に必要な情報や支援等、ご意見・ご感想などあればご記入願います。

＊記入年月日：　　年　　月　　日

ありがとうございました。

資料１４

第2子妊娠中のお母様方へ

子育てクラス(Parenting Class)
2011. 助産師:礒山

第２子妊娠中のお母様方へ

1．第２子妊娠中の母親の心理について

第１子の育児をしながらの妊娠生活はいかがですか。妊娠週数が進むにつれ，身体的にも心理的にもさまざまな変化を感じていると思います。

第２子妊娠中の母親は【①生活の中心は第１子】であり、「②子どもを育てる喜び」を感じる一方、「③孤立した子育ての苦悩」を感じ、上手に「④育ての合間の意図的な気分転換」をしながら、「⑤自分の時間確保への望み」を持ちながら、第１子の子育てに対する意味づけをしており、第１子の「⑥子育て経験による成長」を感じています。（図１－Ⅰ）

同時に、「⑦第１子の変化への戸惑いと第２子を迎え入れる準備」をしながら「⑧子育て経験から２人の子育てに対する自信」を感じつつ、一方で「⑨2 人の子育てへの迷い」を感じながら【第２子を迎え入れる準備】をしています。（図１－Ⅱ）

そして、「⑩子どもの将来への願い」と「⑪子どもの学び支援の準備」をしながら【子育ての代償への期待】をしながら子育てを中心とした生活を送っているようです。（図１―Ⅲ）

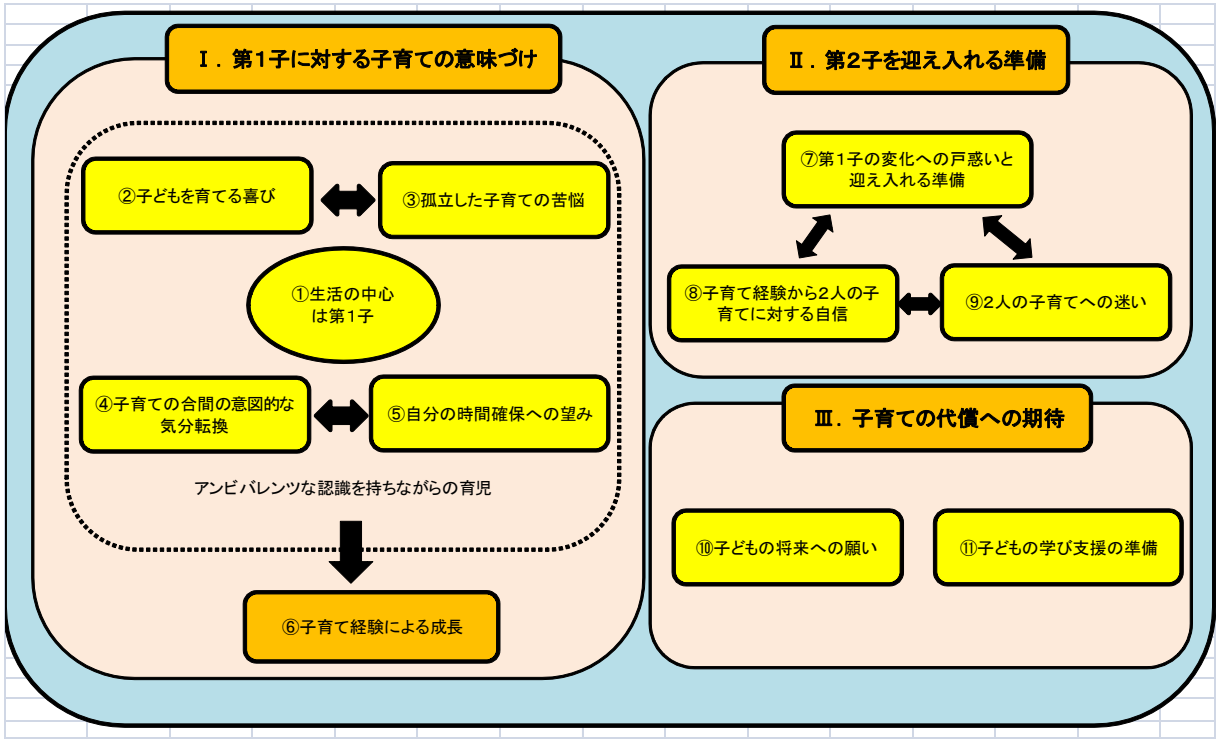


図１　第２子妊娠中の母親の子育てに対する体験

特に第１子の変化について、戸惑いを感じている方もいるかと思います。
たとえば、ある母親は・・・

「今一番不安なことは、お兄ちゃんが赤ちゃんを受け入れられないことです。妊娠中にお父さんがおなかを触ると機嫌が悪くなり、“お兄ちゃん触ってみる？”と聞くと、無視してしまったり、“赤ちゃんいらない”っていうんです。産後には、“ママのおなか、へっこんだから抱っこできる？”とか、“赤ちゃんは看護師さんに預けてママ、おうちへ帰ろう”なんて言ってるんです」

など、困惑しています。

その反応に対し、父親は・・・・・

「長男が言うことを聞かないときについ言ってしまうんです。“言うことを聞かないならお兄ちゃんいらない。赤ちゃんのところに行くから。」

など、つい言ってしまいがちのようです。

第１子はきょうだいが誕生することで様々な感情を表現することがあります。

第１子が１歳～3 歳ころは，言葉でうまく表現することができません。そのため、以下のような行動をとることがあります。
たとえば，

- 母親へのしがみつきがいっそうひどくなり，母親以外の人とは何もできなくなった１歳児
- 昼間の排尿が自立していたのに，くずれてしまった２歳児
- これまで一人で食事ができていたのに，食事時は口をあけたまま待っている，それを拒むと泣き叫び，手のつけられない状態になる３歳児
- しっかり歩行ができるのに，室内では，はいはいでしか移動できない３歳児
- 親が困るいたずらを次から次へと行い出した４歳児
- 幼児語に逆戻りした５歳児
- 夜間のおむつが外れていたのに，第２子が生まれた直後から，おねしょをするようになった５歳児

これらの第１子の姿は，**赤ちゃんがえり**や**退行現象**といわれています。

これは，

★子どもの認知能力が発達し，周りが見えるようになり，これまでとの状況の違いが分かりだしたこと、

★大人との密着関係がしっかりと形成されていたこと、

★自我の芽生え，または成長の時期にあたっていたこと、

★社会性の成長期にあたり，弟や妹と同じ行動をとりたがっていること、

と関係しています。

赤ちゃんがえりや退行現象は，第１の発達の好ましい姿で一時的なものであるといわれています。これまで一人でできるようになっていたのに年齢が大きくなってきたにもかかわらず，親に依存的な態度をとるようになること，そのピークは１歳半から３歳半ころにあたり，第２子誕生とは直接関係なく，心が順調に成長してきている乳幼児に認められる欲求を依存欲求といいます。

中には自分の気持ちを表現できずに我慢をしている兄姉もいます。我慢させずに感情が表現できるような環境を作ることも大切です。

2．第１子と第２子の生育環境について

第１子と第２子の生育環境は異なります。第２子が生まれるまでの数年間は，父母や祖父母を独り占めの状態で育てられ，家族の愛情を独占することができました。また，関心も話題もすべて自分に向けられていたのに，母親が第２子妊娠直後からその様子が変わってきます。

この時期の第１子の特徴と周囲の環境について知り，心身ともに第２子を迎えいれる準備をしましょう。

第２子妊娠中の母親のほとんどは、第２子の出産で入院するときがはじめて母親と離れて夜を過ごす方もいるかと思います。そのようなときは心配事になります。
しかし，どうしても離れなければなりません。
この時期は，子どもにとってもお母さんにとってもきょうだいを迎え入れるための準備の第一歩のためとお考えください。

3．妊娠中から第２子出生にかけて第１子への関わり方

赤ちゃんが生まれることに一緒に参加できるようにしましょう。

妊婦健康診査に第１も共に連れて行く、赤ちゃん用品の準備を一緒に手伝ってもらう等、一緒に赤ちゃんを迎えるようにしましょう。

第１子を先に優先するように接するように心がけましょう。

第１子と２子に対しては，まず第１子を先に優先するように接するように心がけましょう。
たとえば第２子に授乳をしているときに，第１子が何か要求してくると，
つい「忙しいから後でね」と拒否しがちです。第２子の授乳を中断して，
まず第１子の要求を受け止めて情緒の安定と安心感をはかった後，再び「おまちどうさま」と声をかけて授乳に戻りましょう。

スキンシップを大事にしましょう。

第１子といえども子どもです。第２子より少々早く誕生しただけです。そのことを理解してかかわっていきましょう。大人のほうから触ったり、抱っこしたりとスキンシップを図ってみましょう。第１子は愛情を感じ、きょうだいの誕生を嬉しく感じるようになるでしょう。

なるべくきょうだいが一緒に過ごす時間をとりましょう。

うまれた弟妹と遊びたいという第１子の気持ちを大切にしてください。
一緒に遊ぶ・行動するということが大切です。

成長を喜びましょう。

食事を食べさせてほしい，自分も母乳を飲みたいという第１子に対して，「〇〇ちゃんも赤ちゃんと同じことがしたいのね，どうぞ」とか「〇〇ちゃんも赤ちゃんの時はこのおっぱいを飲んだのよ，そしてこんな立派なお兄ちゃんになって，お母さんはうれしいわ」というように表現するのもひとつです。

認め，ほめるように心がけましょう。

「お兄ちゃんのくせに」「お姉ちゃんのくせにどうしてそんなことするの」という言い方で注意や叱責，禁止の場面で使用しがちです。むしろ第１子がすこしでも好ましいことをしたときに「いつの間にそんなおにいちゃんになったの」「わーすごい，さすがお兄ちゃんだね」などというように認め，喜び，ほめる表現をしましょう。

祖父母・その他の支援を得るようにしましょう。

忙しい親と異なり、祖父母は孫とゆったりと過ごすことができます。１人で頑張らずに、祖父母の支援を得ましょう。家族以外の第３者に支援が得られる場合は、積極的に活用しましょう。

3 歳児は転換期と表現される時期にあたります。

これは自立がすすみ，これまで困難だった母子分離や同年齢の友達との遊びの開始時期にあたるとともに，新しい欲求，「大人に認められたい，ほめられたい」という欲求が出てくる時期です。

子どもの心の動きを受け止め，理解し，それに沿った対応やしつけが行われると，子どもは情緒面で安定し，周囲の大人との信頼関係が形成され，少しずつ自己制御（がまんする，ききわけをする，待つ）を身に着けていきます。

両親や周りの大人側に，もうすぐ第２子が生まれてくるのだから，少しでも早く，第１子をお兄ちゃんらしくしっかりさせておこうという焦りの気持ちがあるときや，育児書どおりに育てようという気持ちがあるときは逆効果です。

第２子誕生前から第１子の役割をわかりやすく説明し，期待していることを伝えることがとても大切です。

4．子育て情報

茨城子ども救急電話相談　#8000

★相談日時：毎日 午後６時 30 分から午後 11 時 30 分まで。

休日 午前９時から午後５時（平成 21 年 10 月から開始）、

（日曜･祝日･年末年始 12 月 29 日から１月３日）

★電話番号：プッシュ回線、携帯電話から：短縮ダイヤル　#8000

すべての電話から：029-254-9900

緊急・重症の場合は迷わず「119」へ

休日・夜間に診てくれる医療機関を知りたいときは

茨城県救急医療情報コントロールセンター

★ホームページアドレス：http://www.qq.pref.ibaraki.jp/

★携帯サイトアドレス：http://www.qq.pref.ibaraki.jp/kt/

★電話番号　（オペレーターが 24 時間対応します）

電話　029-241-4199　（「24 時間いつでも良い救急」と覚えて下さい）

茨城県保健福祉部子ども家庭課、茨城県保育園一覧
http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/hoken/jifuku/category02/01/hoikukshoichiran.pdf

茨城県ホームページくらしのＱ&Ａ・母と子
http://www.pref.ibaraki.jp/life/hoken-fukusi/syusan-ikuji.html

水戸市ホームページ：水戸市少子対策・子育て支援総合ガイドブック
http://www.city.mito.lg.jp/view.rbz?nd=79&of=1&ik=1&pnp=42&pnp=73&pnp=79&cd=2378

日本助産師会ホームページ：助産所一覧（母乳相談・乳房ケア・育児相談）
http://www.midwife.or.jp/birthcenter_list/02_kanto.html

その他、市町村妊娠・子育て関係のホームページ

enjoy 子育てライフ！！

国際医療福祉大学大学院医療福祉学専攻助産学分野博士課程
助産師：礒山あけみ

資　料 15

＊使用するパンフレットに赤字でシナリオを挿入した。

第2子妊娠中のお母様方へ

子育てクラス(Parenting Class)
2011. 助産師:磯山

第２子妊娠中のお母様方へ

図１について、母親が抱いている気持ちについて説明する。

1．第２子妊娠中の母親の心理について

第 1 子の育児をしながらの妊娠生活はいかがですか。妊娠週数が進むにつれ，身体的にも心理的にもさまざまな変化を感じていると思います。

第２子妊娠中のお母さんたち２０名に、第２子を妊娠してからの子育てに対する気持ちについてインタビュー調査をしました。その結果によると、表１をご覧ください。今から説明します。

第 2 子妊娠中の母親は＜第１子の子育てが中心でおなかの子はあまりきにかけていない＞＜第２子を妊娠して第１子が中心の生活＞など【①生活の中心は第 1 子】であり、＜子育ては楽しい＞＜子育ては大きな苦労はない＞など「②子どもを育てる喜び」を感じる一方、＜出産・子育ては体験してみないと分からない、軌道修正しながらだ＞＜妊娠中は身体的変化のために子育ては大変＞＜四六時中ずっと子どもと一緒なので疲れる＞＜子どもを怒る、後悔の日々の繰り返しだ＞など「③孤立した子育ての苦悩」を感じ、上手に＜育児の合間に趣味で気分転換している＞＜誰かとあって会話することで気が晴れる＞＜買い物で気晴らしをしている＞等「④育ての合間の意図的な気分転換」をしながら、＜自分の時間がほしい＞＜シルバー人材の子育てサポートを使いたい＞＜将来の自分は子どもに追われることなく自分だけの時間がほしい＞など、「⑤自分の時間確保への望み」を持ちながら、第 1 子の子育てに対する意味づけをしており、＜子どもを産んで自分も成長したと思う＞＜今の生活に満足している＞等第 1 子の「⑥子育て経験による成長」を感じています。（図１－Ⅰ）

同時に、＜妊娠してから第１子なりに我慢しているのを見ると切なくなる＞＜第１子の赤ちゃんがえりを気にかけている＞＜第１子が兄・姉になるということを意識的に関わっている＞＜お産で入院するとき、第１子のことが心配だ＞など「⑦第 1 子の変化への戸惑いと第 2 子を迎え入れる準備」をしながら＜まだ見ぬ第２子を家族みんなが待ち遠しく思っている＞＜第１子と共に２人目の子育てを楽しめそうだ＞＜２人目の子育ては１度経験しているので自身ｇあるし、前向きに、余裕があるので楽しめると思う＞等「⑧子育て経験から 2 人の子育てに対する自信」を感じつつ、一方で＜第２子の子育てができるかどうか不安だ＞＜２人を同時に育てることができるか心配＞＜第１子も手がかかるので２人の子育ては苦労しそうだ＞等「⑨2 人の子育てへの迷い」を感じながら【第 2 子を迎え入れる準備】をしています。（図 1－Ⅱ）

そして、＜元気に思いやりを持ってほしい＞＜幸せになってほしい＞＜人間関係をうまく築けるようになってほしい＞等「⑩子どもの将来への願い」と＜子ども同士の遊びや人間関係も必要だと思い入園させている＞＜子どもの教育的なことを考えて入園場所を選択している＞など「⑪子どもの学び支援の準備」をしながら【子育ての

代償への期待】をしながら子育てを中心とした生活を送っているようです。（図１―Ⅲ）皆さんはいかがですか。同じような気持だという方もいらっしゃるかと思います。

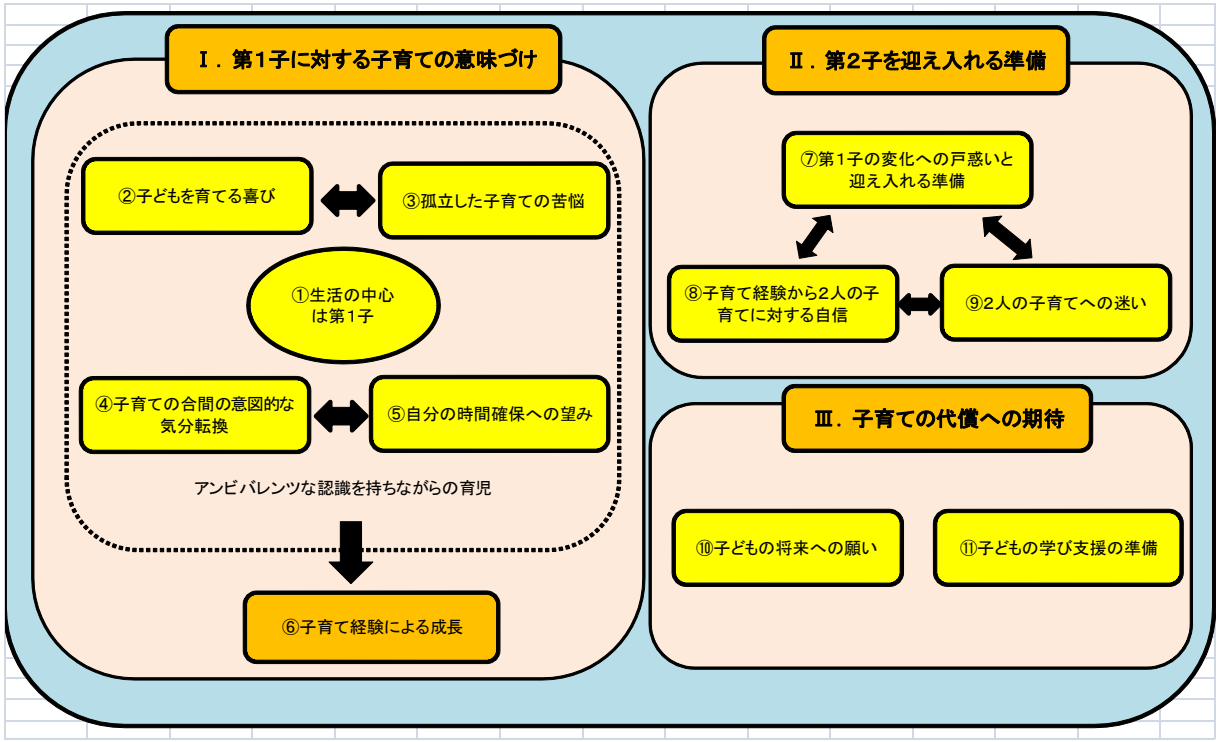


図１　第２子妊娠中の母親の子育てに対する体験

特に第 1 子の変化について戸惑いを感じている方もいるかと思います。先ほどの話しあいで、第１子の子育てに戸惑っているというお話が出てきました。
たとえば、ある母親は・・・
「今、一番不安なことは、お兄ちゃんが赤ちゃんを受け入れられないこ　とです。妊娠中にはお父さんがおなかを触ると機嫌が悪くなり、“お兄ちゃん触ってみる？”と聞くと、無視してしまったり、“赤ちゃんいらない”や“ゴミ箱に捨てちゃえ”っていうんです。って言ったり、産後には、“ママのおなか、へっこんだから抱っこできる？”とか、“赤ちゃんは看護師さんに預けてママ、おうちへ帰ろう”なんて言ってるんです」
など、困惑しています。

その反応に対し、父親は・・・・・
「長男が言うことを聞かないときについ言ってしまうんです。“言うことを聞かないならお兄ちゃんいらない。赤ちゃんのところに行くから。」など、つい言ってしまいがちのようです。
母親のみでなく、家族みんなが第１子の変化にどう対応すればいいのか戸惑っているようですね。今の例についておこころ当たりのかたはいるのではないでしょうか。

第１子はきょうだいが誕生することで様々な感情を表現することがあります。

第１子が１歳～3 歳ころは，言葉でうまく表現することができません。そのため、以下のような行動をとることがあります。

たとえば，

- 母親へのしがみつきがいっそうひどくなり，母親以外の人とは何もできなくなった１歳児
- 昼間の排尿が自立していたのに，くずれてしまった２歳児
- これまで一人で食事ができていたのに，食事時は口をあけたまま待っている，それを拒むと泣き叫び，手のつけられない状態になる３歳児
- しっかり歩行ができるのに，室内でははいはいでしか移動できない３歳児
- 親が困るいたずらをつぎからつぎへと行い出した４歳児
- 幼児語に逆戻りした５歳児
- 夜間のおむつが外れていたのに，第２子が生まれた直後から，おねしょをするようになった５歳児

これらの第 1 の姿は，赤ちゃんがえりとか退行現象といわれています。赤ちゃんがえりや退行現象という言葉は聞いたことがあると思います。この現象は、子どもの順調な発達から見れば、むしろ良い態度なのです。

これは，

★子どもの認知能力が発達し，周りが見えるようになり，これまでとの状況の違いが分かりだしたこと、

★大人との密着関係がしっかりと形成されていたこと、

★自我の芽生え，または成長の時期にあたっていたこと、

★社会性の成長期にあたり，弟や妹と同じ行動をとりたがっていること、

と関係しています。

赤ちゃんがえりや退行現象は，第 1 の発達の好ましい姿で一時的なものであるといわれています。これまで一人でできるようになっていたのに年齢が大きくなってきたにもかかわらず，親に依存的な態度をとるようになること，そのピークは 1 歳半から 3 歳半ころにあたり，第 2 子誕生とは直接関係なく，心が順調に成長してきている乳幼児に認められる欲求を依存欲求といいます。
中には自分の気持ちを表現できずに我慢をしている兄姉もいます。我慢させずに感情が表現できるような環境を作ることも大切です。

しかしながら、分かっていても、いらいらしてしまったり、叱ってしまうことがあると思います。いらいらしてしまう時や叱ってしまう時はどんな時ですか？自分が疲れていたり、睡眠不足だったり、余裕がないときではないでしょうか。妊娠しながらの子育ては身体的にもお腹がおおきくなるにつれて大変になってきます。ですので、１人で頑張らないということも大切です。完璧な鼻親はいません。調査結果にもあるように、自分だけの時間の確保がリセットする時間だったりします。肩の力を抜いて子育てしながら妊娠生活をエンジョイしてくださいね。

では、第１と第２子の生育環境について説明します。

2．第１子と第２子の生育環境について

母親を含め家族も戸惑いを感じていると同時に、第１子も幼いながらに家族の変化を感じているのです。変化は当然生じますが、どのように第１子の子育てをしながら第２子を迎え入れるかをお話します。

第 1 子と第 2 子の生育環境は異なります。第 2 子が生まれるまでの数年間は，父母や祖父母を独り占めの状態で育てられ，家族の愛情を独占することができました。また，関心も話題もすべて自分に向けられていたのに，母親が第 2 子妊娠直後からその様子が変わってきます。皆さんのお宅ではいかがですか？

この時期の第 1 子の特徴と周囲の環境について知り，心身ともに第 2 子を迎えいれる準備をしましょう。

次に、出産の際ですが、みなさん、出産で入院する際に、第１子の世話について準備を始めていますか？今まで第１子と離れて寝たという経験がありますか？

第２子妊娠中の母親のほとんどは、第２子の出産で入院するときがはじめて母親と離れて夜を過ごす方もいるかと思います。そのようなときは心配事になります。
しかし，どうしても離れなければなりません。この時期は，子どもにとってもお母さんにとってもきょうだいを迎え入れるための準備の

第一歩のためとお考えください。

第１子には絵本を通して、あるいは母親・父親の言葉を通して、お母さんは赤ちゃんを産むために、産院に入院するということ、そのために上の子と離れて生活しなければならないこと、その期間、少し我慢すること等を伝えましょう。また、周囲の支援も大切です。抱っこ等が減ったこともあるし、さらには母親と離れて夜も過ごすということで、第１子は大変ストレスをかんじると思います。そのため、第１子に対し、どのようにかかわればいいのか、説明します。

第２子が誕生してからではなく、妊娠中からすでに赤ちゃんが生まれることを話していくことが必要になってきます。少しずつ準備していくことが大切です。

３．妊娠中から第２子出生にかけて第１子への関わり方

赤ちゃんが生まれることに一緒に参加できるようにしましょう。

妊婦健康診査に第１子も共に連れて行く、赤ちゃん用品の準備を一緒に手伝ってもらう等、一緒に赤ちゃんを迎えるようにしましょう。

絵本を用いて、赤ちゃんが誕生することを伝えることも一つの方法ですね。

第２子が誕生してからのお話になりますが、

第１子を先に優先するように接するように心がけましょう。

第１子と２子に対しては，まず第１子を先に優先するように接するように心がけましょう。

たとえば第２子に授乳をしているときに，第１子が何か要求してくると，つい「忙しいから後でね」と拒否しがちです。第２子の授乳を中断して，まず第１子の要求を受け止めて情緒の安定と安心感をはかったあと，再び「おまちどうさま」と声をかけて授乳に戻りましょう。

スキンシップを大事にしましょう。

第１子といえども子どもです。第２子より少々早く誕生しただけです。そのことを理解してかかわっていきましょう。大人のほうから触ったり、抱っこしたりとスキンシップを図ってみましょう。第１子は愛情を感じ、きょうだいの誕生を嬉しく感じるようになるでしょう。

なるべくきょうだいが一緒に過ごす時間をとりましょう。

生まれたきょうだいと遊びたいという第１子の気持ちを大切にしてください。一緒に遊ぶ・行動するということが大切です。

第１子が１・２歳の場合は、まだまだ赤ちゃんのことを理解することが難しい場合があります。赤ちゃんの上に乗ってしまうのではないかとは、おもちゃを赤ちゃんの上に落してしまうのではないかなど、まずは第１子に優しく言い聞かせてみて

ください。そして、できるだけ一緒に遊ぶことができるように様子を見てください。

成長を喜びましょう。

食事を食べさせてほしい，自分も母乳を飲みたいという第１子に対して，「〇〇ちゃんも赤ちゃんと同じことがしたいのね，どうぞ」とか「〇〇ちゃんも赤ちゃんの時はこのおっぱいを飲んだのよ，そしてこんな立派なお兄ちゃんになって，ままはうれしいわ」というように表現するのもひとつです。

褒めるということは心身の順調な成長ためには必要不可欠です。上手に褒めてください。

認め，ほめるように心がけましょう。

「お兄ちゃんのくせに」「お姉ちゃんのくせにどうしてそんなことするの」という言い方で注意や叱責，禁止の場面で使用しがちです。むしろ第１子が少しでも好ましいことをしたときに「いつの間にそんなおにいちゃんになったの」「わーすごい，さすがお兄ちゃんだね」などというように認め。喜び，ほめる表現をしましょう。

第１子の反応は成長の印と思って受け入れてください。

祖父母・その他の支援を得るようにしましょう。

忙しい親と異なり、祖父母は孫とゆったりと過ごすことができます。１人で頑張らずに、祖父母の支援を得ましょう。家族以外の第３者に支援が得られる場合は、積極的に活用しましょう。

最後のページに子育てに関する情報を掲載しました。１人で自宅にこもっていることは子育て中は大変つらいことです。子育てに関する支援は多く展開されています。自分にあったものを活用してみましょう。

（子育て支援センターの例）

祖父母や家族の支援が得られれば、頑張らずに手を借りましょう。

3 歳児は転換期と表現される時期にあたります。

これは自立がすすみ，これまで困難だった母子分離や同年齢の友達との遊びの開始時期にあたるとともに，新しい欲求，「大人に認められたい，ほめられたい」という欲求が出てくる時期です。

たくさん褒めてみましょう。

子どもの心の動きを受け止め，理解し，それに沿った対応やしつけが行われると，子どもは情緒面で安定し，周囲の大人との信頼関係が形成され，

少しずつ自己制御（がまんする，ききわけをする，待つ）を身に着けていきます。

両親や周りの大人側に，もうすぐ第２子が生まれてくるのだから，少しでも早く，第１子をお兄ちゃんらしくしっかりさせておこうという焦りの気持ちがあるときや，育児書どおりに育てようという気持ちがあるときは逆効果です。

第２子が誕生する準備を親子共に準備をすることは必要ですが、過度になるとかえって逆効果の場合があります。強制しないで、第１子の様子を見ながら進めていきましょう。

第２子誕生前から第１子の役割をわかりやすく説明し，期待していることを伝えることがとても大切です。

子どもであっても、親が真剣に向き合えば、１歳２歳でも理解できると　思います。第１子に対し、どのように期待しているか、第１子の様子を見ながら説明してみましょう。

さあ、これで説明は終わりです。何か質問ありますか？

４．子育て情報

茨城子ども救急電話相談　#8000

★相談日時：毎日 午後６時 30 分から午後 11 時 30 分まで。

休日 午前９時から午後５時（平成 21 年 10 月から開始）、

（日曜･祝日･年末年始 12 月 29 日から１月３日）

★電話番号：プッシュ回線、携帯電話から：短縮ダイヤル　#8000

すべての電話から：029-254-9900

緊急・重症の場合は迷わず「119」へ

休日・夜間に診てくれる医療機関を知りたいときは

茨城県救急医療情報コントロールセンター

★ホームページアドレス：http://www.qq.pref.ibaraki.jp/

★携帯サイトアドレス：http://www.qq.pref.ibaraki.jp/kt/

★電話番号　（オペレーターが 24 時間対応します）

電話　029-241-4199　（「24 時間いつでも良い救急」と覚えて下さい）

茨城県保健福祉部子ども家庭課、茨城県保育園一覧
http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/hoken/jifuku/category02/01/hoikukshoichiran.pdf

茨城県ホームページくらしのＱ&Ａ・母と子
http://www.pref.ibaraki.jp/life/hoken-fukusi/syusan-ikuji.html

水戸市ホームページ：水戸市少子対策・子育て支援総合ガイドブック
http://www.city.mito.lg.jp/view.rbz?nd=79&of=1&ik=1&pnp=42&pnp=73&pnp=79&cd=2378

その他、市町村妊娠・子育て関係のホームページ

日本助産師会ホームページ：助産所一覧（母乳相談・乳房ケア・育児相談）
http://www.midwife.or.jp/birthcenter_list/02_kanto.html

さまざまな育児支援および育児情報が掲載されています。ぜひアクセスしてみてください。

楽しい

子育て願っています。

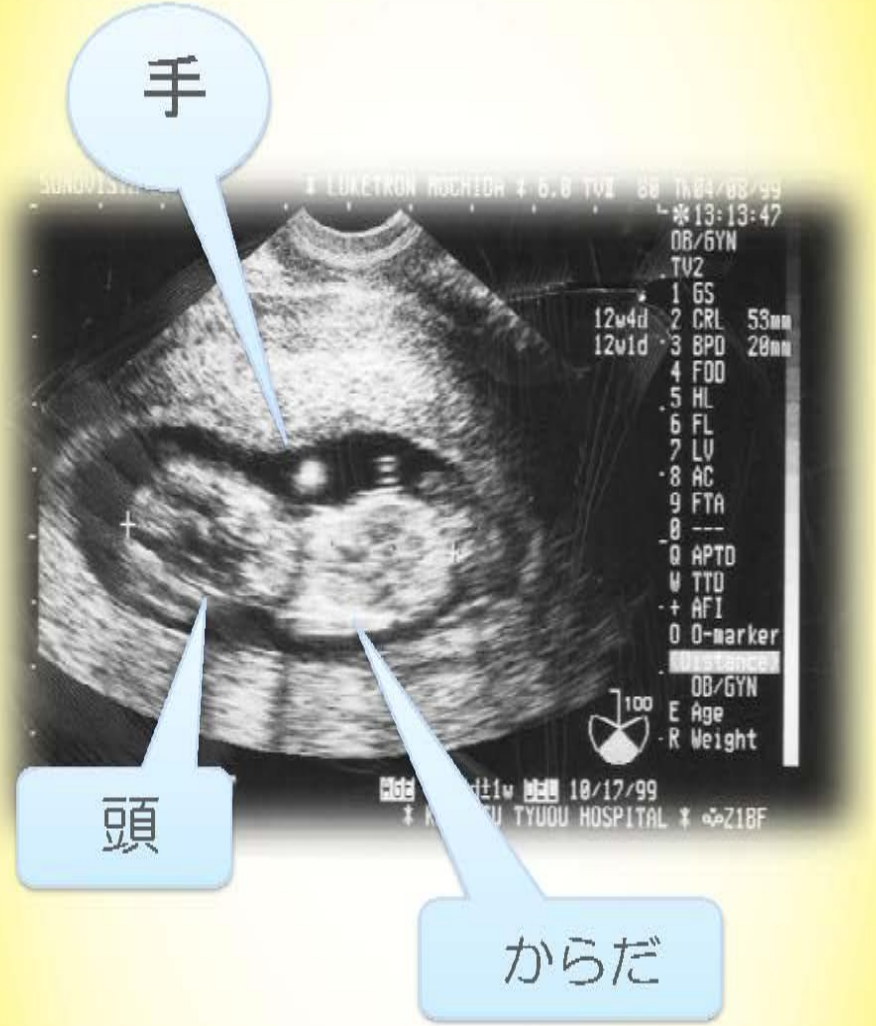
国際医療福祉大学大学院医療福祉学専攻助産学分野博士課程
助産師：礒山あけみ

資料 16

あかちゃんが
やってくる

「おなかがおもたいわ。じゅんちゃん、
もうじきあかちゃんにあえるね」
とお母さんが言いました。

　ぼくのうちに、あかちゃんがやってくる。おかあさんのおなかが、フーセンのようにだんだんおおきくふくらんでいく。


手
頭
からだ
13:13:47
OB/GYN
TV2
1 GS
12w4d 2 CRL 53mm
12w1d 3 BPD 20mm
4 FOD
5 HL
6 FL
7 LV
8 AC
9 FTA
0 ---
Q APTD
W TTD
+ AFI
O O-marker
OB/GYN
E Age
R Weight
100
10/17/99
TYUOU HOSPITAL
Z18F

胎児の画像（妊娠12週）

ぷうーっ

おかあさんのおなかには、じゅんちゃんのきょうだいがいます。

じゅんちゃんは大好きなだっこをがまんしています。だっこはきもちいいけれど、ちょっぴりがまん。あかちゃんのためにちょっぴりがまん。

だってじゅんちゃんは、おにいちゃんになるだから。

　おなかがおおきくなると、おかあさんはゆっくりとうごきます。

じゅんちゃんとあそぶのもゆっくりです。

じゅんちゃんは、おかあさんにやさしくしようと思いました。おかあさんのおてつだいをしようと思いました。

トイレもじぶんでできるぞ！！

おなかのなかのあかちゃんは、まわりの音をかんじています。

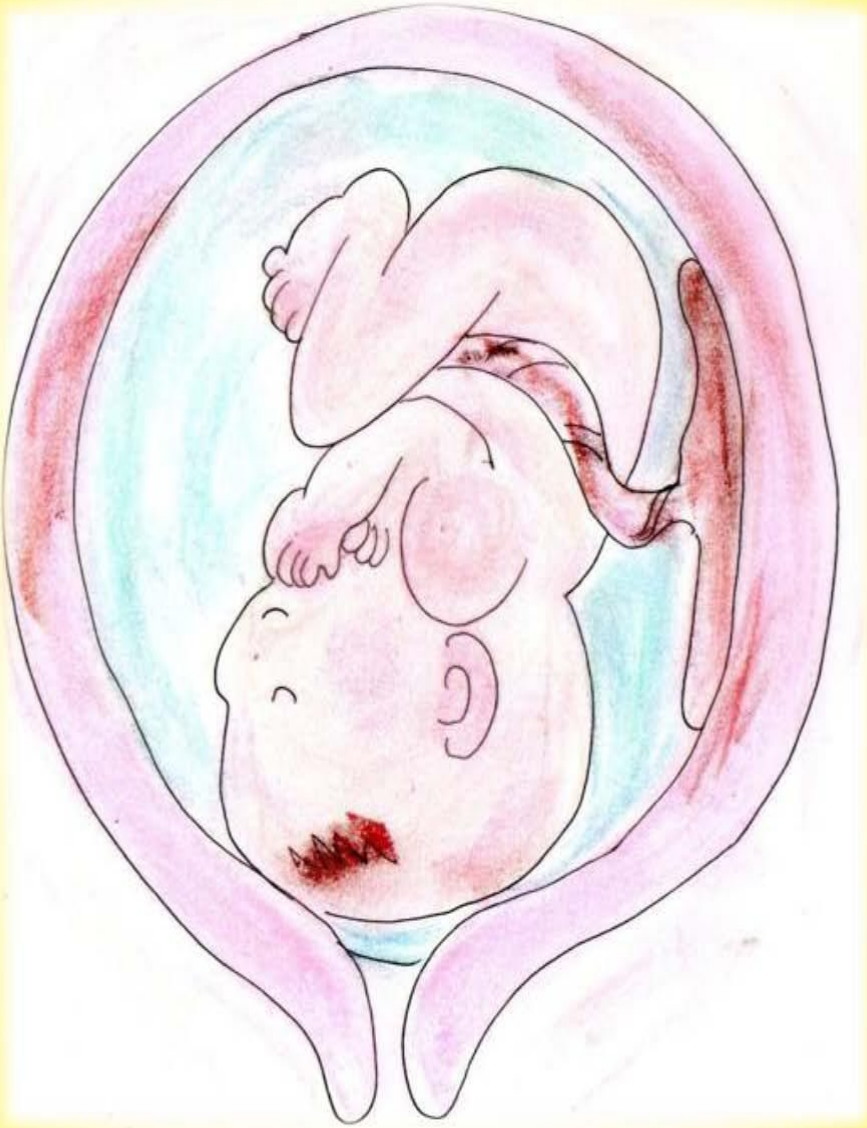
おとうさんやおかあさん、そして、じゅんちゃんの声もきこえています。

じゅんちゃんは、おなかのなかのあかちゃんにおはなしをしようとおもいました。

あかちゃんにじゅんちゃんの声がとどいているはずです。

　あかちゃんは、お母さんとあかちゃんをつなぐ「へそのお」をとおってながれるけつえきから、えいようをもらっておおきくなります。

　もう少しであかちゃんがうまれます。じゅんちゃんはおにいちゃんになります。



　あかちゃんがうまれるときは、おかあさんとちょっぴりはなれなければなりません。

「あかちゃんがもうじきうまれるから、お母さんはお父さんと一緒に病院に行ったのよ。
じゅんちゃん、おばあちゃんといっしょにあかちゃんとお母さんの帰りをまってようね」

とおばあちゃんがいいました。

　きょうは、じゅんちゃんと、おじいちゃん、おばあちゃんの3人で一緒にねんねしようとおもいます。

あかちゃんは、いっしょうけんめいせまいみちをとおりぬけてきます。

あかちゃんをうむことは、おかあさんにとっておおしごとです。おかあさんはがんばってあかちゃんをうんでくれます。

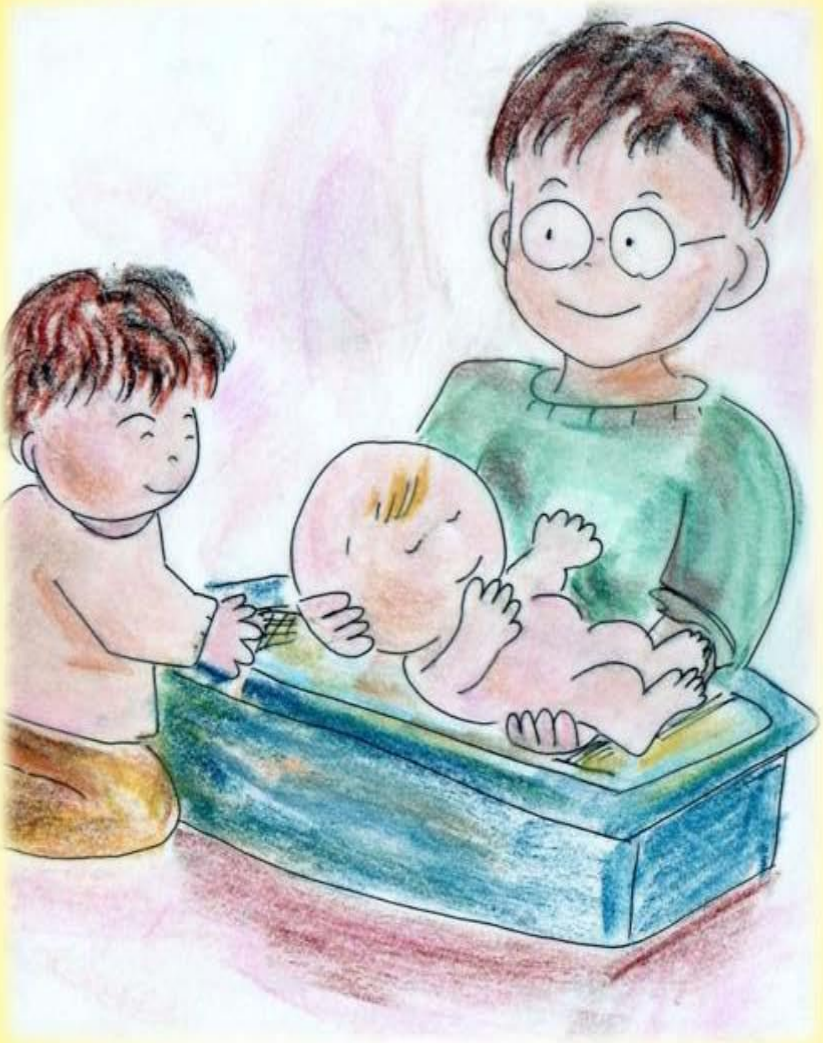
あかちゃんがうまれてくるとき、『じょさんし』さんにおてつだいをしてもらいます。

「おぎゃーっ」と、おおきななきごえがきこえます。
ぼくのようにお話をすることができません。あかちゃんはげんきなこえでないています。

おぎゃー！！

おとうさんもおおよよこびです。
「じゅんちゃんがうまれたときも、
みんなおおよろこびだったよ」
とお父さんが言いました。

あかちゃんは、「おぎゃーっ」てないて、おっぱいのんで、そしてねむるのくりかえし。じゅんちゃんは今日からおにいちゃん。ふしぎなきもちです。



　じゅんちゃんは、あかちゃんがうまれ、
おにいちゃんになりました。

　お母さんは、あかちゃんにおっぱいを
あげたり、おむつを交換したり、
あかちゃんにつきっきりです。

　お母さんはいいました。
「じゅんちゃん、だっこしてほしいとき
はがまんしなくて言っていいのよ。あそ
んでほしいときも言っていいのよ。」

じゅんちゃんはおにいちゃんになりました。

おかあさんのおてつだいをしようとおもいます。

お父さんと一緒にあかちゃんのおふろのおてつだいをしようと思います。

あかちゃんがないていたら、あそんであげようと思います。じゅんちゃんのおもちゃをかしてあげようと思います。

だってぼくはおにいちゃんだから。

じゅんちゃんは幼稚園です。帰ってくるまで待っててね。

タイトル：
　あかちゃんがやってくる

2011年4月　第１刷
絵・文：　礒山あけみ
写　真：　J・I　，　K・I

第２子妊娠中の母親を対象とした第１子の理解を高めるための子育てクラス
（Parenting Class) 教材

資料１７

第２子妊娠中のお母様方へ

第2子を迎え入れる準備クラス第1回

第1子を妊娠・出産した時

第1子の反応

- 母親へのしがみつきがいっそうひどくなり、母親以外の人とは何もできなくなった1歳児
- 昼間の排尿が自立していたのに、崩れてしまった2歳児
- これまで一人で食事ができていたのに、口をあけたままでまっている、それを拒むと泣き叫び、手の付けられない状態になる3歳児

- しっかり歩行ができるのに、室内ではいはいでしか移動できない3歳児
- 親が困るいたずらを次から次へとはじめた4歳児
- 幼児語に逆戻りした5歳児
- 夜間のおむつがはずれていたのに、第2子が生まれた直後からおねしょをするようになった5歳児

あかちゃんがえり・退行現象

★子どもの認知能力が発達し，周りが見えるようになり，これまでとの状況の違いが分かりだしたこと、

★大人との密着関係がしっかりと形成されていたこと、

★自我の芽生え，または成長の時期にあたっていたこと、

★社会性の成長期にあたり，弟や妹と同じ行動をとりたがっていること

第1子と第2子の生育環境について

第1子と第2子の生育環境は異なる。

第2子が生まれるまでの数年間は，父母や祖父母を独り占めの状態で育てられ，家族の愛情を独占することができた。

関心も話題もすべて自分に向けられていたのに，母親が第2子妊娠直後からその様子が変わってくる。

この時期の第1子の特徴と周囲の環境について知り，心身ともに第2子を迎えいれる準備をしましょう。

第2子出産のため入院するとき

第2子妊娠中の母親のほとんどは、第2子の 出産で入院するときがはじめて母親と離れて夜を過ごす方が多いのです。

きょうだいを迎え入れる準備の第一歩！

絵本を通して、母親・父親の言葉を通して、お母さんは赤ちゃんを産むために、産院に入院するということ、そのために上の子と離れて生活しなければならないこと、その期間、少し我慢すること等を伝えましょう。また、周囲の支援も大切です。

妊娠中から第2子出生にかけて
第1子への関わり方

絵本の読み聞かせをしましょう

あかちゃんがやってくる

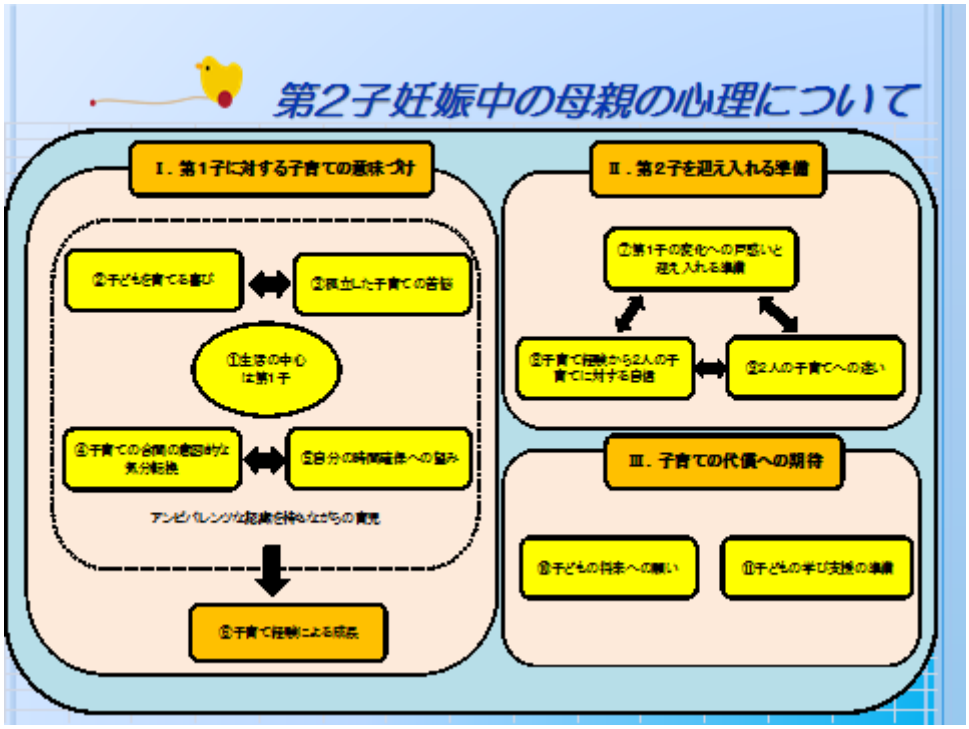
お疲れ様でした。お気をつけて
お帰りください。

パンフレットと絵本、絵本読み聞かせ表を
忘れずにお持ちください。

次回もお待ちしております。

第２子妊娠中のお母様方へ
第2子を迎え入れる準備クラス第2回

絵本の読み聞かせの感想


第2子妊娠中の母親の心理について
Ⅰ．第1子に対する子育ての意味づけ
②子どもを育てる喜び
③孤立した子育ての苦悩
①生活の中心は第1子
④子育ての合間の意図的な気分転換
⑤自分の時間確保への悩み
アンビバレンツな感情を持ちながらの育児
⑥子育て経験による成長
Ⅱ．第2子を迎え入れる準備
⑦第1子の変化への戸惑いと迎え入れる準備
⑧子育て経験から2人の子育てに対する自信
⑨2人の子育てへの迷い
Ⅲ．子育ての代償への期待
⑩子どもの将来への願い
⑪子どもの学び支援の準備

妊娠中から第2子出生にかけて第1子への関わり方

赤ちゃんが生まれることに一緒に参加できるようにしましょう。

妊婦健康診査に第1子も共に連れて行く、赤ちゃん用品の準備を一緒に手伝ってもらう等、一緒に赤ちゃんを迎えるようにしましょう。

絵本を用いて赤ちゃんが誕生することを伝えることも１つの方法です。

第１子を先に優先するように接するように心がけましょう

第1子と2子に対しては，まず第１子を先に優先するように接するように心がけましょう。

第2子に授乳をしているときに，第1子が何か要求してくると，つい「忙しいから後でね」と拒否しがちです。第2子の授乳を中断して，まず第1子の要求を受け止めて情緒の安定と安心感をはかったあと，再び「おまちどうさま」と声をかけて授乳に戻りましょう。

スキンシップを大事にしましょう。

第1子といえども子どもです。第2子より少々早く誕生しただけです。そのことを理解してかかわっていきましょう。

大人のほうから触ったり、抱っこしたりとスキンシップを図ってみましょう。第1子は愛情を感じ、きょうだいの誕生を嬉しく感じるようになるでしょう。

なるべくきょうだいが一緒に過ごす時間をとりましょう

生まれたきょうだいと遊びたいという第1子の気持ちを大切にしてください。

一緒に遊ぶ・行動するということが大切です。

第１子が１・２歳の場合は、まだまだ赤ちゃんのことを理解することが難しい場合があります。

赤ちゃんの上に乗ってしまうのではないかとは、おもちゃを赤ちゃんの上に落してしまうのではないかなど、まずは第１子に優しく言い聞かせてみてください。

できるだけ一緒に遊ぶことができるように様子を見てください。

成長を喜びましょう。

食事を食べさせてほしい，自分も母乳を飲みたいという第1子に対して，「〇〇ちゃんも赤ちゃんと同じことがしたいのね，どうぞ」とか「〇〇ちゃんも赤ちゃんの時はこのおっぱいを飲んだのよ，そしてこんな立派なお兄ちゃんになって，ママはうれしいわ」というように表現するのもひとつです。

褒めるということは心身の順調な成長ためには必要不可欠です。上手に褒めてください。

認め，ほめるように心がけましょう。

「お兄ちゃんのくせに」「お姉ちゃんのくせにどうしてそんなことするの」という言い方で注意や叱責，禁止の場面で使用しがちです。

第1子が少しでも好ましいことをしたときに
「いつの間にそんなおにいちゃんになったの」
「わーすごい，さすがお兄ちゃんだね」
などというように認め、喜び，ほめる表現をしましょう。

第１子の反応は成長のしるしと思って受け入れてください。

祖父母・その他の支援を得るようにしましょう。

忙しい親と異なり、祖父母は孫とゆったりと過ごすことができます。

１人で頑張らずに、祖父母の支援を得ましょう。
家族以外の第３者に支援が得られる場合は、積極的に活用しましょう。

3歳児は転換期と表現される時期にあたります

自立がすすみ，これまで困難だった母子分離や同年齢の友達との遊びの開始時期にあたるとともに，新しい欲求，「大人に認められたい，ほめられたい」という欲求が出てくる時期です。

たくさん褒めてみましょう。

子どもの心の動きを受け止め，理解し，それに沿った対応やしつけが行われると，子どもは情緒面で安定し，周囲の大人との信頼関係が形成され，少しずつ自己制御（がまんする，ききわけをする，待つ）を身に着けていきます。

両親や周りの大人側に，もうすぐ第2子が生まれてくるのだから，少しでも早く，第1子をお兄ちゃんらしくしっかりさせておこうという焦りの気持ちがあるときや，育児書どおりに育てようという気持ちがあるときは逆効果です。

第２子が誕生する準備を親子共に準備をすることは必要ですが、過度になるとかえって逆効果の場合があります。

強制しないで、第１子の様子を見ながら進めていきましょう。

第2子誕生前から第1子の役割をわかりやすく説明し，期待していることを伝えることがとても大切です。

子どもであっても、親が真剣に向き合えば、１歳２歳でも理解できると　思います。第１子に対し、どのように期待しているか、第１子の様子を見ながら説明してみましょう。

お疲れ様でした。
お気をつけてお帰りください。

産後1週間と1か月にアンケートを
お願いいたします。

第2子を迎え入れる母親に対する準備教育プログラムシナリオ

資料18

項 目	時間	指 導 内 容	方 法	留意点	媒体
受付		名札の配布と質問紙調査への記入依頼			
		第１回(28週)			
担当者の紹介および本日の内容説明	20分	**本日の予定** はじめまして、助産師の〇〇です。本日は子育てクラスにご参加いただき、ありがとうございます。本日は2人目のお子さんを妊娠している方を対象とした子育てクラスです。主に上の子の育児と2人目が誕生したら2人の育児と始まりますが、それらについて、みなさんの現在進行形である子育て経験についてや、上の子の様子等ディスカッションを交えてお話をしていきたいと思います。 時間は1回目1時間、2回目も1時間、合計2時間です。 本日1時間の予定ですが、途中休憩をはさんで行います。気分が悪くなったりなどありましたら、遠慮なさらずお声をかけてください。	説明及びディスカッション	音楽を流し、リラクゼーションできる環境にする。胡坐をかくことができるように座布団またはヨガマットなど準備する。 第1子はベビーシッターに預け、母親のみの教室とする。①自己紹介および第1子の年齢②出産に臨む準備を含め、第1子の出産時の状況を想起してもらう。目的 第2子妊娠中の母親が第1子を理解し、戸惑うことなく2人の同時育児を行うことができる。	
		担当者の自己紹介と助産師の仕事について 簡単に自己紹介をいたします。私は今まで〇〇〇人の赤ちゃんの誕生をお手伝いした経験があります。また、助産師の育成にも関わってきました。現在は看護教育に関わっており、看護師を育成しています。 助産師の仕事は皆さんご存知とは思いますが、ご説明いたします。助産師は妊娠中から出産、子育て期の女性と家族の支援をしている職種です。妊娠中は妊婦健康診査や保健指導、母親学級や両親学級など、妊婦さんとその家族が健康に快適にそして安全に出産を迎えることができるように、また、皆さんが陣痛や破水で入院してから、出産、そして産後の母乳や育児までお手伝いをいたします。さらには妊娠出産・子育てに限らず、女性とその家族の生涯を通した支援をする者です。		助産師の仕事について理解を促す。子育てプログラムに関心を持つとができるようにする。	パンフレットP1～3「退行現象の事例」
第1子が誕生した時の母親の感情について	20分	第1子が誕生した時の母親の気持ち 皆さんの初めての妊娠出産育児の際のことを思いだしてみてください。 助産師の存在が浮かびますか。どのような思い出が残っていますか。みなさんの自己紹介を含め、はじめての妊娠・出産の時のことや気持ちなどお話いただきたいと思います。	ディスカッション	出産に望む準備を含め、第1子の出産時の状況を想起してもらう。主体的に望むことができるように、指示はせず、自発的に進める。10人すべてに話してもらうのがベスト。	
第1子がきょうだいを受け入れる準備の必要性	30分	**現在の第1子の状況について** ありがとうございました。それぞれ初めての妊娠・出産の時の皆さんの気持ちについては共感できますね。それでは皆さんは現在進行形で上の子を育てながら第2子を妊娠していますが、第1子の時と比べていかがでしょうか。同じでしょうか。それとも違うでしょうか。身体的なこと、心理的なこと、ご家庭の変化等なんでもいいのでお話ください。	ディスカッション	①第2子を妊娠してから現在に至る第1子の状況についてディスカッションすることで共有する。 ②第2子を迎え入れる第1子の気持ちや態度を説明する。	パンフレットP1～3「退行現象の事例」
		第2子を迎え入れる第1子の気持ち いま、上の子のお話をしていただきましたが、みなさん同じようなお気持ちで子育てと妊娠と同時進行で生活していることが分かりましたね。 パンフレットをご覧ください。以前私は第2子を妊娠している女性20名にインタビューをしました。結果、パンフレットのような気持ちで生活していることが分かりました。みなさんも同じ気持ちであるとお思いの部分もあるかと思います。	説明		
		赤ちゃんの誕生について 今から、上の子に主人公が第1子の男の子という設定での絵本を読み聞かせている場面を上映します。ごらんください。 このように第2子を出産してからではなく、すでにお腹に弟妹がいる時から、第1子がきょうだいを受け入れる準備が必要です。	PPを用いて説明	第1子に対して絵本を用いてよみきかせているようにPPを用いて説明し、母親が自宅に帰っても第1子がきょうだいを受け入れる準備の方法として活用してもらう。絵本の効果は、子供の語彙を豊かにし、言葉で表現する力や感動する心、想像力、知的好奇心を育てることによって情緒が安定し、社会活動で自分を豊かに表現しようとする意欲を引き出す。絵本は「一緒に読み聞かせる」ということに意味がある。絵本を通して一緒に遊び、コミニュケーションをとること。読んであげることによって、子どもは絵本の世界に無理なく溶け込んでいく。3、読み方は気持ちを込めて、例えば次のページを開く時でも絵本の内容に合わせて、ゆっくり開いたり、サッと開いたりしてリズムをつけるとより興味をもたせる効果がある。	絵本「赤ちゃんがうまれる」第1子が主人公である兄姉になる気持ちについてのストーリー
まとめ・質疑応答	5分				

第2回（36週）

本日の内容説明	3分	みなさんこんにちは、第2回の内容について説明します。本日は、最初に絵本の読み聞かせた感想をお話していただき、第2子妊娠中の母親の心理について、第1子の特徴・育児の知恵について、子育て情報についてです。最後にアンケートにお答えいただいて終了となります。時間は約1時間程度です。本日1時間の予定ですが、途中休憩をはさんで行います。気分が悪くなったりなどありましたら、遠慮なさらずお声をかけてください。	説明	音楽を流し、リラクゼーションできる環境にする。胡坐をかくことができるように座布団またはヨガマットなど準備する。 第1子はベビーシッターに預け、母親のみの教室とする。第1子に対して絵本の読み聞かせをしての反応について、何回くらい読んだか、読んでの第1子の反応、母親の感情について話してもらう。10名全員によみきかせの回数や、第1子の反応、母親の感情について話してもらい、メモする。	
第1子への絵本の読み聞かせをした感想	15分	**第1子への絵本の読み聞かせをした感想** みなさんこんにちは、第2回目を行います。本日1時間の予定ですが、途中休憩をはさんで行います。気分が悪くなったりなどありましたら、遠慮なさらずお声をかけてください。 みなさん、第1回から8週間程度の時間がありました。絵本を読み聞かせできましたか。1週間に何回くらいよみきかせしましたが。お子さんの反応はいかがでしょうか。お子さんに変化はありましたか。みなさんの気持ちはいかがでしょうか。	ディスカッション・説明		
第2子妊娠中の母親の心理について	10分	第2子妊娠中の母親の心理について説明します。パンフレットをご覧ください。うえの子の育児をしながら妊娠生活は、妊娠週数が進むにつれ、身体的にも心理的にも負担に感じることがあるかと思います。第2子を妊娠した方は初めての妊娠と異なり、「生活の中心はうえの子」「うえの子への変化への戸惑いと受け入れる準備」「2人の子育てへの戸惑い」「子育て経験に伴う2人の子育てに対する自信」ということを感じているようです。第1子の子育てを振り返り、＜子どもを育てる喜び＞の一方で＜孤立した子育ての苦悩＞を感じ、＜子育ての合間の意図的な気分転換＞の一方で＜自分の時間確保への望み＞を持つなどアンビバレンツな認識を持ちながらの育児をしつつ【生活の中心は第1子】という気持ちで生活していました。そして第1子の子育てを通して【子育て経験による成長】を感じていました。そして、＜うえの子の変化への戸惑いと迎え入れる準備＞をし、＜子育て経験から2人の子育てに対する自信＞をもつ一方で、＜2人の子育てへの迷い＞を感じていました。子どもに対しては＜子どもの将来の願い＞つつ、＜子どもの学び支援の準備＞をしていました。みなさんはいかがですか。		20人の第2子妊娠中の母親の心理結果を用いる。	パンフレット「1.第2子妊娠中の母親の心理について」
第1子の特徴・育児の知恵について	25分	**2人の育児の知恵・退行現象への対応** では、出産もまじかになってきました。出産で入院の時の準備や手筈は整っておりますか。第2子を出産する時に初めて上の子と離れて数日過ごすという方が多いです。皆さんはいかがでしょうか。入院の時に、母親と離れることで上の子は泣く場合もあります。しかし、きちんと弟妹が生まれるということ、兄姉となることを言い聞かせてあげましょう。 パンフレットをご覧ください。きょうだいが誕生し、2人同時育児が開始します。その場合、どのように上手に子育てをしていくかをお話します。育児については上の子の経験があるので、沐浴も授乳もおむつ交換も上手に何ら問題なくできます。また、心のゆとりがあるかと思います。これは第1子の子育て経験からみなさんが学んだ育児の知恵です。第2子の子育ては第1子に比べ楽だという反応が多いです。 **父親・祖父母の支援状況と対応** 第2子が誕生したら、ご主人の支援はどうなりますか。ご主人の反応はいかがですか？ 実父母・義父母の支援状況はいかがでしょうか。第2子が誕生すると、2人同時に育ててていかなければならないので、上手に手を借りましょう。	ディスカッション・説明	今の第1子の状況を話してもらいながら勧める。 パンフレットに沿って、2人同時育児の知恵について説明する。 第1子時および第2子出産後の支援状況を話してもらう。	パンフレットp4～5「妊娠中から第2子出生にかけて第1子への関わり方」
子育て情報について	5分	**病院・地域支援の情報提供（助産師外来、母乳外来、育児サークル、子育て支援センター、保健センターでの育児相談等）** 今までに子育てサークルや子育て支援センター等、地域の子育て支援を活用した方いますか。この地域には〇〇支援が多くあります。私も子育て支援センターでベビーマッサージや断乳、家族計画について等のお話や演習のお手伝いをしています。気軽にご参加ください。楽しく子育てしましょう。	説明	第1子時利用の感想など話してもらう。 パンフレットに子育て情報を掲載し活用できるようにする。助産師会での電話相談や、国際助産師の日、いいお産の日等のイベントの紹介をする。	パンフレットp6～7「子育て情報」
まとめ	5分	クラス終了後、アンケート記入			

*自宅でも兄姉となるための準備のために絵本を差し上げ、よみきかせ時の第1子の反応を記憶してもらう。

必要物品：絵本、パンフレット，CD，パソコン，絵本を読み聞かせている場面のDVD，

クラス中は第1子をベビーシッターに預ける。

準備クラスの様子